

スウェーデンにおける「教育的スロイド」の  
成立過程に関する実証的研究

(研究課題番号 17530563)

平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究C)

研究成果報告書

2008年3月

研究代表者 横山悦生

名古屋大学大学院発達科学研究科

技術教育学研究室

はじめに

本研究では、「教育的スロイド」という理念と方法を発展させたオットー・サロモンに焦点をあて、1870年代から1890年代までの、サロモンのスロイド教育論の形成・展開過程を、とりわけ彼のモデル・シリーズを中心に解明しようとしたものである。まず、先行研究の状況に鑑みて、『ネース・スロイド教育時報』などの原史料にもとづいてオットー・サロモンの全生涯にわたった数多くのスロイド教材の集成の発展過程を関連する事実経過を詳細に追い、その内容を年表の形で整理し、それぞれの段階ごとの特徴について明らかにした。そのなかで課題として浮かび上がってきたことは、オットー・サロモンのスロイド教育に関する主張の特徴を解明するには、「モデル集成」や「モデル・シリーズ」を調査、整理、分析するだけでは不十分で、少なくとも彼自身がスロイド教育に関する主張の要点をテーゼのような形式で述べた文書の内容を、彼が生きた時代の、スウェーデンの民衆教育制度の発展状況との関連で、詳細に分析する課題が浮かび上がってきた。そこで、次に、民衆教育制度の骨格を形成した1842年の民衆教育令を全訳し、その特徴を分析した。

本報告書では、その成果の一端をここに示すとともに、資料として民衆学校の教室に関する設計基準であるKongl.Över-Intendents-Embetet, *Normalritningar till Folkskolebyggnader*,1865とその改訂版Kongl.Över-Intendents-Embetet, *Normalritningar till Folkskolebyggnader*,1878を収録した。

1 「オットー・サロモンによるスロイドのモデルシリーズの形成と発展」『日本産業教育学会紀要』第37巻第1号,2007年1月,47頁-54頁。

2 ‘A study of Otto Salomon’s sloyd education in his earlier stage –analysis of the practice of Naas sloyd school for boys(1872-1876)’ 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第53巻第1号、2006年9月,63頁-73頁。

3 「オットー・サロモンのスロイド教育システムのテーゼ」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第53巻第1号,2006年9月,45頁-61頁。

4 「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第52巻第2号,2006年3月,1頁-27頁。

5 「オットー・サロモンの初期スロイド教育——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——」『日本産業教育学会紀要』第36巻第1号,2006年1月,73頁-80頁。

6 「(資料紹介) スウェーデンの1842年の民衆教育令」名古屋大学教育発達科学研究科技術・職業教育研究室『技術・職業教育学研究室 研究報告——技術教育学の探究——』第4号、2007年9月、55頁～80頁

7 「1864年の国王の回状——民衆教育に関する特別な規則(1864年4月22日)——」名古屋大学教育発達科学研究科技術・職業教育研究室『技術・職業教育学研究室 研究報告——技術教育学の探究——』第4号、2007年9月、81頁～82頁

8 「手工教育の父——オットー・サロモン——」子どもの遊びと手の労働研究会編『子どもの手を育てる』ミネルヴァ書房,2007年7月,184頁～186頁

9 「スウェーデンにおける教育的工工作(教育的スロイド)の誕生とその後の展開」『子どもの遊びと手の労働』No.404,2007年4月,2～6頁



研究経費

科学研究費補助金・平成 17 年度～平成 19 年度 基盤研究 (C)

「スウェーデンにおける『教育的スロイド』の成立過程に関する実証的研究」(研究課題番号  
17530563)

平成 17 年度	直接経費	1,500 千円	間接経費	0 円
平成 18 年度	直接経費	1,100 千円	間接経費	0 円
平成 19 年度	直接経費	500 千円	間接経費	150 千円
合計	直接経費	3,100 千円	間接経費	150 千円

# オットー・サロモンの初期スロイド教育

——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——

横山 悦生 (名古屋大学)

概要：1872年に創設されたネース・少年スロイド学校はヘムスロイドを教えていたが、その2年後の1874年に入学年齢を12～13歳（国民学校修了後）から10～11歳に下げ、多くの普通教育科目を導入して、国民学校としての性格をかねそなえたスロイド学校に変化した。この組織改革によって、同校のスロイド教育の目的は一般的な技能を獲得させることに転換した。本稿では、1872年から1876年までのサロモンのスロイド教育の実践の検討からサロモンがシグネウスと出会う1877年5月以前に普通教育としてのスロイド教育の理念を形成していたことを明らかにした。

キーワード：オットー・サロモン／スロイド／スロイド学校と国民学校の統合／ネース・少年スロイド学校／ウノ・シグネウス

## 1. 先行研究と課題

### (1) 課題

スウェーデンのスロイド教育は、1880年代から1900年代にかけて世界の手工教育に大きな影響を与えたことで知られている<sup>(1)</sup>。筆者は、技術教育の観点からスウェーデンのスロイド教育に関心を持ち、世界の手工教育に影響を与えた内容、スロイド教育が北欧において成立した歴史的背景に関心をもって、研究をすすめてきた<sup>(2)</sup>。本稿では、スロイド教育の理念と教授法について、その発展に大きな足跡を遺したといわれるオットー・サロモン (Otto Salomon, 1849-1907) に注目し、彼の初期のスロイド教育の実践（とりわけネース・少年スロイド学校での実践）の到達点を明らかにし、それとのかかわりでフィンランドの「国民（民衆）学校の父」と称されるウノ・シグネウスの影響について検討する。

### (2) 先行研究

このように課題を設定するのは、オットー・サロモンのスロイド教育にウノ・シグネウス<sup>(3)</sup>が影響を与えたという指摘があるからである<sup>(4)</sup>。松崎巖は「1877年、サロモンはフィンランドにシグネウスを訪ねスロイド教育について大きな影響を与えられた」と述べている。そこで松崎は、「①スロイドは経済的な必要に基くのではなく、教育的な根拠に立つべきこと、②スロイドは職業技術（教育——引用者）としてよりむしろ普通教育の一環として考えるべきこと、③スロイドを教えるものは職人ではなく、教員であるべきこと、④小学校ではスロイド教育には専科教員でなく全科担当の一般教員が当るべきことをシグネウスから教示されたのであった」と1877年のシグネウスとの出会いに注目している<sup>(5)</sup>。そのように松崎が指摘する根拠は、ベネットの *History of Manual and Industrial Education 1870-1917* という1937年の記述にもとづいている<sup>(6)</sup>。さらに、遠藤敏明は「シグネウスがサロモンに与えた最も大きな影響は、スロイドを国民学校の一教科として取り入れることを確信させたことであると思われる」とし、二人の出会いを重視している<sup>(7)</sup>。また、本多雄伸も1877年の二人の出会いを重視する立場から、それ以前のネース・少年スロイド学校のスロイド教育を職業教育ととら

えている<sup>(8)</sup>。

他方、海外においては、古くは上記のベネットの *History of Manual and Industrial Education 1870-1917* がサロモンのこの時期のスロイド教育についてとりあげ、「経済的な必要にもとづく」、「本質的にホームスロイドであった」としている<sup>(9)</sup>。1990年代に入ってから、Hans Thorbjörnsson (1990)<sup>(10)</sup>や Hans Joachim Reincke (1994)<sup>(11)</sup>の二つの著作がサロモンのスロイド教育をとりあげている。しかし、これらの研究も1880年代半ばに体系化され、その教授法が1890年代により精緻化された「教育的スロイド」に焦点があてられており、サロモンの初期のスロイド教育への言及は先に紹介したBennettの評価と基本的に同じであり、それを「教育的スロイド」の前身として事実経過を紹介しているにすぎない。

以上、内外の先行研究に共通していることは、1877年5月以前のサロモンのスロイド教育の実践の検討がなされておらず、多かれ少なかれ、1937年のベネットの研究を引き写している点にその特徴がある。

本稿は、サロモンの初期スロイド教育の理念の発展に対するシグネウスの影響を検討するために、サロモンがシグネウスを訪問する1877年5月以前のネース・少年スロイド学校の実践を、とくにそこにおける普通教育としてのスロイド教育の理念の形成過程に注目して検討する。

## 2. サロモンの1874年までの教育への関心とスロイド教育の実践

### (1) サロモンの生育歴と教育への関心

オットー・サロモンは、ユダヤ人の両親のもとで1849年11月にイエーテボリ (Göteborg) で生まれた。当時としては、ユダヤ人はスウェーデンにとって最初の移民であった<sup>(12)</sup>。サロモンの父方の祖父にあたるベンジャミン・サロモン (Benjamin Salomon) と祖母ソフィア・ニイセン (Sophia Nissen) は1780年代にドイツ北部（当時はプロシア）の町 (Mecklenburg地方にあるGoldberg) からストックホルムに移住してきた。当時のスウェーデンでは、外国人に対する恐怖がひろく存在していた<sup>(13)</sup>。ユダヤ人に許された経済活動は商

業活動かギルドの規定に抵触しない手工業であった。サロモンの母方の祖父アロン・アブラハムソン (Aron Abrahamson) はプロシアでは記章彫版工 (medaljgravör) であったが<sup>144)</sup>、1812年にスウェーデンに移住して以来、海運業者として働いていた。ユダヤ人の子どもがスウェーデンの学校に入学を許されたのは1859年、ユダヤ人が完全な市民権を得たのは1870年のことであった。

サロモンは、14、15歳まではいくつかの私立学校で学び(7、8年間)、その後1864年にイエーテボリにあるギムナシウム (“Högre Realläroverket i Göteborg”) に入学し、1868年春には大学入学資格試験 (mogenhetsexamen) に合格した。同年の秋学期からストックホルム工科大学 (Teknologiska institutet) の1年コースに入学した<sup>145)</sup>。ところが、1869年2月に母方の叔父にあたるオウガスト・アブラハムソン (August Abrahamson, 1817-1895) の妻が死亡し、その後親戚から叔父の所有地の管理を助けるように説得された。長い思案の後にストックホルム工科大学での学習を継続することを断念し、1870年10月からウルツナ農科大学 (Ultuna lantbruksinstitut) において特別学生として1871年の夏まで学習した。その後サロモンは、イエーテボリから30キロメートル東に位置するネースへ移った。移住した直後から、サロモンはネース近郊の国民学校 (folkskola) を訪問したり、イエニー・ベリエ (Jenny Berg) が子どものために設立した日曜学校で教えている。このような事実でサロモンの教育への関心の高さをみる事ができよう。

#### (2) ネース・少年スロイド学校の創設の経緯とその教育内容

サロモンの叔父のアブラハムソンは当初、彼が住んでいる教区 (Skallsjö församling) の学校委員会 (skolråd) にスロイド学校を設立するための寄付の提供を申し出たが、その委員会はすでに設立されていた幼児学校 (småskola)<sup>146)</sup>の維持にその寄付を使用したいということで、スロイド学校を設立することには至らなかった。そこで、「あらゆる種類の実践的労働 (alla slag af praktiskt arbete)、とりわけそれに関する手の技能 (handsskicklighet) に心からの関心」をいっていたアブラハムソンは、私立のスロイド学校としてネースやその周辺に住んでいる国民学校<sup>147)</sup>を修了した男子を生徒として受け入れるネース・少年スロイド学校 (Näas slöjdskola för gossar) を1872年2月に創設した<sup>148)</sup>。このスロイド学校は、1860年代後半にヘムスロイドが後退した後<sup>149)</sup>、そのことに危機を感じた人々が1870年代におこした復興運動と結びついて、スウェーデン国内の各地につくられたスロイド学校の一つであった。ネース・少年スロイド学校でとりあげられた教育内容は、数学、線図 (linearritning)<sup>150)</sup>、糸鋸 (löfsågning)<sup>151)</sup>であり、数学と線図はサロモンによって、糸鋸はスロイド・インストラクターであったボリエストローム (C.A. Borgström) によって担当された。

1872年7月から実習設備を備えた新しい校舎が完成し<sup>152)</sup>、木工 (snickeri) という科目が新たに実施された。この科目を担当したのは、アルフレッド・ヨハンソン (Alfred Johansson) で、彼は「農場のスロイダレ (slöjdare) の一人」であった<sup>153)</sup>。

最初の年のスロイドの授業で製作したものは、“熊手”と“手押し車”であったという<sup>154)</sup>。この段階での取り組みは農民の生活に役立つものをつくる技能を育てることを目的としているスロイド教育であったと考えられる。つまり、ヘムスロイドを教えることを目的としていた。学校の授業は毎日10時間ずつ、週6日間(月曜日から土曜日まで)、年間50週実施された<sup>155)</sup>。一日10時間のうち、7時間はスロイドの授業で、あとの3時間はその他の教科にあてられた。木工という科目には、次第に旋盤作業 (svarvning) や彫刻 (träsnideri) の内容が加えられた。また、一部の生徒のために馬鞍づくり (sadelmakeri) も加えられた。糸鋸については最初の1年目の取り組みを通して生徒に教えるのにあまり適切ではないという理由でとりあげられなくなった。生徒には当初補償金 (godtgörelse) が1日につき40オーレが支払われた。それは、生徒の親<sup>156)</sup>は国民学校を終えた子どもに勉強させる余裕がないことが判明したからであり、生徒が学校に来なくなると学校を閉鎖せざるをえないという判断からであった。しかし、次第にこの学校を卒業した生徒が比較的有利な仕事を獲得することができることによって世間の関心もたれるようになってから、この補償金の制度は1877年に廃止された。

### 3. 1874年の組織改革後のスロイド教育 (1876年まで)

次に本稿の主要な課題である1874年以降のスロイド教育の実践を検討する。

#### (1) スロイド学校への入学年齢の引き下げ

創設当初は先述したように国民学校を修了した生徒 (12歳以上) を入学させていたが、「スロイド教育が基礎的であることが次第に明らかになり、それが専門的教育の分野には含まれないことが明らかになってきたので、スロイド学校への入学者の年齢を下げる必要性がでてきた」<sup>157)</sup>として、1874年にスロイド学校への入学年齢を2年下げる改革を実施した。こうして「スロイド学校への入学年齢が国民学校の上級段階<sup>158)</sup>に入る子どもたちの平均年齢と同じ」になり、「私立の国民学校高等部 (en privat högre folkskola)」となった。

そこで、「理論的教科の授業の方も変化させる必要性がでてきた」ので、教科の構成は、キリスト教の知識、歴史と地理、算数と幾何、スウェーデン語、理科、清書、線図、軍事訓練となり、スロイドは木工、旋盤作業、彫刻 (träsnideri) から構成された。さらに算数と幾何、線図は「通常の国民学校よりも重視された」時間配分となった<sup>159)</sup>。サロモンはこのスロイド学校を「スロイドという教科を特徴とする国民学校に徐々に移行していった」と特徴づけている<sup>160)</sup>。

#### (2) 1875年頃の少年スロイド学校での実践

1875年頃の少年スロイド学校での実践については、サロモン自身が後に (1891年に) 「スウェーデンの教育的スロイド (svenska pedagogiska slöjdundervisning) の基礎になっている考え方を創出する試みがなされた」<sup>161)</sup>と回顧しているように、注目すべき実験がこのスロイド学校の生徒を対象になされた。その実験の特徴の1つは、スロイドの授業でとりあげるスロイドの種類を一つかあるいは関連するものに限定する

ことであった。1876年にはこの点でなされた試みの結果として木工に集中することのメリットが明確になったとサロモンは述べている。「理論的な観点からは、すべての学校の生徒に多様な種類のスロイドに関する知識と技能を獲得させることはメリットが大きいに考えられるが、実際にやってみると状況は異なったものとなった。すなわち、多様な教材への力の分散は、概して何らかの種類の技能とすべてに関するいい加減で、不十分な知識をもたらすこととなった。多くの種類の道具の使用は、道具の操作の確実な習得を妨げた」。木工のメリットは「生徒がのこぎり、かん、ハンマーなどの日常生活でしばしば出会う道具を利用することになれること、木工工作台で立っている状態は、本や製図机で座っている状態との必要な交換になること、力を使うことを通して体力の発達を要求すること、木工以外のものよりも、木工の方が日常生活に役立つものをつくること」にあり、木工の方が日常生活に役立つものをつくることである<sup>62</sup>。

この少年スロイド学校での実践のもう一つの到達点は、「実際に教育的な転換を引き起こすために、方法的に正しいやり方で（スロイド教授を）組織する」ことであった。その「教育的なスロイド教授」の方法は「職人の慣習的な養成方法とは異なる」とし、「慣習的な方法は道具の操作や接合等をそれだけ分離して取りだして学習させ、その後実際の作品を製作する」方法（「前練習（förövning）」といわれる方法）であり、「抽象的なものから具体的なものへとすすんでいく」方法であるとしている。それに対して「教育的なスロイド教授」の方法は「まったく反対の方法」であり、「具体的なものから抽象的なものへと進んでいく」とする。また、職人の養成では「最初の道具としてのこぎりから出発する」のに対して、「教育的なスロイド教授」ではナイフを「基本的な道具」とする。ナイフは「最も普通にある道具」で、「一般的な技能を獲得するのに適している」とする。そして、「このスロイドに特徴的な道具であるナイフだけをつかっ、使用可能なものをつくること」が重要な点である<sup>63</sup>。

以上にみてきたように、1876年の時点においてサロモンはすでにスロイド教育を木工に限定することの有効性を発見していた。すなわち、木工は日常生活で出会う道具を使用すること、体力の発達を促すこと、日常生活に役立つものをつくることなど、普通教育的意味をもつことを発見したのであった。1872年にネース・少年スロイド学校が開始されたときにはそこでのスロイド教育はヘムスロイドを教えることが目的であったと考えられるが、その2年後の組織改革でより多くの普通教育科目を導入することによって、スロイドに配当する時間が減少させられ、そこでのスロイド教育は「一般的な技能を獲得する」ことに目的がおかれるようになった。また、教授法の点でも、職人による「慣習的な方法」から、ナイフの使用から出発するという方法へ転換していたが、これも「一般的な技能を獲得する」目的への転換からもたらされたものであった。

#### 4. 普通教育的スロイドへの転換の要因

##### (1) スロイド学校と国民学校の統合問題

このようなスロイド教育の目的や教授法の転換が起こった要因には、第一に、当時の民衆教育機関の発展過程におけるスロイド学校と国民学校の統合問題があった。

1860年代半ばから1870年頃にかけてのスウェーデンの農村部でのヘムスロイドの減少という状況とかかわって1870年代に創設されたスロイド学校は、1842年の民衆教育令以降、国民（民衆）学校が整備されていくと、1870年代半ばにはこの両者の統合という問題に直面することとなった。ネース・少年スロイド学校の1874年の組織的変更がその一つの例であった。

サロモンは、*Slöjdskolan och folkskolan I*（スロイド学校と国民学校）（1876）において、スロイド学校と国民学校とを統合する必要を主張しているが、その根拠を以下のように述べている。「よく知られているように、肉体労働者の両親はしばしば自分の子どもの教育にあまり時間を割くことが出来ないし、またそれを望んでいない。国民学校の生徒の年齢は14歳を超えることは概してほとんどない。子どもたちが両親と一緒に住んでいる家に実際に役立つものをつくることのできる体力がで次第、できるだけ早く親の仕事を手伝うことを両親たちは望んでいるし、子どもの助けなしには両親はやっていけない。したがって、多くの場合最低限の知識を学校で学んだ後は、子どもたちは本とペンを置き、学校教育を中断せざるをえない。それに代わって自らの時間と体力を自分の家や他人のところでの労働にささげざるを得ないのである。この残念な事実から、スロイド学校はなにか特別な補償なしには、国民学校の中からその生徒を募集せざるをえないのである。」「もちろんスロイド学校が国民学校から独立して活動することができるようになる場合もある。つまり、国民学校の卒業証明書を受け取った子どもの中から生徒を獲得することができるようになる場合もある。しかし、そのような状態は、現在や近い将来においては例外としてみなければならない。」<sup>64</sup>

貧しい農民の子弟を対象としたスロイド学校は国民学校と統合して、はじめて生徒を確保できるという実態が存在したのであるが、そのことによって、スロイド教育に配当される時間数は当然減少する。そこでのスロイドは、販売を目的とする農村工業的なヘムスロイドではなく、より一般的な性格をもつものへの転換が迫られた。

##### (2) 国民学校の実際化

他方、国民学校の方もスロイドを教科として導入することにより、書物中心の知識の学習と実践的な学習とを組み合わせることで、農民からみれば書物中心での知識の学習に偏しているとみられていた国民学校の実態を変化させることがもめられていた。そのことによって国民学校への進学率を上昇させるねらいもあったと考えられる。1876年にエルフスボリ工場のヘムスロイド協会が「スロイド学校と国民学校の統合はいかに可能か」という懸賞問題を公募し、サロモンが1878年に編集・発行した*Slöjdskolan och folkskolan II*（スロイ

ド学校と国民学校)に数編の論考が掲載されている。この問題が当時のスウェーデンの国民(民衆)学校改革の重要な課題の一つであったことを示している。

### (3) スロイド教員養成の問題

さらに、スロイド担当教師及び教員養成の問題が存在した。サロモンは1870年代に各地にスロイド学校がつくられていく中で、スロイド教員養成の必要性を感じ、1874年春にスロイド教員養成所の計画書を作成した<sup>35)</sup>。さらに同年秋に、18歳以上のスロイド経験者を対象とした1年制のネース・スロイド教員養成所を発足させた。その計画書においてサロモンは「教師は教授者(undervisare)であるだけではなく、教育者(uppfostorare)でもあることを常に忘れてはならない」と述べ、「教師は考えていることと、話していることと、行為が同じであることが必要である」「特別に重要であるのは、自分の意見をうまく表現することができること、自分の知識を生徒にうまく教えることができることである」とし、さらにスロイドの教師は、「彼が教えるスロイドの種類におけるすぐれた技能をもっていなければならないが、同時に働く喜びや働き者であり、整理整頓、責任感をもっていなければならない。そして、学校は教師でもあるという真実を常に思い出さねばならない」と述べている。また、具体的な計画のなかでは、スロイド教員養成所の教育内容は、1. 数学と幾何、2. 自然科学、3. 線図、4. スロイドの4つの分野から構成されていた。スロイドについては、「多様な道具に関する知識や技能、より簡単な台所用品を修理し、製作する練習、建物の欠陥部分を修繕する練習、小さな、あるいは普通のサイズの家具の製作、作業車や手押し車の車輪やフレームの製作、鍛冶ややすりがけの技能」などが教育内容とされていた。1874年の時点では、木工に限定するのではなく、鍛冶ややすりがけなどの多様な種類のスロイドが入っていた点や「家具の製作、作業車や手押し車の車輪やフレームの製作」などのヘムスロイドの内容を教えようとしていた点などは、スロイド学校のスロイド担当教員を養成することを目的としていたことと関連していると考えられる。

サロモンはこの時点から数年間は、スロイド教員養成の取り組みに関して「同種の施設が他になかったので、先行経験が得られず、試行錯誤が続いた」と述べている<sup>36)</sup>。しかし、1876年の時点では国民学校教員がスロイドを教える可能性について以下のように述べている。「国民学校でスロイドを教える人は自分が担当するなにかの種類のスロイドについての卓越した技能をもっていなければならないということは、一般的にいて必要のないことである。」「国民学校が職人(大工、鍛冶職人、彫刻士、籠編み職人など——サロモンによる注解)を養成することを引き受けるべきであるということであれば、この教育を担当する人が職人であることは疑いもなく、重要である。」「しかし、国民学校におけるスロイド教育の目的は、一方で労働を何か愉快なものとして、他方で生徒の将来の生計に必要なものとして、生徒が労働を愛好することを学ばせることである。さらに、生徒にその有用な用途について洞察させ、彼らが自分の手を使ってつくることを学ば

せることであり、普通にある道具を使用するための知識と技能を教えることである。』<sup>37)</sup>

以上のように、国民学校のスロイド教師のもつべき能力の問題について、サロモンは1876年の時点にはなにかのスロイドについての卓越した技能をもつ必要はなく、普通にある道具を使用するための知識と技能を教えることが必要であるという見解に到達していた。

サロモンは、職人をスロイド教師に養成することには否定的であった。以下の文章は、1891年に書かれた文章からの引用であるが、すでに1876年の時点でサロモンは職人が必ずしもスロイド担当教員としてふさわしいわけではないことをすでに自覚していたように思われる。「ある特定の分野で技能的にすぐれた人物が同時にすぐれた教師(pedagog)ではないので、彼は自分を生徒の立場におくのではなくて、生徒を自分の立場にたたせようとする。」「職人は一般的に言って、段階的に発達させることの必要性をまったく見落とし、生徒に対する関係は指導者としての関係よりも援助者としての関係になってしまう。」「(職人は)学校スロイド(skolslöjden)の基礎におかれなければならない教育的な考え方を理解することはほとんど稀な場合でしかない。」「(職人は)作業の目的は作品を完成させることにあるのではないことを理解することが困難である。」「それゆえ、職人の観点からの実際のやり方は教育的なねらいとは異なるものになってしまう。そして職人の教授は生徒にとって便益があるよりも有害になってしまう。」「職人は、工房の伝統を忠実に学校にも維持しようとする。そして、教師と生徒という関係よりも職人と徒弟という関係が続くことになる。」「職人は生徒が独立して作業することを学ぶことが最も重要であると考えのではなく、生徒のかわりに職人が自分で作業をする、あるいは一番重要なところの作業をする。」「職人によって指導された学校は、よい作品をつくるが、よい作業者をつくることはほとんどない。』<sup>38)</sup>

### おわりに

本稿では、主として1891年にサロモンが作成したネース・少年スロイド学校やスロイド教員養成所の説明資料をもとに<sup>39)</sup>、サロモンの1876年までの初期のスロイド教育実践とスロイド教員養成の構想を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

ネース・少年スロイド学校は発足して2年経過した1874年に入学年齢を10~11歳に下げ、国民学校としての性格をかねそなえたスロイド学校に変化させた。

1876年の時点においてサロモンはすでにスロイド教育を木工に限定することの有効性を発見していた。すなわち、木工は日常生活で出会う道具を使用すること、体力の発達を促すこと、日常生活に役立つものをつくることなどなどの点で、普通教育的意味をもつことを発見した。1872年にネース・少年スロイド学校が開始されたときには、そこでのスロイド教育はヘムスロイドを教えることが目的であったと考えられるが、その2年後の組織改革でより多くの普通教育科目

を導入することによって、スロイドに配当する時間が減少させられ、そこでのスロイド教育は「一般的な技能を獲得する」ことに目的がおかれるようになった。また、教授法の点でも、職人による「慣習的な方法」からナイフの使用から出発するという方法へ転換していたが、これも「一般的な技能を獲得する」目的への転換からもたらされたものであった。

このようなスロイド教育の目的や教授法の転換が起こった要因には、当時の民衆教育機関の発展過程におけるスロイド学校と国民学校の統合問題があった。農民の子弟を対象としたスロイド学校は国民学校と統合して、はじめて生徒を確保できるという実態が存在したが、そのことによってスロイド教育に配当される時間数は当然減少した。そこでのスロイドは販売を目的とする農村工業的なヘムスロイドではなく、より一般的な性格をもつものへの転換が迫られた。また、他方、国民学校の方もスロイドを教科として導入することにより、理論的な学習と実践的な学習とを組み合わせることで、理論的な学習に偏している国民学校の実態を農民にとって受け入れられる学校に変化させることがもとめられていた。

サロモンは1876年の時点において、国民学校においてスロイド担当する教師として必ずしも職人がふさわしいわけではないこと、むしろ教育的な考え方を理解することができ、生徒に労働を愛好することを学ばせ、普通にある道具を使用するための知識とやり方を教えることができる国民学校教師が望ましいと考えていた。

サロモンがシグネウスとはじめて会ったのは、1877年5月から6月にかけてのフィンランド訪問のときである。本稿では言及できなかったが、彼らはその後10年間にわたって手紙を交換している。筆者はそれらを通読したうえで、両者の最大の相違点はスロイド学校の概念にあり、最初から最後まで二人の見解は平行線のままであったことを見いだした<sup>40</sup>。すなわち、シグネウスはスロイド学校を、初等民衆教育を担当する国民学校と峻別し、職業教育を担当する学校であるとみたが、サロモンはスロイド学校を国民学校と統合することによって、国民学校に発展的に解消していくものにとらえていたと思われる。

以上から、松崎の指摘する①、②、③及び④はすでにサロモンがネース・少年スロイド学校の実践で到達していた内容であり、シグネウスから学んだ内容ではないと結論づけることができよう。

本稿でとりあげた時期のものは、サロモンが「教育的スロイド」として具体的な教材として編成したモデル・シリーズが登場する以前の段階のものである。サロモンの1880年代から1890年代にかけての発展については、稿を改めて述べることにしたい。

#### (注)

(1) 同時期に40ヶ国以上からの参加者がネースでの講習会に参加した。また、彼らは帰国後スロイド教育に関する書物や論文を執筆し、さらに多くの国に間接的に影響を与えた。

(2) その成果の一部は、拙稿「手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流——手工科に与えたスロイドの影響の再評価——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第50巻第2号、2004年3月、Etsuo Yokoyama & Ulla Johansson ‘The Introduction of Sloyd into Swedish Elementary Schools’『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第51巻第2号、2005年3月、等を参照されたい。

(3) ウノ・シグネウス (Uno Cygnaeus, 1810-1888) は、1866年から発足したフィンランドの国民（民衆）学校 (Folkskolan) 制度の創設に、またその国民学校のカリキュラムの中に手工科を必修教科として世界最初に導入した点でも大きな役割を果たした人物である。当時フィンランドは帝政ロシアの支配下にあったが、そのもとでのフィンランド自治政府が民衆学校の組織化に関する意見書を1856年に公募したことがあり、その際シグネウスの提案は高く評価された。そのことによって彼は1858年に約1年間ヨーロッパの教育視察に派遣された (スウェーデン、デンマーク、プロイセン、ザクセン、オーストリア、スイス)。その旅行中に会った教育家たちの中で、彼が特に強い印象を受けたのはスウェーデンの民衆教育の推進者ルーデンショルドとプロイセンにおけるペスタロッチ思想の継承者・普及者ディステルヴェークであり、スイスにおいては、「すでにペスタロッチが没して30年になっていたが、小学校、師範学校の教育のすぐれた実践が、彼に深い感銘を与えた」のであった。帰国後に彼が政府に提出した視察報告書と提案は1866年に発足するフィンランドの国民学校制度の基本構想となったとされる。1866年の国民学校制度の発足に先立ち、1863年にユベスキュラに師範学校が創設されるが、シグネウスはその校長となり、その学校のカリキュラムには手工と農業実習が含まれていた (松崎巖「スロイド教育の思想と実践—シグネウスとサロモン」『技術教育』1973年5月、p.51)

(4) 本多雄伸は「ウノ・シグネウスと手工教育」(日本大学教育学会『教育学雑誌』第40号、2005年)において、「(遠藤敏明氏は)『オットー・サロモンは国民学校で教科スロイドを教えるのは教育学的な訓練を受けた国民学校教師が最適であると考えようになった』としているが、これはサロモンの考えではなく、1877年にフィンランドのユベスキュラを訪問したサロモンが、シグネウスから直接教示されたもので、シグネウスの考えである」と主張している (p.10)。また、同氏は、「サロモンは、職人や職工を教員に仕立て上げて職業教育を行うことを止め、シグネウスの考えを取り入れて、小学校の現職教員を集めて普通教育としての手工教育教授法を教えるようになった。」(p.9)と述べている。

(5) 松崎巖「教育的スロイドの成立と発展について」『青山女子短期大学紀要』第18号 (1964年)

(6) なお、注(5)の松崎の論文にみられるネース・スロイド学



校に関する記述（1868年にネースの少年スロイドが設立された点や1872年に改組された点、及びこの学校の名称をarbetskolaとしている点や1872年の改組後の教育内容などの点）は後述するように明らかに誤りであるが、それらの内容はBennettの叙述にもとづいて書かれている（C.A.Bennett, *History of Manual and Industrial Education 1870-1917*, p.55-p.62）。ただ、松崎が「普通教育の一環としてのスロイドという考え方はなかった」と評価している点を、Bennettは「1876年までの時期のスロイド教育は経済的な必要にもとづくもので、本質的にホーム・スロイド（home sloyd）であった」としている（ibid, p.62-p.63）。

- (7) 「スロイド教育研究—19世紀末からの歴史的展開と現代的意義—」筑波大学博士学位論文（未公開）1993年
- (8) 本多は「1872年、スウェーデンのネースでオットー・サロモンが小学校を修了した少年を対象にした職業教育学校を開いた。この当時、スウェーデンでは各地にこのような職業学校が林立していたが、サロモンは教員養成の重要性を見抜き、1874年に自分の職業学校に意識の高い職人や職工を手工科教員に仕立て上げる教員養成課程を併設した。この頃のサロモンは、職業教育の普及と向上に傾注していた。」と述べている（本多雄伸「ウノ・シユグネウスと手工教育」〔日本大学教育学会『教育学雑誌』第40号、2005年、p.8〕なお、本多はこのように述べた根拠として、松崎巖の「教育的スロイドの成立と発展について」をあげている。
- (9) 注(6)参照。なおベネットは英語文献だけにもとづいて北欧のスロイド教育にかかわる章（Sloyd of Scandinavia）を執筆しており、スウェーデン語の文献はまったく参照していない。本稿でとりあげるサロモンの“*Slöjdskolan och folkskolan I*”（1876）をはじめ、サロモンがスウェーデン語で書いたものの中に英語に翻訳されていないものが多く存在している。
- (10) Hans Thorbjörnsson, *Nääs och Salomon – slöjden och leken*, 1990
- (11) Hans Joachim Reincke, *Slöjd – Die schwedische Arbeitserziehung in der international Reformpädagogik*-, PETERLANG, 1994
- (12) スウェーデンに定住して、その営業に対する保証書を得るためには、最低限2000ダーレルの資本金が必要とされた。ダーレは当時のスウェーデンの貨幣単位で、当時の普通の労働者の賃金は年100ダーレル以下であった。つまり、裕福なユダヤ人だけが移民として歓迎された（Eva Helen Ulvros, *Sophie Elkan*, s.27, 2001）。
- (13) David Glück, Aron Neuman, Jacqueline Stare, *Sveriges judar*, 1997
- (14) さらに彼の父親であるアロン・イサック（Aron Isaac）は印鑑彫版工（sigillgravören）であった。
- (15) 後のTekniska högskolan（ストックホルム工科大学）
- (16) 幼児学校は2年あるいは3年制の学校で、その後国民学校（その修業年限は幼児学校が2年の場合は国民学校

は4年、3年の場合は3年であった）が続いた。当時の民衆教育は最大で6～7年間（7–14歳）で、人口の大部分が住む農村部では隔日に登校する学校（varannandagskolan）や教師がいくつかの学校を訪問する巡回学校（ambulerande skolor）などに通学する生徒も多かった。農村の子どもは、農業労働に年齢に応じて従事しており、農村部の親の学校教育に対する「抵抗」（motstånd）はある地域では1920年代まで続いた（Mats Sjöberg, *Att säkra framtidens skördar – Barndom, skola och arbete i agrar miljö: Bolstad pastorat 1860-1930*, Linköping universitet, 1996）。なお、幼児学校の教員はすべて女性でsmåskollärarinnaと呼ばれた。

- (17) 1842年の民衆教育令（Kungl. Stadgan den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket）によって、すべての民衆に義務教育を課するという理念が確立されたものの、この国民（民衆）学校（folkskola）が普及するまでに相当の期間を必要とした。その現象はスウェーデンの人口の大部分をかかえる農村部で顕著であり、児童労働を必要としている農家に4年間の義務教育を普及させるのに80年ちかい年月を要した（農村部では、隔日学校（varannandagskolan）が1920年代まで存在した）。このような変則的な形態の学校を含めて、国民（民衆）学校の就学状況を別表にかかげておく。なお、管見の限り、19世紀から20世紀にかけてのスウェーデンの教育事情を述べた適切な邦語文献はないので、当時の国民学校制度全体の動向については、本稿では省略せざるをえない。詳しくは、*Svenska folkskolans historia del 2 (1860-1900)*を参照のこと。なお、この本は、スウェーデンの国民学校制度が創設されてから100年目にあたる1942年に発行された。
- (18) ネース・少年スロイド学校の取り組みを記録したのものとしては、1876年にサロモンがネースのスロイド学校について書いた史料（“Om Nääs slöjdskolor”）がある。この史料は、同年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会での展示に向けて書かれたものと考えられる。その後、1891年にサロモンがネースのそれまでの歩みについてまとめた*Något om Nääs och dess läroanstalter*という冊子がある。以下の叙述はこの1891年の冊子にもとづいている（1876年の史料よりもこの冊子の方が詳細に書かれているという理由からこれを主に使用した）。この1891年の冊子は、同年8月5日にスウェーデン国王Oskar II世がネースを訪問した際に、その説明資料として作成されたものである。その他には、この学校の25周年である1897年6月30日に行ったサロモンの講演記録が“*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.147, 1897. juniに‘Högtidstal’と題して残されている。また、サロモン没後、1942に70周年の記念誌（*Nääs 1872-1942, Minneskrift*）が出版され、その中にも少年スロイド学校にかかわる記録が書かれているが<sup>8</sup>（ibid, s.31-s.35）、その内容は1891年の冊子の内容を紹介したものである。

- (19) Per Hartman, *Slöjd för arbete eller fritid?*, 1984, s.9 なお、ヘムスロイド (hemslöjd) とは基本的には農村部において農業や家庭生活に必要なものを簡単な道具でつくることで、地域によってはその特産物として家庭において使用する以外にも販売に出すものを生産することもあった。工業化による安価な製品の普及、農村での労働形態の変化によって、1860年代後半に減少したとされ、1870年代に入ってヘムスロイド復興運動が展開した。
- (20) 線図はサロモンが重視していた教科の一つであった。サロモンはスロイドの技能 (slöjdfärdighet) は製図の技能 (ritfärdighet) に支えられるとし、このスロイド学校では隔日に3時間づつ (週9時間) を線図にあてていた (*Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.27)。また、サロモンは1876年に *Kortfattad handledning i linearringning* (線図のための手引き) を出版している。この当時に国民学校における製図教育をめぐる、2つの対立する見解が存在した。一つはフリーハンドのスケッチ (frihandsteckning) 他の一つは線図であった。サロモンは個人の才能の違いによらないで誰もが獲得すべき能力を重視する観点から線図を重視していた (“Om Nääs slöjdskolor” 1876. s.6.)。
- (21) 糸鋸 (löfsågning) は当時スウェーデンにおいて流行し始めていたとサロモンは書いている (Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13)
- (22) 6月30日に落成式が開催されたが、その際に祝辞を述べた人物は、エルフスボリエ県の県知事のエリック・スパレであった。彼は、国会議員 (Riksdagman) であるとともに、この県のヘムスロイド協会の代表でもあり、スロイド教育問題に熱心に取り組み、国民学校へのスロイド教育の導入に関する動議を1876年の国会に提出した (この国会では否決されたが、翌年の国会でスロイド教育を実施する学校への補助金に関する法律が可決された)。
- (23) このスロイダレ (slöjdare) は、スロイドをおこなう人といいかえることができるが、*Ordbok över Svenska Språket utgiven av Svenska Akademien* (第28巻) という辞典によれば、この1800年頃から1900頃にかけては、スタータレ (statare、農場労働者) と同じように農場に雇用された労働者であり、農場に必要なものを製作するということで、少し高い賃金を得ていた人をさす言葉であった。
- (24) 1891年にサロモンによって書かれた文章には、「(熊手と手押し車がつくられたのは) 奇妙なことですが」という言葉が付け加えられているが、この言葉は、1891年の時点で到達した地点からみて、「(その時点で到達した) 教育的スロイド」からみて、という意味であると解釈できよう。
- (25) 1876年2月に作成された史料 (“Om Nääs slöjdskolor”) では、夏時には午前6時から午後7時まで (うち2時間は日中の休憩時間)、冬時には午前7時から午後6時までが学校が開かれていたようである。
- (26) サロモンは「労働者階級 (kropparbetarnes klass) の親」と表現しているが、スタータレ (農場労働者) をさして
- いると考えられる。なお、当時の農場労働者の日当はおよそ1クローネ (100オーレ) であった。
- (27) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13
- (28) 上級段階とは幼児学校を1, 2学年とすると5学年と6学年に相当する部分であり、7歳で幼児学校に入学した生徒は11歳から12歳の年齢段階にあたる。
- (29) 1874年改革以後のネース・少年スロイド学校のカリキュラムの各教科の時間数等に関する資料は、以下に示すエテボリ公文書館の筆者への回答 (2005年10月12日付) がある。現在のところ、これ以上の詳細は知られていない。「August Abrahamssons stiftelse (財団) のアーカイブには、1875年度と1876年度の修了証明書の写しがわずかに保管されている。それには、生徒が学んだ教科についての全体的な表は記載されておらず、生徒ごとに学習した教科は異なっている。そこに記載されている教科は、算数 (räkning)、数学、製図 (ritning)、線図、物理、鍛冶、音楽、ドイツ語、英語、一般的な知識 (allmän kunskap) であり、教科ごとの時間数についての記載はない。」
- (30) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.18 1870年代のネース・少年スロイド学校は修業年限や学年の修了という制度や概念がはたして存在したのかどうかを含めてよくわかっていない。1876年のこの学校の生徒数は12名で、年齢は12歳から16歳であった (Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876 s.73)。このスロイド学校は1888年に閉鎖された。一方、(同地区に存在した) ネース・国民学校 (Nääs folkskola) の生徒の記録簿 (Examens Katalog) が、レルム・コミュン (Lerums kommun) のアーカイブに残されている。その資料 (1881年から1899年までの記録簿が残されている) によると、この国民学校は1881年から1888年の間は、第1学年から第3学年までの3年制であった。
- (31) *ibid.*, s.19
- (32) *ibid.*, s.21-s.22
- (33) *ibid.*, s.26
- (34) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876 s.26-s.27
- (35) Otto Salomon, ‘Något om slöjd och slöjdundervisning samt plan till seminarium för utbildande af slöjdlärlare’ *Lansbruksakademins Tidskrift*, nr.5, 1874, s.303-s.312
- (36) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.43
- (37) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876, s.39-s.40
- (38) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, s.41-s.42
- (39) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, Otto Salomon, ‘Något om slöjd och slöjdundervisning samt plan till seminarium för utbildande af slöjdlärlare’ *Lansbruksakademins Tidskrift*, nr.5, 1874, s.303-s.312 サロモンはこの1891年の資料で、「この考え方 (本稿で紹介した内容をさす——引用者) で作成されたモデル・シリーズは1877年に初めて公開され、エルフスボリエ県のスロイド展覧会において賞を授与された」(*Något om*



Nääs och dess läroanstalter, s.27) としている。筆者が確認できるサロモンの教育的スロイドの「モデルシリーズ」は1880年代前半以降のものであり、この1877年のモデル・シリーズはまだ確認されていない。

- (40) これらの手紙の一部は、拙稿「『教育的スロイド』の成立をめぐる」(『技術と教育』第362号、2004年2月)において1881年9月29日付のシグネウスのサロモンへの手紙を紹介した。これらの手紙を読むかぎり、サロモン

はシグネウスからペスタロッツ、フレーベル、ディステルペグなどのドイツ語圏の教育学の成果を学ぶ必要性を教えられたということがシグネウスのサロモンへの影響の内容であったと考えられる。この点については別途検討する予定である。サロモンはフィンランドから帰国後、1880年頃までにこれらの教育学の著作を購入し、その研究成果をもとに*Slöjdskolan och folkskolan IV* (1882)、*Slöjdskolan och folkskolan V* (1884) を執筆した。

別表 学校形態ごとの生徒数とその割合の変化 (1847年~1881年)

	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計
1847	99,343	91964	...		191,307	51.9	48.1	...		100
1850	143,526	126,178	...		269,704	53.2	46.8	...		100
1853	152,039	132,033	...		284,072	53.5	46.5	...		100
1856	159,745	146,483	...		306,228	52.2	47.8	...		100
1859	174,418	155,824	...		330,242	52.8	47.2	...		100
1865	189,366	149,745	122,717		461,828	41.0	32.4	26.6		100
1866	189,928	157,121	133,591		480,640	39.5	32.7	27.8		100
1867	194,075	158,287	152,006		504,368	38.5	31.4	30.0		100
1868	200,339	157,616	162,591		520,546	38.5	30.3	31.2		100
1869	208,514	153,445	171,925		533,884	39.1	28.7	32.2		100
1870	214,784	153,928	186,883		555,595	38.7	27.7	33.6		100
1871	224,444	152,806	199,603		576,853	38.9	26.5	34.6		100
1872	233,021	151,429	213,665		598,115	39.0	25.3	35.7		100
1873	239,495	149,565	218,616		607,676	39.4	24.6	36.0		100
1874	244,757	147,789	222,305		614,851	39.8	24.0	36.2		100
1875	249,757	139,837	223,830		613,424	40.7	22.8	36.5		100
1876	238,612	109,452	38,880	185,276	572,220	41.7	19.1	6.8	32.4	100
1877	242,339	102,256	41,593	183,944	570,132	42.5	17.9	7.3	32.3	100
1878	248,566	98,328	43,590	187,107	577,591	43.0	17.0	7.5	32.4	100
1879	249,031	91,450	42,189	188,999	571,669	43.6	16.0	7.4	33.1	100
1880	251,351	86,201	39,503	196,873	573,928	43.8	15.0	6.9	34.3	100
1881	249,879	80,483	42,870	192,753	565,985	44.1	14.2	7.6	34.1	100

この表の左半分は各学校形態ごとの生徒数であり、右半分はその百分率である。固定型国民学校 (Fasta folkskolor) は独自の校舎をもつ国民学校で、有資格教員が教えている学校である。巡回型国民学校 (Flyttande folkskolor) は有資格教員が巡回する形態の学校教育である。低学年学校 (Mindre skolor) と幼児学校 (Småskolor) の形態は多様であったが、前者は無資格教員が、後者は幼児学校の教員資格を持った教師が教える学校である。1871年から幼児学校は国民学校の準備教育を行う学校となった。それ以前はこれらの学校は国民学校の代替機関であると親がみなした地域も農村部ではあった。なお、この表にはあらわれていないが、学校に通わず、家庭で親が教育を担当する形態(Hemundervisning)もあった。1870年代前半では約1割の子どもがそのような形態を選択し、コミューン(地方自治体)から承認を得ていた。参考文献 "Elever i obligatoriska skolor 1847-1962" (Statistiska centralbyrån), 1974,s.55

(2005年9月29日 受理)

(2005年11月25日 再受理)

## スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態

— オットー・サロモンの著作からみえてくるもの —

横 山 悦 生

1. はじめに
2. 1870年代までの民衆学校の発展
  - (1) 1842年民衆教育令と義務教育
  - (2) 民衆（国民）学校への就学実態とその背景
  - (3) 補習学校（fortsättningssskolan）
3. 1870年代前半における農村部のスロイド学校
  - (1) オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第1巻』にみられるスロイド学校の実態とその改革課題
  - (2) 1876年12月におけるスロイド学校一覧とその所在地
  - (3) 1870年代前半のスロイド学校の実態
4. 1877年改革によるスロイド学校の変容の萌芽
  - (1) 1877年改革の概要
  - (2) スロイド学校と国民学校との統合など—オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第2巻』にみられるスロイド学校改革の若干の論点—
  - (3) 1877年改革によるスロイド学校変容の萌芽の実態
5. 若干の分析
6. 結びにかえて

## 1. はじめに

本稿の目的は、スウェーデンのスロイド教育史における一つのメルクマールである1877年スロイド教育改革（以下1877年改革とする）の背景となっている、①それまでの民衆学校の発展状況、②1870年代に創設されたスロイド学校の実態について述べ、若干の分析を加えることである。

1860年代後半にスウェーデン各地でヘムスロイド（hemslöjd）が後退した後、農業経済会議所（Hushållnings-sällskap）\* や地方議会（Landsting）\*\* がスロイド教育を促進するために補助金制度を発足させた。ヘムスロイドとは基本的には農村部において家庭生活に必要なものを簡単な道具で

つくることで、地域によってはその特産物として家庭生活に必要なもの以外にも販売に出すものを生産することもあった（ヒューススロイド（husslöjd）やヒュースフリート（husflit）という用語も使われたが、これらはヘムスロイドと同義語である）。工業化による安価な製品の普及、農村での労働形態の変化によって、1860年代後半に減少したとされ、1870年代に入ってヘムスロイド復興運動が展開した。

1942年に国民学校制度100周年を記念して出版され

\*\* Landsting に正確に対応する日本語はないが、あえて翻訳すると「地方議会」であろう。それは一定の地域範囲（“landstingsområde”）での政策を決定し、遂行することができる機関であった。この“landstingsområde”は1862年の改革によって創設され、地図のうえでは“Län”（県）の範囲とほぼ同じであった。Landsting（ランスティング）は農業の促進、交通、警察、教育、病院などに責任をもつ機関でもあった。

\* 農業経済会議所は、農業やそれと関連する産業を促進するために組織された団体である。（*Svenska Uppslagsbok*, s. 982-s.983, Malmö, 1946-1955）

たヴィクトル・フレドリクソン編『スウェーデンの国民学校の歴史 (Viktor Fredriksson ed., *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*)』には「我が国のスロイド教育はヘムスロイドが死滅する危機の時期において、それを保持しようとする関心から起こってきた。農業に従事する住民が自給自足的な立場に立つ限り、衣服や木や金属による簡単な対象物は、その大部分が家庭での製造を通じて、彼らの必要を充たしていた。糸をつむぐこと、布を織ることはほとんどの地域で『家庭で必要なスロイド (husbehovsslöjd)』として存在した。さらに、ある地域では重要な副業を形成した。19世紀半ばに工業が大量生産を可能にし、農業の集約化が農地の世話により多くの労働を要求したとき、ヘムスロイドは減少した。……ヘムスロイドに最初に興味を示したのは農業経済会議所であった。というのは、ヘムスロイドは農業の副業とみなされたからである。」と書かれている<sup>1)</sup>。ヘムスロイドは、ここにてくる「家庭で必要なスロイド」という概念より広義の概念で、「家庭で必要なスロイド」と副業としてのスロイドとを合わせたものがヘムスロイドであると考えてよい。

また、1872年には政府はヘムスロイドを復活・促進させるための援助者を国内の各地に派遣するように予算措置をとった。この措置によって国内の各地を講演し回ったカール・アールボーン\*の講演の内容の一部は以下のようなものであった。

「人は本業に配慮することだけでは不十分で、労働者が本業に従事していない時間を利用して、家計に小さくても必要な貢献をなす労働の重要性を思い起こさなければならない。冬の夜の時間を睡眠や怠惰に無駄に過ごすべきではない。ヒューズフリート

(husfliten) は将来勤勞になれるべき子どもたちに祝福をもたらすであろう。」<sup>2)</sup>

このアールボーンの言葉が示しているように、ヘムスロイドの復興運動の担い手たちは、「成人の世代に欠落している技能や能力を成長中の若い世代に伝えていくべきであり、そのことによって現在の（技能の—引用者）欠落が将来の（技能の）欠落になることを防ぐことが可能になる」<sup>3)</sup> ことを、つまりヘムスロイドの復興のためには若い世代に対するスロイド教育がきわめて重要な課題であることを次第に自覚していった。こうして1870年代にスロイド学校がスウェーデン国内の各地に新たに設立されていったが、その実態についてはほとんど知られていない。

筆者はすでに別稿<sup>4)</sup>において、オットー・サロモン (Otto, Salomon) がスロイド教育の実践を進展させたネースの少年スロイド学校の事例分析をとおして、1870年代後半にスロイド学校と国民学校とが統合されていく要因を解明した。このネースの少年スロイド学校は、1870年代に創設されたスロイド学校の一つにすぎない。その他の同時期における同種のスロイド学校は、地域によっては不安定な存在であったこともあり、その実態に関する調査はなく、その正確な数もよくわかっていない。

アルバート・ヴィベリ (Albert Wiberg) は、『学校スロイド前史—スウェーデンの労働教育学の発展におけるいくつかの系譜 (1877年まで) —第1分冊1861年まで— (Till Skolslöjdens förhistoria—Några utvecklingslinjer i svensk arbetspedagogik intill 1877— I Tiden intill 1861)』の中で、国民学校にスロイドを導入する大きな契機になった1877年 (国会決議とそれに基づく法令) を学校スロイドの成立のメルクマルとしてとらえ、それ以前の時期のスロイド教育の発展過程をその前史と位置づけ、主として1700年代から1861年に至るスロイド教育をめぐる思想とスロイド教育の実態の展開過程を詳細に描いている\*\*。

ただし、実際には彼の論述は1861年までで終わっているので、彼の著書には1870年代のスロイド学校の実態はまったく出てこない。

筆者がこれまで調べた限りでは、1870年代のスロイ

\* アールボーンは、装飾彫刻家 (ornamentsbildhuggare) で、1845年のスウェーデン・スロイド協会の創設にかかわった人物の一人であった。1870年代初めには、スウェーデンの各地でヘムスロイドに関する講義をもち、ヘムスロイド復興運動に取り組んだ。彼が1875年にダーラナ地方を講演で回った際の報告書が残されている (*Berättelse af Ornamentsbildhuggaren C. Ahlborn rörande hans resa och verksamhet för husslöjdens upphjelpande i Dalarna år 1875*)。この報告書は、コッパルベリ県の農業経済会議所管理委員会に提出されたものであるが、ここからダーラナの各地域でヘムスロイドの復興運動が熱心に取り組みられ、スロイド学校がつくられていった事実を読み取ることができる。

\*\* 彼はこの本 (1939年に出版された第1分冊) で1700年代から1861年に至るスロイド教育をめぐる思想とスロイド教育の実態の展開過程を詳細に描いている。しかし、1861年から1877年までを論述する予定であったと思われる第2分冊は出版されることはなかった。

ド学校の全国的状況をかなり詳細に伝えている資料としては、オットー・サロモンが1876年と1878年に出版した著作 *Slöjdskolan och folkskolan I*, *Slöjdskolan och folkskolan II* に紹介されたスロイド学校に関する記述が唯一のものであるように思われる<sup>5)</sup>。本稿では、この資料にもとづいて、スロイド学校の実態をくわしく紹介し、若干の分析を加える。

サロモンが *Slöjdskolan och folkskolan I* (1876) と *Slöjdskolan och folkskolan II* (1878) において紹介しているのは主に男子を対象としたスロイド学校なので、本稿で紹介するのも、男子を対象としたスロイド学校である。ただし、学校によっては女子を対象としたスロイド学校に関する記述もみられる。その場合にはそれについても紹介する。

## 2. 1870年代までの民衆学校の発展

### (1) 1842年民衆教育令と義務教育

1842年の民衆教育令 (Kungl. Stadgan den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket) によって、すべての民衆に義務教育を課するという理念が確立された。1842年以前にもいくつかの教区では、民衆学校\* (folkskola) が組織されていたが、この法令によって、都市部のすべての教区 (församling) と農村部のすべての教区 (socken) に「学校委員会 (skolstyrelsen) を組織し、」「5年以内に最低1校の学校 (固定型 (fasta)) を、例外的な場合として巡回型 (flyttbara) 学校を、しかるべき資格を持った教師を雇用して設立することが義務づけられた<sup>6)</sup>。また、「学齢にある子どもを出席させることが義務」とされたが、「必要とされる理解能力を欠いている子どもだけではなくて、貧困家庭の子ども」には「より限定された教育が与えられる」とされた<sup>7)</sup>。このような規定は、スウェーデンの人口の大部分を占める農村の貧困家庭にとって児童労働が必要であった事実と関連していた。

\* folkskolaのfolkという言葉の翻訳については、歴史学研究において重要な検討課題となっている。現時点で筆者は、主に貧民の子どもを対象とする民衆学校 (folkskola) から、より広範な階層の子どもを対象とする国民学校 (folkskola) に徐々に移行していったと考えており、その意味で国民学校と表記することができるのは、1880年前後の時期であると考えている。国民学校と古典語学校 (gymnasium) との併存という複線型学校制度が完全になくなるのは、1962年の総合制基礎学校制度が発足してからである。

まず、表1にスウェーデンにおける人口の変化と都市部と農村部の住民の割合の変化 (1860-1885) を示す。

表1

	総人口	農村部人口割合	都市部人口割合
1860	3,859,728人	88.74%	11.26%
1865	4,114,141人	87.87%	12.13%
1870	4,168,525人	87.05%	12.95%
1875	4,383,291人	86.00%	14.00%
1880	4,565,668人	84.88%	15.12%
1885	4,682,769人	82.81%	17.19%

Sveriges Officiella Statistik, 1860, 65, 70, 75, 80, 85 から作成

この表1から1870年代においてはスウェーデンの農村部の人口割合は85パーセント以上であったことがわかる。人口の大部分が住む農村部では隔日に登校する学校である隔日学校 (varannandagskola) や教師がいくつかの学校を訪問する巡回学校 (ambulerande skolor) などに通学する生徒も多かった。巡回学校<sup>8)</sup>では、生徒はある一定期間のみ学校に通学した。農村の子どもは、年齢に応じた仕事に従事しており、農村部の親の学校教育に対する「抵抗」(motstånd) は地域によっては1920年代まで続いた<sup>9)</sup>。

このような変則的な形態の学校を含めて、国民(民衆)学校への就学状況を表2に示す<sup>9)</sup>。

この表2の左半分は各学校形態ごとの生徒数であり、右半分はその百分率である。「固定型」と表記したのは、固定型国民学校 (Fasta folkskolor) をさし、それは独自の校舎をもち、有資格教員が教えている国民学校であった。「巡回型」と表記したのは巡回型国民学校 (Flyttande folkskolor) をさし、それは有資格教員が学校を巡回する形態の国民学校教育であった。低学年学校 (Mindre skolor) は1856年から発足した学校で、農村部の僻地で国民学校までの距離が長い場合にその代替機関として設置された。無資格教員が教えることができ、多くは少数の生徒を対象とする学校 (固定型と巡回型があった) であった。この低学年学校は当初は法令上では幼児学校 (Småskolor) とも呼ばれたが、1871年から幼児学校は国民学校の準備教育を担う学校となり、独立した区分とされた。幼児学校は2年あるいは3年制の学校で、その後国民学校 (その修業年限は、幼児学校が2年の場合国民学

\*\* 巡回学校 (ambulerande skolor) と巡回型 (flyttbara) とは同じ内容をさす用語である。

表2 国民（民衆）学校の学校形態ごとの生徒数とその割合の変化（1847年～1881年）

	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計	固定型	巡回型	低学年	幼児学校	合計
1847	99,343	91,964	—	—	191,307	51.9	48.1	—	—	100
1850	143,526	126,178	—	—	269,704	53.2	46.8	—	—	100
1853	152,039	132,033	—	—	284,072	53.5	46.5	—	—	100
1856	159,745	146,483	—	—	306,228	52.2	47.8	—	—	100
1859	174,418	155,824	—	—	330,242	52.8	47.2	—	—	100
1865	189,366	149,745	122,717	—	461,828	41.0	32.4	26.6	—	100
1866	189,928	157,121	133,591	—	480,640	39.5	32.7	27.8	—	100
1867	194,075	158,287	152,006	—	504,368	38.5	31.4	30.0	—	100
1868	200,339	157,616	162,591	—	520,546	38.5	30.3	31.2	—	100
1869	208,514	153,445	171,925	—	533,884	39.1	28.7	32.2	—	100
1870	214,784	153,928	186,883	—	555,595	38.7	27.7	33.6	—	100
1871	224,444	152,806	199,603	—	576,853	38.9	26.5	34.6	—	100
1872	233,021	151,429	213,665	—	598,115	39.0	25.3	35.7	—	100
1873	239,495	149,565	218,616	—	607,676	39.4	24.6	36.0	—	100
1874	244,757	147,789	222,305	—	614,851	39.8	24.0	36.2	—	100
1875	249,757	139,837	223,830	—	613,424	40.7	22.8	36.5	—	100
1876	238,612	109,452	38,880	185,276	572,220	41.7	19.1	6.8	32.4	100
1877	242,339	102,256	41,593	183,944	570,132	42.5	17.9	7.3	32.3	100
1878	248,566	98,328	43,590	187,107	577,591	43.0	17.0	7.5	32.4	100
1879	249,031	91,450	42,189	188,999	571,669	43.6	16.0	7.4	33.1	100
1880	251,351	86,201	39,503	196,873	573,928	43.8	15.0	6.9	34.3	100
1881	249,879	80,483	42,870	192,753	565,985	44.1	14.2	7.6	34.1	100

校は4年、3年の場合は国民学校が3年であった）が続いた。修業年限は決められていたが、ほとんどの生徒は途中で退学し、卒業試験をうけて合格し、国民学校を卒業する生徒の割合はきわめて少なかった。1876年から1880年にかけての国民学校を正式に卒業した生徒の割合は1.6パーセントとされている<sup>10)</sup>。なお、この表にはあらわれていないが、学校に通わず、家庭で親が教育を担当する形態（Hemundervisning）もあり、1870年代前半では約1割の子どものような形態を選択し、教区から承認を得ていた\*。

学校教育を開始する年齢は1842年の法令で「9歳になるまでに開始される」と規定されただけで、開始年齢は教区ごとに決定できることになっていた。当初は学齢という概念も曖昧で、1882年に改正された国民学校令においてはじめて7歳から14歳とされた<sup>11)</sup>。

\* 家庭で親が教育を担当するとされた数字（約10%）の中には、家庭教師を雇用して教育し、その後古典語学校（läroverk）や女学校（flickskola）に入学させる裕福な家庭の子どもの含まれるが、1、2年間だけ民衆学校に通学させた後、家庭で労働に従事している貧困農家の子どもの含まれている。

## (2) 民衆（国民）学校への就学実態とその背景

義務教育という理念は1842年に確立したものの、その就学実態は地域でかなり異なっていた。1860年代の国民学校視学官の報告書には、不規則な学校通学に対する視学官の不満が述べられている<sup>12)</sup>。ベステルヨーランド（Västergötland）の視学官が予告なく6校を視察したときに、在籍している生徒数が100名とされている学校の出席者は13名しかいなかった。同様に170名に対して23名、112名に対して25名、170名に対して15名、195名に対して26名、70名に対して3名という、きわめて低い出席率を報告している。しかも、この学校視察はたまたま天気の良い日であったことも付け加えている<sup>13)</sup>。別の視学官は「出席者の割合は、8～15%から60～80%といろいろな学校で異なっている」と報告している<sup>14)</sup>。1876年においてさえ、ハランド（Halland）の視学官は「最悪の学校地区では学齢にある子ども437人のうち18名だけがその学期に登録していた<sup>15)</sup>」とし、このような就学実態の背景には「多くの子どもにとって学校までの距離が長いこと、学校までの道が悪い状態にあること、親にとって子どもに弁当を持たせることや服や靴を入手することが難しいこと、家での仕事に子どもの助けが必要であるこ

と、あるいは親の貧困さが牧草地の下僕や子守りとして子どもを働きに出していること、親の無理解や無関心」などがあったとしていた<sup>16)</sup>。

### (3) 補習学校 (fortsättningskolan)

1842年の民衆教育令には学校で獲得した知識を保持する重要性が強調されていたので、その目的のために日曜学校 (söndagsskola) や繰り返し学校 (repetitionskola) が設立された。これらの学校は後に補習学校に再編成されることになる。1864年に政府は国民学校を中退した子どもが獲得した知識をある一定の期間教師の指導のもとで保持し、さらに発展させるように監督する仕事を学校委員会 (skolråden) に委託した。この学校委員会によって、補習学校がさまざまな方法で組織された。ある地域では、国民学校を中退した子どもを対象に4または6週間の期間にわたって補習教育が組織された。別のところでは、通常の国民学校の8ヶ月の期間内に、毎週1日か隔週に1日補習教育が組織された。あるいは、水曜日の午後（この時間帯は国民学校の生徒は学校にいない）や日曜日に補習教育が組織された。多くの補習学校では、キリスト教の知識だけを教えており、ある種の堅信礼に向けた準備教育であった。能力のある生徒がいる場合には、読み書きの練習もなされた<sup>17)</sup>。

この補習学校の制度は当初うまく定着せず、1872年から1876年の間ほとんど補習学校は「名前だけが残っている状態」(knappt mer än i antydningar) であったという<sup>18)</sup>。

1877年の国会において、補習学校に対する国家補助金に関する提案が可決された。この提案のなかで、当時の文部大臣のカールソン (F. F. Carlson) は「補習学校は国民学校を卒業した生徒を受け入れただけではなく、国民学校を怠学したり、何らかの理由で退学になった生徒も受け入れてきた」ことを強調した。この場合、補習学校は国民学校の上におかれる部門 (en högre avdelning) ではなく、国民学校に対する補助施設であった<sup>19)</sup>。1877年以降の補習学校は\*、国民学校よりもより高い教育を与えることが本来の任務とされた。それとともに、必要な繰り返し

(repetition) によって生徒の能力の向上が目ざされた。教科としては、「聖書を読むことを通して得るキリスト教の知識、スウェーデン語（とりわけ文章を書くことの練習）、実践的な応用に関連した計算と幾何、図画、条件が許せばスロイドまたは手仕事 (handarbete)」から構成された。さらに、「自国史と自然に関する知識（とりわけ農村部では農業に関係ある自然の知識）」が加えられた。年間の授業時数は、「少なくとも6週間（1週20時間）を確保するべきである」とされた。農村部では、「連続して6週間実施するか、6週か8週を2つの学期に分けて実施するか、年間を通して毎週1日（6時間）実施するか」ということになっていた。都市部では、「夜間補習学校 (aftonskolor) においてより適切に実施される」とされ、その授業時間は年間に最低180時間とされた<sup>20)</sup>。

## 3. 1870年代前半における農村部のスロイド学校

### (1) オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第1巻』にみられるスロイド学校の実態とその改革課題

オットー・サロモンは、1876年12月に『スロイド学校と国民学校 第1巻』(Slöjdskolan och folkskolan I) を著した。この副題である「スロイド学校はその目的を充たすためにいかに組織されるべきか、そしてそれは国民学校と統合されるべきか？」が示すように、この著作は「日程にのぼってきた」「実習教科としてのスロイドの国民学校への導入問題」に対するさまざまな誤解を解くために執筆された。100頁に満たないこの著作の目的は、読者にスロイド学校への理解を深めてもらうことにあった。すなわち、サロモンは、「スロイド学校は国民学校にとってかわるものではなく、国民学校の教育を『労働者（サロモンの場合、主として農業労働者のことをさしている——引用者）』にとってより完全なものにするためにスロイド学校は不可欠である」ことを説いている。また、逆に「スロイド学校を実現するためには、国民学校が不可欠である<sup>21)</sup>。サロモンにとって、スロイド学校と国民学校とは2つがあいまってはじめて「労働者」にとって意味のある「教育施設」になるのであった。

本著作の内容を要約すると、サロモンは最初に北欧の農民の冬の過ごし方を問題にし、スロイド（彼は道具を扱うことと定義している）の技能を身につけることによって、剰余の時間をヘムスロイドに使用する重要性を説いている。その次にスロイド学校の目的について論じ、それは「1つあるいは複数の種類のスロイ

\* 以下の叙述は、カールソンの提出した補習学校に関する法案の内容である。これらの内容については、1877年9月11日に公布された補習学校に関する法令 (Kungl.kungörelse angående fortsättningskolan) の公布以降において実施されたと考えられる。



ドの技能を教えることとともに、より重要なことは生徒に労働に対する好み (håg) と喜び (lust) の感情を呼び起こし、秩序 (ordning) や正確さ (noggrannhet) の重要さ (vigten) や魅力 (behaget) や利点 (fördelarne) を教えることとともに、注意深さ (uppmärksamhet) や勤勉さ (flit)、忍耐強さ (ihärdighet) の必要性を身につけさせること」であり、そのことによって「生まれつき持っている人も怠惰への傾向 (håg) を克服させることである」とする<sup>23)</sup>。

そのうえで、サロモンはスロイド学校でとりあげられるべきスロイドの種類について検討する。まず男子と女子に要求されるスロイドの種類は異なるとし、最初に男子のスロイドについて以下のように述べる。「農場にとって、鍛冶の技能は重要ではあるが、施設設備に財源を要するという問題点がある。」それに対して、「木工 (snickeri) と木工旋盤 (svarfning) をスロイドとしてとりあげねばならない」とする。その理由は、それらは日常生活でしばしば使用され、家具や道具や家庭用品がそれによってつくられ、原材料である木が豊富にあり、道具も安く、また、生徒の体力の発達にとっても木工は適切だからであるとする<sup>24)</sup>。

次に女子のスロイドについて木工とほぼ同様の理由で裁縫 (sömnad) が重要であるとする\*。さらに、ミシン (symaskin) の発明は女性の手工 (handarbete) に革命をもたらしたとし、ミシンが女子のスロイド学校に導入されるべきであるとする。ミシンは、近い将来において多くの農民の家庭に導入されるので、その扱い方をスロイド学校で学ぶことが重要であるとする。サロモンは、裁縫と同様に編み物 (stickning) はスロイド学校にとって適切であるとし、機織り (väfning) は体力が要求されるためにあまり適切ではないとする。また、かご編み細工 (korgmakeri) やわら細工 (halmflätning)、籐細工 (rottingsflätning) もあみ靴の製作 (listskottillverkning) もスロイド学校で教えるスロイドとしてふさわしいとしている<sup>24)</sup>。

その後、サロモンは「スロイド学校は国民学校と統合できるか」という問題を議論しているが、その内容はすでに別稿で紹介したので、ここでは省略する<sup>25)</sup>。さらに、少年のためのスロイド学校にとって製図の技能を獲得させることがきわめて重要であるとし、とり

\* サロモンは男子のためのスロイドには座っておこなう種類のスロイドはよくないとしているのに対して、女子にはこの原則はあてはめていない。

わけ線図 (linearritning) を重視すべきであるとする\*。

その後、サロモンはスロイド学校を組織するための基礎として、1. 教師 2. 実習室 3. 教科 4. 生徒 5. 授業時間 6. 教材 について彼の考える最低条件について興味深い議論を展開している。本稿の目的は、1870年代前半のスロイド教育の実態について紹介することにあるので、これらの内容については別の機会にゆずる。

## (2) 1876年12月におけるスロイド学校一覧とその所在地

サロモンは、「現時点で男子にスロイド教育を実施している」約85校の男子スロイド学校の名称とその中の17校のスロイド学校の概要をこの著作の後半において紹介している。これらの85校の名称については、「アールボーン (C. Ahlborn) から提供された」、また、17校の学校の概要についてはそれぞれのスロイド学校の校長から寄せられた情報にもとづくとサロモンは述べている。この学校の一覧を表3に掲げ、これらの学校の所在地を当時のスウェーデンの地図をもとに図1に示す<sup>26)</sup>。

この図1から、1876年には多くのスロイド学校は農村部に位置していたこと、かなり特定の地域に集中して存在したことがわかる。農村部に位置していたことは、スロイド学校の問題が農村部の貧困農家の子弟の教育の問題とかわかっていたことが背景にあった。スウェーデン南部に多く、北部に少ないのは、北部は森林地帯であり、

\* この当時に国民学校における製図教育をめぐる、2つの対立する見解が存在した。一つはフリーハンドのスケッチ (frihandsteckning) を重視する見解と他の一つは線図を重視する見解であった。サロモンは個人の才能の違いによらないで誰もが獲得すべき能力を重視する観点から線図をスロイド学校では教えるべきであるとした。サロモンは1876年に *Kortfattad handledning i linearritning* (線図のための手引き) を出版している。

\*\* 当時のスウェーデンの地図については、*Nationalencyklopedin, band 17, sid 499, 1995, Bokförlaget Bra Böcker i Höganas* を参照した。なお、10. ノイミュラー・スロイド学校 (Neumüllers slöjdsolan) と56. エケルード・スロイド学校 (Ekeruds slöjdskola) については不明である。ただし、前者については、ストックホルム県に、後者についてはエルフスボリ県にある。

表3 オットー・サロモンの *Slöjdskolan och folkskolan I* (1876) において掲げられたスロイド学校一覧

ストックホルム市
1. 子どもの家 (Barnhemmet i Stockholm)
2. アドルフ・フレドリック教区国民学校 (Adolf Fredrjks församlings folkskola)
3. ヨハネスプラン師範学校 (Normalskolan å Johannesplan i Stockholm)
4. ラドゥゴードランド教区国民学校 (Ladugårdslands församlings folkskola)
5. ブルンケベリェ・ホテル・スロイド学校 (Nya slöjdskolan i Brunkebergs hotell)
6. モサイスカ教区学校 (Mosaiska församlingens skola i Stockholm)
ストックホルム県
7. ブレンシルカ教区スロイド学校 (Brännkyrka församlings slöjdskola)
8. ブレンシルカ教区子どもの家 (Brännkyrka församlings barnhem)
9. ヴィンクラシュカ・スロイド学校 (Vinklerska slöjdskolan)
10. ノイミュラー・スロイド学校 (Neumüllers slöjdskola)
11. ゴーロン・プリンスカ・カール養育施設 (Prins Carls uppfostringsanstalt å Gålön)
12. ヴェルムドー・スロイド学校 (Wermdö slöjdskola)
13. ヴェステルハニンゲ・スロイド学校 (Westerhaninge slöjdskola)
14. オステルハニンゲ・スロイド学校 (Österhaninge slöjdskola)
15. ロー・スロイド学校 (Röö slöjdskola)
16. ボートシルカ・スロイド学校 (Botkyrka slöjdskola)
17. フディング・スロイド学校 (Huddinge slöjdskola)
ウプサラ県
18. ウプサラ・スロイド学校 (Upsala slöjdskola)
ソーデルマンランド県
19. クラーストルプ・スロイド学校 (Claestorps slöjdskola)
20. ニーショーピング・スロイド学校 (Nyköpings slöjdskola)
21. ヴィーロ・ブルク・スロイド学校 (Wirå bruks slöjdskola)
ヨンショーピング県
22. コーシュベリ教区スロイド学校 (Korsbergs församlings folkskola)
23. アールスヘダ教区子どもの家 (Alsheda pastorats barnhem)
24. ローグベリャ教区国民学校 (Rogberga församlings folkskola)
25. ヨンショーピング西国民学校 (Jönköpings vestra folkskola)
カルマル県
26. オスカーシュハムン・スロイド学校 (Oskarshamn slöjdskola)
27. ヴィンメルビー・スロイド学校 (Wimmerby slöjdskola)
28. ヴェステルヴィーク・スロイド学校 (Westerviks slöjdskola)
29. トーナ・スロイド学校 (Tuna slöjdskola)
30. ヨーテッド・スロイド学校 (Hjorteds slöjdskola)
31. フローフルト・スロイド学校 (Flohults slöjdskola)
32. トールネスファラ・スロイド学校 (Törnesfalla slöjdskola)
33. ユングビー・コミューン・スロイド学校 (5校) (Ljungby kommuns slöjdskola)
34. エード・スロイド (Eds slöjdskola)
35. ニーブロ・スロイド学校 (Nybro slöjdskola)
ゴットランド県
36. ヴィースビ・スロイド学校 (Wisby slöjdskola)
ブレーキング県
37. カールスクローナ・スロイド学校 (Carlskrona slöjdskola)
クリシャンスタ県
38. エンネスタード国民高等学校 (Folkhögskolan Önnestad)
マルメヒューズ県
39. ランスクローナ・スロイド学校 (Landskrona slöjdskola)
イエーテボリ・ボヒューズ県
40. イェーテボリ・分離学校 (Afsöndringsskolan Göteborg)



41. グスタフスベリ・子どもの家 (Gustafsbergs barnhus)
  42. シンメルスリョード・少年スロイド学校 (Simmersröds slöjdskola för gossar)
  43. ヴィリーンスカ学校 (Wilinska skolan)
  44. シルヴァンデシュカ・スロイド学校 (Silvanderska slöjdskola)
- エルフスボリ県
45. ヴェーネシュボリ・スロイド学校 (Wenersborgs slöjdskola)
  46. ヴェーネシュボリ・国民学校 (Wenersborgs folkskola)
  47. オーモル・スロイド学校 (Åmåls slöjdskola)
  48. アーリングソース・国民学校 (Alingsås folkskola)
  49. ウルリーセハムン・スロイド学校 (Ulricehamns slöjdskola)
  50. シェーリングスホルム・スロイド学校 (Kölingsholms slöjdskola)
  51. ラーグマンセレード・スロイド学校 (Lagmansereds slöjdskola)
  52. エスタード・子どもの家 (Östad barnhus)
  53. ボールスタード・スロイド学校 (Bolstads slöjdskola)
  54. フェリエランダ・スロイド学校 (Ferglanda slöjdskola)
  55. ネース・スロイド学校 (2校) (Näås slöjdskola)
  56. エーケルード・スロイド学校 (Ekeruds slöjdskola)
  57. ヘッスナ・スロイド学校 (Hössna slöjdskola)
  58. リーアレード・スロイド学校 (Liareds slöjdskola)
  59. アーラフォッシュ・スロイド学校 (Alafors slöjdskola)
  60. エール・スロイド学校 (Örs slöjdskola)
- スカーラボリ県
61. リードショーパング・スロイド学校 (Lidköpings slöjdskola)
- ヴェルムランド県
62. カールスタード国民学校教師セミナーリウム (Folkskolelärareseminariet i Carlstad)
- オレブロ県
63. オレブロ・スロイド学校 (Örebro slöjdskola)
  64. アスケルスンド・スロイド学校 (Askersunds slöjdskola)
  65. エーズベリ・スロイド学校 (Edsbergs slöjdskola)
  66. スナフルンダ・スロイド学校 (Snafunda slöjdskola)
  67. アスケル・スロイド出校 (Asker slöjdskola)
  68. ヴェスタ・スロイド学校 (Westa slöjdskola)
  69. ノーラ・ベリィ教区スロイド学校 (Nora Bergs församlings slöjdskola)
  70. ヴィーボ・スロイド学校 (Wibo slöjdskola) (2校)
- ヴェストマンランド県
71. アルボーガ・スロイド学校 (Arboga slöjdskola)
- コッパルベリ県
72. ファール・スロイド学校 (Falun slöjdskola)
  73. ヘーデムーラ・スロイド学校 (Hedemora slöjdskola)
  74. ティスクブー・スロイド学校 (Tyskbo slöjdskola)
  75. エッペルブー・スロイド学校 (Äppelbos slöjdskola)
  76. マールグン・スロイド学枢 (Malugns slöjdskola)
  77. フォルケルナ・スロイド学校 (Folkerna slöjdskola)
  78. フースビ・スロイド学校 (Husby slöjdskola)
- ヴェステルノルランド県
79. ヘルネサンド・スロイド学校 (Hernösands slöjdskola)
- イエムトランド県
80. ブルーンフロー・スロイド学校 (Brunflo slöjdskola)
- ヴェステルボッテン県
81. ウメオ・スロイド学校 (Umeå slöjdskola)
  82. ブールトレクス・スロイド学校 (Burträsk slöjdskola)
  83. ローフォンゲルス・スロイド学校 (Löfångers slöjdskola)
  84. ロバートフォッシュ・スロイド学校 (Robertsfors slöjdskola)
- ノルボッテン県
85. ピテオ・スロイド学校 (Piteå slöjdskola)

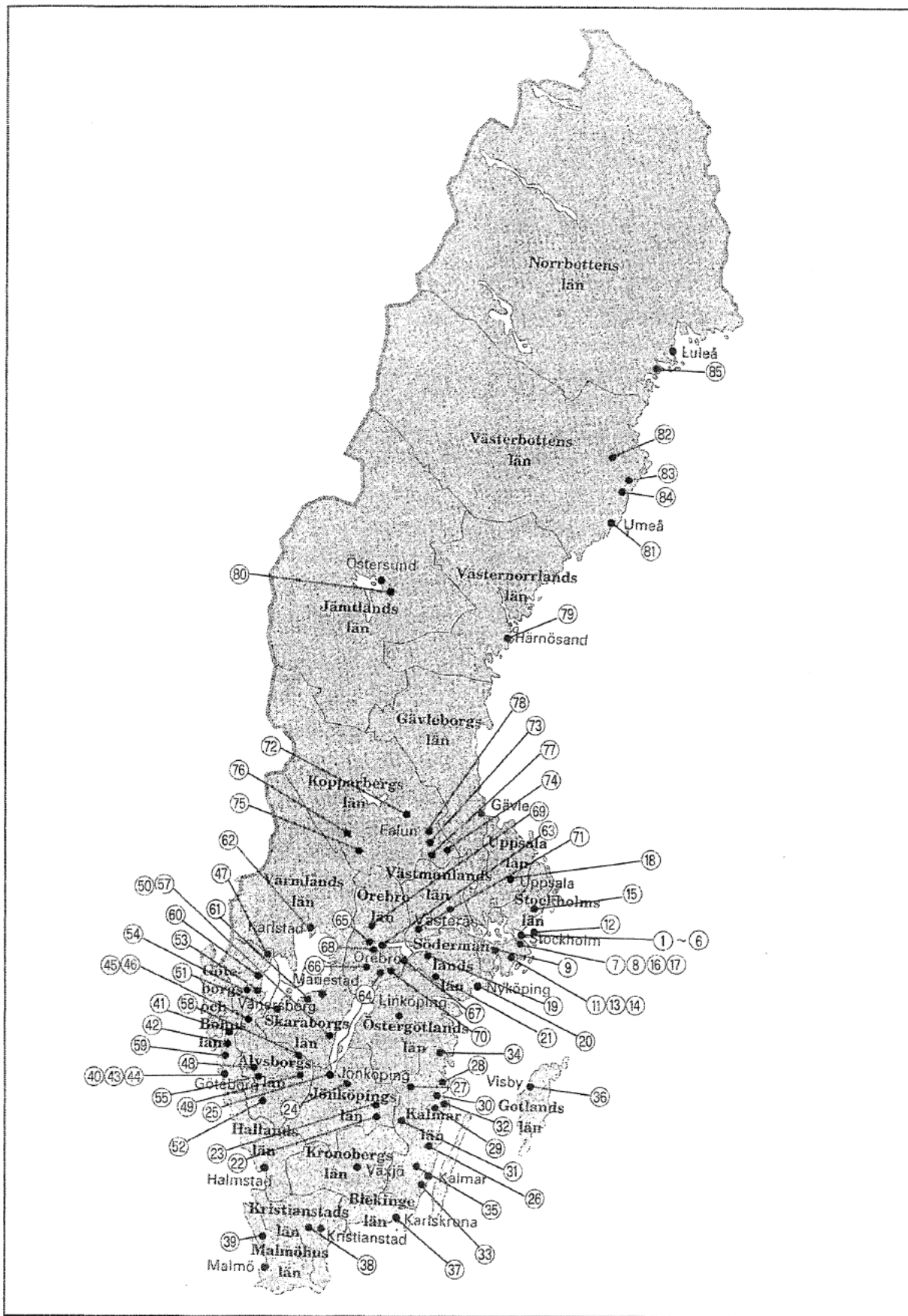


図1 1876年のスロイド学校の所在地  
 (図1のなかでゴシック体でかかれた文字は県の名称であり、そうでないものは都市の名称である。)

人口がきわめて希薄であったからであると考えられる。また、特定の地域に集中しているのは、各地域の農業経済会議所や地方議会などのスロイド教育問題に対する取り組みやその地域の指導者層のこの問題に対する関心の大きさの差違によるものと考えられる\*。図1において男子スロイド学校が学校が存在しない県は、Öster-götland, Gävleborg, Kronoberg, Hallandの4県であった（当時スウェーデンには25の県が存在した）。

なお、サロモンは、このスロイド学校一覧の中のイエーテボリ県のところに注を付け、「それ以外に約90の女子スロイド学校がある」と書いている。また、オレブロ県のところにも注を付け、「これ以外に23の少女スロイド学校がある」と書いており、女子のためのスロイド学校が少なくなかったことを示唆している。

### (3) 1870年代前半のスロイド学校の実態

サロモンはこの著作において17校のスロイド学校の概要を紹介しているが、そのなかには、ネース・少年スロイド学校やネース・スロイド教員養成所についても書かれている。スロイド教員養成を目的とする後者についてはスロイド学校と同種の施設ではないので、ここでは省略する。また、ネース・少年スロイド学校についても、別稿<sup>26)</sup>においてすでに紹介したので省略する。以下に紹介するスロイド学校の概要に関する部分のなかの引用は、すべてOtto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I (1876)* からのものである。

#### ①フローフルト・スロイド学校 (*Flohults slöjdskola*) (カルマル県) (表-③)

このスロイド学校は1872年に開校された。少年スロイド学校の教師の給料は年額350クローネで、他に賃貸料無料の住居と薪が提供される。少女スロイド学校の女性教師には時給25オーレ\*\*の賃金と賃貸料無料の住居と薪が提供される。このスロイド学校は国民学校と連携して運営されているので、毎日実際に配当さ

\* アールボーンが1875年にダーラナ地方を講演で回った際の報告書 (*Berättelse af Ornamentbildhuggaren C. Ahlborn rörande hans resa och verksamhet för husslöjdens upphjelpande i Dalarna år 1875*) には、各地域の指導者層の姿勢の違いによってスロイド教育問題へ対応が大きく異なることが述べられている。

\*\* オーレは貨幣単位で、100オーレが1クローネと等価である。

れた学習時間の中のうちの1時間はスロイドにあてられ、それ以外にも約2時間の休憩時間がスロイドにあてられている\*。子どもの年齢は7歳から15歳で、その数は40人から50人である。

女子生徒は「あらゆる種類の裁縫、マークつけ、編み物、わら細工、あみ靴の製作等」を学ぶ。男子生徒は「簡単な木工作、木靴、ブラシ、鞭、木製スプーン、ひしゃく、織物用シャトル、大小の机、糸巻き、まな板、はかり、玩具、調味料用棚、桶、簡単な農業用具の製作とかご編み細工」を学ぶ。製作物の販売は、一部はオークションにおいて、一部はスロイドの展示会において個人的に行われる。販売総額の一部は生徒たちの奨励金として、他の一部はストックホルムにある貯蓄銀行に預けられる。

学校の活動の経験は「スロイド学校は国民学校と連携して活動すべきこと、子どもの道徳がそれによって高められ、そして両方の学校での学習の交代によって子どもの学習は特別に改善され、減少した学習時間を増大した興味によって取り戻されることを証明した」。

授業では、「一般的な (*allmänna*) スロイド、単純な (*gröfre*) スロイド」が教えられ、すぐれた能力を示す子どもには「きめ細かな (*finare*) スロイド」が教えられる。もし、学校財政に余裕があれば、子どもの好みを刺激し、新しい仕事に関心をもたせるために、他のスロイド教師が雇用される。特別に勤勉さや巧みさをみせる子どもには道具が報奨として与えられる。

#### ②トールネスファラ・スロイド学校 (*Törneshalla Slöjdskola*) (カルマル県) (表-④)

このスロイド学校は、1873年秋にその活動を始めた。そこでの教育は週に2~3回教えられ、実際には冬季(10月から4月)にのみ行われる。このような制限された授業時間の理由は、一つは「夏季に生徒を農業の労働力として使用する両親の必要性と学校通学とが衝突しないため」であり、さらには「スロイド学校での生徒の労働への嗜好が毎日の通学による疲労から減退しないようにするため」である。

このスロイド学校は主に国民学校を出た少年を受け入れており、「スロイドの補習コース(繰り返しコース (*repetitionskurs*))」を提供している。それは「国民学校のスロイド教育のための授業時間がいつもあまりに少なく、分断されており」「また同様に国民

\* 「約2時間の休憩時間 (*loftiden*)」の実態的意味が不明であるが、原文通りに翻訳した。

学校の生徒が一般的に最も簡単な道具でさえ、安定して使用することができるにはあまりに年少であるからである」。

学校には一人の校長が雇用され、毎日の授業日ごとに日給を受け取る。必要がある場合は、彼の補助者として特殊なスロイドを教える人を雇うことができる。生徒の数は9人から15人で、「旋盤作業(svarvning)\*、簡単な木製スプーンや丁寧仕上げられた木製スプーン、道具の製作、桶板、ブラシ製造、わら細工、ハンダづけ、油塗り、窓ガラスをはめる作業等」を学んでいる。

### ③ユングビー・コミュニン・スロイド学校 (*Ljungby kommuns Slöjdsolor*) (カルマル県) (表-③)

ユングビー・コミュニン\*\*には5つの国民学校があり、それぞれにスロイド学校が附設されており、各スロイド学校では男子のスロイドと女子のスロイドが週に1日教えられている（通常は土曜日）。これらのスロイド学校がその活動を始めたのは1875年10月であったが、「実際には1876年にすべてのスロイド学校が軌道にのった」。男子のスロイドでは、「単純なスロイド、馬鞍の製作、かご編み細工」が教えられている。女子のスロイドでは、「太い糸の針仕事と細い糸の針仕事、糸紡ぎ、編み物、洗濯とアイロンかけ、服の裁断、クローセ編み(virkning)、刺繍、マット修理、わら細工」が教えられている。生徒の数は171人で、その内訳は男子は63人、女子は108人である。授業時間数は「通例1日5～6時間であり」、教師は「地域の相場にしたがって月給を、または日給として1～2クローネを受け取る」。

ユングビー・コミュニン・スロイド学校のいくつかの学校では、ほとんどの道具はコミュニンによって購入され、子どもによって製作されたものはオークションで販売される。他のスロイド学校では、教師の監督のもとで修理したり、製作したりするための仕事を子

\* 旋盤作業とは、この時期においては木工旋盤での作業である。

\*\* コミュニン(kommun)は、1862年の改革において創設された地方自治組織である。それ以前にはスウェーデンには教区(socknar)と都市(städer)しか存在しなかった。農村部では、教会の支配権が大きかった。1862年の改革によって教区は宗教的な問題(教会の修理など)だけを扱うことになった。すべての教区は1862年の改革によって同時にコミュニンになった。コミュニンはあらゆる政治的・社会的問題を扱うことになった。

どもが家庭から持ってくる。

学齢にある子どもはスロイド学校への出席が義務づけられている。

### ④エード・スロイド学校 (*Eds Slöjdskola*) (カルマル県) (表-④)

エード・スロイド学校は1873年秋に開校され、「国民学校と連携して」運営されてきた。男子生徒は隔日にスロイド学校と国民学校に通学している。最初の2年間は、「木工と靴の製造(skomakeri)の授業が行われた」が、靴の製造については「生徒の関心はあまり高くないので、次第に取り組みれなくなり、昨年には木工だけとなった」。これまでの生徒の最大数は14人で、年齢は11歳から14歳であった。授業では、「主に鋸、斧、ナイフ、鉋、ドリル、ハンマーなどの道具の使用法」を教えており、それらの道具はイスを製作するときに必要なので、「ほとんどの生徒はイス製作に従事している」。「旋盤作業や彫刻」も教えられるが、「それらは関心と才能を示した生徒のみ」に対して実施される。年少の生徒は、「名札、編み物用の道具、ほうきなど」を製作している。その他には、「異なるモデル(台所用、庭園用、子ども用、休憩用)にしたがってイスを製作し、さらに小さなテーブル、糸巻き、ステッキ、ペーパーナイフ等の小さなもの」を製作している。教師には年額200クローネの給料と賃貸料無料の住居が提供される。

### ⑤ヴィンメルビー・スロイド学校 (*Wimmerby Slöjdskola*) (カルマル県) (表-⑤)

この学校は水曜日と土曜日に午前9時から午後4時まで開かれて、10歳から12歳の年齢の28人の生徒が教育を受けている。スロイド教育の目的は、「小さな家具の製作、彫刻、糸のこ作業の技能を教えること」である。教師には年額500クローネの給料と賃貸料無料の住居が提供される。生徒により製作されたものはオークションにおいて販売される。

### ⑥ランズクローナ・スロイド学校 (*Landskrona Slöjd-skolor*) (マルメヒューズ県) (表-⑥)

この学校は、男子スロイド学校と女子スロイド学校からなる。男子スロイド学校では「425人の生徒が6つの学年に分けられ、その中の2つの低学年では、年少の生徒が30人ずつのクラス」で教えられており、「他の4つの学年では60人ずつのクラス」で教えられている。「最年長のクラス(第6学年)では、スロイドが教えられ」、「木工、旋盤作業、糸のこ作業」が教

えられている。第6学年では、「生徒によって在籍年数が異なる（1年間から3年間）が、その期間においてスロイドが学ばれる」。一日の授業時間は5時間の日と6時間の日があり、一日おきに交代で行われ、午前中に4時間、午後2時間の日と、午前中に3時間、午後2時間の日がある。これらの時間において、クラスを半分に分け（30人ずつ）、午前と午後で交代で毎日2時間スロイドが教えられている。クラスの他の半分は、その時間には国民学校での普通教科の授業をうける。そのようにして、各生徒は毎日2時間のスロイドの授業を受けている。「スロイド学校でクラスの半分だけが同時に授業を受けるのは、教室と教師の不足のためである」。スロイド学校には一人のスロイド教師だけがおり、毎日4時間の授業を行い、年額600クローネの給料を受け取る。

作業場には「8つの旋盤と6つの鉋台があり、それらとその他に道具の購入に1,172クローネを必要とした」。製作されたものは、学校の経費のために販売され、一部は卒業試験の際の展示会において、一部は個人的に販売される。そのようにして得られた資金は道具のメンテナンスに必要な経費や材料の購入にも使用される。また、それらの必要経費や材料代を除いた剰余金は生徒に報奨金として与えられる。

男子スロイド学校では、「盆、箱、手桶、工具の柄、痰壺、いろいろな種類のモデル」を製作する。一部の生徒は糸のこ作業を行う。教師は一定のガイダンスの後、生徒自身が作業を遂行することを重視しており、「他人の援助によって完璧な作品にするよりも、あまりいい作品でなくても、自分で仕上げることを重視している」。「生徒たちは正規の作業時間以外にも喜々として作業場に来ている」。

女子スロイド学校では、約500人の生徒が6つの学年に分けられている。「上の3つの学年において（そこには、9歳から14歳の150人の女子生徒が属しているが）、編み物、裁縫、けば立て作業、糸紡ぎ、機織り」を、2人の女教師によって毎日3時間学んでいる。授業は、2つある特別室において行われており、「1つの部屋には裁縫台と長いす、もう1つの部屋には4台の機織り機、2台のひも編み機、24台の紡ぎ機、4台の糸まき機等」がおかれている。すべての道具類に要した経費は944クローネであった。

⑦シルヴァンデシュカ・スロイド学校 (*Silvanderska Slöjdskolan*) (イエーテボリ・ボヒュース県) (表-44)

この学校の建物は「スロイド学校のために（独自に）

建てられた建物」で、1875年5月31日に落成式を行った。このスロイド学校ではコミュニンの2つの国民学校からそれぞれ12人の男子生徒が交代で隔週に来て、午後1時から4時までスロイドの授業を受ける。それらの生徒たちの年齢は12歳から14歳で、国民学校の上級段階 (*högre avdelning*) に属し、午前8時から12時までではそこで授業を受けている。教師は年額600クローネの給料と賃貸料無料の住居と薪と灯油が提供される。

スロイド学校で製作しているものは、「たらい、机、熊手、鋸立てのような生活用品、手押し車やスコップ」である。

⑧ヴェーネシュボリ・スロイド学校 (*Wenersborgs Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-45)

この教育施設はエルフスボリ県のスロイド協会によって雇われたスロイド教師と製図教師によって管理されている。本格的な活動は「1875年に開始され、現在に至っている」。このスロイド学校は、「年中ほとんど毎日開かれ、10人から15人の生徒が訪れている」。

「現在の条件では、スロイドのさまざまな種類のことを教えることはできない」ので、各々の生徒の適性と能力にしたがって労働の分割が行われている。その製作物の販売は、一部はストックホルムの店舗で行われ、一部はオークションや個人的に販売される。

⑨ヴェーネシュボリ・国民学校 (*Wenersborgs Folkskola*) (エルフスボリ県) (表-46)

この学校では、スロイド教育は男子女子ともに「上級の2つの学年において必修とされている」。30年前には既に女子に手工 (*handarbete*) が教えられていた。男子には1872年にスロイド教育が導入された。低学年のクラスには、8歳から15歳までの生徒がおり、このクラスを修了するには3年間を要する。「通例では11歳で中学年のクラスに移り、スロイド教育をうけるようになる。中学年と高学年では、修了するにはそれぞれ2年間を必要とする。また、この中・高学年では、一つのクラスの生徒を半分ずつに分け、片方が座学の学習をしているときに、他方はスロイドの授業を受けている。国民学校で教えなければならない知識量の中・高学年の4年間の中でその半分の時間でこなしているのは先に述べたように生徒を半分ずつに分けているからである」。

鍛冶担当と木工担当の教師の給料は、それぞれ年額600クローネであり、靴の製作と服の仕立ての担当の教師の給料はそれぞれ年額500クローネである。これ

らのスロイドを担当するのは、町に住む職人であり、彼らの教授時間は通常の学校の教師と同じで、1年のうちの9カ月間で週30時間である。スロイド担当の女性の教師の給料は（仕事の内容によって）年額400クローネか250クローネである。国民学校の校長の給料は年額600クローネである。

スロイドの授業で製作されるものは、さまざまな種類のものがあるが、「主として労働者の家庭で役立つような簡単なもの」である。女子は、「繊維の準備作業、糸紡ぎと機織り、その後いろいろな種類の服を縫い、クローセ編み、編み物、マーキング」などを学ぶ。男子は「靴職人と仕立屋のもとでいたんだ靴や服を修理し、新しいものも作る」。鍛冶では、「単純な工具、例えばハンマー、はさみ、バール、馬蹄、木の実割り、砂糖はさみ、スパナ等」をつくる。さらに、その他に注文によってさまざまなものがつくられる。「木工職人のもとで家具や台所用品が作られる」。すべての製品は、その販売価格が低く設定されている（ほとんど材料代に等しい）ので、売れやすい。

生徒数は、1876年秋学期には中学年で男子55人女子67人、高学年で男子38人女子46人であった。学校への通学状況は「ヴェーネシュボリではとてもよく、怠学は数回起こるくらいのものである。怠学は「男子生徒の間で発生するが、スロイドの授業では起こっていない」。スロイドの授業が導入されてから、「生徒は以前と同じコースをより容易に、より短い時間（半分）で学ぶこと」が示された。

#### ⑩ウルリーセハムン・スロイド学校 (*Ulricehamns Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-49)

このスロイド学校は1875年11月に設立された。国民学校の建物の一部である2つの広い部屋を市の負担で（無償で）この学校が利用できるようにし、さらにかなり豊富なモデル・コレクションのための特別な部屋が貸与された。「家具職人でもある教師は、1週間に1日教える義務とモデル・コレクションの管理という仕事に対して年額200クローネの給料を受け取る」。生徒数は約30人で、その年齢は10歳から17歳である。この学校では「より簡単なスロイドの製品がつくられ、おけ、足台、簡単な玩具の彫刻」などがつくられている。それとともに、「かご編み細工の導入」が予定されている。このスロイド学校は活動を始めて短期間しか経過したに過ぎないが、「その良い効果はすでに顕著で、世間に承認されてきた」。

#### ⑪シェーリングスホルム・スロイド学校 (*Köllingsholms Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-50)

このスロイド学校は、「2つのかなり大きいスロイドの作業室と教師の住居よりなる建物がこの学校のために新設され」、1875年8月にその活動を開始した。生徒の数は男子23人と女子20人である。彼らは、ほとんどが同時に国民学校の生徒でもあり、その年齢は10歳から15歳である。毎土曜日の午前9時からが、このスロイド学校の男子生徒と裁縫学校 (*Syskolan*) の女子生徒にとっての通常の作業日であり、授業日である。男子生徒は「一週間経過した後は、生徒が望むときに教師の指導のもとで作業するためにスロイド学校に来ることができ、教師は常にその場にいないなければならない」。男子生徒の授業料は無料であり、学校にある道具を使用することができ、最初は自分の製作するものの材料も無料である。女子生徒も同様に授業料は無料であり、貧困な家庭の出身者は裁縫の材料費も無料となる。

教師は給料として年額400クローネ、無料の薪と野菜畑が貸与される。彼の労働時間は1日に10時間で4週間の休暇が与えられる。

この学校は、農業後継者にできるだけ多くのスロイド技能を教えることを任務としている。つまり、「冬の夕方や時間と機会がある時に、道具や簡単な台所用具をつくることのできるような技能」を教える。その意味するところは「スロイド学校が農民を手工職人の分野に引き込むことでなく、農民をできるだけ手工職人に頼らないようにすること」である。それゆえ、生徒は「簡単なイスや机、熊手、木製スコップ、まぐわなど、いわば日々の生活に必要なものをつくること」を学ぶ。女子は「裁断し、服を縫い、カバーや靴下などを編む」。生徒がつくったものは、地域で販売される。

裁縫学校の教師は毎週土曜日の教授義務に対して年50クローネを受け取る。

生徒たちはその作業をととても楽しみ、興味を感じている。「毎朝所定の時刻を待ちきれなくて早く来ている」。男子は「特別な製図教育」を受けている。

#### ⑫ラーグマンセレード・スロイド学校 (*Lagmansereds Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-51)

このスロイド学校は1871年9月に設立された。最初の構想は「スロイド学校とそこにあった国民学校とを統合することを追求した」が、「国民学校の教師がスロイドの教育を担当することの能力不足とその意思がないことが判明した」ので、スロイド学校は国民学校



とは統合せず、そのために建物が新設された。そこには、モデル・コレクションのための部屋と採用されたスロイド教師のための部屋とが含まれている。その教師の給料は一日につき2クローネである。授業日数は年間で55日から65日である。生徒数は10人から12人で、年齢は11歳から14歳である。

スロイド学校で「これまで行ってきた作業は糸のこ作業」であった。「この作業を通して製作されたものは、生徒にとって実践的に利用できるものではなく、さらに販売することも難しいので、これからはスロイドとして木工を導入することが現在検討されている」。

### ⑬フェリエランダ・スロイド学校 (Ferglanda slöjdskola) (エルフスボリ県) (表-④)

その学校は1876年3月にその活動を開始した（「ただし、現在活動休止中である」とサロモンは注記している）。これまでにこの学校の活動に25人の生徒が参加した。彼らの年齢は、10歳から19歳であった。一日の授業時間は朝6時から夕方7時までで、そのなかに2時間の休息を含んでいる。授業は一人の教師によって担当され、「製図、木工、糸のこ作業、旋盤作業」が教えられている。彼の給料は一日につき1クローネ50オーレである。

授業において製作されたものは「大部分がその地域で販売される机やイス等の家具」であった。また「注文によって家庭に必要な小物を製作」した。「春と夏の間、学校は特別に借用した部屋で授業を行うが、生徒の参加状況はよくなかった。その原因は「農業や放牧にとって労働力が不足しており、年少者が労働力として必要である」からである。それに対して、秋にはスロイド学校は国民学校と同じ建物の中で活動しているので、スロイド学校への参加者は多くなった。男子生徒たちは「国民学校が始まる前の早朝にスロイド学校に来て、あるいは国民学校の授業が終わった後にスロイド学校に残って活動している」。この学校での経験は「スロイド学校が国民学校と統合されることが望ましいことを示している」。

### ⑭ネース・少女スロイド学校 (Näås Slöjdskola för flickor) (エルフスボリ県) (表-⑤)

この教育施設 (uppfostringsanstalt) は1874年3月25日に創設された。その目的は、「国民学校法令が女子に対して学習させることを要求している多数の教科を教えるとともに、女性のハンドスロイドの技能、手と器械による機織り、紡ぎ、裁縫、さらに編み物、掃除、料理等を教える」ことである。学校の授業は1

年のうち10カ月半行われ、1日に夏期は8時間、冬期は6時間である。授業は学校長と一人の女性教師により担当され、一人の特別な教師（今のところネース・スロイドセミナリウムの一人の生徒である）が低学年の算術を担当している。

生徒は12歳から15歳で以下に示す2つのクラス（それぞれが1年制）に分かれる。生徒数は現在で15人である。冬学期の各クラスの授業時間を以下に示す。

	第1クラス	第2クラス
キリスト教	5時間	6時間
歴史	1時間	2時間
地理	1時間	2時間
スウェーデン語	1時間	4時間
算術	3時間	6時間
「家政学」	3時間	—
清書	1時間	1時間
手工 (handarbete)	21時間	15時間

「夏季には各々のクラスにさらに週に12時間の手工が加わる」。第1クラスの生徒は出席ごとに一日25オーレの補償金を受け取る。また、このクラスの生徒は週に1、2回の筆記テストが課される。

### ⑮ヴェスタ・スロイド学校 (Vesta Slöjdskola) (オレブロ県) (表-⑥)

この教育施設は1875年11月7日に開設された。「1年のうちで4カ月間この学校において国民学校の男子生徒を対象に授業がなされ、1週間のうちの4日間午前9時から午後1時まで、木工、糸のこ作業、彫刻が教えられる」。国民学校の教師はスロイドを教えることができるので、スロイド教育を担当している。

### ⑯ティスクブー・スロイド学校 (Tyskbo Slöjdskola) (コッパルベリ県) (表-⑦)

このスロイド学校は、「ティスクブー国民学校の生徒のために自力で道具を調達し、部屋を借り、教育経費を払うという国民学校教師の熱意」によって1875年に設立された。国民学校の生徒は同時に授業を受ける2つのグループに分けられ、「高学年の方のグループは最小限のコース (minimim kurs) をすでに学習した生徒」で、「彼らはスロイドの作業場の規則にしたがって毎週水曜日と土曜日の午後に作業を行い、また、教師の都合がよければ、時には土曜日全日、あるいは週の別の日の特定の時間に作業すること」ができる。スロイド学校が土曜日に活動していて、他の国

民学校の生徒は休日であるので、国民学校教師はスロイド学校の世話をする。他の日については生徒の世話と指導を国民学校教師以外の人間が担当する。生徒の数は約20人である。

生徒は「旋盤作業やより簡単な木工に従事し、糸巻き、台所と家事のためのさまざまな小物、ハンガー、瓶の栓、樽の栓、小箱、道具の柄、パンをこねるための道具、糸のこのフレーム、熊手、バター用スコップ、バター圧搾器等を製作する。彫刻や糸のこ作業、ブラシ製造やわら細工、かご編み細工、いろいろな玩具、金属加工等」も行なう。

#### ⑩ウメオ・スロイド学校（Umeå slöjdskola）

（ヴェステルボッテン県）（表-⑩）

このスロイド学校の目的は、「1年または2年間で1つのコースを修了した人が将来において大抵の場合自分で自らの必要をみたせる、または副収入として金銭を稼ぐことができるように、また生活の糧として自分の技能を生かせることができるような、労働技能または訓練された資質の育成」である。スロイド学校は国民学校から完全に独立している。この学校の生徒としては、17歳から27歳の年齢になっており、単によい資質をもっているだけではなく、「以前に旋盤作業や木工、その他のスロイドについて訓練を受けていること」が求められる。スウェーデンの北部にあるヴェステルボッテン地方は、「僻地で主に森林地からなり、まばらな人口で成り立った広い面積の地域」と特徴づけられる。そのような地域では、日常生活に必要なものをつくることに重点をおく必要があった。

この地方のいろいろな地域から生徒を獲得することはコミューンにとって懸案事項であった。スロイド学校の施設・設備・教師の給料などへの補助金がコミューンによって予算措置された。この10年間に、とりわけ1867年の不作以降、スロイド教育に取り組むという問題が農業会議で何度も提起されたが、「この問題に対する一般の人々の考え方は好意的でなかったので、問題の解決に向けた取り組みは前進しなかった」。1867年から地方議会（landsting）によってある強力な措置がとられた。その措置は、「不作や少ない労働収入によって貧困に苦しんでいる多くの人々に労働機会を提供するための措置」であった。

ヴェステルボッテン県のスロイド学校の設立は、「現在は国家公務員として一時的に雇用されている技師ラムストローム（A. F. Ramström）によりこの10年間刑務所の囚人に対して教えられたスロイド教育から出発した」といわれている。このスロイド教育

は単に囚人だけでなく、看守や他の職員にも広がった。そこで製作されたものは、「麦わらマット、かご細工、ブラシ細工、鉄に関する仕事」であった。このような準備期間を経て、一人の人間が多くの種類の技能を練習した後に農業経済会議所の管理委員会の配慮によって、また地方議会の予算措置によって1873年秋にウメオ市にスロイド学校が開設された。そこでは上記のラムストローム氏以外にも旋盤加工職人とブラシ製造職人がスロイドの教師として115日間通常の日給で雇われ、7人の生徒のスロイド教育を担当した。展示会において生徒たちは報奨金として110クローネを受け取り、その中の10クローネが貯蓄銀行に預けられた。オークションでは製作物は167クローネ8オーレで販売された。

1874/75年度は冬にスロイド学校が5カ月間活動を行った。41人の生徒が活動し、その中で13人がコミューンから派遣されたか、または県のいろいろな地域から個人としてやってきた正規の生徒で、その他はウメオ市や他の町の学校の生徒であった。展示会において生徒たちは報奨金として130クローネを受け取った。オークションでは製作物は270クローネ88オーレで販売された。

1875/76年度は冬季に5カ月間、13人の正規の生徒に対してスロイド教育がなされた。「材木の切断や動物の角の旋盤加工等」が行われた。この年度に製作された39の作品がノルショーピンの農業会議において展示され、1等賞が授与された。その次の年の冬にスロイド学校のために4つの部屋が借用され、その1つはスロイド教師のために、2つの部屋が作業場のために、1つの部屋がモデルのための部屋とされた。

スロイド担当の教師は年額500クローネを給料として、それに加えて1つの部屋を賃貸料無料で提供され、灯油、薪を無償で提供される。教師は「いろいろなことができなければならない。それゆえ、ウプサラ・スロイド学校やクラウストープ・スロイド学校で滞在し、研修を受け、またノルショーピンの農業会議で研修を受ける」ことができた。スロイド学校が休みの間に、彼はスロイド学校のためのモデルを製作する。そのモデルの一部は新しく建設されるスロイド学校に送られ、他の部分はコミューンへ送られる。そのモデルは国民学校へ送られ、その利用を希望する人が自由に借りることができるようにされた。

学校に年少の男子を生徒として採用することは目的に合っていなかった。一番年長の正規の生徒は31歳で、あとは25歳、20歳、18歳、17歳、そして一番下が15歳であった。



ここでのスロイド教育は、「国民学校が交通の不便な遠隔地を巡回方式で対応したように、巡回方式を取らねばならない。農民の子どもは家庭でよりその年齢に適した仕事をおこなう豊かな機会がある」。

#### 4. 1877年改革によるスロイド学校の変容の萌芽

##### (1) 1877年改革の概要

ここで1877年改革の概要について述べる。本稿でいう1877年改革とは、男子に対するスロイド教育を適切な仕方でも組織した国民学校への国庫補助金を決定した国会決議をうけて公布された1877年9月11日付法令「スロイドの教育について」(Kungl. Maj:t d. 11 Sept. 1877 “Om undervisning i slöjd”) をさしている。この法令は、国民学校へスロイド教科を導入する改革の大きな契機になった。『民衆(学校)教育に関する諸法令——学校委員会のための指導書』(Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tilledning för skolråden, 1880)によれば、この法令による措置の概要は以下のとおりである。

「国会ではすでに総額15,000クローナの国庫補助金を国民学校における男子に対するスロイド教育の促進のために支出することを決定した。」「この教育は職業における技能を教えることを目的とするのではなく、普通に存在する道具、まず大工道具、条件が許せば旋盤に関する道具や木彫りに関する道具、さらに可能であるならば鍛冶に関する道具を使用する技能(händighet)や能力(förmåga)を獲得させることを目的としている。とりわけ農村部の学校では、農民にとって必要なもの(föremål)が製作される。」「スロイドの教育は国民学校の高学年(folkskolans högre afdelningar)において、また補習学校(fortsättningsskolan)において教えらるる。」「知識の学習とスロイドの学習は適切な方法で相互に交代するように実施される。例えば固定型国民学校では午前中の4時間は知識の学習に、午後の2時間はスロイドにあてるような方法で、またはある日は知識の学習に、別の日はスロイド(の学習)にあてるような方法によって行われる。」(Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tilledning för skolråden, s.37-s.38, 1880)

また、この法令では、この国庫補助金を国民学校に提供するだけでなく、「学齢にある子どもに別の仕方でも(スロイド教育を)組織した教区(församlingar)」にも提供することを掲げていた。このこと

により、すでに設立されたスロイド学校へもこの国庫補助金が提供されることになった。ここには、この法令に先立つ国会(Riksdag)での議論を受けてなされた妥協が法令の内容に反映していると考えられる。しかし、国会での議論を含めてこの法令の成立過程については別の機会に論じることにした。

##### (2) スロイド学校と国民学校との統合など ——オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第2巻』にみられるスロイド学校改革の若干の論点——

オットー・サロモンの『スロイド学校と国民学校 第2巻』(Slöjdskolan och Folkskolan II)は、1876年にスウェーデンの南西部にあって、スロイド学校が一番多く設立された県であるエルフスボリ県のヘムスロイド協会が「スロイド学校と国民学校の統合はいかに可能か」という懸賞論文を公募し、それに提出された10本の論文のうち数編をサロモンが選び、さらにこの問題に関連する資料を掲載して1878年12月に編集・発行したものである。1877年9月に国会での決議にもとづいて、法令が公布され、男子に対するスロイド教育を実施する国民学校やスロイド学校に補助金が出されることになり、国民学校におけるスロイド教育の導入問題がさまざまに議論されるようになった。この著作の序文において、サロモンは「スロイド学校と国民学校の統合問題は、まだ実験レベルであり、今後経験を積み重ねていくなかで、現在出されている疑問にも答えていくことができる」と書いている。この著作は、この問題に対する議論と実践を進めていくために出版されたと考えられる。

この著作には、以下に掲げる7つの論文と最後に12校のスロイド学校の概要が収録されている。( )内は執筆者名)

1. 国民学校におけるハンドスロイド (Claes Bratt)
2. スロイド学校は国民学校と統合可能か? (M. Ysenius)
3. スロイド学校は国民学校と統合可能か? (K. Börjesson)
4. ゴーロン教育施設\*におけるヒュースフリート問題 (C. J. Lundbäck)
5. スロイド問題に関する検討 (Cdrg)
6. エルフスボリ県の国民学校教師とスロイド教育 (Otto Salomon)
7. 1877年4月11日の国会第2院における国民学校教師養成所の拡張に関する県知事エリック・ス

## パレの発言

これらの論文において議論されている内容は多岐にわたるが、スロイド学校改革にかかわる最大の論点は、スロイド学校を国民学校と統合させることにあった。そのことと関連して、スロイドの教育を担当する教師の問題（国民学校教師が担当するのかそれとも職人が担当するのか）や、新教科の教育課程上の位置づけの問題（必修教科とするのか、選択教科とするのか〔正規の時間割（schema）外に位置づけるのか〕）が議論されている。

## (3) 1877年改革によるスロイド学校変容の萌芽の実態

先の著作の最後に「男子のためのスロイドが教えられている学校は現在106校に達した」として<sup>\*\*</sup>、12校の概要を紹介しているが、その中の一つである「子どもと若者のための実践的労働学校（Praktisk Arbetsskola för Barn och Ungdom）」については、サロモン自身が「この教育施設は、富裕層の子どもたちを対象としているので、この冊子で扱ってきたスロイド学校と決して混同されるべきではない」と述べているように、他のスロイド学校とは同列に扱えないので、ここでは省略した<sup>\*\*\*</sup>。以下にそれを除いた11校の概要を紹介する。以下に紹介するスロイド学校の概要に関する部分のなかの引用は、すべてOtto

\* この教育施設は、両親のいない子どもや親が犯罪者であったり、きちんと養育されず、放置された子どものために1832年にストックホルムのソーデルマルム（Södermalm）にJohan Olov Wallinによって創設された。この施設には、犯罪をおかした子どもも収容された。1860年にストックホルムからゴロン（Gålön）に移動し、1940年代に廃止された。

\*\* 1882年に発行されたOtto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV* (1882), には「スロイドを実習教科として教えている学校の数は」「1876; 80, 1877; 100, 1878; 120, 1879; 200, 1880; 300, そして現在のところはおよそ400以上の学校で男子のスロイドを実習教科として教えている」と述べている (ibid, s. 14-s. 15)。1878年以降の数字には、スロイドを教科として導入した国民学校の数字も含まれていると考えられる。

\*\*\* この学校は、パルムグレン（Karl Edvard Palmgren,）が1876年にストックホルムに創設した学校で、1880年代の初め頃にはとても有名な学校となり、さまざまな国から教育関係者が視察に訪れた。この学校については別稿にて検討する予定である。

Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan II* (1878) からのものである。

①ウプサラ・スロイド学校（Upsala slöjdskola）  
（ウプサラ県）（表-18）

ウプサラ県の知事であるハミルトン氏のイニシアティブにより、ウプサラにおいて労働学校（arbetskola）として30年以上前から活動してきたものが、1872年秋にかなり拡張されてスロイド学校となった。国民学校と統合されたこのスロイド学校は、ウプサラ市によって経費が負担されているが、「それは国民学校の男子生徒を受け入れているから」である。授業については、その一部を校長が担当し、あとは（年間）給与で雇用されている教師と臨時雇用の教師によって担当されている。校長は、「材料の購入、作業内容の決定、販売、作業による収益に対する生徒の分け前の決定、収入と支出に関する会計報告を遂行する責任」を持っている。その学校への入学条件は、「国民学校の最初の3年間を修了していること」である。生徒は第4学年に入ってはじめて手工（handaslöjd）に取り組み始める。第4学年と第5学年の生徒が週にそれぞれ15時間、国民学校と労働学校に交代で通学する。夏期休暇の間には、すべての学年の生徒たちが作業をすることができる。各生徒は、自分が製作したものに對して「作業時に示したその勤勉さと正確さにしたがって報奨金を受け取る」が、その製品の販売価格の半額を超えることはない。この作業による収入は、作業帳に記入され、各年度の終わりに貯蓄銀行に預金される。卒業試験（afgångsexamen）の後、学校を修了するときにその収入を貯蓄銀行から受け取る。1877年の冬学期に、この学校で教えられていた内容は、「木工、旋盤作業、糸のこ作業（löfsågning）（ただし、彫刻（träsnideri）と関連したもののみ）、かご編み細工、籐細工、ガラス細工（Glasmästeri）、靴の製作（Skomakeri）」であった。これらのスロイドの教育は、「同時に実施されるのではなく、異なる時間に交代で行われる。一度に4種類以上のものが行われることはなく、生徒が約40人以上になることはない」。授業は、一日に6時間（午前9時から12時、午後2時から5時）で、各生徒には3時間ずつ割り当てられる。

この国民学校にスロイド教育を導入したもっとも特筆すべき成果は、「1）親が自分の子どもを国民学校により長い時間滞在させるようになったこと 2）生徒自身が学校での学習を続けることへの関心と嗜好を強めたこと 3）能力のない生徒が理論的教科においても、スロイド教育への参加を通して改善をしめすよ

うになったこと 4) 多くの怠け者が勤勉で、時間を大切にすることになったこと 5) スロイド教育は一般的に子どもの行動と秩序の改善に貢献したこと 6) 生徒は労働学校から成績証明を受けた後、概してよい仕事をすることができたこと」にあった。

スロイド担当の教師の給与は年額800クローネで、それに賃貸料無料の住居が提供される。さらに、彼の指導によって製作された作品の販売価格の10%が提供される。作業室は、国民学校とつながっており、3つの特別な部屋からなる。製作された作品は、その場で売られるか、農業経済会議所のスロイド販売店で販売される。

### ② クラーストルプ・スロイド学校 (Claestorps Slöjdskola) (ソーデルマンランド県) (表-19)

この学校は、スロイド教育の普及のために熱心に活動したクラス・レヴェンハウプト伯爵によって1872年に設置され、今日まで維持されてきた。授業は、3つの教室で行われている。生徒の年齢は7歳から15歳で、人数は30人から50人である。生徒によってきちんとなされた仕事に対する報酬は、毎週土曜日に支払われる。学校の目的は、「技能的な面で職業人を養成することではなく、生徒が手の労働 (handarbete) を愛し、自分の暇な時間を有用に使うことを可能にすること」にある。

### ③ ヴィースビ・スロイド学校 (Wisby Slöjdskola) (ゴットランド県) (表-20)

「管理委員会によってなされた準備とエルヴスボリ県のフェリエランダ教区のスロイド教師であるグスタフ・ダーリンが当分の間その学校の校長になり、またスロイドも担当すること、及び中等学校助教諭ヨハン・カール博士が時給で製図の授業を担当するという契約、D. B. W 協会の建物を無償で借用するという規定にしたがって」、その学校が1876年4月に開校された。その後すぐに、管理委員会は学校の執行部を任命し、執行部はその年度の終わりまでに重要事項を処理した。執行部は「執行部の任務、学校組織の規則に関する提案を報告し、その提案は協会によって7月3日に承認された」。

学校の規則によれば、その学校には男女とも、年少年長ともに入学できるが、一般的に12歳以下では入学できない。スロイド教育は、毎日午前と午後に行われる。製図の授業は午後で週に4回行われ、1回あたり2時間である。さらに日曜の午後にもあるが、その授業は在職者が対象である。学校が最初に開校したとき

には、200人の生徒が殺到したが、選別と自主的な退学の後、定期的に通学している生徒は主に都市の国民学校の上級クラス (övre klasser) から来ており、50人を超えている。彼らは「各人が午後2回スロイドの授業を、午後1回か2回製図の授業を」受けている。彼ら以外にも、「古典語学校 (elementarläroverket)\* や女学校 (flickskola)\*\* の生徒やその他に成人も」スロイドの授業を受けている。

国から派遣されたスロイド・インストラクターであるエンジニアのラムストロームによって作成され、管理委員会によって承認された計画を執行部はたえず実施してきた。この計画によれば、学校の主要な任務は「生徒たちに器用さ (händighet) や嗜好 (smak) や几帳面さ (ordentlighet) を育てることであるが、特別の職業のために彼らを教育することではない。最も望ましいことは、初心者に、嗜好を磨き、観察力を鋭くし、同時に最も普通にある道具の扱い方の練習をおこなうこと」である。その際、最初の科目としては、「木工、旋盤作業、木の切断と鋸引きおよび製図」が

\* 古典語学校 (Elementarläroverk) は、1847年に計算学校 (Apologistskola) と学問学校 (lärdomsskola) とが統合されたときにその総称として使用された用語であった (Ulf P Lundgren (red), "Pedagogisk Uppslagsbok", Stockholm, Lärarförbundets Förlag, 1996)。Elementarläroverk と Läroverk とは基本的に同義で、ともに古典語学校と訳した。松崎巖は Läroverk を学問的学校と訳しているが (『世界教育史大系25 北欧教育史』講談社、), 学問学校 (lärdomsskola) との違いがわかりにくいので、筆者は古典語学校と訳した。なお、19世紀を通して古典語学校は社会の変化とかかわって大きく揺さぶられた (Ulla Johansson & Christina Florin, "Där de härliga lagrarna gro-": kultur, klass och kön i det svenska läroverket 1850-1914, s. 81-s.104, 1993参照)。

\*\* 女学校 (Flickskola) は女子のための特別に理論的なことを学ぶ学校で、1786年に最初にイエーテボリにおいて開設された。その後、1831年にストックホルム (Wallinska skolan i Stockholm) に開設され、1868年にはストックホルムに高等女子教員養成所 (Högre lärarinnaseminariet (HLS)) が創設されたが、それも女学校の一つの形態とされた。1928年までは、女学校はすべて私立の学校であった (Ulf P Lundgren (red), "Pedagogisk Uppslagsbok", Stockholm, Lärarförbundets Förlag, 1996)。

選ばれた。

執行部は「場合によっては特殊な職業的技能を教えることを試みるべきであると考えた」が、「そのことは住民の中ではあまり重視されていなかった」。それゆえ、執行部は「かご編みの基礎的な知識を習得する機会を与えると同時に暇な時間に家庭でそれに関する仕事に従事するように、巡回のかご編みインストラクターを派遣した」。一般の人々や特に職業人がこの教育を活用することが奨励された。「かご編みの教師は6週間雇用され、その間に学校の普通の生徒たちが授業を受け、生徒の技能はよくなった。しかし、当初期待された職業人や農民の参加は実現しなかった」。

エンジニアのラムストローム氏は、管理委員会の要請を受け、1876年6月にその学校を訪問し、そこで執行部に対して授業の進行状況や道具一式に満足を表明した。

学校は、3ヶ月間だけ活動していた状況であったが、県の農業会議での展示で、審判員によって農業経済会議所による銀メダルが授与された。また、ノルショーピン市で開催されたスウェーデン全国農業会議において生徒の作品が展示され、国の多くのスロイド学校との競争において、銅メダルを獲得した。

学校の設備は、製図室に14台の製図用機と1台の整理用機、スロイド室に5台の鉋台、2台の旋盤、6台の切断台、1台の足踏み鋸と、それらに付随した道具一式からなる。これに加えて、二つの部屋には棚がおかれている。そこには、モデルと見本が設置され、その一部は、以前に農業経済会議所により購入されたものである。

学校の規則によれば、生徒が製作したものは校長により、優、可、不可のいずれかに判定される。優と判定されたものは、モデルのリストに書かれた販売価格で販売される。可と判定されたものは、その3分の2の値段となる。生徒は、その販売価格の半分を受け取る。この販売による学校の収入は、125クローネ3オーレとなったが、使用された材料の費用はその倍以上であった。

#### ④ シンメルスリョード・少年スロイド学校 (*Simmerslöds slöjdskola för gossar*) (イエーテボリ・ボヒュース県) (表-④)

このスロイド学校は、「1859年に作成された遺書により、高等裁判所弁務官ベルギウス (S. Bergius) が自分の全財産を子ども (少年) の家 (寄宿舎) (*Barnhus (internat) för gossar*) に寄付したことをうけて」、1874年末に開始された。「実際的な生活

に必要で有用な知識を少年に教えることを試みようとする施設におけるスロイド教育の有用性と必要性については疑問の余地がなかった」。最初は一日6時間、午前中に4時間、午後2時間理論的教科を学習した。経験によって明らかになったことは、「午後からの学習はあまり成果が伴わず、スロイドを導入することを考え、以前の6時間の理論的教科の学習は、午前中のみ実施するように計画した。この計画は校長の支持を得たが、予算の関係で特別にスロイド教師を雇用するには至らなかった。この計画を立てる経過において、計画者は「1. 自分が子どもの頃にスロイドを学んだことから受けた実感 2. 計画者が訪問した3つのスロイド学校から学んだこと 3. 計画者がアールボーンとの手紙のやりとりによって、助言と情報を得たこと」を参考にして1874年に計画を実行した。午前中のみの授業が導入された後に、男子生徒たちはより勤勉さを示した。また、製図の授業は午後に行われた。春の初めから、夏、秋まで、男子は午後の大部分を庭園のさまざまな仕事に従事した。そのときに少数のものだけがスロイドに従事した。

スロイドの導入によって、「職業的な技能を養成することが目的でなく、手と眼の練習を与え、かつ労働への尊敬 (*aktning för arbetet*) を育てること」にスロイドの授業の目的があることが明確になった。スロイド学校発足以来、1876年の秋までには生徒数は15人であったが、さらに2名加わって17人となった。その17人がスロイドの授業に参加した。さらにその施設に属さない3人の少年たちが、定期的にスロイドの授業に参加していた。

スロイドでは、「台所と家庭のための小物、大小のイス (いわゆる折り畳みイス)、ハンガー、道具の柄、ブラシ、スリッパ、靴脱ぎ、糸巻き、鍵箱、薬箱、花瓶のケース、花瓶に使う棒、本棚、本立て、机 (庭用、花用の台)、園芸用のイス、長イス、ほうき、人形用ベット、小さい手押し車、タオルかけ、トランク、そり、ステッキ、服掛け、メジャー、鍵用のラベル、ペンの柄、ペーパーナイフ、ねずみ取り、熊手の歯の部分、鏡の枠、写真たて等」を製作した。それらは、個人的に販売され、ある場合は試験の際に販売された。製作した生徒は、その売上金の半分を受け取り、他の半分は材料と道具の購入に使用された。男子生徒がそのようにして得た金は、貯蓄銀行に入金された。生徒は一人ずつスロイドの部屋にある道具の管理と保守をおこなう。「何か紛失した場合、生徒は不注意で物を壊した場合に各人が弁償せねばならないと同様に、それを弁償せねばならない」。農家にある小さなもの

やその修理は生徒たちが行う。また、施設の生徒たちは服の修理や靴下の繕いも学んでいた。

⑤ヘリッダ・スロイド学校 (*Härreda Slöjdskola*)  
(イエーテボリ・ボヒュース県) (表に記載なし)

この学校では、1874年から男子用スロイドと女子用スロイドが教えられてきた。男子スロイド学校には、「県の農業経済会議所が300クローネを補助し、それは道具の購入に使用された。そのうえにこの団体は、年間を通して教師や女性教師への報奨金、最も勤勉であった生徒や高いスロイド技能をもつ生徒への報奨金を授与することに補助金を出してきた」。授業は、男子に対しては国民学校教員によって、女子に対してはその教員の妻によって担当される。スロイド教育の時間は、現在(1877年夏)では木曜日の午後と土曜日の午前に限定され、およそ約38週間継続される。「本来の国民学校への通学は、3、4年、最高で5年までであり、この期間にスロイドの教育は男女共に義務づけられている」。「生徒が学校に対して道具と材料の経費を支払う必要はなく、教師は無給で働くが、製作したものの売上金があれば、その一部を生徒は得ることになる」。スロイドで作ったものの販売は良好で、住民がこのことに関心を持っていることを示している。

女子は「編み物、服縫い、名前つけ、クローセ編み等」を学ぶ。男子は「木工と旋盤作業を学び、簡単な木の机、踏み台、折りたたみ式ベット、ハンガー、スリッパ、まぐわ、角燈、手押し車、道具の柄等」をつくる。

生徒たちはスロイドを「とても楽しみ、好感をもっている。何人かの生徒は良い資質を示す。その例として、彼らは休み時間を自主的にスロイドに利用する。生徒は二つのグループに分けられ、隔日のみ通学するものの、以前の全時間が理論的教科の学習であった時と同じくらい多くを学んでいる」。

この学校の目的は、「職業人を養成することではなく、有用な仕事に生徒を慣れさせ、最も普通にある道具や家財用品を修理したり作ったりすることの有益性を彼らに学習させること」にある。

⑥オースタッド子どもの家附設スロイド学校 (*Östads barnhus slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-⑤)

この子どもの家においては、スロイド教育が1876年5月初めに開始された。その施設の子どもの家は週5日子どもの家での授業に出席することが課されているが、4日は国民学校の教科の学習に取り組み、1日がスロイドの学習に取り組み。国民学校の教科の学習は1日

6時間で、午前7時30分に開始し、午後1時30分に終了する。それに対して、スロイドの学習は、一日中続けられる。「一般的に子どもたちはとてもスロイドに興味を抱いている。なぜならスロイドの学習の日には、子どもたちが早くから全員あつまっているからである」。スロイドを学んでいる男子は、昨年度は22人であった。女子は男子と大体同じ数で、裁縫を学んでいる。子どもの年齢は、12歳から15歳であった。男子のスロイドを担当したのは大工職人であり、女子の裁縫を担当したのは女性教師である。規律の維持のため、さらには製図とスロイドを平行して教えるために国民学校の教師も男子のスロイドの授業に参加し、生徒は数人ずつ順番に製図を学習している。

スロイドの活動は、「特に農業に必要なものを作ることを含んでいる。その理由は、生徒は一般的に農業労働者になるからである」。「生徒を励ますために、彼らは自分で製作したものを自宅に持ち帰ることができた」。

スロイドの授業は生徒に大いに役立つが、それ以外にも、その活動は「教区内の民衆一般にスロイドへの関心を喚起し、活気づけるように思われる」。

⑦エーケルード・スロイド学校 (*Eckeruds Slöjdskola*) (エルフスボリ県) (表-⑤)

ダールスランド地方は、「スロイドの救済が一番必要な地域」である。この目的のためにエーケルードにスロイド学校が設置された。学校は、1875年3月1日に活動を開始し、その後、夏期を除いてその活動を継続してきた。エルフスボリ県の北部スロイド協会は、1000クローネを建物の建築費への補助金として援助し、学校の活動への年間の補助金として500(1875年)、1000(1876年)、1200(1877年)クローネを補助した。

スロイドの授業の目的は「最も普通にある農業道具を製作する技能を教えること」であり、この授業は校長ヤコブソン(A. G. Jacobsson)氏と一人の補助教師が担当している。生徒の数は、今学期は24人で、年齢は12歳から22歳までであった。学校は、午前6時から午後7時まで開かれ、「鋤やまぐわ、ふるい、草刈り機、はかり、機織り機、ベッド、長イス、机、イス、洗面台、鏡、本棚等」がつけられた。製造されたものは、その地域で販売された。

⑧ファルショーピング・スロイド学校 (*Falköpings Slöjdskola*) (表に記載なし)

この学校は、1876年10月15日にその活動を開始し、年間8ヶ月活動することになっている。一日の作業時

間は6時間、すなわち午前9時から午後1時、午後3時から午後5時である。生徒数は1877年度の春学期には46人で、作業時間を以下のように区分している。

「国民学校の男子生徒は午前9時から午前11時まで学校に通っていない子どもは、午前11時から午後1時まで

教師の子どもは、午後3時から午後5時まで」

国民学校の男子生徒は、2つのグループに分けられ（それぞれが7、8人の生徒からなる）、1日おきに学校に通う。午前11時から午後1時まで通う子どもは、最初は同じ方法で分けられたが、後に1つのグループになった。いま彼らは毎日通学している。彼らの年齢は全員15歳以上である。教師の子どもは、3つのグループに分けられ、それぞれが8人である。彼らは週に2回学校に通う。

これまでに、「木工、旋盤作業、かご編み細工、針金細工、彫刻、糸のこ作業（主に年少の生徒を対象に）、亜鉛板細工、製図（線図およびフリーハンド）」が取り組まれた。生徒は、自分たちが製作したものの販売代金の25%を受け取る。

#### ⑨ヨーテード・スロイド学校 (*Hjorteds Slöjdskola*) (カルマル県) (表-⑩)

ヨーテード・スロイド学校は、最初は聾唖児童施設の生徒たちにスロイド教育を提供することを目的として創設された。その後国民学校の生徒も対象になっており、現在では主に国民学校の生徒がその場所を使用している。このスロイド学校は、1873年8月に開始され、年に4か月間活動をしている。作業室は狭小で、8人から10人以上の生徒を同時に収容できない。「木工、旋盤作業、木の切断、ブラシ製造等を担当する教師は、その4ヶ月の期間に1日につき2～2.5クローネの日給を受けとる。かご編み細工を担当する教師は、時給25オーレを受けとる。わら細工は主に聾唖児童(女子)向けのものである」。

子どもの関心を活気づけるために報奨が与えられるが、お金ではなく、よい道具が授与される。教師は到達した技能よりも、示された勤勉さと意欲をできるだけ励まそうとしている。製作したものはオークションで販売され、その後製作した生徒が販売総額の半額を現金で受け取る。他の半額は、貯蓄銀行に預けられる。農業経済会議所の年間の補助金は250クローネであったが、今年から350クローネに引き上げられ、いくつかの教科の非常勤教師を雇う義務を伴うことになった。北部カルマル県のスロイド学校の主な原則として、スロイド学校の目的は「生徒を手工職人 (handt-

verkare) にするのではなく、農業を捨てることでもなく、労働の喜び (lust för arbete) とできるだけ多くの単純な道具を取り扱う技能 (skicklighet) を教え、大抵の場合自助できるように、また他の仕事が無くなった場合副業の手段にもなるようにすること」である。

#### ⑩アルボーガ・スロイド学校 (*Arboga Slöjdskola*) (ヴェストマンランド県) (表-⑪)

この学習施設は、市長をはじめとする人々の準備をふまえて、1876年4月1日に開始された。最初学校は屋根裏部屋におかれたが、後にスロイド学校のために借用された2つの部屋におかれた。その部屋の賃貸料は年220クローネである。道具や設備一式の費用は800クローネで、モデルの費用は3つのモデルで400クローネである。教師の給与は、年額600クローネである。夏学期には授業時間は週48時間、また冬学期には週46時間となる。生徒の数は26人であり、その中の8人は、12歳～15歳であり、残りの18人は10歳～12歳である。年長の生徒は「園芸用のイスや机や長イス、年少の生徒は楊枝、鳥かご、花用の棒、ラベル等」を製作している。

#### ⑪エッペルブー・スロイド学校 (*Äppelbo Slöjdskola*) (コッパルベリ県) (表-⑫)

「国民学校と連携して成立したこのスロイド学校」は、学校教師のイニシアティブで、コミュンが最初の年に350クローネの補助金を予算措置し、さらに毎年50クローネの補助金を4年間支出することを決定した後に、1877年2月20日にその活動を開始した。「木工と靴製造のための道具が購入されたが、靴製造の方は生徒の興味を引かなかった」。

スロイド学校を開始するために、その学校教師は無償でスロイド教育を担当した。作業場としては、国民学校のホールの一部が利用された。スロイドの授業時間については、時間割に配当された一日2時間と昼休みの1時間、その日の放課後の1時間がスロイドにあてられたが、実際に生徒がより長い時間放課後に残ることもよくある。

スロイドの授業には一度に15人の男子生徒（その数は過大であると思われるが）が参加した。生徒は「イス、スプーン、ひしゃく、網、スリッパ、ねずみ取り、ブラシ、バターナイフ、クッキーをつくるための型等を製作し、旋盤作業（パン粉をこねる棒、道具の柄）も行った」。生徒たちは、製作したものの販売代金の中から原材料の購入費を控除した後の分を受け取る。



## 5. 若干の分析

以上の記述にみられる1870年代のスロイド学校の特徴をいくつかの視点からまとめておく。

### (1) 学校が設置された地域

多くのスロイド学校は、すでに図1で示したように農村部に位置していた。しかも、かなり特定の地域に集中しており、とりわけスウェーデン南部に多かった。農村部に位置していたことは、スロイド学校の問題が農村部の貧困農家の子弟の教育の問題とかわっていたことを背景としていた。スウェーデン南部に多いのは、北部は森林地帯であり、人口がきわめて希薄であったことがその背景として考えられる。また、特定の地域に集中しているのは、各地域の農業経済会議所や地方議会などのスロイド教育問題に対する取り組みやその地域の指導者層のこの問題に対する関心の大きさの差によるものと考えられる。

### (2) スロイド学校設立の契機

多くのスロイド学校は、国民学校と連携して（あるいは「統合され」）組織されていた。これがこの時期に設立されたスロイド学校の大きな特徴である。事例Ⅱ-①のように\*、すでに30年以上の歴史をもつスロイド学校であっても、1870年代に「国民学校と統合され」「拡張され」た。事例Ⅰ-⑭や事例Ⅱ-②のように、個人のイニシアティブによってスロイド学校が創設されたところもあったが、スロイド協会（とりわけエルフスボリ県では、スロイド協会が独自の補助金制度を発足させた（事例Ⅱ-⑦））ことや農業経済会議所や地方議会の補助金制度が学校設立の大きな契機になっていたところもあった。

### (3) スロイド学校の目的

1870年代に創設されたほとんどのスロイド学校では、その目的を「農民を手工職人の分野に引き込むことなく、農民をできるだけ手工職人に頼らないようにすること」（Ⅰ-⑩）、「技能的な面で職業人を養成することではなく、生徒が手の労働（handarbete）を愛し、自分の暇な時間を有用に使うことを可能にするこ

\* 事例Ⅱ-①とは、サロモンの*Slöjdskolan och folkskolan II*に掲載された①の事例（ウブサラ・スロイド学校）のことをさしている。以下同様のこと。

\*\* Bennettは「1876年までの時期のスロイド教育は経済的な必要にもとづくもので、本質的にホーム・スロイド（home sloyd）であった」としている（C. A. Bennett, *History of Manual and Industrial Education 1870-1917*, p.62-p.63, 1937）。

と」（Ⅱ-②）としていた。すなわちベネットがいうような“home sloyd”を教えること\*\*、言い換えればホームスロイドを教えることにおかれているものはほとんどなく、「職業的な技能を養成することが目的ではなく、手と眼の練習を与え、かつ労働への尊敬（aktning för arbetet）を育てること」（Ⅱ-④）「最も普通にある農業道具を製作する技能を教えること」（Ⅰ-⑦）など一般的な技能を教えることにおかれていたことが注目される。スロイド学校の目的を「労働技能または訓練された資質の育成」におく事例（Ⅰ-⑰）のような事例もあった。この学校では、国民学校をすでに修了した生徒を受け入れており、生徒の年齢も他の事例と比べても高かった。この学校はスウェーデン北部のウメオにある学校で、先に述べたことも考え合わせるとその地域の特性を反映した事例であり、例外といえるかも知れない。

### (4) スロイド教育の教育内容、教材について

スロイド教育の教育内容や教材について、表4に示した。この表から木工作業が中心であり、すべてのスロイド学校で教えられていたことがわかる。いすなどの家具、家庭内で用いられる食卓用の各種の道具だけでなく、農作業用品を含むきわめて多様な実用品が作られていた。道具や工具の使用法を教育内容としては掲げていないように思われるが、「旋盤作業」がこの表4において11事例あった。これら多様な作品から、ナイフを含む多様な工具が活用されていることを知り得るのみではなく、少なからぬ学校で木工旋盤が活用されていたことも注目される。

一部のスロイド学校で「鍛冶」（Ⅰ-⑨）「金属加工」（Ⅰ-⑯）「鉄に関する仕事」（Ⅰ-⑰）「針金細工」（Ⅱ-⑧）が教えられ、金属を加工する多様な品物が製作されていたことが注目される。そこには馬蹄のような農業に必須の用具のみではなく、パール、ハサミなどの金属加工用の工具の製作さえ含まれていた。

糸のこ作業に取り組んでいる事例が8つ（Ⅰ-⑤、Ⅰ-⑥、Ⅰ-⑫、Ⅰ-⑬、Ⅰ-⑮、Ⅰ-⑯、Ⅱ-①、Ⅱ-⑧）あったが、この当時（1870年代半ば）、糸のこ作業を教えることが流行していたことと関連していると考えられる\*。事例Ⅰ-⑫から「糸のこ作業で製作されたものは、生徒にとって実践的に利用できるものではなく、さらに販売することも難しい」ので、次

\* サロモンは、糸のこ作業が当時スウェーデンにおいて流行し始めていたと書いている（Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13, 1891）。

表4 1870年代のスロイド学校の教育内容、教材（男子）

I-①	簡単な木工作、木靴、ブラシ、鞭、木製スプーン、ひしゃく、織物用シャトル、大小の机、糸巻き、まな板、はかり、玩具、調味料用棚、桶、簡単な農業用具の製作とかご編み細工
I-②	旋盤作業、簡単な木製スプーンや丁寧仕上げられた木製スプーン、道具の製作、桶板、ブラシ製造、わら細工、ハンダづけ、油塗り、窓ガラスをはめる作業等
I-③	単純なスロイド、馬鞍の製作、かご編み細工
I-④	最初の2年間は木工と靴の製造。その後木工だけとなる。主に鋸、斧、ナイフ、鉋、ドリル、ハンマーなどの道具の使用方法を教えている。それらの道具はイスを製作するときに必要となるので、ほとんどの生徒はイス製作に従事。旋盤作業や彫刻も教えるが、それらは関心と才能を示した生徒のみに対して実施される。年少の生徒は、名札、編み物用の道具、ほうきなどを製作。その他に異なるモデル（台所用、庭園用、子ども用、休食用）にしたがってイスを製作。さらに小さなテーブル、糸巻き、ステッキ、ペーパーナイフ等の小さなものを製作
I-⑤	小さな家具の製作、彫刻、糸のこ作業
I-⑥	木工、旋盤作業、糸のこ作業。盆、箱、手桶、工具の柄、痰壺、いろいろな種類のモデルを製作。一部の生徒は糸のこ作業。
I-⑦	たらい、机、熊手、鋸立てのような生活用品、手押し車やスコップ
I-⑧	靴職人と仕立屋のもとでいたんだ靴や服を修理し、新しいものを作る。鍛冶では、単純な工具、例えばハンマー、はさみ、パール、馬蹄、木の実割り、砂糖はさみ、スパナ等をつくる。さらに、その他に注文によってさまざまなものをつくる。木工職人のもとで家具や台所用品をつくる。
I-⑨	おけ、足台、簡単な玩具の木彫り
I-⑩	簡単なイスや机、熊手、木製スコップ、まぐわなど、いわば日々の生活に必要なものをつくることを学ぶ
I-⑪	（最初は）糸のこ作業であった。この作業を通して製作されたものは、生徒にとって実践的に利用できるものではなく、さらに販売することも難しいので、これからはスロイドとして木工を導入することが現在検討されている。
I-⑫	製図、木工、糸のこ作業、旋盤作業。製作されたものは、大部分がその地域で販売される机やイス等の家具であった。また、注文によって家庭に必要な小物を製作した。
I-⑬	木工、糸のこ作業、彫刻
I-⑭	旋盤作業やより簡単な木工に従事し、糸巻き、台所と家事のためのさまざまな小物、ハンガー、瓶の栓、樽の栓、小箱、道具の柄、パンをこねるための道具、糸のこのフレーム、熊手、バター用スコップ、バター圧搾器等を製作。彫刻や糸のこ作業、ブラシ製造やわら細工、かご編み細工、いろいろな玩具、金属加工等。
I-⑮	麦わらマット、かご細工、ブラシ細工、鉄に関する仕事
II-①	木工、旋盤作業、糸のこ作業（ただし、彫刻と関連したもののみ）、かご編み細工、籐細工、ガラス細工、靴の製作
II-②	木工、旋盤作業、木の切断と鋸引きおよび製図、かご編み
II-③	台所と家庭のための小物、大小のイス（いわゆる折り畳みイス）、ハンガー、道具の柄、ブラシ、スリッパ、靴脱ぎ、糸巻き、鍵箱、葉箱、花瓶のケース、花瓶に使う棒、本棚、本立て、机（庭用、花用の台）、園芸用のイス、長イス、ほうき、人形用ベット、小さい手押し車、タオルかけ、トランク、そり、ステッキ、服掛け、メジャー、鍵用のラベル、ペンの柄、ペーパーナイフ、ねずみ取り、熊手の歯の部分、鏡の枠、写真立て等
II-④	木工と旋盤作業を学び、簡単な木の机、踏み台、折りたたみ式ベット、ハンガー、スリッパ、まぐわ、角燈、手押し車、道具の柄等
II-⑤	鋤やまぐわ、ふるい、草刈り機、はかり、機織り機、ベッド、長イス、机、イス、洗面台、鏡、本棚等
II-⑥	木工、旋盤作業、かご編み細工、針金細工、彫刻、糸のこ作業（主に年少の生徒を対象に）
II-⑦	木工、旋盤作業、木の切断、ブラシ製造等
II-⑧	年長の生徒は園芸用のイスや机や長イス、年少の生徒は楊枝、鳥かご、花用の棒、ラベル等
II-⑨	イス、スプーン、ひしゃく、網、スリッパ、ねずみ取り、ブラシ、バターナイフ、クッキーをつくるための型等を製作し、旋盤作業（パン粉をこねる棒、道具の柄）



第に取り組みられなくなったことがわかる。

#### (5) 製図について

製図の授業をおこなっているスロイド学校は、ⅠとⅡをあわせて6校あったが、国民学校教師が製図を担当している事例(Ⅱ-⑥)や製図を専門としている教師が担当する事例(Ⅰ-⑧、Ⅱ-③)やスロイド教師が担当する事例(Ⅰ-⑬)があった。先述したようにサロモンはフリーハンドのスケッチ(frihand-steckning)よりも線図(linearritning)を重視していたが、このことが明記されている事例は1つだけであった(Ⅱ-⑧)。他の事例は「製図」(ritning)とだけ記述されているので、その内容は不明である。国民学校教師が製図を担当するという状況は、1860年代から国民学校に製図が徐々に導入されていった<sup>27)</sup>こととかかわっていると思われるが、この点については今後の検討課題としたい。

#### (6) 学校の規模、設備

1870年代の多くのスロイド学校は、主にスロイドだけを教える作業室と施設・設備や材料、モデルや製作したものを保存する場所から構成される。ここで紹介した事例Ⅰ-⑭ネース・少女スロイド学校のように、あるいは別稿<sup>28)</sup>で分析したネース・少年スロイド学校のように、スロイド学校で国民学校の普通教育科目を教えているようなスロイド学校は例外的な存在で、大部分はスロイドの授業だけを行うための作業室を中心としたものであった。

しかし、学校の施設・設備について詳しく書かれている事例もあった。事例Ⅰ-⑥と事例Ⅱ-③である。事例Ⅰ-⑥(ランズクローナ・スロイド学校)では、「作業場には8つの旋盤と6つの鉋台があり、それらとその他に道具の購入に1,172クローネを必要とした」と書かれていた。この学校については、少女スロイド学校についても設備に関する記述があり、「2つの特別室」があり、「1つの部屋には裁縫台と長いす、もう一つの部屋には4台の機織り機、2台のひも編み機、24台の紡ぎ機、4台の糸まき機等」がおかれ、「すべての道具類に要した経費は944クローネであった」と書かれていた。事例Ⅱ-③(ヴィースビ・スロイド学校)では、「学校の設備は、製図室に14台の製図用機と1台の整理用機、スロイド室に5台の鉋台、2台の旋盤、6台の切断台、1台の足踏み鋸と、それらに付随した道具一式からなる。これに加えて、二つの部屋には棚がおかれている。そこには、モデルと見本が設置され、その一部は、以前に農業経済会議所により購入されたものである」と書かれていた。これらの2つの例は充実した設備をもった学校の事例であると考え

られる。さらに、設備について詳しく書かれていないが、スロイド教育の内容として旋盤作業を位置づけている学校(Ⅰ-②、Ⅰ-④、Ⅰ-⑥、Ⅰ-⑬、Ⅰ-⑯、Ⅰ-⑰、Ⅱ-①、Ⅱ-③、Ⅱ-⑤、Ⅱ-⑧、Ⅱ-⑨)には、少なくとも木工旋盤は置かれていたことが読みとれる。

#### (7) 授業日

授業日については、隔日でスロイド学校と国民学校に通う事例(Ⅰ-④、Ⅱ-①)、週に1日の事例(Ⅰ-③、Ⅰ-⑩、Ⅰ-⑪)、あるいは週に2日、水曜日と土曜日の午後にスロイドの授業をおこなう事例(Ⅰ-⑤、Ⅰ-⑯)、毎日午後にスロイド教育をおこなう事例(Ⅰ-⑥)、冬季のみに授業をおこなう事例(Ⅰ-②)等、多様な授業時間が設定されていた。これは、国民学校が巡回型など多様な組織のあり方をもっており、スロイドの授業も多様な方法で組織されていたことを示している。

#### (8) 生徒の年齢について

生徒の年齢は、7歳~15歳(Ⅰ-①)、11歳~14歳(Ⅰ-④)、10歳~12歳(Ⅰ-⑤)、12~14歳(Ⅰ-⑦)、10歳~17歳(Ⅰ-⑩)、10歳~15歳(Ⅰ-⑪、Ⅱ-⑩)、11歳~14歳(Ⅰ-⑫)、10歳~19歳(Ⅰ-⑬)、12歳~15歳(Ⅰ-⑭、Ⅱ-⑥)、15歳~31歳(Ⅰ-⑰)、7歳~15歳(Ⅱ-②)、12歳~22歳(Ⅱ-⑦)ときわめて多様であった。この背景には先に述べたように1882年に学齢が7歳から14歳とされる以前は国民学校の生徒の入学年齢が多様であったので、スロイド学校の生徒の年齢も多様であった事情もあげられる。しかし、それだけにはつきない地域、施設ごとの多様性があったことも示されている。また一部のスロイド学校では成人さえも学んでいた。

#### (9) スロイド担当の教師について

職人がスロイドを担当する事例(Ⅰ-⑨、Ⅰ-⑩)と国民学校教師がスロイドを担当する事例(Ⅰ-⑬)があったが、多くの場合は、前者であった。それは、「国民学校の教師がスロイドの教育を担当することの能力不足とその意思がない」(事例Ⅰ-⑫)という問題状況を反映していたと考えられる。サロモンは、この問題を解決するために1874年からスロイド教員養成所を開始したが、1878年には国民学校教員を対象としたスロイド教授法の原理と方法を教える短期講習会に重点をおくようになった。1870年代のスロイド学校の校長やスロイド担当教員には、先のスロイド教員養成所を修了した人がいたが、1870年代のスロイド学校の発展にも貢献したと考えられる。

### (10) 校長、教員とその待遇について

ほとんどのスロイド学校には、校長が専任教員として配置されていた。さらに臨時のスロイド教員がおかれる事例も多く存在した。校長やスロイド教員の給与等の待遇については、学校（あるいは地域）によって、性によって異なっていた（女子スロイド学校のスロイド教師の給料は男性教員の半額くらいに処遇されていた）。もちろん、スロイド教師の勤務すべき日数にもよるが、国民学校教師と同じ日数の場合はほぼ同額の給料を受け取っていた事例があった（Ⅰ-⑥）。教員養成機関において修了試験を合格した国民学校教師（すべて男性であった）の年額の給料は、1870年代においては500～600クローナ＋賃貸料無料の宿舎、畑地であった<sup>29)</sup>。この給料と比較して、スロイド学校教員の給料が低い事例もあった（Ⅰ-①）。逆に事例Ⅱ-①のウブサラ・スロイド学校のように、国民学校教員よりも高額である場合もあった（年額800クローネの給料）。職人がスロイド教師となる場合には、地域の相場が考慮された事例（Ⅰ-③）もあった。

### (11) 製作した作品の扱いについて

生徒が製作したものはオークションや展覧会において、あるいは個人的にも販売され、多くの場合その売上金の一部は報奨金として生徒に支払われた。「販売総額の半額を生徒が現金で受け取り、他の半額は貯蓄銀行に預けられる」事例（Ⅱ-⑨）、「販売総額の半額を超えることはない」事例（Ⅱ-①、Ⅱ-④）、販売代金から「道具のメンテナンスに必要な経費や材料の購入」代金を差し引いた額を報奨金として生徒が受け取る事例（Ⅰ-⑥）、販売価格が「ほとんど材料代と同じくらいに」低く設定されている事例（Ⅰ-⑨）、材料代にも達しない事例（Ⅱ-③）などその支払い方法は多様であった。

また、その報奨金は貯蓄銀行に預金される場合が多かった（「各年度の終わりに銀行預金され」、「生徒が修了するときに受け取る」事例（Ⅱ-①）など）。「毎週土曜日に（報酬として）支払われる」事例（Ⅱ-②）もあった。

### (12) 授業料について

授業料についての記述がある事例は、Ⅰ-⑪（シェーリングスホルム・スロイド学校）の事例だけで、「男子生徒の授業料は無料であり、学校にある道具を使用することができ、最初は自分の製作するものの材料も無料である。女子生徒も同様に授業料は無料であり、貧困な家庭の出身者は裁縫の材料費も無料となる」と書かれている。他の事例には授業料に関する記述はないが、スロイド学校が対象とする子どもは貧困農家の

子どもたちが主体であったことから、多くのスロイド学校の授業料は無料であったと考えられる。

以上に、サロモンの *Slöjdskolan och folkskolan I* (1876), *Slöjdskolan och folkskolan II*, (1878) において紹介されたスロイド学校に関する記述をくわしく紹介し、その特徴をいくつかの視点から分析した。このようにやくわしく紹介してきたのは、先に述べたように先行研究において1870年代のスロイド学校に関する記述がみられないからでもあるが、サロモンの2つの著作に書かれたスロイド学校に関する記述が当時のスロイド学校の実態をある程度反映しており、その詳細な記述そのものを紹介することに独自の価値があると判断したからである。

## 6. 結びにかえて

本稿では、オットー・サロモンの二つの著作に映し出された19世紀スウェーデンにおけるスロイド教育の状況を素描してみた。そこには、1870年代初頭までは停滞していたスロイド教育が1877年改革を契機として1870年代後半以降に変化、発展し始める状況が具体的な学校の実態に即して映し出されていた。ところでサロモンの筆致は、スロイド教育の状況とその変化の背景となっていたその経済的土台、すなわち当時のスウェーデン社会の状況と、19世紀後半に始まるその顕著な変化には及んでいない。つまり、スロイド教育の変化と発展の過程をどう解釈できるかについては全く触れていなかった。

そこでここでは、稿をしめくくるにあたり、停滞していたスロイド教育が1877年改革を契機として1870年代後半以降に変化し発展し始めた状況の背景に関する筆者のメモを整理しておく。

19世紀前半のスウェーデンにおける農村の窮乏化の進展と、19世紀後半とくに1870年代に始まる急激な工業化の進展とその中で発生した経済恐慌はスウェーデンにおける資本主義社会の到来を示唆するものであった。表2の数値は、全国人口の変化を示す統計を含んでいないし、したがって全人口に対する在学者の比率などの数値を示していないので、経済状態などを直接に反映するものではない。しかし、この表に見られる1870年代における民衆学校拡張の背景に工業化の進展という事情が反映していたことを読みとることは可能であろう。また、1879年に発生した軍隊が出動するほどの大規模な労働者の争議\*は、スウェーデンにおける階級としての労働者すなわちプロレタリアートの誕生を示唆する事象として注目される。こうした急激な

工業化の進展は、筆者の理解では、イギリスにおいて18世紀に発生し19世紀初頭に及んだいわゆる古典的産業革命に比すべきものであった。その意味で、サロモンが明言しているわけではないが、1877年改革自体はスウェーデン社会の工業化へ向けた改革であったことが注目されるべきであろう。なお、スウェーデンの経済史研究者は産業革命と言わずに産業化(industrialisering)と称している場合が多いように見えるが\*\*、この点についての立ち入った検討は別の機会に譲りたい。

1870年代後半におけるスロイド学校の叢生という現象が直接には1877年の法令により促進されていたことを疑う余地はない。しかしまたその背景ないし土台としてスロイド学校の叢生を可能ならしめた条件は、社会における工業化の進展であったとみるべきであろう。つけ加えれば、こうして生まれたスロイド学校の条件整備の進展、木工中心であったことは疑いないことであるにもかかわらず、金属加工の内容にまで及んでいたスロイド学校の教育内容の豊かさも、単にスウェーデンでは早くから鉄が普及していたので自らのほど(火床)をもつ農家が多かったとか、農村の至る所に鍛冶屋が存在したという状況の反映ばかりではなく、テンポは緩慢であったとしても農村をも次第に巻き込み始めていた工業化の進展の反映であったとみることができるのではないか。こうしてスロイド学校を拡充発展せしめた条件は、それを立証することは筆者の今後の課題であるが、後にオットー・サロモンの天才的努力とあいまって創造された教育的スロイドのモデル・シリーズの成立として結実することになるといえよう。

## (注)

1) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s. 425-426, 1942

\* 約6000人の労働者がデモに参加した争議であった(Isidor Kjellberg, *Sågverksarbetarne i Norrland*, 1879, Nytryck 1974 med förord av Barbro Björk, förord s. 3, Sundsvalls museum)。百瀬宏・熊野聡・村井誠人編『北欧史』(1998年, 山川出版社)では、約7000人と書かれている(p.260)。

\*\* *En modern svensk ekonomisk historia - Tillväxt och omvandling under två sekel-* (SNS Förlag, 2000)では、1790年から1850年の時期を「農業の変化と初期の産業化(Jordbruksomvandling och tidig industrialisering)」と特徴づけている。

- 2) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s. 426, 1942
- 3) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV s. 14*, 1882
- 4) 拙稿「オットー・サロモンの初期スロイド教育——ネース・少年スロイド学校における実践の到達点からみたシグネウスの影響——」日本産業教育学会『産業教育学研究』第36巻第1号, p.73-p.80, 2006年1月
- 5) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I (1876), Slöjdskolan och folkskolan II*, (1878)
- 6) *Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen. Tilledning för skolråden*, s.2, 1880
- 7) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (*Statistiska centralbyrån*), s.20, 1974
- 8) Mats Sjöberg, *Att säkra framtidens skördar - Barndom, skola och arbete I agrar miljö: Bolstad pastorat 1860-1930*, Linköping universitet, 1996
- 9) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (*Statistiska centralbyrån*), s.55, 1974
- 10) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (*Statistiska centralbyrån*), s.52, 1974
- 11) *Elever i obligatoriska skolor 1847-1962*" (*Statistiska centralbyrån*), s.20, 1974
- 12) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 13) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 14) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 15) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.134, 1942
- 16) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.135, 1942
- 17) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.152, 1942
- 18) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.155, 1942
- 19) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.156, 1942
- 20) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*, s.157, 1942
- 21) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan*

- I, s.82 (1876)
- 22) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan*  
I, s.12-s.13 (1876)
- 23) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan*  
I, s.14-s.19 (1876)
- 24) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan*  
I, s.19-s.23 (1876)
- 25) 拙稿「オットー・サロモンの初期スロイド教育——  
ネース・少年スロイド学校における実践の到達点か  
らみたシグネウスの影響——」日本産業教育学会  
『産業教育学研究』 第36巻第1号, p.73-p.80,  
2006年1月
- 26) 同上
- 27) *Svenska Folkskolans Historia III 1860-1900*,  
s.418 - s.419, 1942
- 28) 拙稿「オットー・サロモンの初期スロイド教育  
——ネース・少年スロイド学校における実践の到達  
点からみたシグネウスの影響——」日本産業教育学  
会『産業教育学研究』第36巻第1号, p.73-p.80,  
2006年1月
- 29) *Folkskolestadgan med flera författningar  
rörande folkundervisningen. Tilledning för  
skolråden*, s.4-s. 7, 1880

（謝辞）スロイド学校の所在地の地図の作成，資料の  
収集にあたっては，Ingemar Ottosson 氏  
（Kristianstad university）と Hans Thorbjörn-  
sson 氏にお世話になりました。記して感謝申し上げ  
ます。

# オットー・サロモンのスロイド教育システムのテーゼ

横 山 悦 生

はじめに

- (1) 本論文の目的
- (2) 本論文執筆の背景
- (3) 本論文の研究課題の限定
1. オットー・サロモンによるスロイド教育システムのテーゼの萌芽  
— 「モデル集成」段階(1876～)の文書から —
2. オットー・サロモンによるスロイド教育システムのテーゼの形成  
— 「モデルシリーズI」段階(1882～)の文書から —
3. オットー・サロモンによるスロイド教育システムのテーゼの完成  
— 「モデルシリーズII」段階(1888～)の文書から —
4. まとめにかえて  
— サロモンにおけるスロイド教育システムの骨格とその展開 —

## はじめに

### (1) 本論文の目的

本論文は、スウェーデンの男子のスロイド教育を確立したことで知られるオットー・サロモンのスロイド教育システムに関する主張の特徴を解明することを目的とする。具体的には、彼が機会あるごとに繰り返し指し示したスロイド教育システムの要点を簡潔にまとめた文章(以下これを「テーゼ」という)の中から、その発展の時期を画したと思われる三つをとりあげて紹介し、そこで彼が展開し強調したスロイド教育の諸要素の特質を分析し、スロイド教育が発展していった経過と背景などをスウェーデンの近代的教育制度の発展との関連で解明する。

### (2) 本論文執筆の背景

サロモンのスロイド教育に関する主張は生前から海外で広く知られた。その背景には、サロモン自身が国内の教師たちにはもちろん、関心を抱く国外の研究者たちに対して、スロイド教育の本質的な課題とその内容と方法を広めるために、ことばによる説明と同じくらいあるいはそれ以上に、生徒たちに製作させる作品群を提示しようとした経緯がある。これは、彼の主張の発表の方法にみられる重要な特徴の一つであった。

その目的のためにサロモンは、生徒に製作させるべきスロイド教育の教材(=作品)(群)を体系化し、それを生涯にわたって絶えず整理し編成し直す努力を続け、それを機会あるごとに積極的に発表した。その結果、オットー・サロモンのスロイド教育の教材集成は何種類も知られることになった。しかし、スウェーデン語で書かれたそれらに原史料にもとづく分析がなかったために、後年の研究者たちには、幾種類もの教材集成に見られる教材体系の発展の前後関係などが解明されて来なかったきらいがある。こうした経過からみれば、サロモンによるスロイド教育の発展過程を教材体系の変化、発展にそくして詳細に分析することも、サロモンのスロイド教育に関する主張の特徴を解明する有力な方法の一つである。

筆者は別稿<sup>1)</sup>において、『ネース・スロイド教育時報』(以下、『スロイド教育時報』とする)<sup>2)</sup>などの原史料にもとづいてオットー・サロモンの全生涯にわたった数多くのスロイド教材の集成の発展過程を関連する事実経過を詳細に追い、その内容を年代を追って整理し、それぞれの段階ごとの特徴について明らかにした。その結論のみを要約すれば、大きくはまずモデルを集成したに過ぎない筆者のいう「モデル集成」の段階と、モデルをさまざまな原理で体系化した「モデルシリー

ズ」の段階に区分され、それぞれの段階はさらに以下のように細分されることを明らかにした。

「モデル集成」の段階

(1)モデル集成Ⅰ（1876年に成立）

(2)モデル集成Ⅱ（1880年に成立）

「モデルシリーズ」の段階

(1)モデルシリーズⅠ（1882年に成立）とその  
修正版

(2)モデルシリーズⅡ（1888年に成立）とその  
修正版

(3)モデルシリーズⅢ（1902年に成立）

ところで、オッター・サロモンのスロイド教育に関する主張の特徴を解明するには、「モデル集成」や「モデルシリーズ」を調査、整理、分析するだけでは不十分で、少なくとも彼自身がスロイド教育に関する主張の要点をテーゼのような形式で述べた文書の内容を、彼が生きた時代の、スウェーデンの教育制度の近代化の発展状況との関連で、詳細に分析することが必要である。この場合に困惑するのは、サロモンのスロイド教育に関する主張が「モデル集成」あるいは「モデルシリーズ」の発展過程がそうであったように、さまざまな形式で機会あるごとに展開されてきたことである。そのためにスロイド教育に関するテーゼと称すべき文書も少なからぬ種類に及んでいる。スウェーデン語で書かれたこれらの諸文書にみられるサロモンのスロイド教育に関する主張を克明に追って調査し分析することは、海外の研究者には容易ならない課題として残されていた。サロモンのスロイド教育に関する主張とその発展過程を詳細に分析した先行研究が見られなかった所以である。

### (3) 本論文の研究課題の限定

以上に略述した先行研究の状況に鑑みて、本稿ではスロイド教育に関するサロモンの主張をその別の表現方式である教材集成あるいは教材シリーズの発展過程にそくして三つのテーゼをとりあげて紹介し、教科教育思想史の観点から、スウェーデンの近代学校制度の発展との関連において、それらを調査、分析することを目的とする。

最初に、1876年に成立した「モデル集成Ⅰ」の段階における文書にみられるオッター・サロモンによるスロイド教育システムの諸要素を紹介し、その内容を分析する。あらかじめ一つの見通しをいえば、この文書で展開されたサロモンの思想は、彼の「スロイド教育システムのテーゼの萌芽」というべきものであった。

次いで本稿では、1880年代前半にモデルシリーズを創出し、それを媒介として「教育的スロイド」の理念

と教授法を普及させることを目的として、教師にわかりやすい形で示すためにこれらの諸要素を1つのシステムとして体系的に整理した文書<sup>3)</sup>に注目する。この文書は、1885年9月に『スロイド教育時報』に発表されたもので、スロイド教育システムの諸要素を簡潔にかつ体系的に述べたサロモンの最初の文書であり、かつその後に見れる同種の文書の基本形とみられる。本稿ではここに示されたスロイド教育システムの諸要素の特徴をやや詳細に分析する。

ところで、後に触れるようにオッター・サロモンのスロイド教育システムの最も重要なキーワードの一つは「教育的スロイド」であるが、この1885年文書にはこの言葉はまだ登場しない。このことについてあらかじめ説明を加えておくと、『スロイド教育時報』でみるかぎり、サロモンが「教育的スロイド」という言葉を使用し始めたのは1886年頃からであったことがわかる<sup>4)</sup>。しかし、たしかに言葉が使用されたのは1886年からであったとしても、別稿において明らかにしたように、「教育的スロイド」が実態として成立したのは1882年の「モデルシリーズⅠ」からであったとみなすことができる。この「教育的スロイド」とモデルシリーズとの関係は、モデルシリーズが「教育的スロイド」の理念と教授法を教材というレベルにおいて具体的な形態で表したものと考えられる。

本稿では最後に、1888年に成立した「モデルシリーズⅡ」の段階におけるスロイド教育システムに関するサロモンの主張を分析する。これは、モデルシリーズを練り上げる過程で整理された主張である。この後さらにモデルシリーズは改良されて筆者がいう「モデルシリーズⅢ」が成立する。しかしこの「モデルシリーズⅢ」に対応するスロイド教育システムの諸要素を整理した文献は知られていないので、「モデルシリーズⅡ」の段階に対応した文書を「スロイド教育システムの完成段階」と称することができる。ちなみに、サロモンは1902年に心臓を病み倒れたので\*、「モデルシリーズⅢ」の段階に対応した教育システムに関するテーゼというべき文書は存在しないことを書き添えておく。

\* Hans Joachim Reinckeはその著書において「彼のむしばまれた健康状態（1899年に彼は最初の心筋梗塞に襲われ、1902年には2回目の発作）が1902年から課題に満ちた作業を継続することを不可能にした。発病してから、サロモンには時折車椅子が必要になった。」と述べている<sup>5)</sup>。

以下では、サロモンのスロイド教育システムに関するテーゼをスウェーデンの国民教育の発展との関連において分析する。筆者はすでに別稿において、近代学



校の発展過程におけるスロイド教育——とくにスロイド学校のそれ——の位置付けについて、国民学校制度の1877年改革前後状況とその時期のスロイド学校の状況との関連をサロモンの著作から解明することを試みた<sup>6)</sup>。したがって本稿では、この点については簡略に指摘するにとどめることになる。

1870年代に農村部にスロイド学校が多く創設されるが、その多くは国民学校と連携して組織されていた。また、その目的や教育内容なども職業的な技能を育てることにではなく、「目と手の練習を与え、労働への尊敬を育てる」ことにおかれるなど、一般的な技能や労働観を育てることにおかれていた。それゆえ、その後多くのスロイド学校は1877年改革によって国民学校と統合されていくことになった。

したがって、サロモンは、「スロイド教育システムのテーゼの萌芽」としてとりあげる早い時期に刊行された『スロイド学校と国民学校 第1巻』では、スロイド学校のあり方について論じていたのであり、「スロイド教育システムの形成」及び「完成」の段階としてとりあげる1882年以降の文章、後述のように国民学校に導入された教科としてのスロイドのあり方について論じていることに注意しなければならない。

なお冒頭に述べたように、本論文は男子を対象としたスロイド教育に関するオットー・サロモンの言動に限定される。スウェーデンにおける幼児学校や国民学校は、それが創設された当初から、都会の大規模校を例外として、一般的には男女共学であった。しかし、そのスロイド教育については、19世紀から20世紀半ばまでは、男子生徒に対するものと女子生徒に対するそれ——手芸、裁縫、総じてテキスタイル・スロイド——とは別個のものとして発達してきた。つまりスロイドに関する限り長期にわたって別学であった。こうした措置が一般化した背景に実生活における性別役割分業という事情があったことはいうまでもない。本稿が男子生徒に対するスロイド教育のみを対象とするのは、サロモンが関心をもったのは一貫して男子生徒に対するスロイド教育に限られていたからである。

スウェーデンに発達した女子に対するスロイド教育、及びスロイド教育における共学の成立過程などの問題は、それ自体が大きなテーマなので、別の機会に論じることとする。

以下の文章においてはオットー・サロモンの言葉は、〈 〉の中に囲んで引用する。

## 1. オットー・サロモンによるスロイド教育システムのテーゼの萌芽

——「モデル集成」段階(1876～)の文書から——

サロモンは、1876年12月に『スロイド学校と国民学校 第1巻』を著した。サロモンがネース・少年スロイド学校の指導を始めてから4年目である。この副題「スロイド学校はその目的を充たすためにいかに組織されるべきか、そしてそれは国民学校と統合されるべきか？」が示すように、この冊子はサロモンが描いていたスロイド教育の骨格と、おりから漸く「日程にのぼってきた」国民学校制度改革とそこでの論点の一つである「実習教科としてのスロイドの国民学校への導入問題」に対する理解を広げるために執筆された。

同時にこの冊子では、スロイド学校での140種類の製作品が例として示された。サロモンがスロイドの本質的特徴を示すために例示した最初の製作品群である。並べられたモデルの種類は多数で、羅列的で整理されていない観が強い。別稿年表に示したように、筆者はこれを「モデル集成I」と名付けている。

この冊子において、サロモンは国民教育におけるスロイド教育システムの位置付けに関する彼のまとまった構想を初めて述べた。後述する後年のスロイド教育システムに関するテーゼ成立の経過からみれば、ここに述べられたものはサロモンによる「スロイド教育システムのテーゼの萌芽」と呼ぶべきものであった。

この冊子に展開されたスロイド教育についてのサロモンの思想を要約すると、以下のごとくである。まずサロモンはスウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェーなど夏が短く、冬になると日照時間も短い北欧の農民の冬の過ごし方を問題にし、スロイド(彼は道具を扱うことと定義している)の技能を身につけることによって、農閑期の時間をヘムスロイドに当てる重要性を説いている。ここには、実生活のなかでのヘムスロイドの位置を見定めているサロモンの確かな目を読みとることができる。

その次にサロモンはスロイド学校の目的について論じる。それは〈一つあるいは複数の種類のスロイドの技能を教えること〉によって、〈生徒に労働に対する好みと喜びの感情を呼び起こし、秩序や正確さの重要さと喜びと利点を教えることとともに、注意深さや勤勉さ、忍耐強さの必要性を身につけさせること〉であり、そのことによって〈生まれつき持っている人もいる怠惰への志向を克服させることである〉とする<sup>7)</sup>。ここには、〈一つあるいは複数の種類のスロイドの技能を教えること〉というようなスロイド教育の方法に

類する事項も混在しているが、ここに示した目的を学校の課題とすることが提案されている。ここには、労働と教育とを結びつけようとする、後々まで続くサロモンの確固とした見解を読みとることができる。

サロモンは、スロイド学校と国民学校とを統合する必要を主張するが、その根拠を以下のように述べる<sup>8)</sup>。

「よく知られているように、肉体労働者の両親はしばしば自分の子どもの教育にあまり時間を割くことが出来ないし、またそれを望んでいない。国民学校の生徒の年齢は14歳を超えることは概してほとんどない。子どもたちが両親と一緒に住んでいる家に実際に役立つものをつくることのできる体力ができ次第、できるだけ早く親の仕事を手伝うことを両親たちは望んでいるし、子どもの助けなしには両親はやっていけない。したがって、多くの場合最低限の知識を学校で学んだ後は、子どもたちは本とペンを置き、学校教育を中断し、それに代わって自らの時間と体力を自分の家や他人のところで労働にささげざるを得ないのである。この残念な事実によって、スロイド学校はその生徒をなにか特別な補償なしには国民学校の在学生のなかから募集することが求められる。」

1870年代のスロイド学校は、貧しい農民の子弟を対象としていたので、国民学校と統合してはじめて生徒を確保できるという実態が存在したのであった。

その後サロモンはスロイド学校でとりあげられるべきスロイドの種類など、スロイド教育の課題について検討する。サロモンはまず男子と女子に要求されるスロイドの種類は異なるとする。これは、おそらくは筋肉労働は男子、家事や裁縫は女子という実生活において従事している男女の労働の違い——性別役割分業を反映したものであろう。

この後でサロモンは、学校における男子のスロイドについて以下のように述べる。《農業にとって、鍛冶の技能は重要ではあるが、施設設備に財源を要するという問題点がある。》それに対して、《木工(snickeri)と木工旋盤(svarfning)をスロイドとしてとりあげねばならない》とする。その理由は、《それらは日常生活でしばしば使用され、家具や道具や家庭用品がそれによってつくられ、原材料である木が豊富にあり、道具も安く、また、生徒の体力の発達にとっても木工は適切であるからである》とする<sup>9)</sup>。

サロモンはスロイド教育において一貫して木工を重視してきた。しかし、この文章によると、サロモンは当初は鍛冶などの金属加工の学習をもスロイド教育のなかに位置付けることも視野に入れていた。しかし、施設設備を整える財源措置に難点があり、日常生活に

有用なものが多いだけではなく、材料費が安価であり、手作業が容易であることなどが木工品を重視する背景になっていたことがわかる。

続けてサロモンはスロイド学校を組織するための基礎として、1. 教師 2. 実習室 3. 教科 4. 生徒 5. 授業時間 6. 設備の各項目について、彼の考える最低条件について議論している。

サロモンは《6. 設備》において、《スロイド学校での製造の価値は木材(材料)にあるのではなく、作業そのものにある》<sup>10)</sup>と述べ、さらにスロイド学校が備えるべき設備について論じ、その設備は《道具、モデル(作品例)、原材料から構成される》とする。そのモデルについては《それにしたがって学校において作業されるべきもの》とし、《多様に異なる種類と性質からなるものでなければならぬ》と述べている。ここでのサロモンのモデルの基準は、《容易に販売可能なもの》《材料の消費が少ないもの》であり、《初心者がまねるのに適切なもの》としている。また、《スロイド学校は、よく利用される修理作業場として機能し、生徒の親や学校に関心をもっている人たちが修理や再生をほどこしたい単純な家具や家財をもってくるところである》ことを想定している<sup>11)</sup>。生徒が製作する作品は実用的なものでなくてはならないとするサロモンの主張は、この当時から最後まで一貫していることが注目される。

サロモンがここでスロイド学校を組織するための基礎として掲げた諸項目は、後にさらに拡充されるので、詳細は次節で分析する。ここでは、モデルのあり方の理論的枠組みがまだ整理されていないことをのぞくと、国民学校との関連でスロイド学校を組織するために配慮すべきだとするサロモンの主張の枠組みや論点がほぼ網羅されている。筆者がここに示されたテーゼを、サロモンによる「スロイド教育システムのテーゼの萌芽」と特徴づけた所以である。

## 2. オッター・サロモンによるスロイド教育システムのテーゼの形成

### ——「モデルシリーズI」段階(1882～)の文書から——

サロモンは、1882年に100種類のスロイドのモデル(作品例)を示した。これは、前時期の「モデル集成」のようなモデルの単なる集成ではなく、一定の原理にそって整理されたシステムであり、サロモンのスロイド教育論の発展を画するものなので、筆者はこれを「モデルシリーズI」と称することとした。この「モデルシリーズI」は、当初はこれが発表された講習会

に参加したスリュイによる解説とモデルそのものを通じて広まった。

サロモンは、彼のスロイド教育の理念と教授法を普及させることを目的として、1885年9月に「ネースで使われているスロイド教育システムのための基礎の体系的な提示」を『スロイド教育時報』に発表した<sup>19)</sup>。これは、彼のスロイド教育の理念と教授法の原則をわかりやすい形で現場の教師たちに示そうとしたものである。その意味でこの文書は「サロモンによるスロイド教育システムの最初のテーゼ」というべき性格をもっていたので、この文書に注目する。

サロモンはこのテーゼを《A. スロイド教育の目的》と《B. スロイド教育の組織》の2つに分けて、以下のように定式化している。若干の節に区切ってその特徴等を分析する。

#### 《A. スロイド教育の目的》

《基礎的な教育施設は生活のために間接的に準備をしなければならないので、スロイド教育の目的は、主として形式的陶冶——精神と肉体の諸力の発達——を達成することであり、これに、実質的な目的として一般的な技能を育てることが加わる。

スロイド教育が目指す形式的陶冶とは、

一般的に労働への嗜好と愛を育てること

肉体労働への敬意を育てること

自己活動を発達させること

秩序、几帳面さ、清潔さ、整理整頓に慣れさせること

注意深さ、勤勉さや忍耐強さを育てること

体力の発達を促すこと

眼と形態感覚を訓練することである。》

ここでは、前述の1876年のテーゼと比較して、《一つあるいは複数の種類のスロイドの技能を教えること》とされていた部分を《一般的な技能を育てること》と修正して目的が明確化されている。また、《眼と形態感覚を訓練すること》のようなスロイド教育に固有の目的が新たに加えられていることも注目される。

この文書全体としては、近代学校が育成をめざす近代的な労働者像の形成を目的とすることをいっそう明確にしているといえよう。このようなテーゼの発展の背景には、シグネウスに示唆されてサロモンが学んだ西欧の近代的教育思想が反映しているといえるのではないだろうか。

#### 《B. スロイド教育の組織》

次の《B. スロイド教育の組織》は、「I. 一般的基礎」から「II. 教師」、「III. 生徒の年齢」、「IV. 教科」、「V. 生徒の数」、「VI. モデル」にいたるまで、

それぞれをさらに詳細に分節化して展開されている。前述の1876年のテーゼでは「1. 教師、2. 実習室、3. 教科、4. 生徒、5. 授業時間、6. 設備」とされていた部分なので、これと比較すると、「I. 一般的基礎」と「VI. モデル」とが新たな項目として詳細に論じられ、これがこのテーゼの大きな特徴となっている。これに対して、以前のテーゼから「2. 実習室」「6. 設備」の2項目は削除されている。サロモンがスロイド教育のための実習室や設備を軽視するようになったとは考えにくいし、またそうみなす証拠もない。「実習室」や「設備」を整備することを厳しく求めることがスロイド教育の発展の障害になることを危惧してあえて削除したのではないであろうか。

#### 《I. 一般的基礎》

《スロイド教育への参加は、生徒の自由意志にまかせるべきである。そのうえで上述の目的の達成のためには、作業は

1) 有用であらねばならない

2) 生徒を疲労させる「前練習」(föröfningar)を組織してはならない

3) 変化に富むものでなければならない

4) 生徒が自分自身で独立して遂行することができるものでなければならない

5) 実際の仕事であって、遊びであってはならない

6) 贅沢品の製作であってはならない

7) 製作した作品は生徒のものにならねばならない

8) 作業者の能力と体力に対応したものでなければならない

9) 注意深く遂行される性質のものでなければならない

10) 清潔で整理整頓の習慣を養うようなものでなければならない

11) 思考活動が要求され、それゆえ機械的に遂行されることがないようなものでなければならない

12) 体力を強化し、発展させることができるものでなければならない

13) 形態感覚の訓練に貢献するものでなければならない

14) できるだけ多くの道具と操作を使うことを要求するものでなければならない。》

冒頭に掲げられた《スロイド教育への参加は、生徒の自由意志にまかせるべきである。》というテーゼは、スロイド教育は生徒の自由意志による選択に任せる教科とすべきで、国民学校のいわゆる必修教科とはすべきではないというサロモンの主張を示している。スウェー

表1 国からの補助金を受け取った学校数（男子のみ）の変化

1878	1881	1882	1883	1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894
103	300	367	469	584	727	872	991	1167	1278	1392	1492	1624	1787	1895

表2 国からの補助金を受け取ったグループ数（男子のみ）の変化

1895	1896	1897	1898	1899	1900
2483	2743	2960	3157	3342	3489

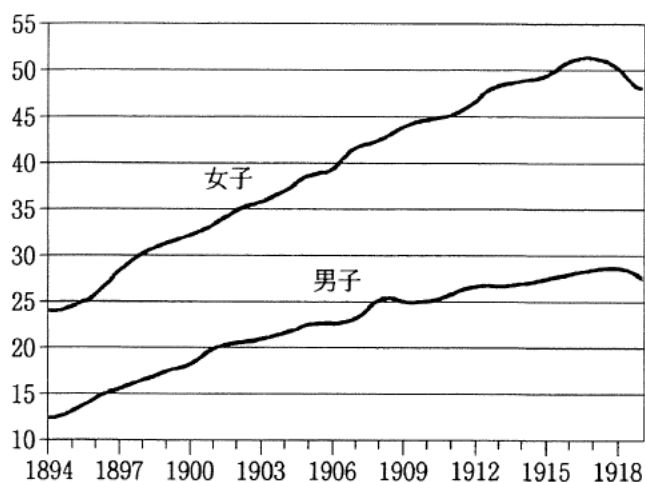


図1 1894年から1919年までの間に、幼児学校、国民学校、低学年学校においてスロイド教育を受けた割合の変化

デンにおいて1877年改革<sup>13)</sup>が国民学校の教育課程にスロイドを導入する契機となり、1878年の「国民学校と幼児学校のための教授プラン」<sup>14)</sup>においてこの教科は選択教科として位置づけられ、その後も1955年にスロイドが必修教科になるまで約80年間、選択教科のままであった。しかし、この教科の設置学校数は確実に増え続けたことも事実であった。表1に「国からの補助金を受け取った学校数（男子のみ）の変化」を示す<sup>15)</sup>。ただし、1895年からは、補助金が15名以上のグループに対して提供されるように変化したので、そのグループ数を表2に示す。また、図1に「1894年から1919年までの間に、幼児学校、国民学校、低学年学校においてスロイド教育を受けた割合の変化」を示す<sup>16)</sup>。なお、国庫補助金は、1896年からは女子のためのスロイド教育（テキスタイル・スロイド）の実施した学校へも提供されたが、その基準は男子とは同じではなかった。男子の場合は15名以上の生徒に対してスロイドの授業を実施した学校に対して75クローネの国庫補助金が提供されたが、女子の場合は25名以上の生徒に対してスロイド教育を実施した学校に対して30クローネの国庫補助金が提供された。

表1及び表2から、男子に対するスロイド教育は着実に前進していったことが読みとれる。図1からは、女子に対するスロイド教育への国庫補助金制度が発足する1896年以前から、スロイド教育を受けた女子の割合は、スロイド教育を受けた男子の割合よりも常に高かった（約2倍であった）ことがわかる。

なお、このテーゼは、後述する1891年のテーゼでは、「教師の側からも生徒の側からもその選択にまかせるべきである。」という表現になっており、サロモンはその学校にスロイド教育にかかわる教科を開設するかどうかについてもその学校の教師の判断に任せていたことを示している。その背景には、1882年に改訂された国民学校に関する法令において次のようにスロイドが位置づけられていたことが関係している。

「スロイドの授業は、それに有能な教師の同意のもとで、スロイドを教えることを希望する学校地区によって、親または、保護者によってスロイドの授業を受けるように登録された児童のために組織することができる。」<sup>17)</sup>

このように生徒がスロイドの授業を受けるためには、教師、親、学校地区の同意が必要という条件を満たさなければならなかった。そのうえで、生徒の選択にしたということは、この教科が定着していくためには生徒から好かれる教科であってはじめてそれが可能になるという思いをサロモンはこのテーゼに込めたと考えられる。

1) から14) までの諸項目は、スロイド教育の内容というより生徒に行わせる作業の構成に関する留意事項を注意深く並べている。しかし、その順序はやや羅列した観があるので、より分析的に考察する必要がある。

まず、2) は、職人養成のためにはある場合には不可欠となる製作目的のない単なる練習のための練習はスロイド教育では排除すべきだとしている。サロモンはそれを「前練習」(förförningar)と表現しているが、それはいわゆるロシア法にいうオペレーションに相当すると考えられる。サロモンは別の文献においてフランスやデンマークで行われている手工科の方法をこの点で批判している。「前練習」は生徒のやる気をそぐというのがその理由である。

7) は注目される。前述の萌芽の段階ではサロモンは「容易に販売可能なもの」としており、実際に別稿

で示したように<sup>18)</sup>、1870年代の多くのスロイド学校では、生徒の作品を販売することが行われていたからである。それに対してこのテーゼの7)は作品は生徒自身のものにならねばならないとしているので、作品を販売する方式を排除していると理解される。これはスロイド教育の実施方法の大きな転換を示唆していると考えられる。

4), 8), 11), 12)などの諸項目は、生徒の体力の発達段階への配慮、発達を促すことへの配慮をもとめている。これらは、スロイド教育は職人による教授ではなく、教育に専門的知見をもった国民学校教師が担当すべきだとするスロイド教育のいわば根幹にすえられているサロモンの主張に通底するものである。

〈4) 生徒が自分自身で独立して遂行することができるものでなければならない〉〈13) 形態感覚の訓練に貢献するものでなければならない 14) できるだけ多くの道具と操作を使うことを要求するものでなければならない〉などの項目は、製作させる題材に関する配慮で、モデルシリーズの構成に際して貫かれている原則である。

## 《II 教師》には次の2項目が述べられている。

〈1) 授業は教育学的な訓練をうけた人物によって、また他の知識教科を担当する教師によって担当されることがのぞましい。

2) 教師は指導し、監督し、統制するが、生徒の作品に直接に介入することは注意深くさげなければならない。〉

この1)項には、スロイド教育を担当する教師の制度上の位置付けに関する事項が述べられている。他方、2)項は、スロイドの授業に際して担当教師が配慮すべき事項であり、1)項とは異なる角度からの論点である。

1)項は、単に教師の資質あるいは指導上の問題ではなく、国民教育(制度)におけるスロイド教育の位置付けにかかわる問題である。スロイド教育を近代学校のなかに制度化するに際して、その担当する教師の養成システムを制度化することは大きな課題であった\*。

\*スウェーデンにおけるスロイド教員養成の始まりはネースのスロイド教員養成セミナー(1年制)であり、1874年からであった。最初の年は4名の卒業生がいたが、主に当時蘇生しつつあったスロイド学校の教師になった。その後、サロモンは1878年1月から国民学校教師を対象とした、スロイド教員養成のための短期の講習会(最初は

5週間、後に6週間)を開始した。

サロモンは、1882年に出版した『スロイド学校と国民学校 第4巻』において、「教育的な観点から正しく組織されたスロイド教育」を実現するためには「教育学的な訓練をうけたスロイド教師への要求」が「絶対的な条件として現れる」と述べていた<sup>19)</sup>。これに続けてサロモンは「国民学校への手の労働の一般的な導入の最大の障害は、資金や場所や時間にあるのではなく、適切な教師を見つける困難さにある。そのような教師はどこにいるか?その返事は国民学校教師である」と述べていた<sup>20)</sup>。それゆえ、その養成機関である国民学校教員養成所(folkskoleseminarie)の教育課程にスロイドを導入することが制度上の課題でもあった。しかし、そのための法案は1877年に国会で審議されたものの、廃案とされた。同様の動議は3年後の1880年にも提出されたが、否決された<sup>21)</sup>。

これらの法案が否決されたことは、国民学校のスロイド教育の担当者をめぐって意見が分かれていたことを示している。1880年代前半まではストックホルム市やイエーテボリ市などの大都市部においては職人がスロイド教育を担当していた。それらの都市でも、ネースのスロイド教員養成講習会で学んだ国民学校教師が次第にスロイドを担当するようになっていった\*。

\*このことについては、以下のような事情が知られている。

イエーテボリ市において国民学校におけるスロイド教育は1972年から実施され、当初は作品を販売することを目的として、その意味では職業教育の性格をもつ教科として位置づけられ、職人がスロイドを教えていた。その後1887年にこの方針が転換され、国民教育の一環として位置づけるサロモンの理念が受け入れられたことが、各年度の国民学校に関する報告書から読みとれる<sup>22)</sup>。

ストックホルム市では、1870年からスロイド教育への取り組みが始まった。当初は職人が教えていたが、1882年4月にアンダーシュ・ベリエ(Anders Berg)がスロイド担当官になったころから方針が変わり始めた。彼は、1882年4月にネースを訪問し、その後サロモンと手紙で交流を続けた。1882年度の市への報告書でアンダーシュは「多くのスロイド学校では、販売するためのもものがつくられており、できるようなそのような製品に限定している 需要によってつくられるものが決められている。ときには簡単なもの、ときには難しいものをつくっている。可能な限り、生徒ができるところをやり、残りを教師がつくっていた。

そのような状態のもとでは、スロイドは本質的にその教育的影響力を失う。経済的に計画を立てることが教育的なものを不可能にする。」と述べている。さらに彼は「ネースのスロイド施設で適用され、発展させられたものを一番論理的に正しいもの」と考え、オッター・サロモンをストックホルムに招待し、1882年秋にストックホルムの国民学校の教師会議を招集した。それに参加した国民学校教師のなかでは、意見は分かれていた。すなわち、「スロイドの教育的重要性については誰も否定する人物はいなかったが、国民学校教師のスロイド教師としての適切性と国民学校の他の教科に対するスロイド教科の対等性については鋭く意見が分かれた。」「スロイドはこれまで国民学校にあった教科よりも馴染みがない教科であるので、必修教科にすべきではない、むしろスロイド学校が特別な教師をもっているはずである」という国民学校教師ステファンソン (A. M. Stefanson) の提案が多数派を獲得した。少数派にとどまったのは、フリチューブ・ベリエ (Fridtjuv Berg) による提案で、「国民学校の目標は生涯のための基礎教育を与えることであり、すべての人間の生活は肉体労働と精神労働の両方を要求するものであるから、スロイドが職業的ではなく、教育的に扱われるという前提のもとに、スロイドは国民学校の教科の中に含まれるべきだ」とするものであった。しかし、その後アンダーシュは、「スロイド担当教師であった3名に奨学金を支給し、ネースのスロイド教員養成講習会に派遣した。そこから2名が資格をもつスロイド教師として新たに採用した」。また、「ネースのモデル・シリーズが調達され、それはストックホルムの状況にあったモデルに置き換えることを通してよりよく適応するようにされていった」。このようにしてストックホルム市においても次第にネースの方法が浸透していった<sup>23)</sup>。なお、フリチューブ・ベリエはアンダーシュ・ベリエの息子で、後に文部大臣になり、学校制度改革を進めていった。

国民学校教員養成所での男子のスロイドの授業への国家補助金の導入案が国会で通過したのは、1887年のことであった。その後、カールスタッド (Karlstad)、ルンド (Lund)、ヘルノサンド (Härnösand) の3つの国民学校教員養成所 (セミナリウム) の教育年限が3年制から4年制に延長され、そのカリキュラムにスロイドを導入することが可能になった。

2) 項は、指導上、教師が配慮すべき問題である。

《生徒の作品に直接に介入する》とは、生徒の作品製作に教師の手を添えて助けることを排除することを指していると理解される。製作させる作品については後述するかなり細かな配慮をしており、また《監督し、統制するが、》とあるので、この項目を自由放任主義ということとはできない。

### 《Ⅲ 生徒の年齢》

《スロイドの授業に参加させるためには、生徒は一般的に11歳の発達段階に達していなければならない。》

この項目は1876年の『スロイド学校と国民学校 第1巻』では、「木工をスロイド教育の内容とするならば基本的には12歳以上でなければならない」とされていた。1886年のテーゼでは《11歳の発達段階に達していなければならない》とされているが、この変化ははじめてスウェーデンの国民学校のカリキュラムの内容が示されたところの1878年の「国民学校と幼児学校のための教授プラン」によって、スロイドが国民学校の upper 段階 (第3及び第4学年) に位置づけられたこと、さらに1882年に改正された国民学校令によって学齢が7歳から14歳に定められ、幼児学校へは7歳から8歳、国民学校へは9歳から12歳の年齢の子どもが多く通うようになったことと関連していると考えられる。

### 《Ⅳ 教科》

《数種類のスロイドを教えるのはよくない。その理由は、学校ではすでに多くの教科を教えているので、数種類のスロイドを教えることは新しい教科がその数だけ増えることになる。授業時間は短く制限されているので、そのようにすれば、生徒の興味が拡散する危険がある。教師にあまりに多くのこと (数種類のスロイドを教えること——引用者) を要求すべきではない。スロイド教授では1つの種類のスロイドを取り上げるべきである。上述の段階にもっともふさわしい作業の種類は、木工スロイド (snickerislöjd)、旋盤作業 (svarfning)、木彫 (träsnideri) を含めた木のスロイド (träslöjd) である。木工スロイドは、以下の点において職業としての大工 (snickriyrket) と区別される。

- 1) 製作されるものの性質——木工スロイドでは一般的にはより小さいサイズのものが製作されるのに対して、職業としての大工では一般的により大きいサイズのものが製作される。
- 2) スロイドする人 (slöjdare) にとって重要な道具であるナイフは、職人である大工にはあまり重要な道具にはならない。



3) 作業のやり方;職業としての大工に存在する分業はスロイドではおこなわない。旋盤作業は、教科としては木のスロイドから区別される。)

ここでは、サロモンはスロイドの授業では1種類のスロイド、すなわち木工スロイドをとりあげることを主張している。国民学校のカリキュラムにスロイドが入ってきた段階では他の教科の授業時間との関係でスロイドに当てることができる時間は限られているということが主な理由である。また、学校で木工をとりあげる際の留意点として、職人ならばあまり重要でないであろうナイフがスロイドでは「最も重要な道具」であるとされた点や、労働過程の近代化ででてくる分業は、スロイドでは否定される点が、サロモンの教育方法の特徴である。

《V. 生徒の数》では、次のことが述べられている。

《一般的に個別指導が推薦される。スロイドの授業では学級教授は原理的にも実践的にもよくない。制限された数の生徒だけが、一人の教師によって同時に指導できる。》

《V. 生徒の数》という項目を特掲していることは注目される。スロイドの授業では、一人の教師が同時に指導する生徒数は少人数でなければならない、とサロモンは強調している。これは、かりに他の条件が整ったとしても最終的にスロイド教育の成否を左右するほどの条件になると筆者には考えられる。当時のスウェーデンでは、いくつかの資料でみるかぎりこのサロモンの主張がかなりの程度尊重されていたように思われる\*。

\* Hjalmar Berg 'Inforandet och ordnandet av slöjdundervisning for gossar vid Stockholms folkskolor' (1932), s. 49や Anna Sorensen "Svenska folkskolans historia III" (1942), s. 429などに掲載されているスロイドの授業の写真などには十数名の生徒が授業でスロイドに取り組んでいる様子が示されている。

サロモンは、次章に述べる「完成段階におけるテーゼ」では、いっそう踏み込んで、許容される人数を具体的に示している。ちなみに、日本の小学校への手工教育の導入に際しては、この種の条件が軽視されていたことをつけ加えておく。

## 《VI. モデル》

《スロイドの授業は、図面によってではなく、眼でみてわかりやすいようにモデルによって教えられる。モデルの下に紙をおいて直接にうつすか、定規とコン

パスによって作図する。それに対して、型紙(schabloner)は使用してはならない。》

ここでは、以前のテーゼでは学校が備えるべき「設備」の項の中で述べていた《IV. モデル》を独立した項目として説明している。ここに述べられた主張は、サロモンのスロイド教育システムが「モデルシリーズ」として定式化されるにいたったことを示唆するきわめて重要な内容を含んでいる。

ここでサロモンは、スロイド教育システムは図面ではなく、作品モデルで構成されるべきことを説いている。たとえば、1882年の『スロイド学校と国民学校第4巻』において「モデルの利用は、純粋に教育学的な観点からスロイド教育が十分に有用であるためには絶対的条件」と述べている<sup>24)</sup>。

また、モデルから図面を作ることは容認される。「たとえ、紙のうえになされていなくても、つくる対象になされた作図をとおして、スロイドと製図は多くの点で共通点がある。スロイドはある点では製図を前提として要求する。」<sup>25)</sup>

しかし、型紙による方式は排除されている。彼の後々まで一貫する主張の根幹部分の一つである。

これに続いてサロモンは、《モデルシリーズを組み立てる際に、注意すべき諸事項》を a) モデルの選択と b) モデルの編成に分けて詳細に説明している。

### 《a) モデルの選択については、

- 1) ぜいたく品は排除する
- 2) 販売目的ではなく、家庭での使用を見出せるもの
- 3) 作品は他者の援助なしに子どもによって完全に製作できるもの
- 4) 製作するのに必要なだけの木を加工する
- 5) モデルには色を塗ってはならない
- 6) できるだけ少ない木材が消費されること
- 7) 子どもが堅い木の種類の加工とやわらかい木の種類の加工の両方になれること
- 8) 旋盤作業と木彫は例外的に行なわれる
- 9) 作品は子どもの形態感覚と美的感覚の発達を促すものでなければならない。これに到達するためには、モデルシリーズはいくつかの形をつくる作業(スプーン、ひしゃくなどのわんきょくした面をもつ作品、フリーハンドや目でみて評価してつくられるようなもの)を含んでいなければならない。
- 10) モデルシリーズの作品を仕上げた後で、生徒はスロイドの種類の中にあるより重要な道具をすべて利用すべきである。それらの使用に関する多様

な知識と多様な接合法の練習を生徒は獲得していなければならない。)

1), 2) は、販売目的ではなく、またぜいたく品ではなく、家庭で用いるものを生徒に製作させるという、作品(モデル)の種類に関する事項である。しかし、3) 以下では、選択すべきモデルに関する留意事項ではなく、生徒におこなわせる作業に関する留意事項である。2種類の留意事項の混在は、サロモンのテーゼが熟していないことを示唆しているのかもしれない。なお、《5) モデルには色を塗ってはならない》は、生徒の作品についても色を塗ることを排除していることを示している。そのことによって、生徒の道具の使用具合が隠れてしまうことを避けることを意図している。

#### 《b) モデルの編成に関しては

- 1) シリーズがよりやさしいものからより難しいものへ、より単純なものからより複雑なものへ飛躍なしに進行していかなければならない
- 2) 必要な変化がある
- 3) それぞれのモデルの位置は、教師の直接の援助なしに完全にまねることができるような条件を特別に考慮して決定する
- 4) 生徒がいかなるレベル(技能のレベルや経験の有無)であっても遂行できる作業であり、さらに正確な作業をつねに遂行できるようにモデルは組織されなければならない。
- 5) 最初のモデルの製作のときには少ない数の道具が使用されるが、シリーズが進むにつれて新しい道具と操作が徐々に導入される。
- 6) 基礎的な道具としてのナイフは最初の段階では頻繁に使用される。
- 7) 一般的に最初の段階のモデルでは、やわらかい種類の木は使用されない。
- 8) シリーズの最初の段階のモデルはすぐに完成できるものを、その後徐々に長い時間をその製作に要するモデルに移っていく。)

ここでは、《よりやさしいものからより難しいものへ》、《より単純なものからより複雑なものへ》など、モデルシリーズの編成原理が簡潔に示されている。

サロモンのスロイド教育システムの最も重要な特徴の一つは、作品例としての「モデル」を重視することである。これについてサロモンは後年、「最初のモデルシリーズは『直観的』につくられた」と述べていた。

これは、ネース・少年スロイド学校での経験をもとにつくられたと考えられる。サロモン自身は、1877年のオスダールでの展覧会において「最初に方法的に組

織されたモデルシリーズ」が展示されたと述べているが<sup>26)</sup>、これについては資料が見つからない。1878年に開催されたパリ万国博覧会において出品されたのは、その報告書によると<sup>27)</sup>、ネース・少年スロイド学校の生徒による作品とスロイド教員養成所(1年制)の生徒による作品であった。

またサロモンは、1893年に書いた論文において約15年前、すなわち1878年頃のスロイド学校の活動を回顧し、その当時は「多くのスロイド学校では見本(förebilder)はなかった」と述べている<sup>28)</sup>。

「教師が描写したものを生徒に与えたり、生徒と一緒に作業することによって教えた。しかし、そのような計画性のない教授から見本またはモデル(förebilder-modeller)が利用されるようになっていった。スロイド学校で製作されるものが注文や展示のためのものである限りにおいては、モデルのコレクションでしかなかったが、モデルシリーズに発展するためには、まず教授の目標を決めることが最も重要になった。ヘムスロイドの振興を目的とするスロイドのモデルシリーズと純粋に教育的な目的のためにスロイド教育のモデルシリーズとは、まったく異なっていた」<sup>29)</sup>と述べている。ここに、「モデル集成」から「モデルシリーズ」への飛躍が語られている。

サロモンにとっての「モデル」は、第一義的には、生徒にスロイドを教えるために活用されるものである。それとともに、セミナーに学びに来る本国や他国の教師や研究者たちにスロイド教育システムの核心を伝える手段とされていることが注目される。

### 3. オッター・サロモンによるスロイド教育システムのテーゼの完成

#### —「モデルシリーズII」段階(1888~)の文書から—

サロモンは、1891年7月に「スウェーデンのスロイド教育システムの基本テーゼについての体系的な提示」を『スロイド教育時報』に公表した<sup>30)</sup>。サロモン自身が「基本テーゼ」と称していることが注目される。これ以降この種の文書は書かれていないので、筆者はこれにより、サロモンによるスロイド教育システムのテーゼが完成したということができると考える。

サロモンはこのテーゼを、《A. 基本的概念 B. スロイド教育の目的 C. スロイド教育の組織》の3つに分けて定式化している。従来のテーゼとの大きな違いは、《A. 基本的概念》を簡潔な文章で独立させていることである。そこでは、スロイド教育の基本的概念は、《スロイドは、手工職人的な方法ではない方

法である作業を行なうことである。教育学は、教育(uppförstran)と教育技術に関する学説である。教育の目的は、人間が生活をよくしていくことである。》とされている。

《B. スロイド教育の目的》は、以下のように整理されている。

《基礎的な教育施設は生活のために間接的に準備をしなければならないので、スロイド教育の目的は、主として形式的陶冶——精神と肉体の諸力の発達——を達成することを試みることである。

スロイド教育が目指す形式的陶冶は、

一般的に労働への嗜好と愛を育てること

肉体労働への敬意を育てること

自己活動を発達させること

秩序、几帳面さ、清潔さ、整理整頓に慣れさせること

注意深さを発達させること

勤勉さや忍耐強さに慣れさせること

体力の発達に作用すること

眼を訓練し、形態感覚を発達させること

ある程度の一般的技能を育てること

これに、道具の正しい使用法に関する技能やよい作業を遂行する技能を育てるといふ実質的な目的が加わる。)

最後の2行は「実質的な目的」であり、前述の形成段階のテーゼでは、「一般的な技能を育てる」ことが「実質的な目的」とされていた。この「実質的な目的(materiellt syfte)」とは、「形式的陶冶(formell bildning)」が間接的であるのに対して、直接的なものをさしていると考えられる。形成段階のテーゼでは、スロイド教育の形式的陶冶の目的として7項目を掲げていたが、ここでは「注意深さ」と「勤勉さや忍耐強さ」を別項目として計8項目に拡充されていることが注目される。

## 《C. スロイド教育の組織》

### 《I. 一般的な基礎》

《作業は、その重点を完成した生産物におくべきではなく、作業それ自体、その生徒の発達にとっての意味におかれるべきである。すなわち、教師の側からも生徒の側からもその選択にまかせるべきである。生徒にとってなにか有用なものとして理解されること、必要な変化をまねくものであること、思考においても作業の遂行においても生徒の独立性が認められること、贅沢品の製作ではないこと、作業者の能力と体力にふさわしいものであること、作業者によって正確に遂行

される性質のものであること、教師によって注意深く管理され、統制されるものであること、作業は清潔であり、整理されたものであること、思考活動が十分に要求され、機械的に遂行されるようなものではないこと、健康に有害でないこと、動くことをつくり出すか許容するようなものであること、身体的な発達にとって良いか又は有害でない姿勢で遂行されること、形態感覚と美的感覚の訓練に貢献できるようなもの、多くの道具と操作の使用を要求するもの、方法的に組織されえること、などが留意されなければならない)

ここに掲げられた諸項目は、サロモンが掲げるスロイド教育の基本的な目標、教授の留意事項が注意深く列挙されている。ただし、ここには「形態感覚と美的感覚の訓練に貢献できるようなもの」など前項《B. スロイド教育の目的》に掲げられた項目と微妙に重複する内容もふくまれている。販売目的がのぞかれていることには、繰り返し注目しておきたい。

### 《II. 教師》

《スロイドの授業は、教育学的な教育を受けた人間によって、また他の理論的教科を教えている人間によってなされることが望ましい。)

ここでは、前回のテーゼにみられた教師の指導法に関する事項は削除され、スロイドの授業を担当する教師に求められる資質に関する事項に限定されている。スロイド教育において教師の役割が重要であることは終始一貫したサロモンの主張であった。

### 《III. スロイドの種類》

《スロイドの授業は、それぞれの段階において、1種類のものに限定するべきである。即ち、教育学的な観点からみて最も適切なスロイドの種類は、木工スロイドである。)

スロイド教育システムでは木工が最適だとするサロモンの主張が繰り返されている。

### 《IV. 生徒》

《スロイド教育の目的が十分に達成されるようにするためには、生徒は一般的に11歳の年齢に達していなければならない。教育的スロイドにおいて最大の配慮が生徒の個性と作業の几帳面な監督におかれるのであれば、一人の教師によって同時に扱われる生徒の数は8名から20名に限定されるべきである。)

ここでは、発達の程度からみてスロイド教育を施すのは一般に11歳からとする従来からの主張と、一人の教師によって同時に扱われる生徒の数を8名から20名に限定するという教育条件が述べられている。後者についてサロモンは従来から少人数数であるべきことを主張しており、ここでは具体的に限定していることが注

目される。

#### 《V. 方法》

《徐々に進んでいく方法は、スロイドの種類に含まれる練習にもとづいて組み立てられる。練習は「前練習」として抽象的に遂行されるのではなく、実際の作業に含まれるものでなければならない。一目でわかるようにするためには、授業は主としてモデル(modeller)か図面(teckningar)にしたがってなされる。スロイドは図面と組み合わせることができる。図面はフリーハンドかまたは設計によってなされる。それに対して型紙(schabloner)は使用されてはならない。決められた寸法を遵守することがきわめて重視される。授業の対象は、大工(snickeri)ではなく、木工作業(snickerislojd)であるので、基礎的で、もっとも普通にある道具としてのナイフが含まれるべきである。最初の作業は小さなもので、短時間で完成されるものであるべきで、次第により長い時間と体力を要求されるものに移行していく。作業の遂行についての授業は、個別指導によるべきであり、学級指導としてなされるべきではない。》

ここでは、いくつかの事項が目される。《徐々に進んでいく方法は、スロイドの種類に含まれる練習にもとづいて組み立てられる》というテーゼはここではじめて登場する。サロモンが「練習」(övning)という概念を発見したのは、1887年頃であったと考えられる。『スロイド教育時報』にはじめてこの概念が使用されたのは、1887年5月であった<sup>30)</sup>。この「練習」という概念でモデルを製作するときに含まれる作業を分析し、それをもとにモデルの配列を設定してシリーズを作り上げたものが「モデルシリーズII」である。これが、練習にもとづいて組み立てられた最初のモデルシリーズであった。このテーゼにはこの事実が反映されている。

またサロモンのスロイド教育においては当初からモデルを重視していたことは周知のところであるが、ここではモデルと図面とを併用することが勧められている。大きな変化の一つといえよう。

個々の授業で指導する生徒の人数を制限すべきことは、早い時期からのサロモンの関心事であり、これは以前のテーゼでは《生徒の数》の項に述べられていた。今回のテーゼでは、《V. 方法》の項に入っている。

サロモンは、周知のように、スロイド教育においてナイフを活用することを重視していた。このことは、次の《VI. 道具》の項ではなく、《V. 方法》に入っていることが注目される。

#### 《VI. 道具》

《子ども用の特別の道具ではなく、実際の生活に存在する道具が作業に際して使用されるべきである。生徒には自分が使用する道具を自分で準備し、研ぐようにすることになれさせる。》

ここで、《子ども用の特別の道具ではなく、実際の生活に存在する道具を》使用させるという主張は、1つの重要な見識である。当時、デンマークのコペンハーゲンでは、子どものための特別な道具を開発して、それをスロイドの授業で使用することがアクセル・ミケルセン(Aksel Mikkelsen)という人物によって提唱され、実践されていた。サロモンは1891年ごろにはミケルセンとスロイド教育をめぐるいくつかの問題(個別指導かそれとも一斉教授か、前練習(förövningar)の是非、道具はナイフから始めるか、のこぎりから始めるか、製作したものをやすりやサンドペーパーで磨くことの是非など)について論争を展開することになるが、このテーゼにはその一つが反映されていると考えられる。

《生徒には自分が使用する道具を自分で準備し、研ぐようにすることになれさせる。》という点は、大人と同じように道具を使うことを教えようとする姿勢がうかがえる。

#### 《VII. 材料》

《多様なかたさと性質の木材が加工されるべきである。木材も他の材料も教師の世話のもとに用意される。生徒は作業の遂行にもっともふさわしい材料を取得する。》

以前のテーゼでは、「材料」という項目はなく、「モデル」の項目の中に入れられていたが、このテーゼでは独立した項目となった。また、前回のテーゼでは、「子どもが堅い木の種類の加工とやわらかい木の種類の加工の両方になれること」とされていたが、ここではより簡潔な表現となっている。

#### 《VIII. 完成した製作物》

《製作物は子どもによって、または彼らの家において利用されるものでなければならない。いわゆるぜいたく品であってはならない。製作者のものになる。》

この実用品を製作し、家庭で使用するという点は、サロモンの一貫した主張であった。

#### 4. まとめにかえて

##### — サロモンにおけるスロイド教育システムの骨格とその展開 —

##### (1) 一貫していたサロモンにおけるスロイド教育システムの骨格

以上の分析から判明する重要な結論の一つは、サロモンにおいては、彼がこの事業に着手したかなり早い時期——少なくとも「モデル集成」が構想された時期には、早くもスロイド教育システムの思想の「萌芽」というべき骨格が形成されていたとみなされることである。ネース・スロイド少年学校を開始してから4年経過した段階で、そのときサロモン自身は27歳であったが、このような骨格を作りえた事実は驚くべきことであるように思われる。

第二に、そのわずか数年後に「モデルシリーズⅠ」の形成と相まって、スロイド教育システムの理論的な枠組みは飛躍的に強化されたことが注目された。筆者はこれを「サロモンにおけるスロイド教育システムの形成の段階」と特徴づけた。それは、「萌芽」の段階の理論を精緻化し、部分的には発展・変更したものであったが、全体としての基本的な枠組みは変更されることなく、一貫していたことが注目される。

第三に、「モデルシリーズⅡ」「モデルシリーズⅢ」への変更・発展とともに、サロモンにおけるスロイド教育システムの理論は、「形成」の段階から「完成」の段階に到達したとみなされた。それは、後述するように「形成の段階」への部分的な変化を含むものであるが、基本的な枠組みを変更するものではなかった、といえる。

このことは、スロイド教育の目的や内容などに顕著に認めることができる。すなわち、スロイド教育の目的の中で、形式的陶冶として掲げられた諸項目は本稿でみたようにほぼ最初から同じ内容であった。スロイド教育の内容について、「萌芽」の段階では「木工と木工旋盤」、「形成」の段階では「木工スロイド、旋盤作業、木彫を含めた木のスロイド」、「完成」の段階では旋盤作業と木彫は除外して、「木工スロイド」だけに限定していた。多少の変化はあるものの、木工を重視することでは一貫していたといえよう。

以上が、本稿の最も重要な結論の一つである。

##### (2) サロモンにおけるスロイド教育システムの展開過程の論点

こうした特徴を生み出し、可能ならしめた背景についての感想を以下に略述する。

##### サロモンにおけるスロイド教育システムの展開過程

を段階区分する際の主要なメルクマールは、本稿の冒頭にのべた彼のモデルの「集成」段階から「モデルシリーズⅠ」「モデルシリーズⅡ」「モデルシリーズⅢ」への発展であった。そこにみられる主要な変化は、モデルシリーズの数量原理、構成などであった。

これを、彼がそれぞれの「シリーズ」の展開にそくして述べたスロイド教育システムの理論に注目してみると、上記(1)に略述したように基本的枠組みは変わっていないが、以下に述べる若干の点で変化、発展を認めることができる。

最初に指摘すべきことは、1887年以降になるとモデルを製作するときに含まれる共通作業を分析し、それを「練習」と名づけ、それをもとにモデルの配列を設定してモデルシリーズを作り上げるという方法を作り上げたことである。そのことが「完成」の段階のテーゼに反映されている。

また、「萌芽」の段階では、製作した作品を販売するという方式であったものが、「形成」の段階以降は「作品が生徒のものになる」ことへ大きく転換した。

さらに、製図の位置づけに変化がみられることである。サロモンは、スロイド学校創設当時から製図の教育を重視していた\*。

\* サロモンは1876年に当時の国民学校とスロイド学校のための用器画教科書(Kort handledning i linearritning för folk-och slöjdskolor)を執筆して、製図の教育に取り組んでいた。

1878年から開始されたスロイド教員養成のための講習会(最初は5週間、その後6週間)においても当初は製図の教育は重視されていた。ところが、モデルの製作に時間が不足しているという講習会参加者の声から次第に製図は講習会では教えられなくなった\*。

\* サロモンは、1897年6月30日に行なわれた25周年記念講話において「私たちの最初のモデルシリーズがあまりにも長すぎて、生徒が完遂することが難しかったこと」「モデルのみを一方的に使用して見本としての図面の意味を見落としたこと」をネースでのスロイド教育の不十分点として述べている<sup>32)</sup>。

本稿でみたように、「形成」の段階ではサロモンはスロイド教育システムが図面ではなく、作品モデルで構成されるべきことを説いていた。ところが、「完成」の段階ではモデルのみで教える方法からモデルと図面とを組み合わせる方法への変化がみられる。

表3 オットー・サロモンの外遊に関する年表

1877年	5月～6月にはフィンランドのヘルシンキ、エケネース、ヴィボルグ、ユベスキュレ（師範学校）を訪問、ロシアのサンクト・ペテルブルク（観光旅行として）。
1881年	4月パリ（フランス）を訪問。サリシーと会う。
1883年	3月～4月にはコペンハーゲン、ベルリン、ライプチヒ、アムステルダム、ハーグ、ブリュッセル、パリ、オスナブリュックを訪問。ライプチヒでは、カール・ビーダーマンと、パリではサリシーと会う。
1884年春	コペンハーゲン、アムステルダム、ハーグ、ブリュッセル（フレーベル式子ども園）、パリを訪問。コペンハーゲン、キール、ゲッチンゲン、アムステルダムにおいて講演。オスナブリュックでは手工教育に関する会議に参加。
1885年	4月～5月はウィーンに滞在。プラハとブタペストの学校を訪問。その後、ベルリンで滞在。同年8月オスロで開催された教師会議に参加して講演。
1886年春	デンマーク、ドイツ、スイスにて講演。イタリアを訪問。その後、ドレスデンとマクデブルグで開催された手工教育に関する会議に参加。秋には、コペンハーゲンを訪問、そこで講演。
1887年	コペンハーゲンのアクセル・ミケルセンを訪問。マクデブルグにて開催されたドイツ少年手工教育協会の会議に参加。
1888年	5月にロンドンに滞在。コペンハーゲンでの展覧会の審査員として参加。
1889年春	イングランドの学校を訪問。その後、パリ万国博覧会に参加。9月にはハンブルグで開催された手工教育会議に参加。
1890年	コペンハーゲンの学校を訪問。オスロで講演。
1891年	デンマークのアスコフ国民高等学校を訪問。その後コペンハーゲンを訪問。
1892年	5月にコペンハーゲンを訪問。
1893年	4月にオランダの学校を訪問。7月にノルウェーにてハイキング
1894年	ロンドン、パリ、ベルリンの大学図書館にて遊びの歴史を研究。オックスフォードでの教師会議に出席。そこで講演。
1895年	9月にコペンハーゲンを訪問（自転車で）。
1896年	デンマークのアスコフ国民高等学校とバレキルデを訪問（自転車で）。 同年12月から翌年にかけて、ノルウェーのホルメンコーレンにあるサナトリウムにて静養
1897年	オランダとベルギーをとおってパリを訪問（自転車で）。フランスの手工教育の実践家と交流。
1898年	秋にノルウェーのホルメンコーレンにあるサナトリウムにて静養。
1899年	4月～5月はナポリ、ローマ、ヴェネチアを訪問。9月にはバード・ノイハイムで滞在。スイスのモントローで後療法のために滞在。スイスでベスタロッチの足跡を訪ねる旅行。帰国の途中に、ミュンヘン、ニュルンベルグ、ドレスデン、ベルリンにて滞在。
1900年	4月～5月ドイツのバード・ノイハイムで静養のために滞在。
1901年春	南イタリアを通して、5月はバード・ノイハイムとピースバーデンに滞在。同年秋には、ドイツとスイスを旅行。スイスのインテルラーケンとモントローに滞在
1902年	5月～6月はベルリンにある体操教員養成所を訪問。その後コペンハーゲンへ。
1903年	3月～5月にかけての6週間をイタリアで過ごす。遊びの歴史の研究と学校訪問。
1904年	3月～4月はイギリス各地を旅行。ポートマスで開催された教員会議で講演。イギリス各地の学校の授業を見学。同年5月にはオランダのハーレム、ブローメンダール、アムステルダムにて講演。同年年末はノルウェーのホルメンコーレンにて滞在。
1905年 ～6年	05年10月からベルリン、リエージュ（ベルギー）、パリに滞在。06年4月にバード・ノイハイムで1ヶ月滞在。
1907年春	バード・ノイハイムに滞在。

(Hans Thorbjörnsson, *Nääs och Salomon - slöjden och leken*, 1990, s. 54の表をもとに作成)



### (3) サロモンにおけるスロイド教育システム思想形成の背景

以上に略述したサロモンにおけるスロイド教育システム思想形成の背景について、筆者は以下のような感想をもつ。

サロモンのスロイド教育思想の根底には、労働することの大切さを教えること——労働と教育とをむすびつけようとする思想が最初から一貫して横たわっていた。スロイド学校は国民学校と統合してこそ、民衆から支持されるものになりうる。また、国民学校は労働をきちんと教えることなしには、民衆からの支持は得られない、という教育思想をサロモンは当時の国民学校やスロイド学校をめぐる現実から学びとったように思われる。そして、学校のなかに労働を位置づけようとするれば、それにはスロイドが最適であるとサロモンは考えたのであろう。その背景には、当時のスウェーデンの90パーセントの国民学校が農村部に設立されていた事実についてのリアルな認識があったと考えられる。しかし、本稿で述べたように、サロモンのスロイド教育の目的である、形成すべき人間像は、きわめて近代的な労働者であった。

このようなサロモンにおけるスロイド教育システム思想の背景には、近代の教育思想の影響を読みとることができる。サロモンが近代の教育思想を学び始めたのは、1877年5月にフィンランドのシグネウスを訪問した後、彼に近代の教育思想を学ぶことを勧められて以降のことであるとされてきた。これはサロモンが、ペスタロッチ、フレーベル、ルソー、ザルツマンなどの本を書店に発注したことを示す1878年頃のメモが残されている<sup>30)</sup>ことから推測される。しかし、シグネウスに会う1877年以前の1876年に執筆された『スロイド学校と国民学校 第1巻』などの記述からは、サロモンはすでに近代の教育思想についての一定の見識をもっていただことを読みとることができる。こうした経過についてのより具体的な解明は、今後の課題としておきたい。

さらにいえば、サロモンのスロイド教育システム思想形成の背景には、近代学校の制度的特質に関する洞察があったのではないと思われる。スウェーデンにおいて、国民学校が制度化されたのは1842年であったが、実態として定着していくのは、1870年代から1880年代にかけてのことであったと考えられる。サロモンがスロイドを国民学校に導入していくためにスロイド教育システムを形成していった時期は、近代学校の成立過程のなかであった。この近代学校の成立過程とスロイド教育との関係については、稿を改めてさらに詳

しく論じたい。

最後に、本稿では詳細にふれる機会はなかったが、サロモンの外遊経験に触れておく必要がある。彼は、前述のように1877年にフィンランドを訪問した。これは彼の最初の外遊であった。その後彼は1881年4月にはパリにサリシーを訪問し、交流を深めた。その後のサロモンの生涯にわたる事績を調べてみると、彼は1882年をのぞき、最晩年にいたるまでほぼ毎年、遠くはイギリス、イタリアを含むヨーロッパ各地を訪問していたことがわかる(表3)。19世紀に入ると各国に鉄道が発達して外遊も比較的容易になってきたとはいえ、サロモンの外遊の豊富さはきわだっていたといえる。その外遊はたんなる観光や静養のためではなく、各国に在住するかつてのサロモンのスロイド教育講習会への参加者を訪ね、それぞれの地域の教育事情の視察と意見交流に費やされることが多かったと思われる。

本稿の課題との関連でいえば、スロイド教育システムに関するサロモンの構想は、上述したように彼の度重なる外遊以前にすでに萌芽がみられたことがまず注目される。その後数多くの外国の教育に関する知見をもつようになってからも、彼の構想はその骨格の基本的枠組みは変更されず、細部の変更を含みながらいわば次第に精緻になったに過ぎなかったことがわかる。こうして彼の洞察は、外国の事情に関する豊富な知見が加わっても揺るがなかったという点は特筆すべきであろう。反面で、スロイド教育システムが早い時期から、かつ長期にわたって諸外国の教育関係者から注目されたのは、サロモンのこうした確固とした構想に裏付けられていたからであるといえるように思われる。

### 〔注〕

- 1) 拙稿「オットー・サロモンによるスロイドのモデルシリーズの形成と発展」『日本産業教育学会紀要』第37巻第1号、2007年1月(印刷中)
- 2) この『ネース・スロイド教育時報』(Slöjdundervisningsblad från Nääs)はサロモンが編集した月刊誌で、1885年5月から1902年まで月1回、通算200号が発行された。
- 3) 'Schematisk framställning af grunderna för det vid Nääs använda slöjdundervisnings-systemet' ('ネースで使われているスロイド教育システムのための基礎の体系的な提示') "Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.5, September 1885
- 4) "Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.12,

- December, 1886, p.1において「教育的スロイド (pedagogiska slöjdundervisning)」という言葉がはじめて使用された。
- 5) Hans Joachim Reincke, *Slöjd - Die schwedische Arbeitserziehung in der international Reformpädagogik*-, PETERLANG, 1994, p.139
  - 6) 拙稿「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第52巻第2号, 2006年3月, 1頁-27頁
  - 7) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, s.12-s.13 (1876)
  - 8) *ibid*, s.26-27
  - 9) *ibid*, s.14-s.15
  - 10) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876. s.52
  - 11) *ibid*, s.52
  - 12) 'Schematisk framställning af grunderna för det vid Nääs använda slöjdundervisnings-systemet' "Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.5, September 1885
  - 13) 1877年改革の概要は, 拙稿「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第52巻第2号, 2006年3月, 16頁を参照のこと。
  - 14) *Normalplan för undervisningen i folkskolor och småskolor*, 1878
  - 15) Hans Thorbjörnsson, *Nääs och Salomon—slöjden och leken*, 1990, s. 27
  - 16) Ulla Johansson, *Att skolas för hemmet—Trädgårdsskötsel, slöjd, huslig ekonomi och nykterhetsundervisning i den svenska folkskolan 1842-1919 med exempel från Sköns församling*, Umea Universitet Pedagogiska institutionen, 1986, s.94
  - 17) B. Rud. Hall, *Sverige allmänna folkskolestadgar 1842-1921 (Årsböcker i Svensk Undervisningshistoria, vol. 13, Föreningen för svensk undervisningshistoria)*, 1924, s.20
  - 18) 6) と同じ
  - 19) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV*, 1882, s.28
  - 20) *ibid*, s.28
  - 21) Ulla Johansson, *Att skolas för hemmet—Trädgårdsskötsel, slöjd, huslig ekonomi och nykterhetsundervisning i den svenska folkskolan 1842-1919 med exempel från Sköns församling*, Umea Universitet Pedagogiska institutionen, 1986, s. 60
  - 22) "Göteborgs allmänna folkskolestyrelses berättelse om skolornas gång och verksamhet under ÅR 1887" 1888
  - 23) Hjalmar Berg 'Införandet och ordnandet av slöjdundervisning för gossar vid Stockholms folkskolor' 1932,
  - 24) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV*, 1882, s. 61
  - 25) Otto Salomon, 'Slöjdens förhållande till ritning' I *PEDAGOGISKA FRÅGOR*, s.137
  - 26) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, s.27
  - 27) TH. BRAUN "L'ENSEIGNEMENT PRIMAIRE L'EXPOSITION INTERNATIONALE DE PARIS" pp.287-289, 1880
  - 28) Otto Salomon, 'Några synpunkter vid ordnandet af en modellserie I' "Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.2 (94), 1893, s.1
  - 29) *ibid*, s.1
  - 30) 'Schematisk framställning af det svenska pedagogiska slöjdundervisningssystemets grundsater' "Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.7, Juli, 1891
  - 31) 「スロイド教育における方法的問題についてII」(Om metodisk framställning vid slöjd undervisningen II) ("Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.25, 1887)
  - 32) 'Högtidstal' "Slöjdundervisningsblad från Nääs" No.147, Juli, 1897
  - 33) 筆者のハンス・トリュビョーンソンに対する聞き取りによる。

# オットー・サロモンによるスロイドの モデルシリーズの形成と発展

横山 悦生 (名古屋大学)

**概要：**本稿では、オットー・サロモンの手工教育の教材集成とモデルシリーズの生成及び発展の過程を、その形成された時期と内容構成などの特徴により段階区分することができることを解明した。サロモンのモデルシリーズは、最初は当時のスロイド学校の教材を集成して作成した「モデル集成Ⅰ」からそれらに順次性を与えた「モデル集成Ⅱ」に、その後モデルの数を50に限定し、その中での順次性が考慮されて「モデルシリーズⅠ」が作成された。1880年代後半から製作過程を調査分析し、「練習」を基礎として「モデルシリーズⅡ」を作り上げ、さらに現場の要求から簡略化された「モデルシリーズⅢ」へと発展していった。

キーワード：オットー・サロモン／スロイド／モデルシリーズ／練習

## 1. はじめに

### (1) 本論文の目的

オットー・サロモンはスウェーデンの国民教育における手工教育、とくにその理念と教授法を創出し、その発展に大きく寄与した。サロモンは様々な機会をとらえて彼のスロイド教育観、その教材観を発表してきた。とくにスロイド教育の本質的特徴についてはこれをたんなる抽象的議論にとどめず、生徒たちに製作させるべき具体物たる教材を集成する形式で発表することをとおして、すなわちその教育内容と方法を実際にそくして繰り返し展開してきたことはよく知られている。しかしこれまでの研究では、彼の多数の種類教材集「モデルシリーズ」相互の関連やその発展過程は整理されて来なかったきらいがある。これらの経過に鑑みて、本論文は、直接には、サロモンが発表したスロイド教材の様々なシリーズを、それが発表された文献にそくして調査・整理し、その発展過程の全体像を素描することを目的とする。そこでは、何種類にもなる彼のスロイド教材集は、最初から定型化されたものではなく、①時期を追って補足・訂正、あるいは抜本的改定を重ねていたこと、②それらは、最初は教材をいわば集めたに過ぎず、筆者が「モデル集成」と特徴づける段階であったこと、③それら教材集がやがて一定の原則にそくして「モデルシリーズ」と名づける段階に発展したこと、④それらをさらにいくつかの修正段階に細分して理解することで、彼のスロイド教材観の全体像の発展過程をより深く理解することが可能であることが解明される。

### (2) 先行研究の状況

これまで、サロモンのスロイド教育の最も重要な特徴をなしている「モデルシリーズ」については、ハドソン、ベネット、戦前日本では上原六四郎、岡山秀吉、山形寛、戦後では松崎巖、石原英雄、遠藤敏明、吉兼利恵らにより何種類かあることが断片的に紹介されてきた。すなわち、ジョージ・ハドソンが『教育的スロイド——その理論と実践——』<sup>(1)</sup>において、サロモンの教育的スロイドの理論を紹介し、モデルシ

リーズ(1888年の古典語学校用シリーズ)の教授法を分析し、それを一覧表(マトリックス)にして整理した<sup>(2)</sup>。

ベネットは1894年頃のネースでのスロイド教育講習会の様子を「これは『簡略化した基礎シリーズ』として知られている。それは68の練習と40の有用なモデルのかたちで生徒に提示されている」と述べ、40のモデルの図面と「新しい練習」の内容を紹介した<sup>(3)</sup>。ベネットはボストンでネース方式のスロイド教育を発展させたグスタフ・ラーションへの聞き取りを通して得た情報にもとづいて記述していると推測される。しかし、その40のモデルの出典は1902年に発行された『ネースの教育的木工スロイドのためのモデルシリーズ』からのものであり、本稿で明らかにするように正確さを欠いている。

上原は「瑞典のネースの師範学校で採用しておる方法」について、「雛形類を一切用いず、総て実物に就て教ふるので、其の実物とは日常の用に役立つ品物を撰んで生徒に教ふる仕方に為つて居るから生徒は第一に其の品物の用方を知て来るから悟りが早く、悦んで仕事をなし、従ひて進歩が著るしい、然れども又爰に一の困難がある、それは先づ製作せしむべき器物の員数と種類とを定めて内に悉く教授すべき科目を網羅せしめ又難易に応じて其の順序を定めねばならぬ、是が一つの不都合で教員がそれを定むるに頗る困難を感ずることあります。」と述べている<sup>(4)</sup>。上原は主としてスリュイの報告書を手がかりにネースの方法の積極面と限界をこの引用のように理解していたが、モデルシリーズについての言及はなかった。

岡山は『欧米諸国手工教授の実況』(大正4年)を著し、そのなかの「第11章 瑞典国手工科実施の状況」の「第3 手工教材の選択に対するサロモン氏の意見」という節において、“The teachers handbook of sloyd”と“The theory of educational sloyd”の2つのサロモンの著書(英語版)をもとにして「一 教材選択の基準」「二 各種手工の優劣——木工選定の理由」「三 木工の課程」について論じている<sup>(5)</sup>。「三 木工の課程」では、50種類の「製作題目」と「用材」

を一覧表の形で紹介している。サロモンの“The theory of educational sloyd”は1893年に出版されたが、これはネースの夏期講習会への1890年頃の参加者がサロモンの講義を筆記したものを英語版として出版したものであった。それゆえ、40種類のモデルではなく、50種類のモデルが紹介されている。原著である“The theory of educational sloyd”には88の練習課題が掲載されているが、それについて岡山は取り上げてはいない。

松崎は、「40のモデル製作と68の練習を含むモデル・シリーズ」を紹介しているが<sup>6)</sup>、これはベネットの研究成果に基本的に依拠して書かれたと考えられる。石原も同様にベネットに依拠しているが、「1894年に、ネースで教えられ始めた学習のコースは特有のものであった。これは、『縮小された基本的な系列』として知られる。一連の教材モデルの系列 (series of models) による学習であった。それは68種の練習から成る40の形の有用なモデルが、学生に与えられた。…このモデルは、その後追加されて50になり、ネースの50のモデルともいわれた」と述べている<sup>7)</sup>。最後の点は、後述する事実経過に反している。

吉兼は、その論文<sup>8)</sup>において、「そこ (モデル・シリーズ) に含まれるモデルの数が、100、50、40のもの」の3種類を紹介している。100のモデルは1883年にスリュエイがネースの夏期講習会において学んだモデルシリーズを彼の報告書から紹介し、それを「100モデルシリーズ (1883年シリーズ)」とし、この特徴を「各モデルの製作の際に使用する道具がその使用順序にしたがって整理されている」ことから「使用する道具を基準として、モデルシリーズの配列を試みた」のではないかと指摘している。また、3種類のモデルシリーズの内容を紹介しているが、それぞれの特徴については解明できていない。

遠藤は「1877年にオスダール (Osdal) でエルヴスボルユ県のスロイド展覧会が催されたが、そこで、ネースから初めてモデル・シリーズが紹介された。それは、より確立されたネース・システムへ向かう第一歩であったということが出来るだろう。」としている<sup>9)</sup>。この遠藤の指摘は、サロモンの著作における記述<sup>10)</sup>をもとづいていると推測されるが、モデルシリーズの起点を1877年におくことには無理がある。というのは、エルヴスボルユ県のヘムスロイド協会が1877年に実施した展覧会に関して、この協会の年報には以下の記述が書かれているからである。

「スロイド作品の展示はかなり豊富で、県の8つのスロイド学校 (ネースもそれに含まれている——訳者注) はかなり美しいスロイド作品を通じて代表的な存在であり、その作品の大部分は展示期間中に販売された。」<sup>11)</sup>

当時のスロイド学校の製作物は販売を目的としてつくられており、本稿で明らかにするように教育的スロイドの理念の具体化としてのモデルシリーズはまだ形成されていなかったと考えられる。

海外の先行研究においてモデルシリーズの形成過程について言及したものは少ないが、ハンス・トルビヨンソンは1878

年に「最初のモデルシリーズがヨンショーピンにおいて示された」としている<sup>12)</sup>。

ところでサロモンのモデルシリーズは、後に本稿でやや詳しく述べるように、筆者が「モデル集成I」と名付ける最初の段階から始まり、サロモン自身によりほとんど毎年のように修正、発展、補足され、教材として体系化されたモデルシリーズに集約したシリーズが公表されたという経過があった。そのモデルシリーズもほとんど毎年のように修正、改善が重ねられた。こうした経過をたどったためか、サロモン自身は段階区分をしていない。

こうして、スウェーデンにおけるスロイド教育の発展の経過は、世界的に広く知られてきたとはいえ、それはスリュエイやベネットなど外国人研究者を通じた間接的情報から得られたもので、間接的な紹介の域を出ないものが多かった。換言すれば、その生成・発展・改善の経過など経過の全容ないし詳細が知られていなかった。

このような研究状況が生まれる背景には、スウェーデン国内は別として、外国人によるスウェーデン語の原典による体系的な研究がきわめて少なかったという事情が指摘されよう。例えばサロモンのスロイド教育を最も詳細に伝えるサロモン自身が編集執筆した『ネース・スロイド教育時報』(以下、『スロイド教育時報』とする)を利用した研究が皆無に等しい状況であり<sup>13)</sup>、その結果、サロモンのモデルシリーズの構成に際して「練習」概念の登場したことがスロイド教育の発達段階を画するほどの大きな意義をもつことを深く解明した研究はきわめて少なかった。

### (3) 本論文の課題と限定

本論文は、スロイド教育の発展に貢献したサロモンの数多くの事績の中から、スロイド教材の集成やその体系化 (シリーズ化) に焦点を絞り、その発展過程を解明することを目的とする。より具体的には、サロモン自身が書き残した文章や彼の教育事績にそくして、彼のスロイド教材に関する理解がたんなる「スロイド教材集成」というべき段階から「モデルシリーズ」として体系化される段階へと発展したことを解明することを主たる目的とする。さらに、「スロイド教材集成」「モデルシリーズ」の形成とその発展の経過を解明し、教材の配列体系の方法論、「練習」という方法概念や教授法の分析などを指標としてみると、そこには一定の段階区分がみられることを解明し、細分化されるそれぞれの段階のシリーズの特質を解明する。

ところでサロモンのスロイド教育研究は、彼がスロイド学校に関与し始めた23歳から1907年に没するまでのほとんど全生涯にわたっていた。その中で彼はその教材体系を絶えず改良することに努め、その修正版を自分が編集発行した『スロイド教育時報』などに次々に発表してきた。他方、サロモンは1881年から1907年まで、ほとんど毎年のようにイギリス、ドイツ、イタリア、スイスなどのヨーロッパ諸国への旅行を繰り返し、海外の研究者、教育実践家と交流して手工教育に関する知見を広めるとともに、自らの主張を海外に広める努力をしていたことが知られている<sup>14)</sup>。したがって、こうした

事績にそって多数の教材体系とその修正過程の細部まで立ち入って考察するためには、多大の紙幅を費やさざるを得ないことになる。そこで本稿では、教材体系の発展過程の側面に限ったサロモンの事績の概略とその出典を年表形式で叙述することとする。換言すれば修正・発展過程にかんする立ち入った考察は別の機会に譲らざるをえない。

なお、本論文で対象とする時期を、オットー・サロモンの生きていた時代に限定し、サロモン没後の1907年以降のモデルシリーズの展開については言及しない。

## 2. モデル集成の成立

### (1) モデル集成 I の成立 (1876年)

サロモンはその著書『スロイド学校と国民学校 第1巻』(1876年12月発行)において当時存在していたスロイド学校での製作品をもとに140種類の作品例(モデル)を示した<sup>65)</sup>。この著作では、スロイド学校と国民学校は統合されていくべきものとして構想されている。同書において、サロモンは「スロイド学校での製造の価値は木材(材料)にあるのではなく、作業(arbete)そのものにあるべきである」<sup>66)</sup>と述べ、さらに学校が備えるべき設備について論じ、その設備は「道具、モデル(作品例)、原材料」から構成される」とし、モデル(作品例)については「それにしたがって学校において作業されるべきもの」とし、「多様に異なる種類と性質からなるものでなければならない」と述べている。ここでのサロモンのモデルの基準は、「容易に販売可能なもの」「材料の消費が少ないもの」であり、「初心者がまねるのに適切なもの」においている。また、「国民学校は、よく利用される修理作業場として機能し、生徒の親や学校に関心をもっている人たちが修理や再生をほどこしたい単純な家具や家財をもってくる場所である」ことを想定している<sup>67)</sup>。サロモンが掲げたモデルの一覧は作品名のアルファベット順で並べられており、順序性はみられないという点で、後の「モデルシリーズ」とはことなり、単なる教材集成であった<sup>68)</sup>。これを「モデル集成 I」と名付ける。

### (2) モデル集成 II の成立 (1880年)

1880年にストックホルムで開催されたヘムスロイド展覧会において、ネース・スロイド教員養成所から216種類の作品例が出品され、それはゴールドメダルを受賞した<sup>69)</sup>。サロモンは、『スロイド学校と国民学校 第3巻』のなかで、これらの216種類の作品例(モデル)は「そのほとんどが貧しい家庭に有用で、必要なもので構成されている」と説明している。これらの作品例がすべて農村で実用に供されていたものであったことは注目に値する。サロモン自身は、これら216種類の作品例を「方法的な順序で編成されたモデル集成(metodisk följd ordnade modellsamling)」と表現している<sup>70)</sup>。その意味するところはアルファベット順ではなく、おおむね製作に必要な技能の難易度順に整理されたものと考えられる。同年にサロモンは「国民学校のスロイド教授のための、方法的な順序で編成されたモデル」<sup>71)</sup>と名付けたパンフレットを発行した。ここに掲載されている216種類の作品例は先

のストックホルムでの展覧会に出品されたものと同じであり、それらがそれぞれの価格とともに記載されている。これらは216種類という数の多さから考えると、それを全部製作させるのではなく、そこから選択して製作させることを前提としており、後述する「モデルシリーズ」とはことなり、モデル集成とみなすことができる。これを「モデル集成 II」と名付ける。

## 3. モデルシリーズの成立と展開

### (1) モデルシリーズ I の成立 (1882年) とその修正版

サロモンの『スロイド学校と国民学校 第4巻』では、100種類のモデル(作品例)が提示されている<sup>72)</sup>。同書には、以下のことが書かれている。

1881年7月11日から8月12日のほぼ5週間の講習会において、18名の参加者を2つのグループに分け、最初のグループでは50種類の「方法的な順序で編成されたモデル」のシリーズとして整理されたものが製作された。それらの50のモデルは、「初心者が木工スロイドで使われる道具やそれに伴う接合法の利用に関する知識を獲得することができるように選択された」<sup>73)</sup>。また、そこにはあれこれの旋盤作業(svarfning)や木彫作業(träsnideri)も適当な位置に入れられている。もう一つのシリーズは、過去に一度講習会に参加した人たちのグループのために、最初の50種類のシリーズの継続としてモデルが選択されたものであった。この記述から、100種類のモデルは1881年夏にはすでに50種類ずつのモデルに分かれており、それぞれが「方法的な順序で編成されたモデル」のシリーズであったことがわかる。この1882年の著書で発表された100種類のモデル群を筆者は「モデルシリーズ I」と名付ける。

ここには、それ以前にみられた多様なモデル群の単なる集成ではなく、初心者に一定の期間内にスロイド作品の製作経験を与え、その技能を一定の水準に到達させる目的のために、作業の難易度、工具を使用する順次性などが考慮されている。そのため、このモデル群は、これらを順次製作していけば、スロイド教育の一定の目的を達成することが期待されるというまとまりをもったシリーズとなっている。

ところで、この「モデルシリーズ I」は以下に略述するように、実地経験などの過程を経て繰り返し改良が重ねられたことが知られている。それらは「モデルシリーズ I」に盛り込まれたモデル群の部分的な改善とみられるので、筆者はそれらを「モデルシリーズ I」の修正版と呼ぶのが適切であろうと考えている。

たとえば、この「モデルシリーズ I」を構成する100種類のモデルを、1883年の夏期講習会にベルギーから派遣されたスリュイの報告書<sup>74)</sup>に掲載された100種類のモデルと比較すると、いくつかの修正がなされている。その翌年の1884年には、ネースのスロイド実習担当教師であるアルフレッド・ヨハンソン(Alfred Johansson)が『木工スロイドの授業における手引き書』(Metodiska hjälpreda vid undervisningen i träslöjd)を発行した。この手引き書には、100のモデルのそ



それぞれの実際の作り方が解説されている。ここに掲げられた100種類のモデルと先のスロイドの報告書のモデルを比較すると、ここでもいくつかの修正がなされている。さらに、1885年6月には『スロイド教育時報』に「現在ネースのスロイド教員養成のための講習会において使用されているモデル間の編成順序 (Ordningsföljden)」と題して100種類のモデルが難易度順に並べられたものが公表された<sup>29)</sup>。これらと1884年のアルフレッドの手引き書のモデルを比べると順序が一部変更されている。これらの100種類のモデルは、1882年のモデルシリーズⅠを、講習会参加者との討論によって順次修正していったものであり、その修正版といえよう<sup>30)</sup>。この段階では、「練習」という考え方はまだ登場していない。サロモンが「教育的スロイド」(den pedagogiska slöjden)という言葉を使用し始めたのは、1886年頃からであった<sup>31)</sup>。1886年1月にネースの講習会の初回参加者用として100種類の中から選んだ50種類のモデルが「基礎シリーズ (grundserien)」として『スロイド教育時報』に公表された。この際にサロモンは「この基礎シリーズはネースの6週間の講習会の期間で全部を製作することが困難であることがわかってきた」ので、「いくつかの省略と短縮を行なった」と解説している<sup>32)</sup>。さらに、その翌年の1887年2月の『スロイド教育時報』にも一部のモデルの順番を入れ替え、一部は他のモデルに変更した「基礎シリーズ」(50種類のモデルで構成される)を公表した<sup>33)</sup>。以上のようにほぼ毎年わたって、修正を重ねていったことがわかる。

#### (2) モデルシリーズⅡの成立 (1888年) とその修正版

1887年5月に発行された『スロイド教育時報』第25号に掲載された「スロイド教育における方法的問題についてⅡ」(Om metodisk framställning vid slöjd undervisningen Ⅱ)において「練習」(övning)という概念がはじめて登場した。その中でサロモンは、モデルを製作するときに含まれる作業を分析し、そこに含まれる「練習」をもとにモデルの配列を設定して新たなモデルシリーズを作る構想を示した。

その最初のもの(88種類の「練習」にもとづく50種類のモデル)が1888年6月の『スロイド教育時報』で公表された<sup>34)</sup>。その際、スロイドが多様な学校に普及し始めた事態に対処するために学校の属する地域的な特徴をふまえて、4つの種類のモデルシリーズ、すなわち基礎シリーズ(農村部の国民学校のためのシリーズ)、都市部の国民学校用のシリーズ、古典語学校用シリーズ、女学校用シリーズ)が作成された<sup>35)</sup>。この基礎シリーズ、都市部の国民学校用シリーズ、古典語学校用シリーズは、内容構成が少しずつ異なるそれぞれ50種類のモデルで構成された。女学校用のシリーズは30種類で構成された。4種類の内容構成には共通するものが多く、ごく一部のみが違っていたに過ぎなかった。ここではじめて練習とモデルとを結合するという重要な発想を基礎としたモデルシリーズが生まれた。これら1888年に発表された4種類のシリーズを「モデルシリーズⅡ」と筆者は名付ける。

その後、1894年頃に50種類の基礎シリーズをこなすことが時間的に難しい学校のために40種類のモデルによる「簡略化

した基礎シリーズ」が作成されたことを、1896年9月に発行された『スロイド教育時報』が報じている<sup>36)</sup>。また、同年に出版されたアルフレッド・ヨハンソン著『ネース・モデルシリーズ、モデルをつくるための方法的指針』(Alfred Johansson "Näas Modellserier metodiska anvisningar för modellernas utförande")には、88種類の練習にもとづく50種類のモデル(基礎シリーズ、都市部の国民学校用シリーズ、古典語学校用シリーズ)と85種類の練習にもとづく40種類のモデル(「簡略化した基礎シリーズ」)の各モデルの実際の作り方が説明されている。「簡略化した基礎シリーズ」の「練習」の数と内容がこの本ではじめて確認される。これらはいずれも「モデルシリーズⅡ」の修正版と考えられる。

#### (3) モデルシリーズⅢ 1902年

1902年に新しい生徒用テキスト『教育的木工スロイドのためのネース・モデルシリーズ』("Näas Modellserie för pedagogisk snickerislöjd")が発行された。筆者は、これを「モデルシリーズⅢ」と名付ける。この編集には、サロモンの指導下にあった、ユリウス・ブロンベリエ (Julius Blomberg) とラーセン (G.A.Larsen) という二人の国民学校教師があたり、サロモンが監修した。サロモンによる解説によれば<sup>37)</sup>、シリーズはネースのスロイド教育講習会での討論と1902年のはじめにネースで開催されたスロイド教育に関する会議においてなされた討論にもとづいて改訂された。この改訂では従来の学校種別によるシリーズを廃止して単一化し、全体として「かなり簡略化 (förenkling) し、短縮 (förkortning)」されている。すなわちモデルシリーズⅡのシリーズの前半部分を簡略化し、「よく似た練習を合併すること」によって「練習シリーズの数」を大幅に(88種類から68種類に)減らし、モデルの数も50種類から40種類に減らすなど、シリーズ全体は大幅に短縮された。これをモデルシリーズⅡと比べると、モデルシリーズⅢにそのまま残ったモデルは6種類だけで、23種類のモデルは何らかの変更を含み、11種類のモデルはまったく新しいものであった。このような改訂の背景には、次のような事情があった。「経験によれば、これまでのネースのモデルシリーズは、学校でスロイド教育に割り当てられた時間との関連でみたときにはあまりに(モデルの数が——引用者)多すぎると判断された」。さらに「各学校の教師に教材選択をまかせることは、概して正しくないことが判明した」。「多くの教師は、ネースで利用されているモデルシリーズを省略したり短縮することが期待されたにもかかわらず、それをそのまま実行していた」。このような事情で簡略化され短縮されたのであった。

また、工業化の動向も反映し、「時代の要求にもとづいて、ねじやフックや家具の金具をかなり多く使用」している。また、この生徒用テキストには、縮小したサイズでそれぞれのモデルを描いた図面と作業説明書が加えられ、生徒が自分だけで作業をすすめることを容易にしている。また販売価格が安く設定され、生徒が容易に購入できるように配慮されている。このテキストによって生徒たちは自分で考えるように促され、教師が作り方を説明するような「一斉教授への誘惑は



減るであろう」とサロモンは述べている。

この生徒用テキストは、改訂されることなく1904年、1906年に増刷されたが、修正版がつくられることはなかった。したがって、このモデルシリーズⅢはサロモンのスロイド教育のモデルを集大成したものであったといえる。

#### 4. おわりに

以上に明らかにしたように、サロモンのモデルシリーズは、最初は当時のスロイド学校の教材を集成して作成した「モデル集成Ⅰ」の段階から、それらに順次性を与えた段階である「モデル集成Ⅱ」に発展した。この段階では販売することを前提としている点や数の多さという点で、後の教育的スロイドとはことなる、教材集成であった。

その後、モデルの数が50種類に限定されるようになり、その中で順次性が考慮されて「モデルシリーズⅠ」が作成された。この段階では、モデルシリーズは経験的に作られたと考えられる。1880年代後半からサロモンは各モデルの製作過程を比較調査し、そのなかの共通要素を「練習」として整理し、その「練習」を基礎に「モデルシリーズⅡ」を作り上げていった。この段階でモデルと「練習」とが結合されるようになった。

その後、現場からの要求（50種類では多すぎて全部をこなせないという問題）から、40種類のモデルに削減する「簡略化された基礎シリーズ」が作成された。さらにその後、社会の工業化の動向も反映させた「モデルシリーズⅢ」が編成された。このときには、モデルだけではなく、生徒が図面を読み取ることから製作に取り組むことができるようにテキストが編集された。ここには、モデルのみで教える方法からモデルと図面とを組み合わせる方法への転換があったとみなすことができる。

従来の研究の定説をつくったベネットの「教育的スロイド」についての見解は、サロモンがシグネウスを訪問した1877年から「教育的スロイド」が始まったとするものであった。本論文で明らかにしたサロモンの事績から判断すると、「教育的スロイド」の成立は、モデルシリーズとして具体化されたもので判断すると、1882年の「モデルシリーズⅠ」によって成立したといえよう。

なお、従来のサロモンの「教育的スロイド」研究における論点の一つは、サロモンがロシア法を知っていたのか、ロシア法から影響を受けたのか、などの問題である。作業を分析して理解しようとする方法論に一定の共通性が見られるなどの点から、ベネット、プログハウス<sup>94</sup>、日本人では遠藤など何人かの研究者がこの問題の解明に挑んできた。ジョージ・ハドソンがサロモンの教育的スロイドの理論を紹介し、モデルシリーズⅡの教授法を分析し、それを一覧表として整理し、サロモンがそれを高く評価していたことから判断すると、サロモンはロシア法を知っていたとは思えない。したがってロシア法の影響をサロモンが受けたとは考えられないであろう。

(注)

- (1) George Hodson “*Educational Sloyd in theory and practice*” 1901
- (2) この一覧表の要点は、表の縦の欄に、上から順に「No.1 ナイフによる直線削り」「No.2 ナイフによるクロス削り」のように、単純で簡易な作業（「練習」）から始めて下に行くにしたがって「のこぎりの横引き」など別の工具の活用を含む作業（「練習」）を「No.88種々ののこ引き」まで並べたものである。たとえば、「ほぞ組み」はNo.87に位置付けられている。他方、横の欄には、左側から右へ向かって「No.1 指示棒」から始まるモデル（の名称）を、より複雑な作業（「練習」）を含む「No.50 小さなテーブル」まで並べられている。このマトリックスの縦と横がクロスする欄に印を付けると、右方向へ行くにしたがってそのモデルの製作には多種類の作業（「練習」）が含まれること、また最初に登場する作業（「練習」）は左側の上隅から順次右側下隅に向かってきれいな斜線を示すことが一目瞭然となる。
- 出版前にハドソンの原稿に目を通したサロモンは、この表を高く評価した。そのことを述べたサロモンの手紙（1900年5月8日付）がハドソンの本の序文には掲載されている。その一部の訳を以下に引用しておく。  
「私は特別の興味をもって古典語学校シリーズのためのモデルシリーズに関する表を検討しました。それは、我々が取り扱っている問題をとっても独創的で印象深い方法で具体化したものです。そして、それは私には以前気づかなかったスロイド・メソッドの図表によるすばらしい表示です。私はこの図表を将来において講習会に参加する教師たちへの講義のなかで使うつもりです。」
- (3) C.A.Bennett, *History of manual and industrial education 1870-1917*, pp.72-82
- (4) 『上原六四郎講述 東京府学術講義 手工科講義録 上巻』、1888年12月
- (5) 岡山秀吉『欧米諸国手工教授の実況』1915年
- (6) 松崎巖「教育的スロイドの成立と発展について」『青山女子短期大学紀要』第18号、1964年
- (7) 石原英雄「一九世紀に於ける北欧の手工教育」『弘前大学教育学部紀要』第25号、1971年
- (8) 吉兼利恵「教育的スロイドの教授法に関する一考察」『技術教育学研究』第5号、1989年
- (9) 遠藤敏明「スロイド教育研究—19世紀末からの歴史的展開と現代的意義—」筑波大学博士学位論文（未公刊）1993年、134頁
- (10) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, s.27
- (11) “*Elfsborgs läns sädra kongl.hushållnings sällskaps Årsberättelse 1877*”, s.46
- (12) Hans Thorbjörnsson, *Nääs och Salomon --slöjden och leken*, 1990, s.15
- (13) この『スロイド教育時報』（Slöjdundervisningsblad från

- Näas) は1885年5月から1902年まで月1回発行された。
- (14) Hans Thorbjörnsson, *Näas och Salomon --slöjden och leken*, 1990, s.54、横山悦生「オットー・サロモンの教育システムのテーゼ」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第53巻第1号、2006年9月、58頁
- (15) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876. ss. 53-54
- (16) *ibid.* s.52
- (17) *ibid.* s.52
- (18) サロモン自身も同書で「このリストは不完全なものである」(*ibid.* s.52) と述べている。
- (19) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan III*, 1882, s.54
- (20) *ibid.* s.54
- (21) *Förteckning över i metodisk följd ordnade modeller afsedda för folkskolans slöjdundervisning från Näas Slöjdlärareseminarium*
- (22) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV*, 1882
- (23) *ibid.* s.34
- (24) M. A. Sluys, *L'enseignement des Travaux Manuels dans les Ecoles Primaires de Garçons en Suede*, Bruxelles, 1884
- (25) “Slöjdundervisningsblad från Näas” No.2. Juni, 1885, s.3  
これらの中の50のモデルには通し番号 (No.1~No.100) とともに括弧内に別の通し番号 (1から50) がつけてあり、それらは50の初心者用の基礎シリーズである。
- (26) 参加者との討論の記録の一部は「スロイド教育時報」紙上において「ネース・スロイド教員養成所 (Näas Slöjdlärareseminarium)」というタイトルの記事において知ることができる。
- (27) “Slöjdundervisningsblad från Naas” No.12, December, 1886, p.1において「教育的スロイド (pedagogiska slöjdundervisning)」という言葉がはじめて使用された。
- (28) “Slöjdundervisningsblad från Näas” No.1, Januari 1886, s.1
- (29) “Slöjdundervisningsblad från Näas” No.22, Feburari, 1887, ss.3-4
- (30) 最初に練習が『スロイド教育時報』に公表されたときには88種類ではなく、87種類 (“Slöjdundervisningsblad från Näas” No.6, Juni 1888, s.2) であった。
- (31) “Slöjdundervisningsblad från Näas” No.10, 1888 スロイド教育新聞にはほぼ毎号モデルシリーズのモデルの作り方と図面が掲載されている。この1888年No.10からはそれぞれのモデルに含まれる「練習」についても明記されるようになった。
- (32) “Slöjdundervisningsblad från Näas” No.9, 1896, s.3
- (33) “Slöjdundervisningsblad från Näas” No.8, 1902, ss.1-2
- (34) Ploghaus, Günter: Victor Della Vos, sein’ Russisches System’ und sein internationaler Einfluss auf die Werkstatt-Pädagogik, in: Zeitschrift für Berufs- und Wirtschaftspädagogik (Zt.), Heft 1/1991  
(2006年9月29日 受理)  
(2006年12月4日 再受理)

オットー・サロモンによるスロイドのモデルシリーズの形成と発展過程の概略（年表）

- 1849年 オットー・サロモン生まれる。
- 1868年 デラ・ボスによりロシア法が創案・開発され、モスクワ帝国技術学校（バウマン工科大学）を従前の中等レベルから高等教育機関（モスクワ帝国高等技術学校）へ昇格させることを規定した『1868年布告』において、初めて明示された\*。  
\* 田中喜美『技術教育の形成と展開』多賀出版、1993年、47頁及び Ploghaus, Günter: *Die Lehrgangsmethode in der berufspraktischen Ausbildung - Genese, internationale Verbreitung und Weiterentwicklung* (2003)
- 1872年 アブラハムソンが自分の領地内にネース・少年スロイド学校設立し、その指導をサロモンに委ねる。
- 1874年 サロモンがエルフスボルグ県のスロイド教育の視学となる。たくさんの学校のスロイド教育を視察する機会が増えた。
- 1875年 ネースにおいて「国民学校教師のための用器画講習会」（Kurser i linearritning för folkskollärare）が組織された（1878年まで）\*  
\* Hans Thorbjörnsson, *Näas och Salomon --slöjden och leken*, 1990, s.15
- 1875年秋 スロイド教員養成所（1年制）が創設される（1882年まで\*）。このカリキュラムには週10時間の用器画の授業が含まれていた\*\*。  
\* Hans Thorbjörnsson, *Näas och Salomon --slöjden och leken*, 1990, s.15  
\*\* Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876. s.72
- 1876年 2月 サロモンによる学校紹介「ネース・スロイド学校について」（“Om Nääs slöjdsolor”）。この冊子はフィラデルフィアの万国博覧会の展示のために書かれたと考えられる。この冊子には、当時の図画の教育をめぐる対立する2つの見解（用器画かフリーハンドによる図画か）が紹介され、サロモン自身は前者を支持していたことが書かれている。  
6月 サロモンにより用器画教科書（*Kort handledning i linearritning för folk- och slöjdsolor*）が発行される  
12月 サロモンの著書『スロイド学校と国民学校 I』においてスロイド学校での製作品として140種類の作品例（モデル）が示された\*。 →これらを「モデル集成 I」と名付ける。  
\* Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876. s.53-s.54
- 1877年 5月～6月 サロモンがフィンランドのシグネウスを訪問。シグネウスから、ペスタロッチやフレーベルなどの教育学の著作を読むことを勧められる\*。  
\* 横山悦生「『教育的スロイド』の成立をめぐる」『技術と教育』第362号、2004年2月。
- 1877年 9月 スロイド教育改革とスロイド学校の進展\*。  
\* 1870年代のスロイド学校の動向は、横山悦生「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第52巻第2号、2006年3月、1頁-27頁参照。
- 1877年 アブラハムソンによって職人学校（Handverksskolan）がネースに設立された。少年スロイド学校の卒業生で大工職人になることを希望している生徒が入学した。この学校はやがて徐々に木工作業場に移行していった。1885年まで販売されたモデルシリーズはそこで製造されたと考えられる\*。  
\* Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, s.38-s.39
- 1878年 1月 ネースにおいて国民学校教師を対象としたスロイド教育に関する講習会（5週間のちに6週間に延長）が始まった。最初の数年間は、講習会において用器画も教えられていたが、参加者からの要望で取り除かれた。
- 1878年 パリ万国博覧会においてネースのスロイド学校紹介の展示がなされた（少年スロイド学校、少女スロイド学校、職人学校、スロイド教員養成所について）。この博覧会で九鬼隆一がネース・スロイド学校の創設者であるアブラハムソンと出会い、同年に清水誠がネース・スロイド学校を訪問し、その学校の製作物を日本に送付した\*。  
\* 横山悦生「手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流——手工科に与えたスロイドの影響の再評価——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第50巻第2号、2004年3月、30頁-31頁。
- 1880年 スtockホルムでのヘムスロイド展覧会にネース・スロイド教員養成所から216種類の作品例が出品される\*。  
\* Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan III*, 1882
- 同年 サロモンが「国民学校のスロイド教授のための、方法的な順序で編成されたモデル」\*と名付けたパンフレットを発行した。ここには216種類の作品例が記載されている。これを「モデル集成 II」と名付ける。  
\* Förteckning över i metodisk följd ordnade modeller afsedda för folkskolans slöjdundervisning från Nääs Slöjdläroareseminarium
- 1882年 サロモンの『スロイド学校と国民学校 第4巻』において、100種類のモデル（作品例）が提示される\*。これらを「モデルシリーズ I」と名付ける。  
\* Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan IV*, 1882

- 1884年 1883年夏期講習会にベルギーから派遣されたスリュイによる報告書 (M. A. Sluys, *L'enseignement des Travaux Manuels dans les Ecoles Primaires de Garçons en Suede*, Bruxelles, 1884) が発行された。
- 1884年 ネースのスロイド実習担当教師であるアルフレッド・ヨハンソンが『木のスロイドの授業における手引き書』\*を発行した。この手引き書には、100のモデルの実際の作り方が解説されている。サロモンが序文を1883年11月に執筆している。
- \* Alfred Johansson “*Metodiska hjelpreda vid undervisningen i träslöjd*”
- 1885年6月 100種類のモデルシリーズを『スロイド教育時報』に公表した\*。「モデルシリーズI」の修正版とみなせる。
- \* “*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.2, Juni, 1885, p.1
- 1885年 ネースのモデルシリーズが東京教育博物館 (手島精一館長) に送付された\*。
- \* 横山悦生「手工科成立過程期における日本とスウェーデンとの教育交流——手工科に与えたスロイドの影響の再評価——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第50巻第2号, 2004年3月)。
- 1885年9月 「ネースで使われているスロイド教育システムのための基礎的体系的提示」(Schematisk främställning af grunderna för det vid Nääs använda slöjdundervisningssystemet) を発表した\*。
- \* “*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.5, September 1885
- 1886年 50種類のモデルシリーズを発表した\*。
- \* “*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.1, Januari 1886)
- 1888年 地域的な特徴をふまえた、4つの種類のモデルシリーズ (基礎シリーズ、都市部の国民学校のためのシリーズ、古典語学校用シリーズ、女学校用シリーズ) を公表 (“*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.10, 1888)。ここではじめて「練習」という言葉が登場する。これらを「モデルシリーズII」と名付ける。
- 1888年12月 このときに出版された講義録\*で、上原六四郎が1884年のスリュイの報告書をもとにスロイドに言及した。
- \* 『上原六四郎講述 東京府学術講義 手工科講義録上巻』、1888年12月、119頁, 128頁
- 1890年 アルフレッド・ヨハンソン著『ネース モデルシリーズ、モデルをつくるための方法的指針』\*が発行された。この本では、88種類の練習にもとづく50種類のモデル (基礎シリーズ、都市学校シリーズ、古典語学校シリーズ) の各モデルの実際のつくり方が説明されている。
- \* Alfred Johansson “*Nääs Modellserier metodiska anvisningar för modellernas utförande*” 1890
- 1890年 オットー・サロモン、カール・ノルデンダール、アルフレッド・ヨハンソン著『教育的木工スロイドのためのハンドブック』\*が発行された。
- \* Otto Salomon, Carl Nordendahl, Alfred Johansson “*Handbok i pedagogisk snickerislöjd*”
- 1891年 同上書の英語版\*が発行された (Mary R. Walker と William Nelsonによって翻訳された)。
- \* Otto Salomon “*The teacher's hand-book of sloyd*” 1891
- 1891年 「スウェーデンの教育的スロイドシステムの基本原理のための体系的提示」(Schematisk framställning af det svenska pedagogiska slöjdundervisningssystemets grundsater) を発表した\*。
- \* “*Slöjdundervisningsblad från Nääs*” No.71, 1891
- 1893年 シカゴ万国博覧会に「Swedish Sloyd」の展示が出された。その解説文はサロモンが執筆した。
- 同年 ネースの講習会受講者がサロモンの講義をまとめた英語版のテキスト『教育的スロイドの理論』(Otto Salomon, *The theory of educational sloyd*, 1893) を発行した。
- 1894年 サロモンがカール・シーロヴとともに『スウェーデンの教育的木工スロイドにおける体の姿勢』\*を出版した。これは16枚の図と解説からなるもので、前年のシカゴでの展示の際に作成されたもの。
- \* Otto Salomon, Carl Silow “*Kroppsställningar vid svensk pedagogisk snickerislöjd XVI taflor med text*”, 1894
- 同年 アルフレッド・ヨハンソン著『ネース・基礎シリーズ、モデルをつくるための方法的指針』\*が発行された。
- \* Alfred Johansson “*Nääs Grundserie. Metodiska anvisningar för modellernas utförande*”
- 1896年 アルフレッド・ヨハンソン著『ネース・モデルシリーズ、モデルをつくるための方法的指針』\*が発行された。この本では、88種類の練習にもとづく50種類のモデル (基礎シリーズ、都市学校シリーズ、古典語学校シリーズ) と85種類の練習にもとづく40種類のモデル (「簡略化した基礎シリーズ」) の各モデルの実際のつくり方が説明されている。「簡略化した基礎シリーズ」の内容がこの本ではじめて確認される。
- \* Alfred Johansson “*Nääs Modellserier metodiska anvisningar för modellernas utförande*”
- 1901年 ジョージ・ハドソンが著作『教育的スロイド——その理論と実践——』\*において、サロモンの教育的スロイドの理論を紹介し、モデルシリーズ (1888年の古典語学校用シリーズ) を一覧表 (マトリックス) にして整理した。
- \* George Hodson “*Educational Sloyd in theory and practice*” 1901
- 1902年 新しい生徒用テキスト『教育的木工スロイドのためのネース・モデルシリーズ』\*が発行された (68種類の練習にもとづく40種類のモデルに大幅に改定)。これを「モデルシリーズIII」と名付ける。
- \* “*Nääs Modellserie för pedagogisk snickerislöjd*”
- 1907年 オットー・サロモン没。

[資料紹介]

スウェーデンの 1842 年の民衆教育令

横山 悦生

はじめに——書誌的説明

- ① 以下に紹介するのは、1842 年 6 月 18 日に公布されたスウェーデンの「民衆教育令」Kungl.Maj:ts nådiga stadga angående folkundervisningen i riket の全文訳である。出典は、Svensk Författnings samling (スウェーデン法令集=日本の法令全集に当たる)に収められているもので、1842 No.19 という番号が付けられている。
- ② この法令には、各条文の見出しはついていない。しかし後年に同法令を収録した”Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen till ledning för skolråden” (学区評議会のための民衆教育に関する法令の手引き書) (1880)では、その目次の条に見出しが付けられている。本訳ではその見出しの訳をも掲げた。
- ③ なお、上記②も条の下位の節に見出しがない。ここでは、便宜のために、各節にもく ) 内に訳者 (横山) による見出しを掲げた。
- ④ 先行研究の一つである松崎巖は、この法令を「初等民衆教育令」と訳している。そのほか重要なテーマについての松崎訳と横山訳との異同については、[訳者注]のなかでふれた。

[解説] スウェーデンの 1842 年の民衆教育令について

(1)民衆教育令の概要

1842 年に公布されたスウェーデンの「民衆教育令」は、国内の民衆の子女すべてを対象として、必要ならば国庫補助を与えることを含みながら、国内すべての地域に学校教育の制度を創出することを規定したスウェーデン最初の法典である。近年のスウェーデンの研究では、国民教育の歴史の端緒をこの法令においている場合が多い。

スウェーデンは当時から王政である。1842 年当時は四身分制議会 (貴族、聖職者、市民、農民) が機能していたが、法律はこの四身分制議会の審議を経て国王の名で公布された。本稿と直接の関係はないが、議会はその後の 1866 年から二院制となった。

なお、古典語学校は別に早くから発達しており、その関係法令は少なくなかったから、「民衆教育令」が教育に関する最初の法令というわけではない。

(2)民衆教育令制定の背景

スウェーデン王国では、国民各層に対する教育については、伝統的に教会の影響が圧倒的に強かった。そうしたなかで、地域住民に対する家庭内諮問の根強い伝統があり、その起源は少なくとも 17 世紀にさかのぼるといわれる。家父長が子どもに対して字を読むことと教理問答を覚えることに義務をもったが、このような家庭教育のほかに、教会の日曜学校、貧民の子どものための労働学校、女子のためのスロイド学校、村落学校などがいわば自生的に各地に設置されていたことも知られる<sup>2</sup>。このような事情が背景となり、当時のスウェーデン人の 18 世紀の識字率は、西欧諸国のなかでも著しく高くなっていったといわれている。そうしたなかで 1820 年以降になると、助教制を採用する学校が増加し始めていた<sup>3</sup>。これらの学校はすべて教会の影響のもとにおかれていた。しかし、それらの学校には教えられるべき内容について養成教育を受けた教師は配置されていなかった。自生的な各種の教育施設やその教師について各方面から数多くの不備が指摘されたが、他方、民衆学校の必置、必就学に対する貴族、聖職者層の反対も根強かった。こうした議論を乗り越えて、ついに四身分制議会の審議を経た民衆教育令が制定された。

(3)民衆教育令の構成

民衆教育令は全 14 か条からなる。その内容構成を条文単位に整理すれば、以下のようである。条の次の

数字は節の数。

1.学校

学校の設置とその形態 [第1条3節]

学区と学区委員会 [第2条3節]

民衆教育に関する監督と聖堂参事会の義務 [第13条2節]

教室=校舎 [第3条1節]

2.教師

教師の給与 [第4条6節]

教師の採用 [第6条4節]

教師の解任と年金 [第11条2節]

教師養成校 [第5条6節]

3.教育内容

教科 [第7条1節]

授業時間、地区への分割、地区での試問 [第9条2節]

宗教教授に関する援助と監督 [第10条2節]

4.就学 [第8条6節]

5.私立学校 [第12条2節]

6.例外的事項に関する規定 [第14条1節]

この法令の中核に据えられているのは、学校の設置・管理、教師の養成や資質、最低限の教育内容の確保、就学確保などであることがわかる。

(4)民衆教育令の特徴の概要

1.民衆教育制度の中央集権化

民衆教育令は、王国内のすべての民衆教育のあり方を規定した単一の法典で、その最も重要な特徴は、民衆教育制度の全般にわたって全国一律に規定していることである。その意味でこの法典は、開設される個々の学校運営についてはそれぞれの教区に設置される学区委員会に委ねるとしながらも、民衆教育制度の中央集権的性格を明確にしている。

2.民衆学校設立の義務化、宗教と教育の未分化

民衆教育令はまず第1条において、国内すべての教区に学校を設置すべきことを規定している。ここに、この法典の最も重要な目的、特徴が示されている。なお、ここでの教区は教会組織の末端単位を指す。教育と宗教が未分離であったことを示している。実際には、教育関係では教区は地方自治体の機能を果たしていたわけである。1862年にコミュン法が成立した後も、学校に関する事務は教区に残された。

3.民衆学校の設置形態とその弾力的運用——固定型と巡回型

民衆教育令は、民衆学校を国内すべての教区にくまなく設置することを予定した(第1条第1節)。この民衆学校網の特徴の一つは、民衆学校の設置形態を通例想定される固定型の学校のみでなく、人口希薄な地域には教師が巡回する巡回型の学校の存在を容認し、また5年の猶予期間をおくなど、弾力的な運用を図っていたことである(第1条第2節)。その他に、伝統的な古典語学校、家庭教育や教区が認める私立学校で学ぶことも容認されていた(第8条第3節)。

4.民衆学校の設置、管理——学区委員会——教会の支配

学校の設置主体は、教区単位に住民から選出される学区委員会である(第2条第1~3節)。そこにおいては教区教師など教会役員が委員長など重要な位置を占めるように配慮されていた(第2条第1節)。

5.校舎

民衆学校の校舎——法典では「教室」と題されている——は教区の住民負担で建設されるべきだとされている(第3条)。子どもが一ヶ所に集まって教師から教えられ、ともに学ぶ場が「教室」(=学校)である。民衆学校を国内すべての教区に必置とするところに民衆教育令の重要な特徴があるとみられるにもかかわらず、校舎に関する規定は一ヶ条のみである。

なお、民衆学校校舎の標準プランは、ようやく1860年代に入って提示された。これによると、プラン



で例示された図面はその大部分が 1 校舎 1 教室で、そのほとんどが校舎の一部を教師の住居としていることが注目される。

## 6. 教育内容と教育組織

民衆学校の教育組織に関する規定は、学校に関する規則は学区委員会が定めると規定する（第 1 条第 3 節）のみで細目を規定していないためか、後述の教師に関する規定と比較すると簡略な印象を与える。民衆学校においてすべての児童に対して習得させるべき最低限の教育内容は、「a)読み方（スウェーデン語で書かれた文章を流暢に読むこと）b)宗教に関する知識と聖書の歴史（牧師のところで聖餐式の学習を始めることができるのに必要な程度）c)賛美歌（ただし、音楽の才能が欠けている場合は例外とする）d)書き方 e)四則の計算のやり方」と規定されている（第 7 条）。つまり母国語による読み書き、四則計算、最低限の宗教教育が項目として掲げられているに過ぎないともいえる。

この中の a)b)c)は、従来から教会牧師による家庭内試問で要求された内容であり、d)e)とがいわば新しく加えられた内容である。後者を挿入するについては国会においても牧師階層の抵抗をうけて相当の議論を経て最終的に 3 票差で決定されたものであった<sup>4</sup>。

これらの初等普通教育と特徴づけられる教育のほかに、宗教教育を充実させるために重ねて格別の条文（第 10 条第 1～2 節）を配置していることも注目される。

法令の文言としては、修業年数、教授法、クラス分けなどに関する規定を欠いている。1842 年のこの民衆教育令制定後の経過からみて、大部分は単級学級で、教師の養成、供給が遅々として進まなかったこともあり、教授法については、この法令以前から行われていた助教制がなお広範かつ長期に残っていたといわれている。

## 7. 教師

教師については、法令中で最も多数の条文を費やして規定している（第 4 条第 1～6 節、第 6 条第 1～4 節、解職、年金に関する第 11 条第 1～2 節、そのほかに教師養成校に関する条文）。資格ある教師の確保がこの民衆教育令の成否の鍵を握ると考えられていたことを示唆しているといえよう。また、実際に 1842 年以降の 5 年間の法令実施に関する予算措置は、主として教師にかかわるものであった<sup>5</sup>。

民衆学校教師に要求される資格あるいは資質は、民衆学校が採用しようとする候補者に求める資質に関する条文のなかに詳細に規定されている（第 6 条第 1 節）。

このほかに、法令に示された教師養成校の生徒に要求される力量（第 5 条第 4 節）も、教師の資質として要請されていたものを表現していたといえよう。

公募、試験の方法などの教師の採用方法は、現代からみれば奇妙な印象を与えるほどに詳細に規定されている（第 6 条第 2 節）。

民衆教育令の制定以前から広範にみられた牧師あるいは教会書記による学校教師の兼任は、民衆教育令においても容認されている（第 6 条 3,4 節）。

教師の解任の手続き（第 11 条第 1 節）、教師退職後の年金についても詳細に規定されている（同条第 2 節）。

## 8. 教師養成校

教師養成校の設立と運営は、聖堂参事会の任務であるとされた（第 5 条第 1,2 節）。また、教師養成校の規則は聖堂参事会が定めるとされた（第 5 条第 3 節）。教師養成校の生徒には、スウェーデン語の読み書き、算術、ルターの教理問答の暗記、聖書の歴史などの力量が要求されている（第 5 条第 4 節）。教師養成校の生徒には奨学金が支給される（第 5 条第 5 節）が、支給された者は卒業後一定年限民衆学校に勤務する義務を負うとされた（第 5 条第 6 節）。

## 9. 教師の給与

教師の給与に関する規定は、きわめて詳細である（第 4 条第 1～6 節）。給与は金額で示されるが、その半分は穀物で支給されると規定されている（同第 1 節）。この穀物現物支給の規定には、当時のスウェーデンでは公租を現物で徴収していた事情が顔をのぞかせている。また教師には、通常の給与のほかに、住居、農地貸与、牧草供給などの便宜が提供されることを詳細に規定している（同第 2～3 節）。これらの規定には、当時のスウェーデン経済の一端がかいま見られて興味深い。

学区が教師の給与を負担しきれないときには、国庫補助の道が開かれている（第 4 条第 5 節）。なお、教師の給与は固定型、巡回型などの学校の設置形態で区別しないとされている（第 4 条第 6 節）。

## 10. 就学

就学に関する諸規定（第8条）は、この民衆教育令の最も重要な条文の一つである。親・後見人は、すべての児童を9歳までに民衆学校に就学させなければならないとする。例外的に免除されるのは、古典語学校や公認された私立学校に学ぶ者、及び教会による試問により家庭教育で教育されていることが認められる者（第8条第3節）のみである。

就学義務規定は、労働力を奪われることをおそれる農民が抵抗するところでもあった。そのために就学させない親・後見人に対する処置も詳細に規定されている（第8条第5節）。

この法令の制定、施行後には様々な形態があった。学区委員会で認められている私立学校への就学や古典語学校への就学は学齢にある児童の一部ではあったが、存在していた。民衆教育令が目的とした就学の主な形態は、固定型学校への就学、巡回型学校への就学であったとみられ、実際にこの両タイプの学校の普及は著しかった。これらの学校の他に、法令施行後もかなり長い間、法令上に認められていた家庭における教育という伝統的な形態が少なくとも1850年代末までは広範に残っていた。この家庭教育という就学が認められていたことも、この民衆教育令体制の一つの特徴となっていた。

## 11. 若干のまとめ

以上に略述したように、弾力的運用の余地を多分に残していたとはいえ、この1842年の「民衆教育令」は、全国すべての教区への学校の設置、学齢のすべての児童の就学、母国語による初等普通教育の実施、資格ある教師の配置と教師養成校の開設などの諸規定により、近代的な学校制度の創出を企図した画期的な法典といえよう。

なお、松崎巖は「初等民衆教育令」の名の下に全14条からなるこの民衆教育令の概要を主として第1条（学校の設立）の第1,2,3節、第2条（学区と学区委員会）の第1節、第5条（教師養成）の第1節、第8条（児童の学齢、入学と通学、試問）の第1,3節により特徴づけている<sup>6</sup>が、これらの条文のみでこの法令の全体像を把握するには無理があるといわなくてはならない。

### (5) 民衆教育令制定後の経過の概略

民衆教育令制定の歴史的意義や同令がかかえていた弱点は、その後の歴史的経過の中にあらわれてくる。ここでは、若干の事実経過を掲げるにとどめる。

民衆教育令の公布後、1847年まで5年間の猶予期間が過ぎても、学校建築や授業料の負担に対する農民層の抵抗は大きく、民衆学校の建設が順調に進んだわけではなかった。民衆学校令が構想した学校網の整備が遅々として進まない事態に対処するために、1853年には簡易小学校（Mindre skola）の制度が創設された。簡易小学校の教師は、上述の a) b) d) e) を教えることができるならば、教師養成校で養成された正当な資格をもった教師でなくてもよいとされた<sup>7</sup>。さらに1858年には、簡易小学校の一部を、民衆学校に入学する前の段階の学校として位置づけられる幼年学校（småskola）の制度を創設し、整備していった<sup>8</sup>。このようにして弱点を補強しながら、民衆教育が強化されることになった。

民衆教育令は民衆学校を普及させる端緒となったが、民衆教育令体制の最も大きな弱点の一つは、教師養成体制の立ち後れとそのため猶予期間が過ぎた後々まで助教制が存続したことであった。そのために、助教（制度）の解消、教科の内容の整備充実、指導法の改善、いわゆる単級学校を克服する学力別あるいは年齢等級別のグループ分けの導入など、その学校の内情を充実させる課題が次第に自覚されてきた。こうした課題の解決と民衆学校と幼児学校との関係の整備をはかるために、1864年には回状が出され、これ以降助教制は次第に解消されていった。なお、1865年には学校建築の整備のための標準プランが提示された。この標準プランに示された校舎案のすべてが単級学校であった<sup>9</sup>ところからみて、民衆学校体制の民衆学校は単級（日本語でいう複式学級）であったと考えられる。教育内容に関する標準プランが告示されたのは、1878年で、年齢別あるいは学力等級別によるグレード分けの実際化などは、全68条からなる1882年の民衆教育令改正及び全70条からなる1897年の民衆教育令改正をまたなければならなかった。

なお、北欧諸国においては、スウェーデンの1842年の「民衆教育令」と同様の法令が制定された年代は比較的早く、デンマークが1814年、ノルウェーが1827年、フィンランドは1866年であった。つまり、スウェーデンにおいて制定された「民衆教育令」が北欧諸国のなかではとくに早かったわけではなかった<sup>10</sup>。

本稿の課題とは直接関係しないので、詳しくはふれないが、民衆学校と古典語学校とが制度的に接続されるのは、20世紀に入ってからのことである。

## 1842年6月18日の民衆教育に関する法令

私、カール・ヨハン<sup>11</sup>は以下のことを告知する。わが国の民衆教育のための、より改善された施設の必要性にかかわって、国王が要求したところの教区における児童の教育の状態に関する情報にもとづいて、私は、1840年2月1日に招集した諸身分議会<sup>12</sup>に、民衆教育の促進のために必要な法令のための一般的基礎とその目的のために不可避に必要な国庫補助金についての説明を含む提案をおこなった。諸身分議会は、それをうけて1841年6月14日に民衆教育に関する法令に関する案を作成し、それについての検討の後、この提案が受け入れられるならば、民衆教育に関する一般的な法律を公布してくださるよう国王に請願して、その案を国王に提出した。諸身分議会は、民衆学校の教師の教育のために必要な教育施設とその教育施設の学生に対する奨学金に、また支援を必要とする教区における教師の給料に対する支援に、年間の補助金を予算措置した。さらに、我々の政治家と聖堂参事会(domkapitel)<sup>13</sup>が、上述した諸身分議会によって提出された提案について尋ねられた後に提出した助言を考慮して、私は諸身分議会がこの問題で提出したことに主に同意して、以下のように命令し、法律をつくることにした。

### 第1条 [学校の設立]

#### 第1節 (固定型学校の設立)

すべての都市の教区、すべての農村の教区において<sup>14</sup>、正当な資格ある教師(vederbörligen godkänd lärare)<sup>15</sup>をもった、少なくとも一つの固定型学校(fast skola)が存在すべきである。それからの例外として、少ない人口の地域や他の状況が必要とする場合は、二つ、あるいはいくつかの教区が統一して、一つの学校を運営することができる。

#### 第2節 (巡回型学校の設立)

財政的余裕がない、あるいは地域的な状況が固定型学校の設立をむずかしくしているところでは、当面の間、児童の教育は、正当な資格ある教師を一人あるいは複数もった、巡回型学校(flyttbar skola)においてなされなければならない。同様に、巡回型学校は、広大な上級牧師管区(pastorat)に若干の村、農場、借地、住宅が固定型学校から遠く離れていて、教区の多くの児童が学校に通学することが困難なところに設立されるべきである<sup>16</sup>。

#### 第3節 (この法令の猶予期間(5年))

教師の確保と学校の設立については、この法令の公布から5年以内に実施されるべきである。すでに採用された教師がこの法令公布後に引き続いて教職につけるかどうかについては、以下で決められる知識を教えることを条件として、学区委員会(skolestyrelse)と相談して、教区自身で決めることができる<sup>17</sup>。

### 第2条 [学区と学区委員会]

#### 第1節 (学区委員会の設立とその構成)

一つまたはいくつかの学校をもった、都市の教区あるいは農村の教区から構成される学区(skoldistrikt)に学区委員会がおかれるべきである。または、一つの学校を二つ以上の都市の教区あるいは農村の教区によって共同で組織する学区に学区委員会がおかれるべきである。その学区委員会は、教区牧師(kyrkoherde)またはそのかわりを代表する教会牧師(prestman)がなる委員長と、委員会の会議の際に記録を担当する人と、教区によって選ばれた学区に住んでいるメンバーから構成される。学区委員会のメンバーを特定の期間あるいは不特定の期間選ぶこと、また期限が切れた場合、本人の承諾があれば再任させることは教区が決めることができる。

#### 第2節 (学区委員会の業務)

学区委員会は、学区内に設立されたすべての民衆学校において、その業務がきちんと行われるように注意深く見守り、授業が正しく組織されているか、熱心に行われているかを監督しなければならない。

#### 第3節 (学区委員会による規則の制定)

学区委員会は、その管理下にある学校のために規則を制定する。その規則では、教授方法や規律に関すること、さらに学校の適切な世話と管理に属することが決められる。これらの規則は、制定されるまえに、常に当該の聖堂参事会の監査と承認をえるべきである。そのようにして承認された規則について

の、必要とされる修正や訂正は、学区委員会の提案によって、同様に聖堂参事会の承認をもっておこなうことができる。

### 第3条 [教室]

学区は、その区にある、あるいは設立される民衆学校のために教室を確保し<sup>18</sup>、維持する義務を負う。それにかかわる費用については、それについての特別な合意がないかぎり、教会の建物の費用が教区の住民全員によって負担されるという規則と同様に、学区に住んでいるすべての住民が負担する。固定型学校を建てる場合は、その状況に応じてその場所を決定することはその教区の住民にまかされる。しかしながら、学区委員会の委員長が学校の監督を容易におこなえるように、その住居の近くに設置されることがのぞましい。

### 第4条 [教師の給料、学校制度のための費用の負担]

#### 第1節 (教師の給与)

この法律の規定によれば、有資格で採用された教師は年間最低16トゥンナの穀物を受け取る。そのうちで8トゥンナは穀物そのもので(その半分はライ麦で、残りの半分はその地域で国家に支払われる税金であるところの穀物の種類で)、残りの8トゥンナ分は常に現金で(53リクスダーレル16シリング・バンコ)支払われる<sup>19</sup>。

#### 第2節 (教師への住居、燃料の提供)

学校の教師には、教区によって住居と必要な燃料が(無償で)提供される。また、教師には牛のための夏の牧草と冬のえさが提供される。そのようなものを提供することが困難な地域では、ライ麦かその他の種類の穀物で2トゥンナの価値の分が提供される。

#### 第3節 (教師への農地の貸与)

条件が許すところでは、適切な農地が教師に貸与される。一部は野菜などの(食料の)必要を満たすために利用され、一部は植林や園芸の教育の機会のために利用される。

#### 第4節 (教師への給与の財源)

以上に述べたような教師の給料の財源を準備するために、一部はその教区のすべての納税者によって負担される。他の財源がないところでは、年間で最低で2シリング・バンコから最高6シリング・バンコまでの補助金によってまかなわれる。あと残りの分は民衆学校に通学する児童からの授業料によってまかなわれる。ただし、貧民救済事業の支援を受けている児童や、その親に財産がないために年間の国の税金を減額されている場合は除外される。上述した補助金や授業料に関する細部の決定については教区にまかされるべきである。これらが必要とされる教師の給料の総額に達しない場合には、「第2条 承認された法律」で決められた規則によって、このことに関する他の合意がない限り、教区が不足分を補わなければならない。これらのすべての補助金や授業料は、各教区で合意された方法で集められ、その目的に利用されるように教区の学校会計に渡される。

#### 第5節 (学区への国庫補助)

もし、ある教区が貧困な財政のために上述の最低限の給料の総額を教師に支払えない場合は、当該の県知事(landshövning)と監督(biskop)をとおして、この目的のための国庫補助金による支援を国王に申請することができる。上述の役職のものによってその必要性が調査され、推薦されてから、財政状況が許すかぎり、そのような補助金が認められる。そのような補助金を申請し、獲得した教区は、補助金を受け取る前に、その学校の活動が適切に組織されるような措置を講じていることを示さねばならない。

#### 第6節 (教師の給与の負担)

学校の維持と教師の給料のために教区に課される費用は、それについての他の合意がない限り、学区に存在するすべての固定型学校と巡回型学校のために各学区(のすべての納税者)によって支払われる。

### 第5条 [教師養成校]

#### 第1節 (教師養成校の設立)

教師養成校(seminarium)は<sup>20</sup>、首都、及び各監督座都市(stiftstad)において、民衆学校教師の仕事に従事することを希望するもののために設置される。この仕事に関係する諸教科の教授と実習を得る機会は

聖堂参事会によって準備されなければならない。

#### 第2節 〈教師養成校の運営〉

そのような教師養成校のために聖堂参事会は、それに適切な校長を任命しなければならない。その校長は、将来の学校教師を指導し、教え、彼らの入学と卒業の際には試問(förhör)をおこなわなければならない。それとともに聖堂参事会は、将来の学校教師である学生に賛美歌や簡単な体操の授業をうける機会を準備し、民衆学校での学校教師の仕事を実習する機会を準備しなければならない。聖堂参事会は将来の学校教師である学生の教育にたずさわる人に、各教師養成校に割り当てられた年間の補助金を、最も適切な方法を検討して、分け与えることができる。あるいは、この地位に要求される能力をもっている場合、一人の人物にこの地位を統合し、補助金を与えることができる。教師養成校の校長はこの地位を受け入れる能力があることへの奨励として、牧師としての勤続年数の年金を受け取るべきである。

#### 第3節 〈聖堂参事会による教師養成校に関する規則の制定〉

聖堂参事会は、将来の学校教師である学生の適切な教育に関する諸規則を、とりわけ教師養成校での教授時間、試験等々に関してより詳細に決めなければならない。そして、授業の正しいやり方について入念に監督しなければならない。

#### 第4節 〈教師養成校の生徒に要求される力量〉

品行方正で礼儀正しい態度に関する確かな証明を示さないものは、教師養成校の生徒になることはできない。校長によって実施された試問の際に、スウェーデン語の字体とラテン語の字体で書かれた印刷物<sup>21</sup>を読むこと、書くこと、算術の技能をもっていること、ルターの教理問答をその解説とともに暗記していること、聖書の歴史についての相当な知識をもっていること、これらについての確かな証明を示さないものは、教師養成校の生徒になることはできない。学校教師にふさわしくない、なんらかの肉体的障害をもつ人は、教師養成校の生徒になることはできない。

#### 第5節 〈教師養成校生徒への奨学金〉

奨学金は、総額としてある人には50リクスダーレル、別の人には33リクスダーレル16シリング・パンコを、必要としている人や優秀な将来の学校教師となる学生に、一年間ただし、その期間を半年間あるいは一年間は延長することができるが、聖堂参事会によって与えられる。この点については、必要性と優秀さが同じである場合、教師養成校を修了した後で、その教区の中で計画された民衆学校や設立された民衆学校に教師として採用されることを条件として、ある特別な教区によって教師養成校への入学を申し込む学生が奨学金を優先的に受け取ることができる。

#### 第6節 〈教師養成校卒業生の義務〉

教師養成校で奨学金を受け取った人は、そこでの学習の修了後少なくとも3年間は教師として働かなければならないことになっている。教師としての仕事は、卒業してから半年以内に民衆学校から提供される。これをきちんとみたまない人は、受け取った奨学金を返還する義務がある。そのような場合は、他の教師養成校の学生に与えられる。

### 第6条 [教師の採用]

#### 第1節 〈民衆学校教師に要求される資質〉

民衆学校教師の採用に際しては、第一にその人物の敬神性や道徳的品行に注目しなければならない。それとともに、民衆学校での教師としての仕事に正当であるとみなされることを希望する人は、教師養成校を卒業しているか、していないかにかかわらず、この法令で規定されているすべての教科に必要なとされる知識について、この法令が布告される以前にストックホルムの助教制協会が設立した模範実習学校(normalskola)から出された成績を持っていなければ、聖堂参事会のメンバーを前にして、教師養成校の校長によって行われる試験を受けなければならない。そして、教師養成校の校長によって出され、上述の聖堂参事会のメンバーが署名した成績にしたがって、読み方、書き方の十分な技能をもち、教理問答、聖書の歴史、自然地理と人文地理の概要、スウェーデンの歴史と一般史の概要、算術、幾何の一般的な概念、線図(linear-teckning)、博物(natur-lära)——これらの教科を教えることができる十分な知識と確かな技能をもち、さらに助教制の教育方法に関する知識、簡単な体操(gymnastik)と賛美歌(kyrkosång)を教える技能とそのため近年に発明された補助手段を使う技能をもたなければならない。そのうえに、農村部での教師の仕事と教会書記の仕事(klockarebeställning)とを統一的におこなおうと

するものは、農村部の教会書記に義務として課された種痘と瀉血に関する知識と技能を持たねばならない。教師養成校からの卒業の際に発行される成績においては、卒業者が示した能力を、可、良、優という表現で評価されるべきである。

#### 第2節 〈民衆学校教師の募集、採用、試験〉

民衆学校の教師の選定に際しては、募集が新聞に三回公知された後、志願者は最初の募集の公知から60日以内にその申請書を学区委員会に提出する。学区委員会は、提案にもとづいて志望者の中から三名を、敬神、道徳性、授業の知識と技能が適切であるかどうかを確かめてから、順番をつけて選ぶ。能力をもった志願者が三名よりも少ない場合には、学区委員会と教区が二名の志願者から選択することで満足することを説明されない限り、または一人の志願者として申請した人で満足することを説明されない限り、同じ長さの期間、再び募集が決められ、公知される。提案として選ばれた人の中から、教区の会合に集まった投票権があるメンバーによる選挙がおこなわれる。学区委員会の代表の投票は、教会書記の選挙の際の教区牧師と同じように数えられる。提案の作成や教師の選択の際に犯された違法行為については、聖堂参事会に苦情を述べることができる。その際、教会書記の選挙の際に苦情を述べる場合と同じ期間内になされるべきである。聖堂参事会の決定については、通例国王陛下に苦情を述べるができる。適切に採用された教師の任命は、学区委員会によってなされる。

#### 第3節 〈民衆学校教師と牧師との兼務〉

民衆学校教師の仕事がなんらかの牧師の仕事といかに統一されるかについては、聖堂参事会が検討して決めることができる。そのような統一は、両方の仕事が一人名または同一の人間によって適切に取り扱われる場合のみ認められる。

#### 第4節 〈民衆学校教師と教会書記との兼務〉

第3節と同様に、民衆学校教師の仕事は、教会牧師と教区の承認を得て、教会書記の仕事と統一することができる。すなわち、この統一された仕事を任命された人は、第一に自分の時間と力を民衆学校教師の仕事に捧げなければならない。そのうえで必要であるとみなされる限り、教会牧師と教区の承認を得て選ばれた人の特別の補助を通して教会書記の仕事に関連することをおこなうことができる。統一された学校教師と教会書記の仕事をもつ人は、両方の仕事に割り当てられた給料を、あわせて50トウンナの穀物の価値を超えない限り、減額されることなく受け取るべきである。もし、両方の給料が合計でその総額を超える場合には、学校教師の給料の過剰分を差し引くかどうかについては教区にまかされる。両者の場合において、その助手に教会書記の仕事の給料と同じくらいの給料を自分で支払わなければならない。

### 第7条 [教科]

民衆学校の教師に採用されることをのぞむ人に要求される知識一教科は、第6条第1節にしたがって、民衆学校における授業にとっても、その目標となる。貧困のために長い期間学校教育を受けられない児童も、あるいは学校教育が提供する十分な知識の量を獲得することに必要な能力が欠けている児童は、彼らが学校を去るときには、少なくとも以下に掲げる教科の必要な知識を習得すべきである。

- a) 読み方 (スウェーデン語で書かれた文章を流暢に読むこと)
- b) 宗教に関する知識と聖書の歴史 (牧師のところで聖餐式の学習を始めることができるのに必要な程度)
- c) 賛美歌 (ただし、音楽の才能が欠けている場合は例外とする)
- d) 書き方
- e) 四則の計算のやり方

学区委員会は、要求される知識の点で男女間に差異を決めることができる。

### 第8条 [児童の学齢、入学と通学、試問]

#### 第1節 〈民衆学校への入学年齢〉

各教区は、学区委員会と協議して児童の通学を開始する年齢を決定することができる。ただし、これは9歳の終わりにまでは伸ばすべきではない。もし、児童や親や後見人がその年齢以前であっても学校教育を受けることをのぞむ場合は、入学が認められる。



## 第2節 〈児童の試問〉

学区委員会が決定した時期に、各学校の児童は試問を受けなければならない。それが修了した際に、熱心で、優秀で、良好な行動で注目された児童に、財源がある限り適切な褒賞を与えることができる。

## 第3節 〈就学猶予〉

学齢(skolålder)にある児童は、その親や後見人によって家庭において、あるいは古典語学校(läroverk)において、または以下に規定したように正当に認可されて設立された私立学校において、教育を受けると登録された児童だけを例外として、すべての児童は民衆学校に出席しなければならない。家庭で教育を受ける児童<sup>22</sup>は、普通の学校試問(skolförhör)においてか、または学校教師か牧師によって行われる試問において、家庭で受けた教育が学校でなされる教育と、その正確性と範囲においてどのように対応しているかを明らかにするために、試験を受けなければならない。それによって家庭教育が不十分であることが明らかになった場合には、きちんと学校に通学しなければならない。

## 第4節 〈就学の援助〉

親や後見人がその児童のために服を購入することができない場合、また学校に通学させることができない場合は、この点に関して貧民救済をとおして、援助を受けるべきである。そのような児童、あるいは学校までの遠距離のために、または厳しい季節のために毎日学校に通学することが困難な児童は、読み方の技能を獲得した後は毎週1回か2回だけ学校に出席してもよい。ただし、児童の親や後見人が、道徳性の点や児童を育てることが上手で、彼らの教育について注意深く世話することでよく知られていることが条件である。各家長は、彼らの奉公人や小作人の児童が必要な教育を受けないことがないように監督しなければならない。

## 第5節 〈就学に反対する親・後見人の処置〉

親や後見人が、児童の通学義務(skolgångs-skyldighet)の点で伝えられた規則を守ることに反対する場合、反対する人たちは牧師による警告を受ける。牧師が警告しても効果がない場合は、教区評議会(kyrkoråd)か他のコミュニンの理事会によって(そのようなものが後に設立された限りで)、警告を受ける。このような警告に効果がない場合は、その児童は親から隔離され、他人に世話を受けるために引き渡される。児童の通学にかかわる費用や授業料は、親や後見人のところから法律によって差し押さえられる。

## 第6節 〈就学児童の記録〉

学区委員会の代表は、学区内で最近半年間に学齢に達した児童についての正確な記録を年に2回作成し、学区委員会に伝えなければならない。

## 第9条 [教授時間、地区の分割、地区での試問]

### 第1節 〈通学区域の分割〉

学区委員会は、教区と協議して、より広範に家庭教育を必要とするある地域での状況を考慮して、固定型学校と巡回型学校において授業がなされる期間の長さ(1年のなかでの期間)、一日の授業時間を決定することができる。巡回型学校での授業のために、教区を最も適切な大きさの地区(roste)に分けることができる。

### 第2節 〈巡回型学校における教師の試問〉

巡回型学校の教師は、一つの地区で学校教育が実施されることが決定された時期に、可能ならば学区委員会が決めた順番で他の地区を訪問することができる。その訪問先において、教師が不在の時においても、学習がきちんと進んでいるかどうかを確かめるために、決められた試問の際に時々訪問しなければならない。

## 第10条 [教授に関する監督]

### 第1節 〈宗教教授〉

牧師は民衆学校における宗教教授に関して、特別に注意深く監督しなければならない。教区の教師(牧師のこと—訳者)は、そのために固定型学校においても巡回型学校においても、熱心に、そして彼らの他の仕事が許せば、しばしば自分で学校に行き、この学校の最も重要な教科である宗教教授が学校教師によってどのように教えられているかを調査し、必要な場合、学校教師に情報と助言を与え、自分で

教授し、説明し、適用することをおして、神聖な教義を子どもの感覚に生き生きと伝えなければならない。

#### 第2節 〈宗教教授に関する援助〉

学校で獲得した知識を維持し、とりわけ真実のキリスト教の教育を促進するために、学校教師は学校が休みのときに、可能な場合教区の牧師の監督と補助を受け、日曜日に学校を離れた若者たちに授業と試問をおこなう。同じ目的のために、牧師にもまた、教区図書館の設立とその利用を促すように、さらにそれに適切な本を提案するように努力することが課されるべきである。

### 第11条 [教師の解任と年金]

#### 第1節 〈教師の解任〉

もし、ある学校教師が自分の仕事を遂行するうえで不適切であったならば、あるいは教師として残るべきでないような行為が明らかになった場合、学区委員会は1回目には警告し、学区委員会の議事録に記録する。その後、その警告に効果が見られなかった場合、その人物を教師としての地位から引き離し、その地位にともなう給料も取り上げ、この措置を教区に伝えることができる。

#### 第2節 〈退職教師への年金〉

自分の仕事を申し分なくやり遂げた教師が高齢や病気のためにその仕事を遂行することが不可能になり、この理由により引退しなければならない場合、教区と学区委員会の検討をおして、その教師の必要性と職務をおこなった期間に応じた、また教区から出された給料の大きさに応じた、年金を彼に与えることができる。

### 第12条 [私立学校]

#### 第1節 〈私立学校の設立〉

教育を利用したい人のために私立学校を設立することを望む場合、その人に信用があり、授業に必要な能力をもつ限り、学区委員会に学校の設立について登録すべきである。そのような学校は、授業と時間割に関して学区委員会の監督下におかれるべきである。

#### 第2節 〈私立学校は学区委員会が監督する〉

個人の費用で設立された学校、あるいは将来設立される学校は、学区委員会の監督のもとにおかれる。すなわち、学校の創設の際に決定された条件を変更してはならない。学校教育庁は、これらの学校の設立や管理の点で、教育の適切な組織のためにふさわしいかどうかを、この法令で決められたことによって検討し、設立者の決定した規則を尊重しつつ、それに対応した修正や変更を行うことが許される。

### 第13条 [監督と聖堂参事会の民衆教育に関する義務]

#### 第1節 〈民衆教育に関する監督と聖堂参事会の義務〉

各監督管区の監督や聖堂参事会は、一般的に教育活動に関して彼らに任せられた監督とともに、民衆教育のための教育施設に関して慎重な管理を実施し、それらの重要な目的の達成のための指導や展開を見守らねばならない。

#### 第2節 〈学区委員会の報告義務〉

各学区委員会は、学区内の民衆教育施設の現状に関する報告書を毎年提出しなければならない。聖堂参事会は、その報告書にもとづいて、監督管区内の民衆教育の現状に関する評価を、それについての必要な情報とともに3年に一度国王に送付しなければならない。

### 第14条

この法令で伝えられている規則の適用に特別の障害があるところでは、状況によって、決められた規則からの例外が必要と考えられるならば、これらの障害について国王に報告するかどうかを聖堂参事会が決定することができる。

最後に、私は、私の忠実な臣民にこの私の一般的な命令の実行を熱意と前向きの姿勢で推進し、その命令が目指す重要な目的、すなわち成長世代をキリスト教的で役立つ社会人に教育することを達成するよう

要請する。この点で私はまた第一に国の牧師たちの暖かい協力を期待している。この命令は関係者すべてが注意深く従わなければならない。さらに私は自らの署名と印をもってここに承認する。

ストックホルム城 1842年6月18日

カール・ヨハン

[訳者注]

<sup>1</sup> たとえば、Åke Westman, *Folkskolan 150 år Något om den allmänna utvecklingen samt utveckling och händelser i norra Ångermanland*, 1993

<sup>2</sup> 1840年の国会では、当時すでに1,009校の固定型学校と377人の巡回教師が存在していたこと、国内の約半数の教区である、1,211教区には固定型学校も巡回教師もいなかったことが報告されている(C. Georg Starbäck, P. O. Bäckström, *Berättelser ur svenska historien*, (Tionde bandet. Carl XIII. Carl XIV Johan) s.397)。

<sup>3</sup> 松崎巖『<世界教育史大系14>北欧教育史』(講談社、1976)において「1822年には少なくとも35校の助教制学校があったと報告されている。……1824年には60校、十年後の1834年には322校、…1842年には515校(常設学校の過半数)、…1848年には756校と増加していった」(176頁)と述べている。C. Georg Starbäck, P. O. Bäckström, *Berättelser ur svenska historien*, (Tionde bandet. Carl XIII. Carl XIV Johan)では、「1828年には183校の助教制学校があり、12,711人の子どもがそこで学んでいた。1842年には543校に増加し、35,115人の子どもが学んでいた」と書かれている(s.397)

<sup>4</sup> Rud.Hall, *Folkundervisningens historia*, 1926, s.67

<sup>5</sup> この「民衆教育令」を採択した国会は、同時にこの法令の実施のために「民衆学校の教師の養成のための教師養成校の設立に6,500リクスダーレルを、これらの教師養成校の学生のための奨学金のために9,000リクスダーレルを、民衆学校教師の給料のために補助の必要のある教区のための補助金として、50,000リクスダーレルを予算措置した(C. Georg Starbäck, P. O. Bäckström, *ibid.* s.397)。

<sup>6</sup> 松崎巖、前掲書、179頁

<sup>7</sup> Kungl.Maj:ts nådiga kungörelse, angående förändrad lydelse af 1:a, 4:c, 5:e och 6:e §§ i Konkl.Stadgan om Folkundervisningen i Riket den 18 Juni 1842; den 29 September 1853(Svensk Författnings samling, 1853 No.65) s.6

<sup>8</sup> Kungl.Maj:ts nådiga kungörelse, angående ytterligare åtgärder till folk- undervisningens befrämjande; den 23 April 1858(Svensk Författnings samling, 1858 No.31) s.2

<sup>9</sup> これらの図面は農村部におかれた学校建築のものであると考えられる

(Kongl.Över-Intendents-Embetet, *Normalritningar till Folkskolebyggnader*, 1865)。

<sup>10</sup> Rud.Hall, *Folkundervisningens historia*, 1926, s.67

<sup>11</sup> カール14世ヨハン(1763~1844、在位1818~1844)は、南フランスで生まれ、1810年まではナポレオン麾下の将軍であった(ベルナドッテ元帥)。1810年8月にスウェーデン政府が、皇太子として迎えることを決定し、議会がこれを承認し、同年11月に「カール・ヨハン」と改名し、プロテスタントに改宗したのちにカール13世の皇太子となった。彼のイニシアチブにより1813年10月のフランス軍との戦役を最後に、スウェーデンは中立政策を内外に宣言し、これを国是として確立することに成功した。以降今日まで、スウェーデンは約200年間にわたって戦争に加わったことがない。

<sup>12</sup> 当時は、スウェーデンには四身分(貴族、聖職者、都市市民、農民)制議会が存在した。この四身分制議会は、1435にアールブーガ会議で始められたといわれている。グスタフ・ヴァーサ(在位1523~60)が1527年に招集したものが代表者の名簿が保存されている最初の四身分制議会である。この身分制議会は1866年に廃止され、それ以降は二院制になった。

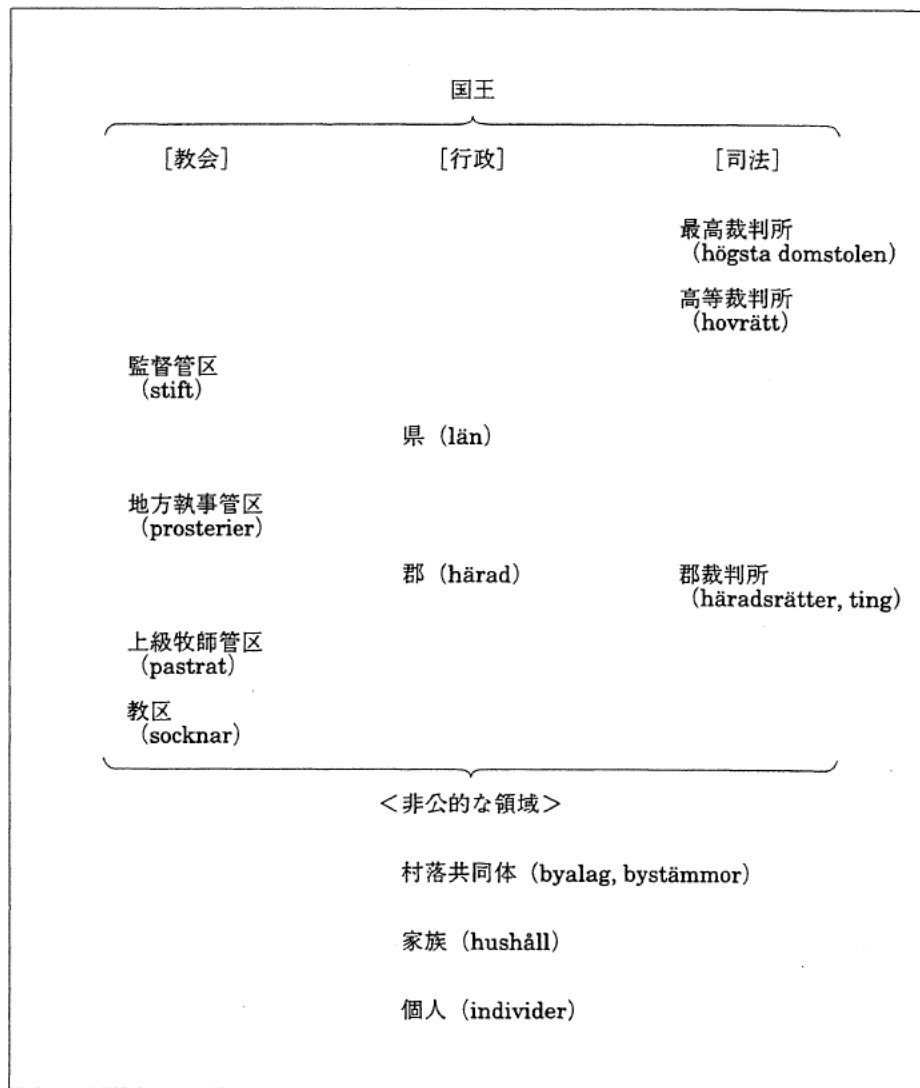
<sup>13</sup> 聖堂参事会(domkapitel)は、全国13の監督管区(stift)におかれた教会の監督機関である。松崎巖はこれを「大聖堂評議会」と訳している(『<世界教育史大系14>北欧教育史』講談社、1976)。しかし、「大聖堂」はウプサラ大聖堂を想起させるので、ここでは単に「聖堂」とし、教育に関わる事務的な仕事を行う機関でもあることから「参事会」と訳した。

<sup>14</sup> 教区(socken)は、農村部の教会組織の末端であるが、「単に宗教行事を行う機関ではなかった。年に少なくとも二回開かれる教区会議(sockenstämma)では、教区牧師を議長として、教会財産や学校の管理、徴税、救貧に関する決定、教区への居住の許可、郡・県の議会議員選出、国会農民院議員選出、穀物の管理など

を協議した。また、教区牧師を長とする常設の教区評議会(kyrkoråd)は、日常において各家族内における親子関係、家父長・奉公人関係を監督し、飲酒を取り締まり、住民同士のいさかいを処理した。各家族においては、家父長が、家族内の道徳や秩序に責任を持ち、子供が字を読み、教理問答を覚えることに義務を持ったが、教会は、そうした教育を徹底させるために、一五歳以上の者に毎年試験(husförhör)を行い、各家族から少なくとも一名の教会行事への出席を義務づけた。」(石原俊時「スウェーデン近代と信仰復興運動——身分制社会解体の一局面」望田幸男・村岡健次監修『近代ヨーロッパの探求③ 教会』ミネルヴァ書房、2000年、304頁)

以上のような教区の行政・司法的機能は、1862年のいわゆるコミュン改革によって変化した。すなわち、コミュンが新たな地方自治の単位として主な行政機能を担うようになった。しかし、教区簿冊による人口統計の業務はその後も教区に残され、教育に関する業務も教区に残された。

参考までに18世紀スウェーデンの地方統治機構を図示したもの(石原前掲論文、305頁)を以下に掲げる。



18世紀スウェーデンの地方統治機構

注：\*図の上に位置するほど、管轄する地域的範囲が広くなる。  
 \*最高裁判所は、一つのみでストックホルムに所在、全国を対象とする。  
 \*現在の国境内に、監督管区は13存在し、高等裁判所は、イェンシェーピング(Jönköping)に1か所存在するのみであった。高等裁判所は、フィンランドやエストニアなどにも置かれた。  
 \*村落共同体は、農業での共同作業の調整を行い、救貧に対し責任を負った。南部スコネ(Skåne)では、自律性が大きく、他の地域で教区の負う任務の多くを担った。

出典：Sundin, Jan, "Control, Punishment and Reconciliation", p.26, Figur 1 より作成。

<sup>15</sup> 1842 年の法令の公布時における「正当な資格ある教師(vederbörligen godkänd lärare)」の意味する内容が問題となる。1853 年 9 月 29 日付の告知において、この表現は「教師養成校において正当に資格と取得した教師(vederbörligen vid en seminarium godkänd lärare)」と改められたことから推測すると、1842 年の法令公布時には、教師養成校の卒業生を前提にはしていなかったと考えられる(このことは、1842 年の法令の第 6 条に明確に規定されている)。教師養成校の多くは 1842 年の民衆教育令公布後に設立されている。

<sup>16</sup> 松崎は fast skola を「常設校」と訳し、flyttbar skola を「巡回学校」と訳している『<世界教育史大系 14> 北欧教育史』講談社、1976、179 頁。

<sup>17</sup> 松崎は skolstyrelse を「学校管理委員会」と訳している(同上)。

<sup>18</sup> 学校の教室に関する設計基準は 1865 年に最初に発行された(Kongl. Över-Intendents-Embetet, *Normalritningar till Folkskolebyggnader*, 1865)。その後 1878 年に改訂されたものが発行された(Kongl. Över-Intendents-Embetet, *Normalritningar till Folkskolebyggnader*, 1878)。1865 年に発行された図面は、農村用の学校建築のモデルであり、そのほとんどが一校舎一教室であった。1878 年に改訂されたものには、都市用の学校建築のモデルも加わり、教室の数が多く設定されている図面も入っている。また、農村部と考えられる校舎の図面の中には、幼児学校用と民衆学校用の 2 つの教室が設定されている図面もある。さらにこれらの教室に加えてスロイドの部屋が別に設定されているのは興味深いところである。つまり、多くの教科の授業が一つの教室(複式学級)で授業をおこなう場合でもスロイドだけはそれが不可能であることを示していると考えられる。これらの例を末尾に掲げておく。

<sup>19</sup> この法令が公布された当時は、1834 年に実施された貨幣改革によって 1 リクスダーレルは 48 シリング・バンコと同価値であった。その後 1855 年に通貨単位に十進法が導入され、1 リクスダーレル・リクスミントは 100 シリングとされた。その後、1873 年に金本位制となり、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーで共通の通貨であるクローナが導入された(1 クローナは 100 オーレと同価値)。

<sup>20</sup> スウェーデンにおいて、1842 年以前には民衆学校の教師養成にかかわる学校として、1830 年にストックホルムに助教制普及協会(Sällskapet för växelundervisningens befrämjande)によって設立されたストックホルム模範実習学校(normalskola i Stockholm)(John Landquist, Torsten Husen, "Pedagogikens historia" 1969, s.232。松崎巖『<世界教育史大系 14> 北欧教育史』講談社、1976、176 頁)や、1835 年に創設されたクリシャンスタ教師養成校(lärarseminariet i Kristianstad)があった。後者は助教制の学校(ランカスターの方法を利用する学校)の教師を養成するために創設され、1842 年までにおよそ 100 名の教師を養成した。この教師養成校は監督座都市になかったため、1842 年に閉校となった(Högskolan Kristianstad, *Från monitorer till monitorer*, 1988)。

<sup>21</sup> この印刷物は、両方ともスウェーデン語で書かれた文章である。印刷の字体がラテン語の字体でかかれたものとスウェーデン語の字体でかかれたものの 2 種類があり、そのことを意味している。

<sup>22</sup> 注 4 で述べたように、スウェーデンでは、17 世紀頃から 19 世紀の半ば頃まで家庭教育において文字を読む訓練を受け、識字率は(少なくとも読む能力については)ヨーロッパのなかでもスコットランドと並んで高かったといわれている。この家庭教育の伝統については以下のように説明されている。「各家族においては家父長が家族内の道徳や秩序に責任を持ち、子供が字を読み、教理問答を覚えることに義務を持ったが、教会は、そうした教育を徹底させるために、一五歳以上の者に毎年家庭内試問を行った。そもそも 1686 年の教会法によって教区簿冊に記録すべきものとして定められたものは、①教会が所有するすべての財産、②教会の所得、③牧師農場(prästgård)とそれに付随するすべての財産、④教会での席の配置、⑤債権・債務、⑥教区会議での決議、⑦教区内で起こった事件、⑧監督の教区訪問(visitations acterne)、⑨結婚した者の名・両親の名、⑩出生・洗礼(子供の名)、⑪死者の名、⑫教区を去った者と移入してきた者の名(どこから来て、どこへ移ったのか)、⑬教理試問の結果であった」(Wannerdt, Arvid, *Den svenska folkbokföringens historia under tre sekler*, Stockholm, 1982, s.8-9)。石原は、⑬教理試問の結果を記録した家庭内試問記録簿の一例をその論文において紹介している(石原俊時「スウェーデンにおける人口統計の生成—教区簿冊と人口表」付録 4)。

[資料紹介]

## 1864年の国王の回状

——民衆教育に関する特別な規則（1864年4月22日）——

横山 悦生

以下に掲げるのは、1864年4月22日に国王から聖堂参事会宛に出された回状 Kunglga cirkurär den 22 April 1864 の全文訳である。出典は、「Folkskolestadgan med flera författningar rörande folkundervisningen till ledning för skolråden」（1880、s.25-s.27）に収められているもので、この本の目次には、「民衆教育に関する特別な規則」という表題のもとに、3つの回状（他の2つは、1869年10月15日、1878年10月11日の回状）が収められている。表題に掲げた「民衆教育に関する特別な規則」はこの目次からとったもので、回状そのものにはついていない。また、この回状には、各条文の見出しと注はついていないが、理解を容易にするために訳者が付け加えたものである。

### 1864年の国王の回状

0. 前書き [この回状の背景、民衆学校と幼児学校の関係、など]

当該の視学官から提出された、1861年、1862年、1863年に国内の民衆学校について実施した視察に関する報告書から、民衆教育に関する1842年6月18日の法令とその後に出された訓令が適切に実行されていないこと、またこの法令が正しく適用されるためには特別な規則が必要なことが判明した。そこですでに1863年12月11日に幼児学校(småskola)について諸身分議会在最近おこなった提議にしたがって以下のことを制定した。

国の財政から補助をうけている学校がある場合、民衆学校委員会(folkskolstyrelse)は、固定型及び巡回型民衆学校においてはすでにかろうじて読むことができる児童だけを受け入れるべきであることを決定することができる。また、私は、幼児学校に関して、目的に応じたやり方で、またそれぞれの学校の種類の状況に適切な方法にしたがって幼児学校と民衆学校との間の関係を組織するための適切な措置をとることを望む。さらに、幼児学校の教師が、民衆教育令第6条第2節で規定するような知識をもつこと、さらに、1853年9月29日の告知による表現によれば、1842年の法令で言及された教科を教える能力をもつことなしには教師に採用されないことに留意すべきことを望む。それとともに民衆学校に関して学校評議会(skolråd)にその管理を依頼することにした<sup>1</sup>。

#### 1. [学齢児童の登録、試問]

民衆教育令第8条第6節に規定されたところの学齢に達した学区内の児童に関する記録にもとづいて、学校評議会によって完全な学校登録簿(skolmatrikel)が作成される。学齢にあるすべての児童は、各学期の始めに学校に登校し、家庭で教育を受けている児童は、学校評議会の委員のまえで民衆教育令第8条第3項に規定された試問をうける。学校評議会は、上述の第8条第6節にしたがって、どの児童が通学する義務を免除されるかを決定することができる。当該の学校評議会は、その他の児童が義務を果たしているかを入念に管理する。怠学については完全にしかも細かく学校の登録簿に記録される。

#### 2. [児童の学年またはグループ分け]

上述したように決められた後、開始された学期において、できるだけ速やかにどの生徒が教育を受けるかを決定し、できるだけ教師によって直接に教えられるように、それらの学校児童をそれぞれの進歩に応じて、ある学年またはグループに分ける。

#### 3. [学校への入学]

学校への入学は、学期の始めにおこなわれる。または特別な事情が生じた場合は、学校評議会の議長が許可を出した場合には学期途中でも認められる。

#### 4. [民衆学校の教科]



民衆学校で教えられるべき教科は、児童がはやく読み方にかわって書き方や算術を練習できるように、適切な順序で授業が組織される。聖書の歴史の授業は、教理問答の授業の後ではなくて、前に行われる。その他の教科の授業は、決められた時間をこえてなされてはならない。

5. [学習指導の方法]

学校における練習は主として生徒の精神的な能力の発達を目的としており、教師がまだ説明していない学習教材を生徒に作業させてはならない。

6. [授業時間]

民衆学校における一日の授業時間は、6時間をこえてはならない。また、午前も午後も1時間ごとに必要な休憩をとらなければならない。

7. [巡回型学校における試問]

学校評議会は、巡回型学校に関して分校における試問の実施に関する民衆教育令第9条第2項で定められた規定を正確に遵守すること。

8. [離学]

学校から離れることを希望する生徒には、その生徒が成し遂げた進歩を確かめるために試験(prövning)がおこなわれる。そして、その結果によって教師による成績証明が生徒に伝えられる。それによって学校を離れる許可を得る生徒に関しては、彼らの学校時代において示された勤勉さや品行に関する成績証明も渡されるべきである。

9. [離学後の指導]

離学した児童のために、ある時期において教師の指導のもとに、すでに獲得した知識を維持し、その知識をさらに上達させる機会が準備されなければならない。

最後に私は監督管区の民衆学校に関する視察のために提出された報告書を宗務省から聖堂参事会に送付するために印刷することにした。私は、この報告書にある情報と提案によってその必要にせまられていることを見いだしたのであるが、聖堂参事会に対して、様々な地域の状況に応じた、追加的措置をとることを任せたい。また、来年度の終わりにその措置について報告することをもとめたい。

[訳者注]

---

<sup>1</sup>学校評議会は、1862年にコミュニオンが制度化されたことにより、民衆教育令の学区委員会が名称を変更したものである。

# A study of the Early Stage of Otto Salomon's Sloyd education — analysis of the practice of the Nääs Sloyd school for Boys (1872–1876) —

Etsuo YOKOYAMA

1. Previous studies and the thesis
  2. Salomon's interests in education before 1874 and practice of sloyd education
  3. Sloyd Education after the structural reform in 1874 (up to 1876)
  4. The cause of change of sloyd as a part of general education
- Conclusion

key words ; Otto Salomon / sloyd / integration of sloyd school and folk school / the Nääs Sloyd School for Boys / Uno Cygnaeus

In this paper, I mainly analyzed the practice of early Sloyd education of the Nääs sloyd school for boys. The Nääs Sloyd School for Boys, which was found in 1872, lowered the entrance age to 10 to 11 years old in 1874, changing to Sloyd school while retaining its folk school side. The school taught home Sloyd as Sloyd education in 1872, but also introduced many general subjects with the reforms of 1874 when Sloyd education had changed to the teaching of general skills. From his analysis of the practice of the Nääs Sloyd School for boys (1872–1876), Salomon had come to the conclusion that Sloyd education should be a part of general education even before he met Cygnaeus in 1877.

From 1876 Salomon had already noticed the effect of restricting Sloyd education to wood work. Salomon found that the teaching wood work as general education was beneficial in that it was necessary to people to use tools in their daily life, promote physical strength, and yield the production of items useful for daily life. When the Nääs Sloyd School for Boys was started in 1872, the purpose of Sloyd education was teaching home Sloyd. But the reforms of 1874 and the introduction of more general subjects lowered the number of time allocated for Sloyd education changing its purpose to “teaching general skills”. Regarding the teaching method, changes were made from the traditional way of

craftsman to using a knife.

There was a problem about integrating Sloyd schools into folk schools at the time when the development of popular education system was occurring. The Sloyd school, which received its pupils from farmers' children, could get enough pupils only by the integration of Sloyd schools and folk schools. Thus, it was necessary for Sloyd schools to lower the number of time allocated for sloyd education and to change the purpose of sloyd education from teaching home Sloyd (in other words, selling products as a rural industry) to teaching Sloyd as general education. On the other hand, folk schools, which were biased toward theoretical study, were also encouraged to become more acceptable for farmers with the introduction of Sloyd as a subject as well as teaching both of theoretical and practical subjects.

## 1. Previous studies and the thesis

### A) Thesis

Swedish sloyd education had a major influence on the manual training of the world in the 1880s to 1900s<sup>1)</sup>. I have been interested in Swedish sloyd education in respect to technology education, and study the details how it influenced the world and the historical background it formed in the northern Europe<sup>2)</sup>. In this paper, I will observe Otto Salomon

(1849–1907), who made notable achievements in the idea and didactics of sloyd education, define the characteristics of the practice of Salomon's early sloyd education, especially at the Nääs sloyd school for boys, and examine the influence of Uno Cygnaeus, who is known as “the father of folk school” in Finland.

#### B) Previous studies

There are some previous researches which refer that Uno Cygnaeus<sup>3)</sup> influenced Otto Salomon's idea about sloyd education<sup>4)</sup>. For example, Iwao Matsuzaki states “Salomon visited Cygnaeus in 1877 and Salomon's idea of sloyd education was influenced by Cygnaeus”;

- i. “Sloyd should not be based on economical need but educational reason.”
- ii. “Sloyd should be treated as a part of general education rather than vocational (education).”
- iii. “Sloyd should be taught by teachers not craftsmen.”
- iv. “In folk schools sloyd should be taught by regular teachers not professionals.”

Matsuzaki thinks this first visit to Cygnaeus in 1877 was very significant<sup>5)</sup>. This is noted in Benett's “History of Manual and Industrial Education 1870–1917” written in 1937<sup>6)</sup>. Then Toshiaki Endo says “the biggest influence Cygnaeus made on Salomon was making him introduce sloyd as a subject in folk schools” and, along with Matsuzaki, thinks their visit important<sup>7)</sup>. In addition, Yusin Honda thinks sloyd education at the Nääs sloyd school for boys was just vocational training before Salomon met Cygnaeus in 1877 and agrees with the importance of their first meeting<sup>8)</sup>.

With regards to the study of sloyd outside of Japan, Benett's “History of Manual and Industrial Education 1870–1917” mentioned Salomon's sloyd education during the same period and said “sloyd had been on an economic basis”, “the sloyd was still essentially home sloyd”<sup>9)</sup>. In the 1990s, works written by Hans Thorbjörnsson (1990)<sup>10)</sup> and Hans Joachim Reincke (1994)<sup>11)</sup> also refer to Salomon's sloyd education. However these studies were focused on systematized educational sloyd which was completed in the mid 1880s. Their

opinions about Salomon's early sloyd education were basically the same as Benett's, namely they just introduced sloyd in the 1870s as the “pre-history” of educational sloyd.

From the statements above, all previous studies did not examine the practice of Salomon's Sloyd education which had done before May 1877. These studies regarding early sloyd education are more or less in line with Benett's study in 1937.

In this paper, I will detail the practices at the Nääs Sloyd School for Boys before Salomon met Cygnaeus in May 1877 in order to examine the idea of sloyd education as general education in May 1877 and Cygnaeus's influence to the idea of Salomon's educational sloyd focusing on the development of the idea that sloyd education as general education.

## 2. Salomon's interests in education before 1874 and practice of sloyd education

#### A) Salomon's personal history and interests in education

Otto Salomon was born to Jewish parents in November 1849 in Göteborg. Jews composed the first wave of immigrants to Sweden at that time<sup>12)</sup>. His paternal grandparents, Benjamin Salomon and Sophia Salomon, emigrated from the town of Goldberg of Mecklenburg in northern Germany to Sweden in the 1780s. There was fear of foreigners in Sweden at that time<sup>13)</sup> and as such they were only allowed to engage in commercial activities and handicrafts that did not interfere with the law of guild in their economic activities. Salomon's maternal grandfather, Aron Abrahamson was a medal worker<sup>14)</sup> in Prussia, but he worked as a shipping agent after his emigration in 1812. It was in 1859 that Jewish children were allowed to enter Swedish schools and it was in 1870 that Jews received complete civil rights.

Salomon studied at several private schools for seven or eight years, then entered the Gymnasium school in Göteborg in 1864 and passed the university entrance examination in the spring of 1868. Then he entered the one-year course at the Stockholm Institute of Technology in the autumn<sup>15)</sup>.

Unfortunately for Salomon, the wife of August Abrahamson, his maternal uncle, died in February 1869, and Salomon's relatives persuaded him to manage his uncle's land by his relatives. He decided to give up studying at Stockholm Institute of Technology after long consideration and end up studying in the Ultuna Institute of Agriculture from October 1870 to the summer of 1871 as a special student. Then he moved to Nääs, which is located 30 kilo-meters east of Göteborg. Just after moving Salomon visited a folk school near Nääs and taught at a Sunday school for children founded by Jenny Berg. It is obvious that Salomon possessed a strong interest in education.

#### B) Founding the Nääs sloyd school for boys and the contents of the education

Abrahamson, Salomon's uncle, offered a donation to found a sloyd school to the school commission of the parish where he lived, however it was used for the upkeep a pre-school<sup>16)</sup> that had already been founded. So the sloyd school was not found at the time. Then in February of 1872<sup>17)</sup>, Abrahamson who was interested in all kinds of practical working, especially hand skills related with it from the heart, found the Nääs sloyd school as a private sloyd school that accepted boys who lived in and around Nääs and had graduated folk school<sup>18)</sup>. The Nääs sloyd school was one of many founded in the 1870s in the boom following the decline of the home sloyd in the late 1860s<sup>19)</sup>. The subjects adopted by the Nääs sloyd school for boys were mathematics, technical drawing<sup>20)</sup> and fret-saw<sup>21)</sup>. Mathematics and technical drawing were taught by Salomon himself and fret-saw was taught by C. A. Borgström who was a sloyd instructor.

A new schoolhouse which had practical equipment was completed in July 1872<sup>22)</sup>, and woodwork was added as a subject. This was taught by Alfred Johansson who had been a sloydman at a farm<sup>23)</sup>. It is said that in the first year rakes and handcarts were made<sup>24)</sup>. During this period the purpose of sloyd education was to teach the necessary skills to make tools that were useful for farmers. This was the same purpose of home sloyd. The school was opened 10 hours each day, six days a week (Mon-

day to Saturday), and 50 weeks a year<sup>25)</sup>. Sloyd lessons lasted seven hours of each day and the three remaining hours were spent on other subjects. Woodwork added woodturning and sculpture. Saddlemaking was also added for particular pupils. Fret-saw was thought as unnecessary during the first year, then it was removed. Pupils received 40 ore per day as compensation because their parents<sup>26)</sup> were poor and could not afford enough time for schooling or lost help on farms. However it became well-known that Nääs graduates got better jobs, so this system was abolished in 1877.

### 3. Sloyd Education after the structural reform in 1874 (up to 1876)

In this section, I will describe the main thesis, sloyd education after 1874.

#### A) Lowering of the entrance age of sloyd school

As mentioned above, the Nääs sloyd school accepted boys who had graduated folk school (over 12 years old) when it was founded. However it lowered the entrance age two years in 1874 because it became clear that sloyd education was a basic one and not a extracurricular subject<sup>27)</sup>. Then "the entrance age to sloyd school became the same as that of the upper part of folk school"<sup>28)</sup> and it became "a private higher folk school."

Then the curriculum was changed to include Christianity, history and geography, mathematics and geometry, Swedish, science, fair copying, technical drawing, military training, and sloyd. Sloyd was composed of woodwork, woodturning, and sculpture. Mathematics, geometry, and technical drawing were given longer lesson time than at ordinary folk schools<sup>29)</sup>. Salomon explained that this sloyd school was "gradually becoming a folk school with remarkable sloyd lessons<sup>30)</sup>."

#### B) Practice of the Nääs Sloyd School for Boys around 1875

Salomon thought back later (1891) that "the attempt to produce a basic idea of Swedish educational sloyd (svenska pedagogiska slöjdundervisning) was done around 1875"<sup>31)</sup>. One of the features of this experiment was restricting the content of sloyd lessons to one or the relations. As the

result in 1876 he said it made clear the merit of focusing on woodwork. "From the theoretical point of view, it seemed that teaching knowledge and skills about various kinds of sloyd to all pupils had much value, however actually it did not. That is, diffusion into various areas generally caused partial skills and vague and incomplete knowledge. Using many kinds of tools prevented pupils from certain mastering for anyone". The merit found in woodwork was "to master the tools the pupils often used their daily lives, for example saws, planes or hammers, to develop their physical strength by standing at a woodwork table and using these tools instead of reading books or sitting on the drafting desk, and to enable students to make something useful for their daily lives"<sup>32)</sup>.

Another new feature of the curriculum at the sloyd school for boys was "to organize (sloyd teaching) in a way that caused actual educational change". The methods used in "the educational sloyd teaching" were "different from the traditional ways of training a craftsmen", and in traditional ways, "pupils learned how to use tools and teach operation extracting it from actual work first (this is called pre-exercise; förövning). Then they made real product. It moves from the abstract to the concrete. On the other hand, "educational sloyd teaching" is "complete opposite", and it goes from the concrete to the abstract. With craftman training first learned how to use a saw as the first tool, however "educational sloyd teaching" defines a knife as "the basic tool". The knife was "the most popular tool" and "the most essential for acquiring the general skill". Moreover Salomon also said that for a sloydman "it is important to make something of use with using only a knife"<sup>33)</sup>.

As mentioned above, Salomon found the value of qualifying sloyd with respect to woodwork in 1876. That is, he found that the place of sloyd education as general education lies in the facts that in woodwork pupils needed to use tools they see their daily lives, woodwork promoted their physical strength to develop, and they could make something useful for their daily lives. It is thought that in 1872, when the Nääs sloyd school for boys was founded, the purpose of sloyd education was

simply to teach home sloyd, however by adopting more general subjects in Salomon's organization reform two years later, the class time distributed to sloyd classes was lowered, and the purpose of sloyd education was "to acquire general skills". In addition, of teaching method, was changed to include using knives in a "traditional way by craftsman". This was caused by the change for the purpose of "acquiring general skills".

#### 4. The cause of change of sloyd as a part of general education

##### A) Integration of sloyd schools into folk schools

Sloyd schools, founded in the 1870s with the situation the decrease of home sloyd at Swedish agricultural districts in the mid 1860s to around the 1870, faced this problem in the mid 1870s after Primary Public Education Act of 1842 and the diffusiorn of folk school. The organization-reform at Nääs Sloyd School for Boys was one of the examples.

Salomon argued the necessity of integration of sloyd schools into folk schools in "slöjdskolan och folkskolan I (Sloyd school and folk school I)" (1876), the reason was "it is well-known that physical labor parents cannot spend time to educate their children and do not hope that. It is seldom that the ages of folk school pupils are over 14 years old. Their parents hope their children to help to work with them as soon as they got physical strength to make something useful for their houses, and cannot manage their daily life without their help. So mostly children have to put books and pen and give up studying after they studied the least knowledge at schools. Instead of studying they have to devote their time and power for working at their home or others. From this unfortunate fact, sloyd schools have to invite pupils from folk schools without special support." "Of course sloyd schools may be independent from folk schools. In other words, it may be going to become to invite students who have diplomas of folk schools. However these situations must be thought as exceptions now and near future"<sup>34)</sup>.

There was a situation that sloyd schools that seems children at poor farmer families as targets

was unified with folk schools, and then they got enough pupils, however because of it the class time for sloyd was decreased. Then, sloyd at there needed to change to be more general character, but home sloyd that has purpose to sell their products.

#### B) Introduction of practical study into folk school

On the other hand, folk schools are needed to be closer to farmer families also by introducing sloyd as its class, and combining theoretical study and practical study and change itself. It was needed also the view of increasing the number of entrance into folk schools. Elfsborg home sloyd association invited answers for "how will it be able to integrate sloyd schools and folk schools?" from the public in a prize contest at 1876, and there were some studies in "Slöjdskolan och folkskolan II" edited and published by Salomon. It showed that this problem was one of the important themes of Swedish folk schools reforming at that time.

#### C) Problems about sloyd teacher training

In addition to above, there were problems about sloyd teachers and training sloyd teachers. Salomon felt the necessity of training sloyd teachers through the situation that many sloyd schools were founded anywhere in the 1870s, and he made the plan of training center of sloyd teachers in spring of 1874<sup>35)</sup>. Then he started one year course of the Nääs sloyd teacher training center for people over 18 years old and experienced sloyd, in the autumn. In the plan he said "Teachers must not forget that they are not only 'undervisare', but also 'uppfostrare'". "What they think, what they say, and what they do must be the same for teachers", "what especially important is to be able to express their opinion and teach their knowledge well to their pupils." In addition, sloyd teachers must "have great skills of sloyd they teach, have joy to work, be good worker, keep things neat and tidy, and be responsible." Then they must always remember the truth that school is also teacher." Then, in the concrete plan, the educational contents of sloyd teacher training were composed by four fields that 1. mathematics and geometry, 2. natural science, 3. technical drawing, and 4. sloyd. About sloyd, "knowledge and skills of various tools, exercising to repair and make easier kitchen tools, exercising

to repair the parts of building, making small or regular size furniture, making working-car, wheels or frames of handcart, skill of forging or filing" were the subject. At the point of 1874, it is not only woodwork and forging or filing were included, and it tried to teach home sloyd that "making furniture, working-car, wheels or frames of handcart," and these shows that it was in the step of trial.

Several years from then, about the sloyd teacher training, Salomon said "trial lasted long time because there were nothing similar places and I could not get previous trials<sup>36)</sup>". However he said in 1876 about the possibility that folk school teachers teach sloyd that "people who teach sloyd at folk schools generally does not need the eminent skills about the sloyd they teach". "If folk schools should accept to train craftsmen (carpenter, blacksmith, engraver, or basket worker – by Salomon), it is important that the teachers of this education were craftsmen." "However purpose of sloyd education at folk schools is making pupils love work as something joyful on the one hand, and as the necessary thing for their future's on the other hand. Then, it makes them think about the useful uses and study to make with their hands by themselves, and it is to teach the knowledge and skills to use general tools."

According to above, about the problem of ability of sloyd teachers at folk schools, Salomon reached at the opinion that they does not need to have eminent skills, but knowledge and skills to use general tools at the point of 1876.

Salomon was negative to train craftsmen as sloyd teachers. Sentences below are quotation from Salomon's writings in 1891, and it seems that Salomon noticed that craftsmen were not always good for sloyd teachers. "A well-skilled person in particular field is not a good teacher (pedagog) at the same time, and he will not put himself into pupils, pupils will be put next to him." "Generally craftsmen do not think the important point that education should be given step by step, and his relationship to pupils will be helper rather than a leader." "It is seldom that craftsmen understand the educational idea that must be put as the base of school sloyd (skolslöjden)." "It is difficult that



craftsmen understand that the purpose of work is not to complete the products." "Therefore, the actual way from the view of craftsmen differs from the educational purpose. And teaching by craftsmen will be harmful rather than beneficial". "Craftsmen try to upkeep the tradition of their atelier faithfully, and the relationship that craftsmen and apprentices rather than teachers and pupils lasts long." "Craftsmen do not think important that pupils learn to work independently, and they work instead of pupils or work the most important point." "The schools taught by craftsmen make good products, but not good workers<sup>38)</sup>."

## Conclusion

In this paper, I analyzed the practice of early sloyd education before 1876 and the training of sloyd teachers through mainly the explanation paper of the Nääs sloyd school for boys and the plan for the sloyd teacher training school written by Salomon in 1891<sup>39)</sup>.

In this paper, I mainly analyzed the practice of early Sloyd education of the Nääs sloyd school for boys. The Nääs Sloyd School for Boys, which was found in 1872, lowered the entrance age to 10 to 11 years old in 1874, changing to Sloyd school while retaining its folk school side. The school taught home Sloyd as Sloyd education in 1872, but also introduced many general subjects with the reforms of 1874 when Sloyd education had changed to the teaching of general skills. From his analysis of the practice of the Nääs Sloyd School for boys (1872–1876), Salomon had come to the conclusion that Sloyd education should be a part of general education even before he met Cygnaeus in 1877.

From 1876 Salomon had already noticed the effect of restricting Sloyd education to wood work. Salomon found that the teaching wood work as general education was beneficial in that it was necessary to people to use tools in their daily life, promote physical strength, and yield the production of items useful for daily life. When the Nääs Sloyd School for Boys was started in 1872, the purpose of Sloyd education was teaching home Sloyd. But the reforms of 1874 and the introduction of more general subjects lowered the number of time allocated

for Sloyd education changing its purpose to "teaching general skills". Regarding the teaching method, changes were made from the traditional way of craftsman to using a knife.

There was a problem about integrating Sloyd schools into folk schools at the time when the development of popular education system was occurring. The Sloyd school, which received its pupils from farmers' children, could get enough pupils only by the integration of Sloyd schools and folk schools. Thus, it was necessary for Sloyd schools to lower the number of time allocated for sloyd education and to change the purpose of sloyd education from teaching home Sloyd (in other words, selling products as a rural industry) to teaching Sloyd as general education. On the other hand, folk schools, which were biased toward theoretical study, were also encouraged to become more acceptable for farmers with the introduction of Sloyd as a subject as well as teaching both of theoretical and practical subjects.

Salomon had the idea that craftsmen were not always suitable for sloyd teachers in folk schools. However, folk school teachers, who can understand educational meaning and teach love for work and correct knowledge to use usual tools, were more suitable.

Salomon met Cygnaeus first when he visited Finland on May to June of 1877. Though this paper did not refer, they had kept in touch with each other for 10 years after that. I read their letters, and found that the biggest difference between them was concept of sloyd schools, and their views ran parallel<sup>40)</sup>. That is, Cygnaeus distinguished sloyd schools that taught vocational education from folk schools that taught primary popular education. Salomon thought, however, that sloyd schools would disappear and reorganized as folk schools by integration into folk schools.

As a conclusion, i, ii, iii, and iv indicated by Matsuzaki were reached by Salomon from his practice at the Nääs Sloyd School for Boys in 1874-76, and these points were not taught by Cygnaeus. In this paper I mentioned the idea of Otto Salomon and the practice at the Nääs Sloyd School for Boys before he composed concrete teaching materials as

the model series called “educational sloyd”. I will analyze Salomon’s development in 1880s to 1890s in other papers.

[Note]

- 1) At the same age people from over 40 countries joined the course at Nääs. Then they wrote the books or papers about the sloyd education after going back their countries and they also influenced many countries indirectly.
- 2) Refer the some of the achievements; Etsuo Yokoyama, *The educational exchange of Japan and Sweden during the period of formation of handicraft subject in Japan – The reevaluation of sloyd influenced Japanese handicraft subject*, The bulletin of Graduate School of Education and Human Development (science of education), Vol.50 No.2, March 2004. Etsuo Yokoyama & Ulla Johansson, *The Introduction of Sloyd into Swedish Elementary Schools*, The bulletin of Graduate School of Education and Human Development (science of education), Vol.51 No.2, March 2005.
- 3) Uno Cygnaeus (1810 – 1888) was a person who relates the founding of the system of folk schools (folkskola) started in 1866 at Finland, and introduced manual training to compulsory curriculum at the first in the world. At that time Finland was under the control of Czarist Russia, Finnish autonomy government invited the opinion about the organization of folk school at 1856, Cygnaeus’s opinion was evaluated well then. He was sent to inspection of European educational situation (Sweden, Denmark, Prussia, Zaksen, Austria, Switzerland) for one year in 1858. The strongest impression he felt in the educationalists he met during this travel were Rudenshöld who was the promoter of folk education at Sweden and Disterberg who was the successor and spreader of Pestalozziism at Prussia. Then at Switzerland, “there was already 30 years after the death of Pestalozzi but great practice at primary school and normal school gave him the great impression.” The inspection report and suggestion he wrote after this travel became the base of Finnish folk school system started in 1866. Before it, a normal school was founded at Jyväskylä in 1863, Cygnaeus was the principle of the school and the curriculum included manual training and agriculture. (Matsuzaki, Iwao, *The idea and practice of sloyd education – Cygnaeus and Salomon*, Gijutsu kyōiku, May 1973, p.51)
- 4) Honda says in *Uno Cygnaeus and manual training* (Nihondaigakukenyūkai, Kyōikugakuzasshi, No.50, 2005), (Endo, Toshiaki says) “*Otto Salomon started to think that the folk school teachers who got the training based on pedagogy were the best for teaching sloyd class at folk schools,*” but this is not his idea, this is taught by Cygnaeus when he went to meet him at Jyväskylä Finland in 1877, so this is Cygnaeus’s idea. (p.10) Then, he “*Salomon stopped to regard craftsmen as teachers and let them teach the vocational education, and introduced the idea of Cygnaeus, collect folk school teachers and started to teach teaching method of manual training as general education.*” (p.9)
- 5) Matsuzaki, Iwao, *The birth and development of educational sloyd*, The bulletin of Aoyama Gakuin Women’s Junior College, No.18, 1964.
- 6) Then, the description about the Nääs Sloyd School for Boys by Matsuzaki (5) includes obvious mistakes (e.g. the Nääs Sloyd School for Boys was founded in 1868 and reformed in 1872, the name of it was “*arbetsskolan*”, the contents of it after the reforming of 1872), however these were written by based on Bennett’s. (C.A. Bennett, *History of Manual Education and Industrial Education 1870-1917*, pp.55-62.) Then, the point that Matsuzaki says “*it was not thought that sloyd was one of the general education*”, Bennett says “*sloyd education by 1876 was essentially home sloyd and it was based on economical reason.*” (ibid, pp.62-63.)
- 7) *Study about sloyd education – The historical process from the end of 19th century and modern meanings*, Ph.D. paper of Tsukuba University, unpublished, 1993.
- 8) Honda says “*in 1872, Otto Salomon started the vocational education school for boys graduated folk schools at Nääs, Sweden. Then there were many similar schools in Sweden, Salomon found the importance of training the teachers and*

- founded the training the teacher course for training craftsmen who had high-awareness at vocational education to teacher of manual training class in the next of his school. He devoted himself to popularize and develop the vocational education." ... Then, he pointed Matsuzaki's "The birth and development of educational sloyd" as the basis.
- 9) See (6). Then Bennett wrote the chapter about Northern European sloyd education (Sloyd and Scandinavia) only from the documents written by English, and he did not refer to Swedish documents. There are many documents written by Salomon and have never translated in English for example "*Slöydskolan och folkskolan I*" (1876), I refers in this paper.
  - 10) Hans Thorbjörnsson, *Nääs och Salomon – slöjden och leken*, 1990
  - 11) Hans Joachim Reincke, *Slöjd – Die schwedische Arbeitserziehung in der international Reformpädagogik* –, PETERLANG, 1994
  - 12) At least 2000 darel as fund was needed to settle in Sweden and acquire the warranty on business. Darel was a currency unit used in Sweden at that time, and the annual income of usual labor was under 100 darel at that time, so only wealthy Jewish was given a welcome. (Eva Helen Ulvros, *Sophie Elkan*, s.27, 2001).
  - 13) David Glück, Aron Neuman, Jacqueline *Stare, Sveriges judar*, 1997
  - 14) Aron Isaac, his father was stampengravor (sigillgravören).
  - 15) Later Tekniska högskolan (Stockholm Institute of Technology)
  - 16) As the educational system, infant school was 2 years course or 3 years course, then people went to folk school (if the infant school was 2 years course, the completion time was 4 years and if it was 3 years, it was 3 years). Popular education at that time was 6 to 7 years at the longest (7 to 14 years old). There were schools that pupils go to every other day (varannandagskolan) or the moving schools that teachers go round some school (ambulerande skolor) in agricultural district that most of people lives. Children at farmer village work at farm according to their age, and the resist (motstånd) from their parents against school education lasted by the 1920s in a district. (Mats Sjöberg, *Att säkra framtidens skördar – Barndom, skola och arbete I agrar miljö: Bolstad pastorat 1860 – 1930*, Linköping universitet, 1996 ) Then, the teachers of infant schools were all women and called småskollärarinna.
  - 17) By Popular Education Act in 1842 (Kungl. Stadgan den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket), the idea that every people have to take general education, however it took very long time to spread this folk school (folkskola). This circumstance was striking at agricultural district and it took 80 years to diffuse 4 years compulsory study at schools to families need the child-labor (In agricultural village, school that students go every other day "varannandagskolan" was by the 1920s). I showed the graph of the situation of entering schools including these irregular style schools. In addition, there is not suitable Japanese document about Swedish educational situation at that time, so it has to leave out the tendency of whole Swedish folk school system in this paper. About details, see "*Svenska folkskolans historia del 2 (1860 – 1900)*." This book was published in 1942 that just 100 years later after founding the folk school system.
  - 18) There is a historical source ("Om Nääs slöjdskolor") written by Otto Salomon about the Nääs Sloyd School for Boys in 1876 as a record of it. It is thought that this source has been written for the display of Philadelphia exposition in the year. Later, there is a booklet called "*Något om Nääs och dess läroanstalter*" that composed the record of the practice of Nääs written by Salomon in 1891. The description below is based on this booklet of 1891 (The reason the author picked up this booklet is this one describe the details than the one of 1876). This booklet is made as the explanation source for Oskar II who was the king of Sweden and visited Nääs on August 8<sup>th</sup> of the year. In addition, there is the report of Salomon at the lecture of June 30<sup>th</sup> in 1897, the 25<sup>th</sup> anniversary of the Nääs Sloyd School for Boys as "Högtidstal" in "Slöjdunder-

- visningsblad från Nääs" No.147, 1897. jun. Then after the death of Salomon, in 1942, in the year of 70<sup>th</sup> anniversary of the Nääs sloyd school for boys, a commemorative magazine was published and it also introduces the sloyd school for boys (*ibid*, p.31-p.35), but actually it introduced the booklet written in 1891.
- 19) Per Hartman, *Slöjd för arbete eller fritid?*, 1984, s.9. Then, home sloyd (hemslöjd) is to make something needed in farmer's daily life by easy tools in usually in agricultural district, according to the district the products are made for not only use in their home, but also selling as regional special products. It is said that it was decreased from the late 1860s by spread of cheap products by industrialization or change of working situation at agricultural district, and it revived in the 1870s.
- 20) Technical drawing was the one of the subject that Otto Salomon thought important. Salomon said the skill of sloyd (slöjdfärdighet) was supported by the skill of technical drawing (ritfärdighet), there were three classes per every other day (nine classes per week) for technical drawing (*Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.27). In addition, Salomon published *Kortfattad handledning i linearritning* (the guide for technical drawing) in 1876. Then, at that time there were two different views about drawing education at folk schools. One was sketch by free hand (frihandsteckning) and another one was technical drawing. Salomon thought technical drawing was important from the point of view that folk schools teach the skills that it did not mention the difference of the personal talent ("Om Nääs slöjdskolor" 1876. s.6.).
- 21) Salomon said fret saws (löfsågning) started to become popular in Sweden at that time (Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13).
- 22) The completion ceremony was held in June 30<sup>th</sup>, and the person who delivered the congratulatory address was Erik Sparre who was the governor of Elfsborg prefecture. He was a member of the National assembly and also the representative of the home sloyd association of the prefecture. He dealt with sloyd education problem and made a motion about the introduction of sloyd education to folk schools in National Parliament in 1876. (It was rejected in that time, but next year the bill about the subsidy for the school which has sloyd education passed.)
- 23) Although slöjdare can be changed to sloydman, according to the encyclopedia called *Ordbok över Svenska Språket utgiven av Svenska Akademien* (vol.28), slöjdare means the people employed to farm as same as farmer (statare) but made something needed for farm and get salary a little bit higher than them.
- 24) The description written by Salomon in 1891, the sentence that "it was strange (to make a rake and a handcart in the sloyd class)" was added, however it is thought that it means that it is thought from the view of educational sloyd (of the point Salomon reached in 1891).
- 25) According to the source written in February 1876 ("Om Nääs slöjdskolor"), school was open from 6 a.m. to 7 p.m. in summer time (two hours of them were break time) and 7 a.m. to 6 p.m. in winter time.
- 26) Salomon expressed as the parents of working class (kroppsarbetarnes klass), but it is thought that it means "statare". Then, a daily allowance of that time was about 1 krone (100ore).
- 27) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.13
- 28) Upper part means grade 5 and 6 in the case of infant school was grade 1 and 2, and when children entered in 7 years old, pupils are 11 to 12 years old.
- 29) About the data refers to class time of subjects after the reforming of the curriculum of the Nääs sloyd school for boys of 1874, there is a reply to the author from Göteborg public document library (October 12, 2005). More details are unknown now. "In the archive of August Abrahamssons stiftelse (foundation), there are a few copies of certificates of 1875 and 1876. According to that, there is no tables about whole subjects they studied. The subjects are different between pupils. Subjects written in these copies are arithmetics (räkning), mathematics, drawing

- (ritning), technical drawing, physics, forging, music, German, English, general knowledge (allmän kunskap). There is no description about lesson time of the subjects.
- 30) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.18  
It is not well-known whether there are the system or concept about term of study or completion term in the 1870s at the Nääs Sloyd School for Boys. The number of pupils in 1876 were 12, and the age was 12 to 16 years old (Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876 s.73). This Sloyd School was closed in 1888. On the other had, the record of pupils (Examens Katalog) of Nääs folk school (Nääs folkskola) which in the same district is in the archive of Lerums kommun. According to the data (it is about 1881 to 1889), this folk school is three year course and had grade 1 to 3.
- 31) *ibid.*, s.19  
32) *ibid.*, s.21-s.22  
33) *ibid.*, s.26  
34) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876 s.26-s.27  
35) Otto Salomon, 'Något om slöjd och slöjdundervisning samt plan till seminarium för utbildande af slöjdlärlare' *Lansbruksakademins Tidskrift*, nr.5, 1874, s.303-s.312  
36) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.43  
37) Otto Salomon, *Slöjdskolan och folkskolan I*, 1876, s.39-s.40  
38) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, s.41-s.42  
39) Otto Salomon, *Något om Nääs och dess läroanstalter*, 1891, Otto Salomon, 'Något om slöjd och slöjdundervisning samt plan till seminarium för utbildande af slöjdlärlare' *Lantbruksakademins Tidskrift*, nr.5, 1874, s.303-s.312 Salomon said "model series composed by this idea (it means the idea what this paper introduced – the author) was opened to the public in 1877 and it was given the prize in the sloyd exhibition at Elfsborg" in this paper written in 1891 (*Något om Nääs och dess läroanstalter*, s.27). "Model series" of Salomon's educational sloyd that I can verify are after the early 1880s and this model series made in 1877 is not verified.  
40) Some of these letters are introduced in my other study (Yokoyama, Etsuo. *About the formation of "educational sloyd"*. Technology and Education. No. 362. Feb. 2004.). As long as the author read these letters, it is thought that the influence Salomon got from Cygnaeus is to be taught the necessity of studying of result of pedagogy of German area, like Pestalozzi, Fröbel, or Distelberg. I will investigate this point in other paper. Salomon bought books about these pedagogy by about 1880 after coming back from Finland and wrote *Slöjdskolan och folkskolan IV* (1882), *Slöjdskolan och folkskolan V* (1884) with the result of the study.

**A study of the Early Stage of Otto Salomon's Sloyd education  
— analysis of the practice of the Nääs Sloyd School for Boys (1872-1876) —**

**Etsuo YOKOYAMA \***

In this paper, I mainly analyzed the practice of early Sloyd education of the Nääs sloyd school for boys. The Nääs Sloyd School for Boys, which was founded in 1872, lowered the entrance age to 10 to 11 years old in 1874, changing to Sloyd school while retaining its folk school side. The school taught home Sloyd as Sloyd education in 1872, but also introduced many general subjects with the reforms of 1874 when Sloyd education had changed to the teaching of general skills. From his analysis of the practice of the Nääs Sloyd School for Boys (1872-1876), Salomon had come to the conclusion that Sloyd education should be a part of general education even before he met Cygnaeus in 1877.

From 1876 Salomon had already noticed the effect of restricting Sloyd education to wood work. Salomon found that the teaching wood work as general education was beneficial in that it was necessary to people to use tools in their daily life, promote physical strength, and yield the production of items useful for daily life. When the Nääs Sloyd School for Boys was started in 1872, the purpose of Sloyd education was teaching home Sloyd. But the reforms of 1874 and the introduction of more general subjects lowered the number of time allocated for Sloyd education changing its purpose to "teaching general skills". Regarding the teaching method, changes were made from the traditional way of craftsman to using a knife.

There was a problem about integrating Sloyd schools into folk schools at the time when the development of popular education system was occurring. The Sloyd school, which received its pupils from farmers' children, could get enough pupils only by the integration of Sloyd schools and folk schools. Thus, it was necessary for Sloyd schools to lower the number of time allocated for sloyd education and to change the purpose of sloyd education from teaching home Sloyd (in other words, selling products as a rural industry) to teaching Sloyd as general education. On the other hand, folk schools, which were biased toward theoretical study, were also encouraged to become more acceptable for farmers with the introduction of Sloyd as a subject as well as teaching both theoretical and practical subjects.

key words; Otto Salomon/Sloyd/integration of sloyd school and folk school/the Nääs sloyd school for boys/Uno Cygnaeus

---

\* Associate Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University.



特集 工作教育の歩み

## スウェーデンにおける教育的スロイド(教育的スロイド)の誕生とその後の展開

名古屋大学 横山悦生

1. スウェーデン語のスロイド (Slöjd) という言葉は元来「器用な人」をスロイダレ (Slöjdare) と呼んでいたことと関連していた。スウェーデン・デンマーク・ノルウェーは中世においてはヴァイキングとしてヨーロッパ各国との交易やときには略奪をおこなったことで知られている。ヴァイキングは日常生活においては農民であった<sup>(1)</sup>。北欧に住む農民の住居形態は、散居といわれ、点在して住んでいた。そこで、かれらは生活や生産にかかわるものを多くは自分たちで製作して暮らしてきた。この伝統は19世紀に至るまで農民の生活の中に生きてきたが、その伝統を、民衆を対象とする学校教育の中に導入し、今日に至るまで(約140年)普通教育のなかで実践されてきたのが、スロイド教科である。

2. スウェーデンにおいて、1870年代半ばにおいて当初はスロイド学校という形態で多くのスロイド教育は実践されたが、このときは必ずしも普通教育として実践されたわけではなかった。ストックホルムやヨーテボリのような都市部では、1880年代までは職人によってさまざまな手工(例えば金工や製本など)が職業教育として教えられていた<sup>(2)</sup>。このような性格をもつスロイド教育を大きく転換させたのが、オットー・

サロモンであった。彼はスロイド教育の教材を木工に限定し、1882年にはモデルシリーズと呼ばれる一群の教材集を完成させた。



オットー・サロモン  
(50歳当時)

さらに、それをネースでのスロイド教員養成所での講習会において参加者との討論などによって発展させていった<sup>(3)</sup>。ここに「教育的スロイド」が誕生したと考えられる。「教育的スロイド」とサロモンが名付けた理由にはさまざまなことが考えられるが、なによりもスロイド教育の目的を道具の正しい使用法に関する技能を教えることだけではなく、「形式的陶冶」においたことと関連している。それは具体的には以下のようなものである<sup>(4)</sup>。

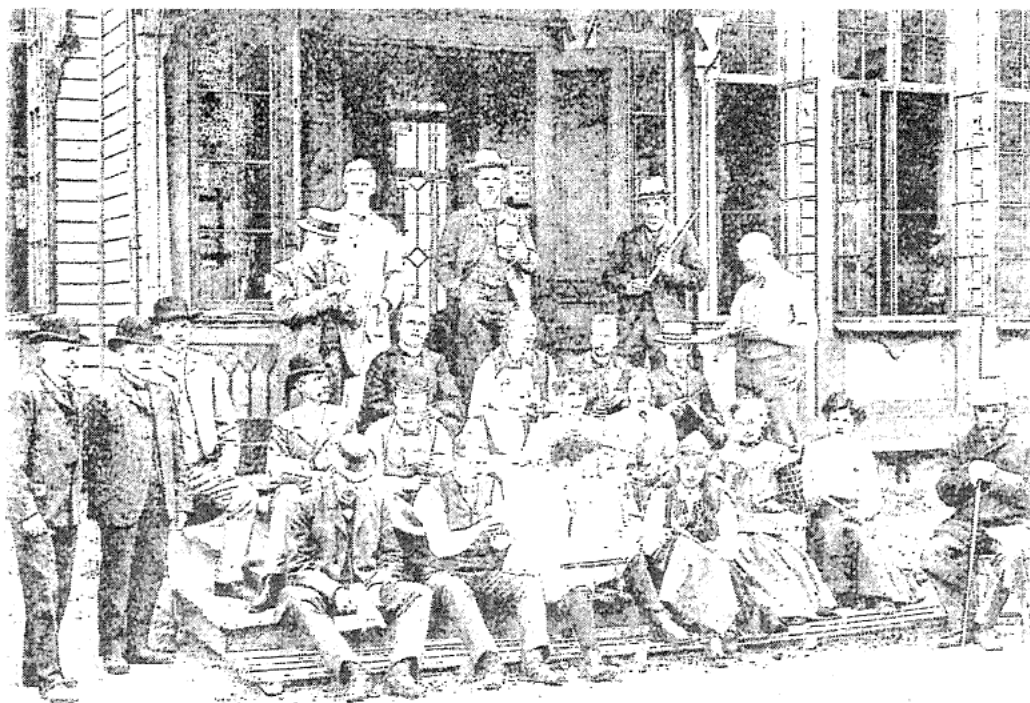
「一般的に労働への嗜好と愛を育てること、肉体労働への敬意を育てること、自己活動を発達させること、秩序、几帳面さ、清潔さ、整理整頓に慣れさせること、注意深

さを発達させること、勤勉さや忍耐強さに慣れさせること、体力の発達に作用すること、眼を訓練し、形態感覚を発達させること、関連した一般的技能を育てること」

その後サロモンは1887年頃から「練習」という作業の共通要素を発見し、それを基礎としてモデルシリーズを編成するようになった。これらのモデルシリーズはネースのスロイド講習会を通じて国際的に各国の手工教育に影響を与えた。

3. 1880年代後半以降に「教育的スロイド」を教えたのは、職人ではなく、国民学校教師であった。サロモン自身も国民学校教師がスロイドを教えることを望んでいた。サロモンの死後（1907年）、ネースのモデルシリーズに対する批判（子どもの創造性クリエイティビティや想像性ファンタジーの欠落という批判）もあり、ネースのモデルシリーズの国際的な影響力は次

第に失われていった。スウェーデン国内では、その後もモデルシリーズは改訂され、1950年代まで使われていた。ネースのスロイド教員養成所では、サロモンが生きていた時代には年間4、5回開催された講習会は1919年頃から夏期のみで開催されるようになった。また、その夏期講習会の受講生は国民学校教師が少なくなり、職人経験者が多くを占めるようになっていった。また、1950年代半ばには、国民学校教員組合との合意により、学校教員の労働時間数を減少させるためにスロイドは専科教員にまかされることになった<sup>(3)</sup>。また、1960年からリンショーピングにおいてスロイド教員養成所が職人経験者を対象とした1年制の課程としてはじめられた。それ以前には木工・金工スロイドの教員養成コースはネースの夏期講習会しか存在しなかった。その夏期講習会も1966年には幕を閉じた。



1906年の夏期コース（木工）の参加者  
右端はサロモン、参加者はモデルシリーズの各作品を手にもっている

4. 1962年にそれ以前の複線型学校制度が廃止され、9年間に義務教育が延長され、それを担う基礎学校 (Grundskolan) 制度が新たに発足した。スロイド教科の性格はこのときから、大きく変化する。「1960年代以降のスロイド教科は創造的活動にねらいをおき、その目的は生徒が作業する材料を使って個性的な表現を見いだすように刺激することに」おかれるようになった<sup>(6)</sup>。1962年のレーオプラン (日本の学習指導要領に相当する) にも同様の趣旨が書かれているが、このときからスロイド教科は「美的教育 (estetisk fostran)」をになう教科としての性格が強化され<sup>(7)</sup>、このような性格づけは現在まで続いている。

5. 最後にスロイド教科の現状についてふれておく。現在のスウェーデンの「指導計画と評価基準 (kursplaner och betygskriterier) 2000」(日本の学習指導要領と指導要録とを合わせたものに相当する) では、スロイド教科の目的は次のように規定されている<sup>(8)</sup>。

「教科スロイドは生徒の創造的 (skapande) 能力、手工的 (manuella) 能力、コミュニケーション的能力の錬磨を通じて生徒の全面発達に寄与する。

スロイド教科は手工作業 (manuellt arbete) と知的作業を統一的に含んでおり、創造性、好奇心、責任感、自立性、問題解決能力を発達させる。それは、アイデアに始まり、完成したモノにいたるプロセス (スロイドプロセス) に表現される。テキスタイル、木工・金工スロイドは、生徒が彼ら自身の能力への信頼を強化し、日常生活

での問題に対処するための準備を与える知識を発達させることである。

デザインと機能を評価し、判断することは、日常生活において頻繁に必要とされる。スロイドの教育は美的 (estetiska) 価値についての意識を創り出すこと、材料の選択や加工、設計がいかに製作物の機能と耐久性に影響を及ぼすかについての理解を発達させることを目的としている。スロイドの教育のなかで、環境問題や安全問題に関する知識を与え、資源を節約することの重要性に関する意識を涵養することも目的としている。

スロイド教科は、新しい思考や新しい創造のための基礎をすえることになる。この教育は、過去と現在のスロイドの伝統に関する知識を通して、生活史や平等問題への見識を与えることになる。スロイド教科は、より広い視点から多様な文化の手工 (hantverk) の伝統に関する自覚を創造することも目的としている。」

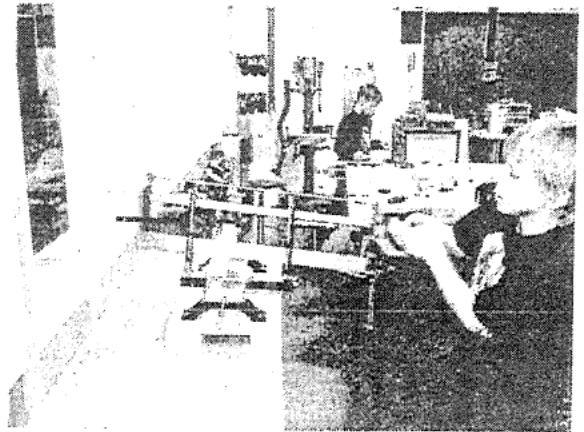
この目的規定には、スウェーデンのスロイド教科の120年以上に及ぶ歴史が反映しているように思われる。学校ではスロイドの授業は、第3学年から第7学年まで木や金属などの固い材料を扱う木工・金工スロイドと布などの柔らかい材料を扱うテキスタイル・スロイドの2種類のものが実施されている<sup>(9)</sup>。これらの学年では、クラスを半分に分け (半学級)、生徒は前期と後期で両方の授業を交代して受ける。したがって、スロイド担当教師 (現在ではテキスタイル・スロイドと木工・金工スロイドの2種類の専科教員) は15名をこえて授業をおこなうことはない。さらに第8学年と第9学

年では、木工・金工スロイド、テキスタイル・スロイド、体育、音楽、美術 (Bild)、技術 (Teknik) などの教科のなかから生徒が選択する。筆者は、2003年10月からストックホルム郊外にあるテービィ (Täby) という町にあるネースビーダール中学校

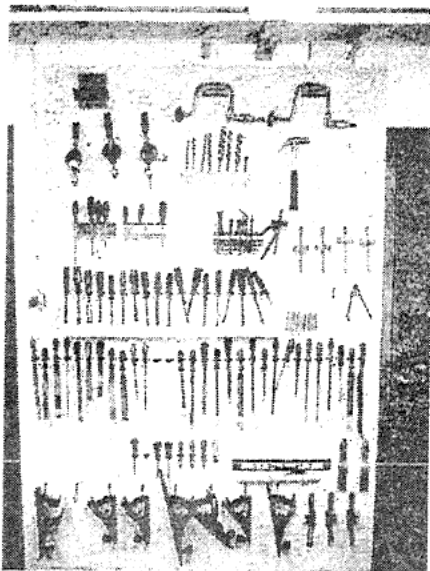
(Näsbydal skolan) に毎週月曜日の午前に行われているスロイドの授業を見学したが、そこでの授業内容や実習材料や道具や設備などは日本と比較してかなり充実しており、生徒はものをつくることを通してスウェーデンの伝統的な手工 (Hantverk, Hemslöjd)



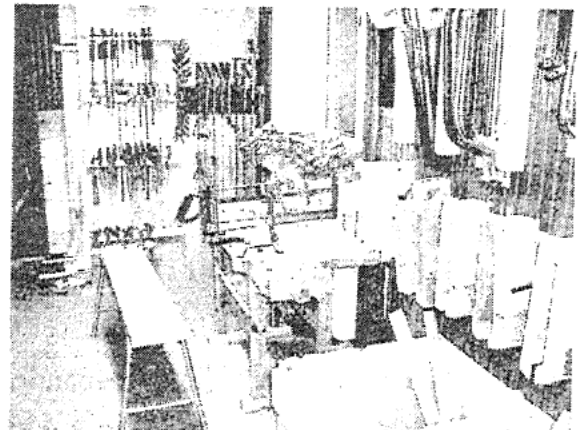
木工スロイドの授業の様子



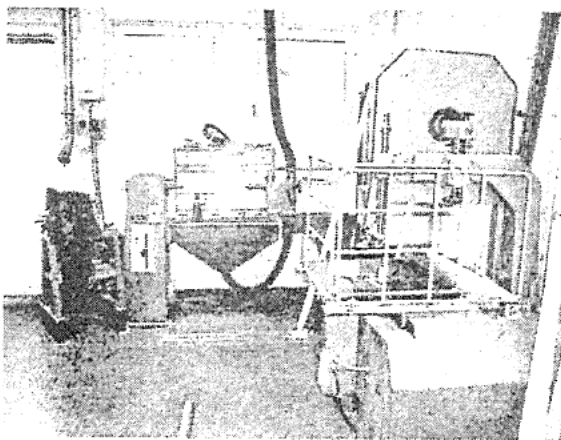
木工スロイドの授業の様子



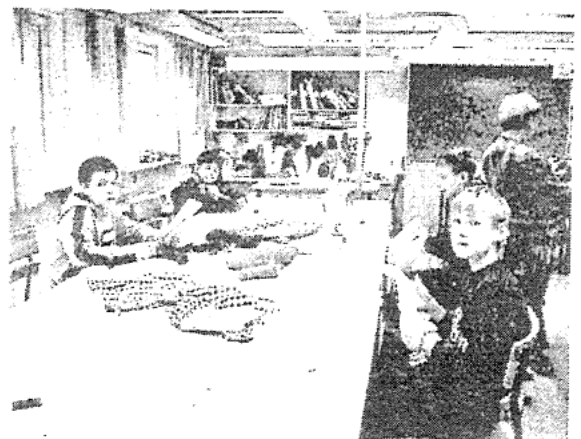
木工室の道具類



木工室の道具類



木工室の機械 (木工旋盤など)



テキスタイル・スロイドの授業の様子

の文化を学んでいるという印象を受けた。筆者が2004年2月に訪問したウメオ市郊外の学校のスロイドの授業の様子を撮影した写真を掲げておく(前ページ参照)。

(注)

- (1) 熊野聡『ヴァイキングの経済学——略奪・贈与・交易』山川出版社、2003年
- (2) 「スウェーデンにおける1877年改革前後のスロイド学校の実態——オットー・サロモンの著書からみえてくるもの——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第52巻第2号、2006年3月、1頁-27頁。
- (3) 「オットー・サロモンによるスロイドのモデルシリーズの形成と発展」『日本産業教育学会紀要』第37巻第1号、2007年1月
- (4) 「オットー・サロモンのスロイド教育システムのテーゼ」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第53巻第1号、2006年9月
- (5) ストックホルム市のスロイド担当視学官であったハリー・アービッドソン氏への筆書による聞き取り。
- (6) Sven Hartman “Lärare kunskap” s.104-105, 1994
- (7) このような性格は、モデルシリーズの否定と関連して登場してきたことは興味深いことである。1962年のレーロプランには以下のように書かれている。「スロイドの授業は常によく計画されなければならないとしても、それはモデルシリーズと結びつけられてはならず、一人一人の条件にあったものにする必要がある。」(“Läroplan för grundskolan” s.329, 1962)
- (8) Skolverket “Grundskolan kursplaner och betygskriterier 2000” s.91, 2000
- (9) 新自由主義の考え方による教育改革によって1989年から中央集権的なコントロールが緩和され、学校にカリキュラム編成権が委譲され、到達目標への達成状況だけを学校教育局(skolverket)が管理するようになった。各教科の年間時間数の配分については実際には学校によって異なっている。

NORMALRITNINGAR

TILL

FOLKSKOLEBYGGNADER

JEMTE BESKRIFNING.

PÅ NÅDIG BEFALLNING UTARBETADE

AF

Kongl. Öfver-Intendents-Embetet.



STOCKHOLM, 1865.  
P. A. NORSTEDT & SÖNER,  
KONGL. BOKTRYCKARE.



# I. ALLMÄNNA GRUNDER.

## Första kapitlet.

### Byggnadsplatsen.

1. Enligt 3:e § i Kongl. Maj:ts nådiga Stadga af den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket, bör en fast skola "helst förläggas nära intill Ordförandens i skolstyrelsen bostad, för att lätta hans uppsigt öfver skolan."

2. Vid valet af byggnadsplats för ett folkskolehus komma för öfrigt en mängd omständigheter med i betraktande, bland hvilka följande äro af mera allmän natur:

a). Skolhuset skall ligga på en torr och om möjligt fri plats, som är öppen mot söder och skyddad för hårda vindar.

b). Sådana ställen, som äro besvärade af stank eller osunda utdunstningar, måste omsorgsfullt undvikas.

c). Isynnerhet på landet, der afstånden stundom äro betydliga, bör skolbyggnaden förläggas vid medelpunkten af distriktet, eller så, att de flesta barn, som derstädes skola njuta undervisning, erhålla så gen skolväg som möjligt.

d). För att underlätta barnens skolgång, bör skolhuset äfven ligga nära intill någon större, alla årstider väl underhållen väg.

e). Likväl måste skolhuset ligga tyst och fredligt, tillräckligt långt från allmänna vägen, för att icke behöfva lida af dess buller och dam, äfvensom aflägsset från bullrande fabriker och verkstäder; och då grannskapet med enskildta boningshus vanligen medför icke blott eldfara, utan äfven andra olägen-

heter af flera slag, bör jemväl en från sådana byggnader och till dem hörande lägenheter afskild plats sökas.

I städerna väljas gerna platser afsides från den lifligaste rörelsen, och, dels för att undvika buller, dels till förekommande af trängsel, drages skolbyggnaden tillbaka från gatan, åtminstone några alnar.

f). Derjemte bör ett skolhus, för att genom sjelfva sitt läge bjuda aktning och medföra trefnad, ligga högt och synligt, i den vackraste omgifning, som under förhandenvarande omständigheter kan åstadkommas, samt med fri utsigt öfver landskapet.

g). Vidare bör en tjenlig skoltomt, jemte god byggnadsgrund på måttligt djup för sjelfva skolhuset, ega tillräcklig rymlighet samt vara så beskaffad, att plats för barnens lekar, för trädgård och för uthusbyggnader m. m. derstädes kan beredas (se mom. 109 och följ.)

h). Rik tillgång på godt dricksvatten får slutligen ej vid skolan saknas.

## Andra kapitlet.

### Skolbyggnaden i allmänhet.

#### Läge.

3. Huru skolhuset bör på en bestämd byggnadsplats förläggas, beror af tomtens läge, storlek, planform, docering, jordmån, tillgänglighet och närmaste omgifningar, med ett ord af så många omständigheter, att allmänt gällande regler derfor icke kunna upp gifvas.

Platsens fördelning till gårdsplan, trädgård m. m., äfvensom uthusens läge, måste i sammanhang med hufvudbyggnadens placering bestämmas, samt för nämnde byggnad en i afseende på väderstrecken ändamålsenlig riktning sökas.

4. I sistnämnde hänseende är framför allt af vikt, att den fönstervägg, genom hvilken skolsalen emottager sin hufvudsakliga belysning, må vända sig åt ett *ljust* väderstreck. Helst väljes syd-ost. Genom sydlig eller sydvestlig riktning skulle visserligen skolans uppvärmning om vintern underlättas, men äfven om sommaren odräglig hetta uppkomma. Riktades skolsalens fönster rakt i öster eller vester, så skulle det om morgnar och aftnar nästan i horisontel riktning infallande solljuset tränga djupt in i rummet och förorsaka stor olägenhet. Den lugna norra dagern blir i sydligare länder för skolor förordad; men hos oss vore den skolsal ganska vanlottad, som hade fönster endast åt detta mörka och hårda väderstreck.

#### Byggnadssätt.

5. Synnerlig omtanka måste egnas åt grunden, på hvars beskaffenhet byggnadens bestånd i väsendtlig mån beror.

Huru djupt och på hvad sätt grunden bör läggas, måste i hvarje serskildt fall bestämmas i enlighet med markens beskaffenhet och byggnadens tyngd. Stundom anträffas straxt under matjorden ett jordlager med den erforderliga bärigheten; på andra ställen åter måste fast botten sökas på betydligt djup. Öfverallt, utom der berg anträffas, måste grundmurarne läggas minst så djupt, som frosten nedtränger.

6. Under de delar af byggnaden, dit källaren icke sträcker sig, skall all matjord borttagas och ersättas till den omgivande markens höjd med torr och ren fyllning, fri från vegetabiliska ämnen.

7. Stenfoten, af huggen eller tuktad och fogstruken grå-, kalk- eller sandsten, bör sättas så hög, att bottenvåningens golf öfverallt kommer att ligga åtminstone 2 fot öfver jordytan och, om marken skulle vara sumpig, minst 3 fot.

8. För större varaktighets skull, samt till vinnande af säkerhet mot eldfara, böra skolhusen företrädesvis byggas af sten, helst skillnaden i kostnad mellan lika stora byggnader af sten och trä icke är synnerligen stor. Men när medel till stenhushusbyggnad saknas, eller i skogstrakter, der nästan alla byggnader uppföras af trä, och i allmänhet der godt trävirke fås för billigt pris, under det brist råder på mursten, eller om marken å den bestämda byggnadsplatsen, för att bära ett stenhushus, skulle fordra mer än vanligt konstig och i följd deraf dyrbar grundläggning, kunna de jemväl byggas af trä.

9. Ett skolhus af sten bör ofvan sockeln om möjligt uppföras af tegel, som är det sundaste stenmaterial. Der kalk- eller sandsten, såsom i orten rådande byggnadsmaterial, kommer till användning, förses yttermurarne med invändig beklädnad af brändt tegel, murad i skickt med förtagningar, och skiljemurarne uppföras om möjligt af tegel. Yttermurarne få i sådant fall efter materialet afpassade tjocklekar.

I ytterväggarna af stenhushus kunna luftspalter med fördel anläggas, till underlåtande af uppvärmningen.

10. Skorstenarne skola utan afbrott uppdragas från grunden till lämplig höjd öfver byggnadens tak, samt bjelklag och träväggar allestädes afvexlas på minst 10 decimeters afstånd från rökrören, och dessa mellanrum fyllas med murmassa.

11. Ett skolhus af sten bör icke afputsas förr än året efter, sedan det blifvit uppfördt, på det murarne må få tid att dessförinnan något uttorka.

12. Då af godt timmer byggda hus kunna ega bestånd i 80, 100, någon gång till och med flere hundra år, men det deremot alldeles icke är ovanligt, att ett trähus förfaller efter 30 à 40 år, eller tidigare, om till detsamma blifvit använt ungt, onoget timmer, så är derföre af största vikt att, när ett skolhus bygges af trä, moget, kärnfullt, torrt och friskt furuvirke, oaktadt den större kostnaden, anskaffas till såväl timmer, som bjelkar, sparrar och bräder.

13. När byggnaden uppföres af trä, skola väggarne sammansättas af upprättstående timmer, alla ytterväggarne invändigt afputsas med kalkbruk, samt utvändigt beklädas med furubräder och målas.

14. Såväl i alla botten- och mellanbjelklag, som äfven ofvanför vindsrummen inläggas tjenliga trossbottnar med trossfyllning, så inrättade, att bjelklagen blifva dragfria, och kölden i möjligaste mätto utestänges.

15. I flera afseenden är det lämpligt, att byggnadens takfötter, uppburna af synliga sparrhufvuden, öfverskjuta väggarna med 2 à 3 fots språng. Något större takyta uppstår visserligen derigenom; men deremot inbesparas den murade taklisten samt de dyrbara fotrännorna af jernplåt, som jemväl alltid skada byggnadens utseende, och väggarna skyddas förträffligt för väta genom det starka taksprånget.

16. Till taktäckning rekommenderas svensk takskiffer och vanligt taktegel, såsom billiga, serdeles varaktiga och fullkomligt brandfria materialier, samt s. k. stickor (spingade af gran), såsom det billigaste och ojemförligt lättaste täckningsämne.

#### Olika dispositioner. — Arkitektonisk behandling.

17. Vid skolhus med *en* lärosal och *en* boställslägenhet — och endast om sådana är här fråga — bör skolsalen med afklädningsrummet alltid ligga i bottenvåningen.

Boställsrummen skulle under vissa förhållanden, då de upptaga ungefär lika utrymme antingen med skolsalen eller med afklädningsrummet, kunna i en öfvervåning förläggas, och sålunda, i följd af den ringa grundyta, som byggnaden i så fall komme att upptaga, någon besparing vinnas. Men en dylik disposition medför deremot i andra afseenden stora olägenheter, såsom ömsesidig störande inverkan lokalerna emellan, försvärad uppvärmning och vid eldstädernas placering inträffande svårigheter. Vidare är det i allmänhet i konstruktivt hänseende vidrigt, att flera smärre rum inredas ofvanpå ett större; takbjelkarna i skolsalen skulle icke ens vid smärre spännvidder kunna uppbära den öfra våningens skiljeväggar, utan att understödjas med pelare eller upphängas medelst spännverk. Byggnaden får ett skåplikt utseende, isynnerhet om någon höjd tillägges ofvan de 2:ne våningarne, för att göra vinden rymligare, och denna blir i annat fall för ett hushåll otillräcklig. Serdeles otjenligt vore det, att, när materialet är trä, bygga i flere våningar.

Af alla dessa skäl må folkskolebyggnader i två våningar endast vid serskilda lokala förhållanden ifrågakomma, och skolhus, som innehålla endast en lärosal jemte lärarebostad, i allmänhet byggas med en vånings höjd.

18. Men vid skolhus af här ifrågavarande slag, uppförda med en vånings höjd, kan icke sträng symetri genomföras, utan att de sanna behofven i något hänseende skulle kränkas. Redan i planen är en irregularitet i de flesta fall oundviklig, emedan vid hvarje skola med mer än 50 barn, skolsalen ensam upptager större utrymme än de öfriga lokalerna tillsammans. Och skolsalen, till hvilken måste anslås vida större höjd, än som för boställsrummen är behöflig, fordrar till följe deraf jemväl högre och större fönster än boningsrummen. Af dessa olika stora fönster, som komma att sitta i samma

fil, betingas äfven en friare arkitektonisk behandling. Således böra skolsal och lärarebostad hvar för sig med sina olika höjder framstå i byggnadens yttre såsom serskilda, men till en byggnadsgrupp sammanbundna partier, och den oregelbundenhet i disposition och façader, som sålunda uppkommer, är vid ett mindre skolhus med fri belägenhet alldeles icke vågad, utan karakteristisk och berättigad för en byggnad, som innesluter lokaler för olika ändamål och med olika behof.

19. Skolhuset bör förete ett treffigt och inbjudande yttre. Såsom en offentlig byggnad, med halft kyrklig tendens och på landet ofta uppfördt i närheten af kyrkan, får det icke sakna en viss värdighet i sitt yttre, men måste likväl i möjligaste måtto enkelt behandlas. Rik och dyrbar arkitektonisk utstyrelse vore här alldeles icke på sin plats. Deremot skall en till byggnadens karakter passande prydlighet utan betydlig tillökning i byggnadskostnaderna ernås, om de för byggnaden egendomliga inre anordningarne oförstaldt framträda äfven i det yttre, och dervid i första rummet sökas vackra proportioner för det hela, samt orneringen okonstladt härledes ur konstruktionen.

20. För att gifva karakter åt byggnaden eller höja dess façade, plägar någongång för signalklockan ett litet torn å skolhusets gavlspets uppföras. Sannolikt ega högst få folkskolor, eller kan för dem anskaffas, så pass stora ringklockor, att en dylik anordning vore berättigad. En vanlig, temligen stor dörrklocka med fjeder, anbragt på tjenligt ställe utvändigt å byggnaden, så att densamma kan ringas inifrån skolsalen, såväl som utifrån gården, är allt hvad som erfordras, för att gifva barnen tecken att samlas.

## Tredje kapitlet.

### Skolsalen.

#### Planform.

21. För en skolsal med 30 platser eller derunder kan kvadratisk planform väljas.

Deremot skulle en sådan form vid större skolsalar ej blott medföra onödiga svårigheter med afseende på bjelklagets konstruktion och belysningens ändamålsenliga ordnande, utan äfven bänkraderna komma att upptaga så stor bredd, att öfversigten öfver skolan från lärareplatsen försvåras.

22. Bästa formen för en skolsal är derföre i allmänhet den aflångt fyrkantiga; likväl fordrar smaken, att rummets längd ej öfverstiger dubbla bredden.

#### Planyta.

23. Skolsalens storlek rättas efter det antal barn, som samtidigt komma att besöka skolan.

Med fästadt afseende på den allmänna folkökningen samt på grund af iakttagelser, gjorda under en följd af år, bör barnens antal antagas något större, än det för tillfället är.

24. Golfytan för en skolsal bestämmes efter det utrymme, som erfordras till sittplatser för ett gifvet antal barn, med tillägg för gångar, lärarepulpit, eldstad, skåp etc.

#### Barnens sittplatser.

25. På ändamålsenlig konstruktion och placering af barnens säten och bord beror i väsentlig mån, ej blott huruvida ordning och disciplin i en skola kunna upprätthållas, utan äfven i allmänhet om undervisningen skall med framgång kunna bedrivas. Genom obekväma sittplatser beröfvas barnen lätteligen all lust till uppmärksamhet, och lärandet, i sig sjelft nog tungt, blir till en odräglig börda.

Skolsalens rengöring försvåras äfven i betydlig mån genom olämpligt inrättade skolbänkar.

Bland alla skolans möbler äro derföre barnens bord och bänkar just de, åt hvilka den största omtänka bör ägnas.

26. I en folkskola få barnen icke placeras, vare sig omkring ett bord eller omkring läraren, amphiteatraliskt, såsom uti ett auditorium, eller på något annat sätt så, att de vända ansigtet emot hvarandra, hvarigenom de skulle frestas att sysselsätta sig med hvarandra; utan böra platserna uppställas rätlinigt i rader och riktas alla åt ett håll.

Att stegvis höja sittplatserna framifrån och bakåt, är en ändamålsenlig anordning i småbarnskolor och i rum, uteslutande afsedda för åskådnings-undervisning, med ett ord öfverallt, der hufvudsakligen afses lätthet för barnen att iakttaga lärarens rörelser; men i vanliga skolsalar är det för lärarens uppsigt öfver barnen mera lämpligt och i alla afseenden enklare, att barnens platser ordnas på ett horisontelt golf, hvaremot lärarens plats i stället kan höjas.

27. De hittills allmänt brukliga, långa skolbankarna äro förkastliga, dels emedan barnen, då de tätt sammanradas sida vid sida, störa hvarandra i arbetet, och ordningens upprätthållande, genom den nära beröringen dem emellan, i hög grad försvåras; dels ock emedan nämnde bänkar, för att medgifva en skäligen bekväm sittande ställning, borde ställas *tätt intill*, men, för att barnen må kunna utan svårighet komma till och ifrån sina platser samt ställa sig upprätt, äfven *på ett visst afstånd från* borden, och således, då båda dessa vilkor icke kunna samtidigt uppfyllas, alltid måste blifva i ena eller andra hänseendet obehöfvade; samt ändtligen emedan ryggstöd icke kan anbringas å en sådan bank, enär lärjungarne måste

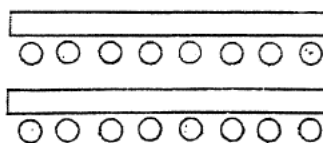
passera *öfver* densamma till och ifrån sina platser.

Ändamålsenliga ryggstöd må dock på barnens säten eller stolar aldrig saknas; ty det är för ett barn icke blott plågsamt, utan för dess helsa ofta skadligt att hela timmar sitta antingen upprätt utan allt stöd, eller med armarna stödda mot bordet.

28. För anordnandet af barnens sittplatser kunna tre sätt komma i fråga:

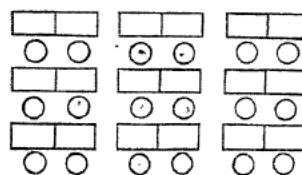
- a) med bibehållande af långa bord får hvarje barn sin serskilda stol, fästad vid golvet, och bakom densamma lemnas rum till genomgång,

Fig. I.



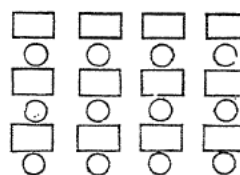
- b) göras för 2 och 2 barn gemensamma bord med isolerade stolar och genomgångar vid sidorna,

Fig. II.



- c) isoleras borden, så väl som stolarna, medelst genomgångar, löpande till höger och venster om hvarje sittplats,

Fig. III.



Vid båda de sednare fallen följa platserna näst framför och efter hvarandra i sammanhängande rader mellan gångarna.

Enligt de mått, som härnedan (mom. 36) vardå föreslagna, upptager en sittplats  
enl. a) 8 qv. fot.  
enl. b) 7,15 »  
enl. c) 8,91 »

De olägenheter, som vidlåda de gamla skolbankarne, blifva genom den under a) nämnda anordningen till en del afhjelpna. Sedan sittplatserna fixerats, får skolan ett ordnad utseende, barnen kunna ej till öfverdrift sammanträngas och sålunda det i förhållande till rummets storlek passande maximiantalet ej öfverskridas; slutligen kunna stolarna förses med ryggstöd. Men anordningen är likväl icke fullt ändamålsenlig; barnen sitta ännu omedelbart sida vid sida till men för disciplinen. Detta sätt att ordna barnens sittplatser kan derföre icke förordas till norm för folkskolan, så mycket mindre som platserna mera ändamålsenligt och jemväl med besparing af utrymme kunna fördelas enligt b).

Visserligen kunna långa bord göras för något bättre pris än isolerade; men pris skillnaden behöfver ej blifva betydlig, isynnerhet om möblerna förfärdigas helt och hållet af trä.

Möbleringen enligt b) åter kräfver minsta utrymmet och är isynnerhet fördelaktig, när undervisningen bedrifves med s. k. öfver- och underläsare eller så, att 2 och 2 lärjungar följas åt; men delar för öfrigt, fastän i mindre grad, den vid a) antydda olägenheten af barnens nära beröring med hvarandra.

Fullständigt isolerade bord enligt c) äro deremot ovedersägligt för undervisningen mest ändamålsenliga. Att en sådan möblering upptager omkring  $\frac{1}{3}$  mera rum än enligt a) och nära  $\frac{1}{3}$  mera än enligt b), dervid behöfver man alldeles icke fästa afseende, då ut-

rymmet i alla fall icke blir större, än som för luftvexlingen erfordras (se mom. 90).

Den vackraste skolmöbel af sistnämnde slag, efter amerikansk model, bordet med gjutna jernfötter och med skifva af fernissadt ekträ, samt stolen af betsad björk, afvenledes på jernfot, är i allmänhet för dyrbar för folkskolan. Mindre vacker, men för godt pris och lika ändamålsenlig, göres samma sorts möbel helt och hållet af furuträ. Bordskifvan och stolsittsen kunna då betsas svarta eller mörkgröna, samt de öfriga delarne målas i oljefärg såsom ek med fernissning.

Vid förfärdigandet och placeringen af bord och stolar för barnen böra för öfrigt följande grundsatser fasthållas.

29. Borden måste ställas vinkelrätt emot rummets långsidor och vändas så mot ljuset, att barnen, när de sitta på sina platser, icke få den starkaste dagern hvarken framifrån eller från högra sidan, utan i alla händelser från den venstra.

30. Bakre delen af bordskifvan, 2,5 tum bred, göres horisontel. I denna del försänkes glasbläckhornet helt och hållet, så att ett lock, af messing eller jernbleck, hvarmed öppningen täckes, kommer att ligga i bordskifvans plan; äfven göres här en urhålkning för griffel, penna etc.

Främre delen af bordskifvan, bildande en enda slät yta, sluttar åt lärjungen 1,5 tum, och dess kanter afrundas framtill och åt sidorna.

Hvarje barn bör i bordet hafva antingen en hylla eller låda till förvarande af böcker, skrifmaterialier o. d.

I bord med jernfötter begagnas ofta hyllor. En sådan hylla, 10 tum bred, sitter 5 à 6 tum under bordskifvans framkant, 2,5 à 3 tum tillbakadragen. Dess framkant är afrundad likasom bordskifvans, och bakkanten försedd med en öfverskjutande, 1 tum hög list.

Men lådorna äro rymligare och i flera afseenden mera ändamålsenliga. När mö-



blerna förfärdigas helt och hållet af trä, tappas en sådan låda på bordets ben eller understöd. I bord med gjutna jernfötter hafva dessa flensar, vid hvilka lådans botten samt dess fram- och bakstam med skrufvar fästas. I båda fallen är endast bordskifvans öfre, horisontela del fast sammanhängande med lådan, hvaremot dess nedre, sluttande del, med gångjern fästad vid den förra, utgör ett fällbart lock till lådan.

31. För ordnings skull och till undvikande af det buller, som skulle uppstå vid möblernas rubbning, ifall de stodo lösa, böra såväl stolar som bord antingen skrufvas fast vid golfvet, eller också två eller flera fästas på och förenas med gemensamma släar, så att de komma att stå stadigt. Det förra förekommer vanligen, när möblerna hafva jernfötter, det sednare, som medför den fördelen, att möblerna kunna omflyttas, vid rengöring uttagas etc., när de äro helt och hållet af trä.

32. Bordens, såväl som stolarnes *höjder* böra afpassas efter barnens olika ålder, och i samma skola böra finnas bord af åtminstone 2 eller 3 storlekar. Stolens höjd är bekväm, när barnet, sittande med lårbenet i horisontelt läge, kan låta hela fotsulan ända till hälen hvila på golfvet, så att fotsulan bildar en rät vinkel mot smalbenet, och smalbenet likaledes en rät vinkel mot det på stolen hvilande lårbenet. Bordet är lagom högt, om dess lägre framkant räcker jemnt till barnets armbågar, när barnet, sittande upprätt, trycker dem intill sidorna.

33. Stolsittsen bör hafva en passande urhålkning och afrundas något i framkanten. Ryggstödet skall afpassas efter barnets korsrygg och skuldror och luta bakåt ungefär 2 tum på 1 fot.

34. De mindre barnen placeras främst och de större bakom.

35. Utmed och emellan barnens sittplatser anordnas, såsom redan är nämndt,

genomgångar, tillräckligt rymliga, så att läraren kan komma till hvarje barn, och barnen kunna gå bekvämt in och ut, utan att störa sina grannar; vidare erfordras i midten af skolan en gång för att afbryta bänkraderna, och utefter skolsalens väggar sidogångar, genom hvilka barnen kunna marschera i led, vid in- och utgåendet.

36. Följande mått å skolmöbler m. m. må tjena såsom norm:

Bordskifvans hela bredd . . .	12,5 dec.tum.	
» » längd . . .	18 à 20 »	
» » lutning . . .	1,5 »	
Bordets höjd i framkanten (olika efter barnets ålder)	18 à 25 »	*)
Stolens afstånd från bordskifvans främre kant (emellan lodlinierna) . . . . .	1,5 »	
Stolsittsens bredd . . . . .	10 »	
» höjd (efter barnets ålder) . . . . .	10 à 14 »	**)
Afståndet från ett bords bakre kant till främre kanten af nästa bord (plats för en stol)	12 à 14,5 »	
En genomgångs bredd . . . . .	18 »	
En sidogångs bredd (om barnen genom densamma skola marschera in och ut) . . . . .	3 à 4 fot.	
En sidogångs bredd (om barnen ej derigenom skola marschera)	1,5 »	
En midtelgång . . . . .	2,5 à 3 »	
Platsen framför den främsta bordsraden . . . . .	5 à 6 »	

\*) I en skola med barn mellan 7 och 15 år kan främsta bordsraden för hvarje kön få det mindre och den längst bort belägna det större måttet, samt de mellanliggandes höjder gradvis för hvarje bordsrad förändras. Men man kan äfven taga minsta sorten bord något högre och största sorten något lägre än de här angifna zifferorna, för att sålunda hjälpa sig fram med 2 à 3 storlekar.

\*\*\*) Detsamma, som i föregående not nämndes om bordens höjder, gäller äfven om stolarnes.

### Lärarens pulpet m. m.

37. En pulpet för läraren uppställs vid en af skolsalens kortare sidor, framför bänkraderna i deras midtlinje; i en mindre skola på sjelfva golfvet, men i en större på en förhöjning eller s. k. platform. På detta sätt vinnes lättare öfversigt öfver skolan, än om pulpeten, såsom vanligen varit fallet, placeras vid ena långväggen.

En låda med läs skall alltid finnas i lärarepulpeten. Inredes pulpeten derjemte på ömse sidor om lärarens plats med lådor och hyllor inom dörrar med läs, så skall endast sällan ett väggskåp derjemte behöfva anskaffas till förvarande af skolans böcker.

38. Svarta taflan bör hafva sin plats vid sidan af lärarens pulpet.

Antingen på väggen ofvanför lärarens plats eller bredvid densamma, på motsatt sida mot svarta taflan, bör finnas en kartställning, i hvilken de större kartorna kunna medelst ett snöre upp- och nedrullas.

### Golf.

39. Golfvet i skolrummet bör inläggas af i möjligaste måtto torra och qvistfria plankor, minst 1,66 dec.tum tjocka. Furuvirke kan dertill användas, men användes ekvirke, blir det mångdubbelt varaktigare. Att med linoljefernissa indränka golfvet har stora fördelar med sig; ett sådant golf ser bättre ut, det insuper mindre dan än ett omåladt, fäster ej fläckar af fett och dylikt och är serdeles lätt att rengöra.

### Höjd.

40. För att luften må kunna underhållas frisk, göres skolsalen icke under 12, och af ekonomiska skäl icke gerna öfver 16 fot hög.

För ett ordinärt rum gör det mindre måttet tillfyllest; en större sal fordrar deremot större höjd.

### Fönster.

41. Hvarje skolrum måste vara väl belyst genom tillräckligt stora och ändamålsenligt placerade fönster.

42. Fönsterna böra insläppa så ymnigt ljus, att äfven den innersta delen af skolrummet erhåller full dager; men å andra sidan åter böra, för besparings skull och på det uppvärmningen icke onödigtvis må försvåras, icke flera fönster upptagas, än som af behövet påkallas.

Vid bestämmandet af fönsterytans storlek, som i allmänhet kan antagas till 15 å 20 procent af rummets golfyta, måste afseende fästas på såväl väderstreckket som omgifningens beskaffenhet, och kan jemväl, med afseende å byggnadens yttre anordning, en afvikelse från regeln vara berättigad.

43. Såsom redan är nämndt (mom. 29) böra barnen, placerade vid sina bord, få dagern från venster sida. För att dels kunna konsekvent genomföra denna regel, dels vinna en angenäm och lugn belysning, bör man helst låta dagern infalla endast från en sida, genom fönster å rummets ena långvägg.

Äfven ett stort rum erhåller på detta sätt full dager, om fönsterna äro tillräckligt stora, och deras höjd afpassas efter rummets djup. Afståndet från rummets golf till fönsternas öfverkant må dock i sådana fall icke understiga rummets halfva bredd, så att, när väggens höjd öfver fönstret räknas till 1 fot, ett skolrum om 22 fots bredd behöfver minst 12 fots höjd, ett skolrum om 24 fots bredd minst 13 fots höjd o. s. v., samt ett skolrum om 30 fots bredd minst 16 fots höjd.

Om nu 16 fot (enl. mom. 40) är den största höjd, som kan gifvas åt ett vanligt skolrum,

så måste i salar, hvilkas bredd öfverstiga 30 fot, fönster anbringas å tvenne motsatta väggar.

Men det sistnämnda sättet för fönstrens anordning är mindre tjenligt, emedan de många, hvarandra korsande dagrarna och skuggorna, som derigenom uppstå, medföra ett intryck af oro. Svarta taflan antager vid sådan belysning ett glänsande skimmer, hvarigenom det, som på densamma skrives, endast med svårighet kan uppfattas, och vid skriföfningarne komma barnen att, allt efter som det starkare ljuset infaller, vända sig åt den ena, än den andra sidan.

Å den framför barnens platser belägna väggen får under intet vilkor fönster upptagas. Det ljus, som härifrån inströmmade, skulle nemligen falla barnen rakt i ansigtet och menligt inverka på deras ögon.

Å den motsatta gafvelväggen deremot kunna fönster utan skada anbringas, om omständigheterna det fordra.

44. Fönsterna i skolsalen böra vara större än i vanliga boningsrum; deras höjd kan allt efter salens storlek vexla mellan 8 och 11, bredden mellan 4 och 6 fot.

45. Pelarne emellan fönsterna och vid väggens ändar böra icke vara bredare, än att dagern blir *jemnt fördelad*. Bakom en alltför bred fönsterpelare skulle mörker uppstå. Åtminstone när fönster endast å rummets ena långvägg upptagas, behöfs å denna vägg inga breda pelare mellan fönstren, emedan salens tre öfriga sidor lemna reela väggytor, med rikligt utrymme för kartor, tabeller, svarta taflor m. m.\*). I stenhus vid-

\*) I sammanhang härmed torde följande yttrande förtjena anföras: "Wandtafeln, Karten und ähuliche Lehrmittel, welche nur von Zeit zu Zeit in Gebrauch genommen werden, *offen an den Wänden* aufzuhängen, scheint nicht angemessen. Abgesehen davon dass sie dadurch leichter der Bestäubung und dem Verreiben ausgesetzt werden, hören sie auch auf, *die Anschauung der Kinder zu reizen*, was doch ihre Wirkung sein muss, wenn sie zu unterrichtlicher Verwendung kommen." K. Bormanns Schulkunde 6:te Aufl. s. 103.

gas fönstersmygarne inåt, så att de mellan fönsterna uppkommande slagskuggorna i möjligaste måtto må förkortas.

46. Fönsterna böra gå så högt upp mot taket som möjligen kan ske, utan att vanprydnad uppstår. Vägghöjden öfver fönsterna, eller afståndet från fönsterdagern till skolsalens takyta, må i allmänhet ej vara mer än en fot. Takbjelkarne kunna vid fönsterna afvexlas.

47. Vid alltför låga fönsterbröstningar skulle ljuset nedifrån slå barnen i ögonen; för höga deremot skulle göra rummet dystert. På det att barnen icke under lästimmarne må kunna se ut, eller förbigående genom fönsterna se in i skolan, göras bröstningarna i allmänhet något högre, än i vanliga boningsrum. Vid fördelaktigt läge är 3 fots bröstningshöjd tillräcklig; men om skolan vetter åt gata eller allmän väg och ligger lågt mot den omgifvande trakten, bör detta mått ökas till 4, högst 4,5 fot.

48. Till skolsalen och alla öfriga rum med eldstad göras dubbelfönster.

49. Alla de yttre fönsterbågarna till skolsalen, och i de inre åtminstone en ruta i hvarje luft, sättas på gångjern, för att kunna efter behag öppnas.

50. Fönsterkarmar och bågar göras efter vanlig konstruktion af furuträ, beslås med starka beslag, samt målas väl med god oljefärg.

I skolsalens fönster, såväl yttre som inre, användes fullkomligt rent och hvitt — s. k. helhvitt — glas.

51. Till skydd mot starkt solljus anbringas i fönsterna antingen jalousier eller förhängen, såsom markiser eller rullgardiner. Till gardiner tages hvarken mörk eller helt hvit, utan ljusgrå eller oblekt väfnad, som borttager det bländande i solskenet, utan att rummet likväl blir mörkt.

Om fönsternas inrättning i och för luftvexling, se längre fram (mom. 70 och 71).

#### Tak och väggar.

52. Alla försprång å väggarna, äfvensom pelare inuti rummet till takets uppbärande, böra i en skolsal undvikas, emedan de i ett eller annat hänseende blifva till hinder.

53. I skolsalens tak anbringas s. k. gipspanel, med tunn, hvit kalkfärgs-anstrykning, som icke fjällar af.

I trä- såväl som stenhus rappas och putsas skolsalens väggar med kalkbruk. Väggarernas nedre del beklädes till omkring 5 fots höjd med bröstpaneler af trä i fyllningsfaçon. Härigenom skyddas väggarna för sönderstötning, och rummet kan lättare hållas rent, samt blir dragfritt och varmt. Kring dörrar och fönster sättas träfoder. Bröstpanelen och foderna målas med oljefärg i ek och fernissas, eller för besparings skull i perlfärg. Der svarta taflor anbringas rundt omkring väggarna, kan bröstpanelen till en del af dem ersättas.

Ofvan bröstpanelen anstrykas väggarna med limfärg i någon för ögat angenäm, ljus kulör.

Tapeter må aldrig i skolsalen uppsättas, emedan papperet fäster lukt.

#### Uppvärmning.

54. Skolsalen, som alltid får 3 ytterväggar och derigenom är synnerligen utsatt för kölden, bör, till underlättande af uppvärmningen, med så stor del af sin omkrets som möjligt och i allmänhet med en af sina långsidor, ansluta sig till den öfriga delen af byggnaden.

55. Väggar, dörrar, fönster etc. måste vara af den beskaffenhet, att skolrummet under kall årstid låter uppvärma sig lätt och likformigt.

56. För folkskolan väljes den möjligast enkla värmeapparat, neml. ugnar af kakel och tegel eller af jern; en eller flera sådana anbringas i det rum, som skall uppvärmas.

Värmeugnar, helt och hållet sammansatta af murverk, såsom vanliga kakelugnar, underhålla värmen mera jemnt än helt och hållet af jern förfärdigade ugnar, s. k. kalorifärer (kaminer); de sednare åter lemna hastigare värme och medgifva användandet af hvad slags bränsle som helst. För våra skolor synas sådana eldstäder erbjuda de största fördelarna, som utgöra en sammansättning af båda de nämnde slagen värmeugnar, såsom kakelugnar med värmerör af gjutet jern, eller jernugnar fodrade med murverk och omgifna med mantlar af kakel.

57. Värmeugnen bör aldrig, när sådant kan undvikas, ställas emot yttervägg, emedan i sådant fall en större del af värmen skulle medela sig till den yttre luften, utan att komma rummet till godo, och sålunda uppvärmningen fördyras, utan fast heldre midt på den vägg, med hvilken skolsalen ansluter sig till den öfriga delen af byggnaden; ej heller bör den eldas utifrån, såsom från kök eller förstuga, utan inifrån sjelfva skolrummet, på det den luftvexling, som genom ugnen vid eldning uppstår, må komma skolrummet till del.

58. Skolrummet uppeldas, efter att förut hafva blifvit vädradt, morgon och eftermiddag så tidigt, att detsamma vid lästimmans början har en medeltemperatur af 16 grader Celsius.

Om eldstäderna i förhållande till luftvexlingen förekommer mera under nästföljande rubriker.

#### Luftvexling.

59. Det är en känd sak, att luften i hvarje slutet rum, der människor vistas, genom andedrägten och hudutdunstningen så till sin sammansättning förändras och med fremmande beståndsdelar uppblandas, att densamma, om icke luftmassan tid efter annan

ur rummet utjagades och med atmospherisk luft af normal beskaffenhet, s. k. frisk luft, ersattes, förr eller sednare, allt efter lokalens storlek och de församlade personernas antal, ålder m. m., skulle förlora sina för andedrägtens underhållande erforderliga egenskaper, och blifva ett dödande gift.

Detta onda mildras väl genom den naturliga luftvexling, som alltid eger rum genom dörr- och fönsterspringorna, samt genom väggarnas porositet, men kan icke derigenom helt och hållet upphävas.

I ett skolrum, som alltid innesluter en till personernas antal relativt liten luftkvantitet, gör sig behovet af luftvexling i hög grad gällande.

60. Att våra folkskolor, tillfölje af bristande luftvexling, i allmänhet äro långt ifrån hvad de borde och kunde vara i sanitärt hänseende, deröfver föres en allmän klagan, och detta icke utan skäl; ty man finner ännu, tyvärr, skolbarn inpackade i låga, sällan eller aldrig vädrade rum, till så stort antal, som der möjligen kan rymmas. Vid inträdet i månget skolrum mötes man af en vidrig, i själfva väggarna inbiten lukt, som, sedan barnen en stund varit sannlade, öfvergår till den vämjeligaste stauk.

Hvem kan undra om, i följd af vistandet i en sådan osund och tung atmospher, skolläraren blir vresig och i förtid utlevad, om barnen blifva mindre lifliga, och undervisningen bedrifves såsom ett tungt handverk, för att icke tala om de allmänna vådor för barnens helsa och utveckling, som under sådana förhållanden måste uppkomma.

61. Om än under de sednaste tiotalen af år uppmärksamheten mer och mer blifvit fästad vid vigten deraf, att tillräcklig kvantitet frisk luft må tillföras alla sådana lokaler, der menniskor vistas tillsammans, och flera nya skolhus, isynnerhet i de större städerna, vittna om, att denna fråga vid de-

ras uppförande blifvit med allvar behjertad, så måste dock erkännas, att bättre luft i nyare skolor vunnits hufvudsakligen derigenom, att skolrummen gjorts vida rymligare än förr, och att man mera vinlagt sig om renlighet och snygghet, medan de hittills i landet använda luftvexlingsmedlen äro endast palliativer.

62. En värme- och luftvexlings-apparat för folkskolan vore fullt ändamålsenlig, om

a) värmegraden kunde ständigt underhållas vid 16° Celsius, yttre temperaturen må vara hvilken som helst,

b) i timman för hvarje barn 300 kubfot frisk luft (under vintern varm, men icke för torr, om sommaren sval), oafbrutet infördes, och under samma tid en lika kvantitet skänd luft utfördes, samt derjemte tillfälle vore beredt, att vid behof öka apparatens effekt till 400 kubfot per barn i timman,

c) luftvexlingens liflighet kunde ökas eller minskas, oberoende af uppvärmningen,

d) friskluften infördes genom tillräckligt stora öppningar, så att drag ingenstädes uppstode, spriddes jemnt till alla delar af salen, och, innan den åter utfördes, blandade sig väl med salens luftmassa,

e) apparaten vore ytterst enkel och till sina väsendtliga delar belägen inom skolsalen, för att af läraren kunna skötas, samt

f) anläggningskostnaden vore ringa och underhållet lätt och billigt.

63. En apparat, som motsvarar dessa fordringar, finnes ännu icke, eller är åtminstone ej så bepröfvad, att den för tillämpning vid folkskolorna kan föreslås.

Tillsvidare torde derföre följande åtgärder för luftvexlingen böra förordas, hvilka, ehuru ej fullt tillfredsställande, likväl i vårt land med temlig framgång blifvit använda.

a). *Kalorifärrörs anbringande i kakelugnarne.*

64. Till denna inrättning, som i all-

mänhet torde vara känd, höra följande delar:

1:o för friskluftens ledning till kalorifärröret, en från yttre luften, mellan eller under golfbjelkarne, fram till kakelugnens plats för lufttät kanal;

2:o sjelfva kalorifärröret, som insättes i kakelugnen, så att det genomlöper dess eldstad och en del af dess rökrör; samt

3:o rör för den skämda luftens afgang.

Friskluftskanalen bör hafva minst lika stor genomskärningsarea som kalorifärröret. Kanalens yttre mynning lägges beqvämast i jemnhöjd med det bjelklag, genom hvilket densamma skall ledas; eller, om luften på denna höjd öfver marken kan anses mindre ren, något högre upp.

Kalorifärröret göres vanligen af gjutjern. Det bör hålla 3,5 å 5 tum i inre diameter, och har midt för eldstaden antingen en svällning, såsom en låda, eller är derstädes söndergrenadt i flera rör, för att bjuda största möjliga yta mot elden. Nedåt kommunicerar röret med friskluftskanalen och inmyunnar med sin öfre ända i rummet, der luftvexling åstundas. Framför rörets mynning i bröstet af kakelugnen sättes en ventil, som efter behag kan öppnas eller slutas.

Den betydliga quantitet luft, som när kakelugnen eldas, utströmmar genom dess öppna eldstad, ersättes nu genom kalorifärröret, hvilket insuger luft från yttre atmosfären och låter densamma uppvärmd inströmma i rummet med större hastighet, ju mera röret höjer sig öfver eldstaden och luften i detsamma upphettas.

På det luftvexlingen må fortgå, afven sedan spjället är skjutet, anläggas serskilda sugrör för skämdluftens afgang. Vanligen anbringas mynningarne till dessa sugrör nära golfvet. För att meddela den i desamma

inneslutna luften stignkraft, föras de bakom kakelugnens rygg och uppdragas tillsammans med eldstädernas skorstensrör.

65. Visserligen kan temligen stark luftvexling på detta sätt underhållas genom kalorifärröret och den öppna eldstaden, så länge eldningen fortgår. Men man bör besinna, att kakelugnen i en skola vanligen eldas på morgonen, att spjället skjutes före lästimmans början, samt att luftens afgang genom eldstaden med detsamma är helt och hållet hämmad. Luftvexlingen är således under lästimman, då luften egentligen förbrukas, inskränkt till de serskilda sugrörens verkan, som måste vara svag i samma mån, som den värme desamma från skorstenen kunna erhålla är obetydlig, under det kakelugnsmassan med sin dåliga värmeledningsförmåga, sedan elden upphört, ganska trögt meddelar kalorifärröret det för friskluftens uppvärmning erforderliga värmets. Lägges nu härtill att den i kakelugnen magasinerade värmemängden icke kan förslå för fortgående uppvärmning af en större quantitet friskluft, helst när om vintern friskluften inkommer med låg temperatur i kalorifärröret, så är klart, att den genom en dylik inrättning befordrade luftvexlingen måste blifva långt ifrån tillräcklig för ett skolrum, samt att, då de in- och utgående luftströmmarna helt och hållet bero af uppvärmningen, den i sig sjelf svaga luftvexlingen med eldningen aftager, och vid en blidare årstid är ingen luftvexling på denna väg möjlig. Under sådana förhållanden kan man icke heller undra på, att ifrågavarande luftvexlingsapparat i skolor, der densamma finnes, icke vunnit förtroende eller skötes.

66. Som likväl under den kalla årstiden, då konstgjord ventilation är mest af nöden, någon grad af luftvexling genom denna apparat ernås, och anläggningskostnaden föga öfverstiger inköp af sjelfva kalorifärröret



med dess ventil, så må apparaten, i brist af en bättre, användas\*).

67. Derjemte och i samma mån som den konstgjorda luftvexlingen är ofullständig, blir det angeläget, dels att skolrummet dagligen och ofta, isynnerhet om morgnarna före eldningen samt före och efter hvarje lektion, grundligen luftas genom direkta förbindelser mellan inre luftmassan och yttre atmosfären, dels ock att sådana anstalter med fönsterventiler etc. vidtagas, hvarigenom äfven under vintern luftvexling med minsta möjliga olägenhet på lästimmarna kan åstadkommas. I detta hänseende användes

b). *Fönsters öppnande.*

68. När luften i ett rum sättes i beröring med den yttre atmosfären, t. ex. genom ett öppet fönster, kan, som bekant är, om begge luftmassorna hålla samma värme-grad, och då vindens verkan abstraheras, ingen rörelse dem emellan uppkomma. Men blefve den ena luftmassan, t. ex. rummets, uppvärmd till högre värmegrad, så skulle dubbla luftströmmar uppstå; den yttre, kallare luften skulle nemligen, såsom tyngre, intränga i rummet genom fönstrets nedre del, sjunka till golfvet och undantränga den varmare luften, hvilken i sin ordning skulle stiga mot rummets tak och utströmma genom öfre delen af det öppna fönstret. Vore rummets temperatur åter lägre än den yttre luftens, så skulle likartad rörelse mellan luftmassorna ega rum, men i motsatta riktningar.

Verkan af denna, såväl som all annan s. k. naturlig luftvexling, blir, när under den varmare årstiden ungefär lika värme råder

\*) Med bortlemnande af kalorifärröret bildas äfven under stundom för den ingående friskluften en kanal bakom kakelugnen, genom att med murverk på båda sidor till 6 å 8 fots höjd öfver rummets golf tilltäppa den vanliga spalten mellan väggen och kakelugnsryggen.

ute och inne, obetydlig, såvida ej vinden sätter luften i rörelse. Under den kallare årstiden åter medför luftmassornas liffigare och vid stor temperaturskillnad våldsamma omsättning ett olideligt drag och häftig afkylning i rummet, hvarföre, till undvikande af förkylning, vanligen hvarje öppning väl tillslutes, enär äfven genom de minsta otät-heter, såsom dörr- eller fönsterspringor, hvassa luftströmmar söka att i rummet intränga.

Att på detta sätt underhålla fortgående tillräcklig och fullkomligt ändamålsenlig luftvexling i ett skolrum är omöjligt, isynnerhet som fönsterna till följe af en mängd tillfälliga omständigheter, sådana som inträffande regn, snö eller bläst, buller på gatan etc., få dagar om året kunna hållas beständigt öppna.

69. Är man likväl, i brist på bättre luftvexlingsmedel, nödsakad att under lästimmarna öppna fönster, måste sådant vid kall årstid ske med urskiljning och försigtigt, samt luftvexlingen ständigt bevakas och regleras, så att barnen icke ådragas förkylning. Läraren bör i första hand öppna det till hans plats närmast belägna fönstret. Märker han då sjelf intet drag, kunna de längre bort belägna fönstern äfven öppnas. I allmänhet böra flere fönster samtidigt hållas öppna, och de öfversta bågarna i hvarje fönsterluft fö-reträdesvis användas till luftvexling.

70. För att denna luftvexling under den kalla årstiden må kunna noggrant regleras, anbringas stundom ventiler i fönsterna på följande sätt: Någon af de öfversta fönsterrutorna förses med gångjern i nedre kanten, så att den kan föras inåt, samt med gafflar af förtent jernbleck, i form af fjerdedels cirklar, vid båda sidorna. Dessa gafflar sammanbindas i deras yttersta hörn med en ten, hvars längd bör vara något större än ventilens (rutans) hela bredd, så att denna ten tillika hindrar ventilen att öppna sig mer än till horisontel ställning. För att öppna och sluta samt efter behag ställa ventilen,

kan man betjena sig af snören, fästade i ventilens öfverkant, samt trissor eller ringar ofvanför och nedom densamma, genom hvilka snörena löpa. Den ruta i innanbågen, som motsvarar ventilen, bör gå på gångjern.

71. I alla händelser måste alla ytterfönsterna samt en eller två af innanbågarna i hvarje luft gå på gångjern. För att mer och mindre öppna fönsterna, samt sätta dem i hvilken ställning som helst, kan man betjena sig af ett snöre och en kork eller klots att sätta emellan i fönsterfalsen.

c). *Luftkanaler genom taket.*

72. Till luftvexling i stora rum, användas ofta af bräder sammanfogade luftkanaler eller s. k. trummor, som från rummets tak föras lodrätt upp genom taklaget och höja sig öfver takåsen såsom skorstenar. Rörande denna luftvexlingsmethod torde följande förtjena nämnas:

Luften i ett rum har i samma mån, som den håller högre värmegrad än den yttre luften, benägenhet att utströmma genom en sådan luftkanal; men, om endast *en* lufttrumma funnes och denna utgjorde den enda öppningen till yttre atmosfären, så att rummet i öfrigt vore lufttätt, skulle antingen dubbla luftströmmar, en uppåt- och en nedåtgående, bildas i samma trumma eller också ingen rörelse kunna uppstå.

73. Luftvexlingen skall utan tvifvel mera regelmessigt fortgå, om lufttrumman medelst en lodrät skiljevägg delas midt itu till tvenne lika stora kanaler, som öfver byggnadens tak på något olika höjder utmynna åt sidorna, under det att trummans öfre ända skyddas med ett litet tak. Mynningen i rummets tak slutes och öppnas efter behag mer och mindre genom en ventil eller lucka, som vänder sig omkring en under trummans skiljevägg liggande horisontel axel, och som medelst ett snöre kan röras från horisontel till vertikal ställning. Till ett skolrum för 50

barn kan den delade trumman göras t. ex. med 1 och 2 fots sidor.

74. Genom en sålunda inrättad, tvådelad trumma kommer luften i allmänhet att omsättas på det sätt, att den förskämda luften i rummet stiger uppåt och utströmmar genom den ena af kanalerna, under det att frisk luft genom den andra drages nedåt och inströmmar. Men redan de luftströmmar, som intränga genom dörr- och fönsterspringor, skola rubba luftvexlingens jemna gång, och öppnas vid större temperaturskillnad en dörr eller ett fönster, så skall den varma luften af en inströmmande kallare luftmassa drifvas åt taket och utströmma genom den delade lufttrumman såsom genom en enkel.

Omsättningens liflighet ökas med trummans höjd, men beror i första hand af temperaturskillnaderna; således skall under sommaren, då inre och yttre temperaturen är temligen lika, så godt som ingen luftvexling uppstå, men deremot om vintern, vid stark köld, då rummet uppvärms och dörrar och fönster hållas väl tillslutna, den varma luften våldsamt uppstiga genom den delade trummans ena hälft, och samtidigt en stark, kall luftström nedstörta genom den andra.

I betraktande här af kan ifrågavarande inrättning icke obetingadt rekommenderas för skolrum. Barnen, som till en del måste taga plats rakt under öppningen, utsättas för förkylning och, vid öppnandet af en dörr eller ett fönster, för ett svårt drag. Ja, redan vid måttliga inre och yttre temperaturskillnader torde så häftigt drag förorsakas, att apparaten måste stängas.

75. Tvenne serskilda luftkanaler skulle ventilera ungefär på samma sätt som den tvådelade trumman\*).

\*) En variation af detta ventilationssätt är under benämningen "Muir's luftvexlingsapparat" efter tidningen Svenska Arbetaren beskrifven i Tidskrift för Byggnadskonst och Ingeniörvetenskap, 5:te årgången, N:o 7 & 8. Der föreslås en diagonaliter fyrdelad trumma.

76. En dylik apparat måste försigtigt och med urskiljning användas, isynnerhet vid kall årstid. Den är serdeles lämplig för att under lofstunderna åstadkomma hastig luftvexling i skolrummet.

77. Anläggningskostnaden är, isynnerhet vid nybyggnad, högst obetydlig.

d). *Serskilda öppningar i väggarna.*

78. Vill man genom serskilda öppningar i skolrummets ytterväggar åstadkomma luftvexling, så böra dessa öppningar tagas så nära taket som möjligt och på motsatta sidor af rummet. En nedåt gående frisk luftström intränger då från den sida, hvarifrån vinden kommer, och en uppåt stigande ström af skämd luft utgår genom den motsatta sidans öppningar.

79. På hvardera sidan af rummet upptagas antingen *en à två större öppningar*, och i hvardera insättes en lucka med gaflar etc., såsom om fönsterventiler är beskrifvet, eller ock *flera smärre*, t. ex. 6 tum i fyrkant med 2 à 3 fots afstånd från hvarandra. De sednare kunna öppnas och slutas medelst små skjutluckor, som sammanhållas af en rak jernsten, så att alla luckorna på samma sida sättas i rörelse på en gång och följas åt fram och tillbaka. Luftvexlingen modifieras derigenom att luckorna mer eller mindre öppnas.

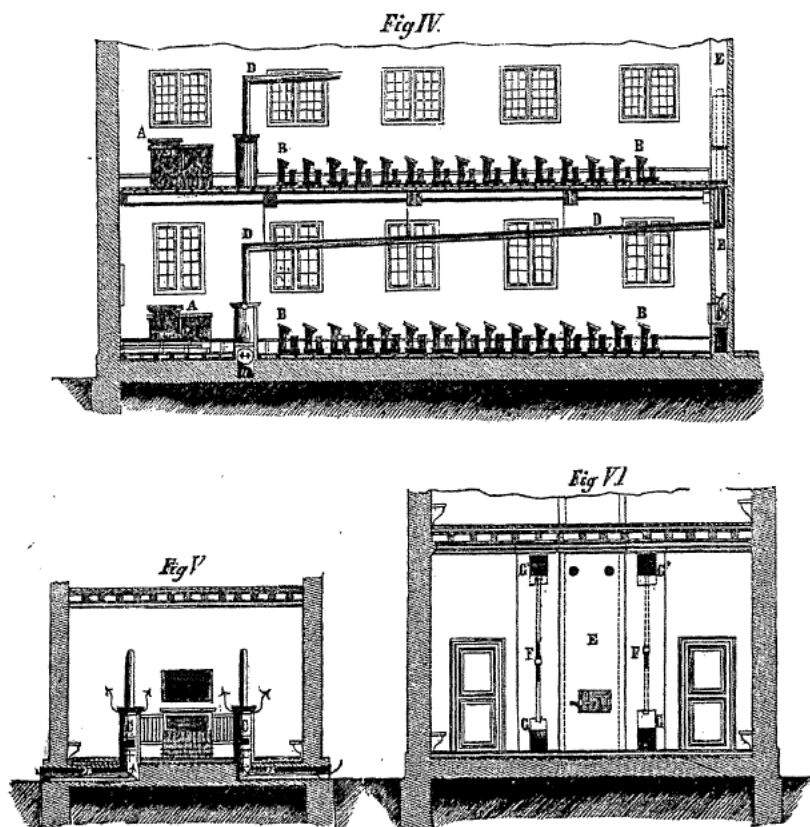
Om en skolsal har fönster endast i en af sina gafvelväggar, synes det vara lämpligt, att i den motsatta gafvelväggen insätta luckor af nyss berörde slag, för att under sommaren, då luften omsättes trögt, kunna från flera håll draga nytta af vindens verkan.

80. Denna luftvexlingsmethod är af samma art som de båda näst förut omtalade och jemväl behäftad med samma olägenheter i nästan samma grad som de.

**Mindre bekanta, förbättrade luftvexlings-metoder.**

81. Bland apparater, som vetterligen i vårt klimat och under våra förhållanden ej blifvit försökta, och hvilka derför utan icke kunna till användning rekommenderas, huru fördelaktiga de än för den theoretiska betraktelsen må synas, förtjenar visserligen den att i första rummet omnämnas, som af fransmannen E. Pécelet blifvit konstruerad för uppvärmning och luftvexling i franska primärskolor och i hans arbete "Traité de la chaleur", 3:me édit. § 2624 o. följ., sålunda i hufvudsak beskrifves:

"Fig. IV (pag. 18) visar längdgenomskäringen af en skolbyggnad i tvenne våningar, Fig. V tvärgenomskäringen af den ena skolsalen och dess värmeugnar, Fig. VI en annan tvärgenomskäring i större skala, å hvilken framställes en projektion af ventilations-skorstenen (cheminée d'appel). *A* utmärker lärarens plats; *B, B*, lärjungarnes bänkar; *C, C*, ugnar, som uppvärma luft, införd från yttre atmosfären; *D, D*, rökrör, som genomlöpa salen efter hela dess längd och derefter gå in uti ventilationsskorstenen; *E*, ventilations-skorsten med serskild eldstad, *f*, (foyer d'appel); *F, F*, trummor af trä eller murverk, placerade på hvar sin sida om skorstenen och med densamma förenade, hvardera genom en sidoöppning, belägen nära golfvet och nedanför rostet i eldstaden; *G, G*, öppningar för den i rummet befintliga luftens afgang, anbragta nära golfvet, *G', G'*, dylika öppningar nära taket; de, som äro på samma sida, kunna mer eller mindre tillslutas medelst spjell, som med en slå eller jernstång äro förenade så, att den ena mynningen är tillsluten, då den andra är öppen. *H, H*, rör, genom hvilka yttre luften är satt i förbindelse med det mellan hvardera ugnen och dess mantel liggande mellanrum. Den uppvärmda luften stiger först till salens öfre



del och sänker sig lagervis ända till golvet, invid hvilket de ventilationsöppningar finnas, som begagnas om vintern, och följaktligen är salens temperatur i det allra närmaste densamma på samma höjd. Ugnarna ställas nära intill lärarens plats, emedan han bör hafva tillsyn öfver dem. Rökrören löpa tversigenom salen, icke blott för att värmen må mera likformigt fördelas i rummet, utan förnämligast till vinnande af bränslebesparing genom rökens nästan fullkomliga afkyllning före dess utströmmande. Ventilationsöppningarna vid taket kunna endast om sommaren användas. När uppvärmning sker, uppkommer äfven luftvexling genom den friska, ugnen omgifvande luftens stigrkraft, samt genom stigrkraften hos luften i skorstenen, hvars temperatur först är lika med

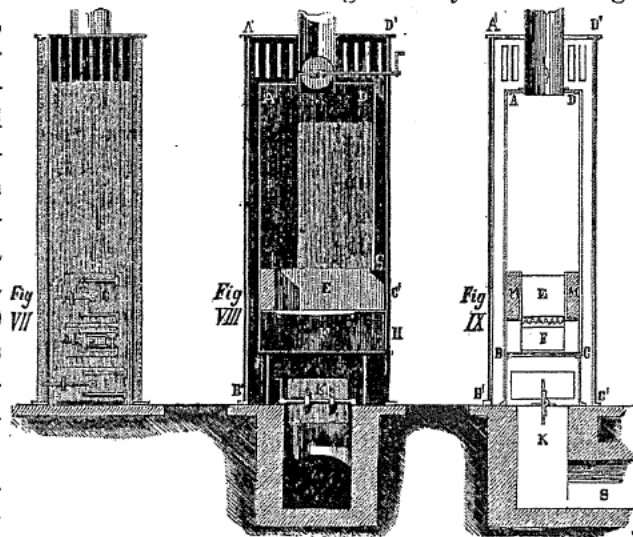
salens, men på en viss höjd ökas genom värmet hos de från ugnarne utgående förbränningspunkterna. I allmänhet bör den nederst i skorstenen anbragta eldstaden endast undantagsvis under sommaren begagnas.”

”I denna allmänna anordning skulle några temligen viktiga förändringar kunna vidtagas. För att salens uppvärmning före barnens ankomst, då luftvexling ännu icke behöfves, må kunna med hushållning bedrivas, borde denna verkställas så, att samma luft finge cirkulera omkring ugnen, och erfordras för sådant ändamål: 1:o att en kommunikation med salen inrättas genom ugnens mantel nära golvet, hvilken kommunikation skulle stängas, när man ville återställa luftvexlingen; 2:o att spjellen för luftens till-

träde till de tvenne trummorna på ömse sidor om skorstenen göras oberoende af hvarandra, så att luftens utströmmande kan helt och hållet upphävas. Slutligen skulle det vara nyttigt att på något sätt underlätta den skända luftens utströmmande under sommaren, då luftvexlingen icke behöfver genom ventilationshärden (se *f.* å figuren IV) bedrifvas. Till den ändan anbringas i skorstenen, uppe vid taket, en öppning, försedd med ett spjell, som i detta fall hålles fullkomligt öppet; luften möter då ringa motstånd och löper ut med mycket större hastighet, än om den skulle gå ned genom sidorören *F*, i hvilka den tre gånger måste ändra riktning i rät vinkel."

"När endast en värmeugn (calorifère) användes, är det fördelaktigast att placera densamma midt uti salen. Har man tvenne, är det lämpligast att uppställa dem så, att afståndet dem emellan blir dubbelt så stort som hvardera ugnens afstånd från sidomurarna. Man skulle också kunna verkställa uppvärmningen och luftvexlingen hvar för sig genom skilda apparater. Värmeugnarna skulle då ställas vid rummets ena ända och hafva rökrör, som, sedan de genomlupit en del af rummet, återvände till ugnarna för att uppnå en gemensam skorsten, och i rummets andra ända skulle man placera en liten ugn (poêle) utan mantel, hvars rör omedelbart skulle ledas till ventilationskorstenen."

"Värmeugnarna inrättas såsom figu-



rerna VII, VIII och IX angifva. Den förstnämnda figuren visar ugnens framsida, de två sednare tvenne vertikalkänningar af densamma; *ABCD* är ett rektangulärt prisma af jernplåtar eller gjutgjern, som omgifver eldstaden; *A'B'C'D'*, ett yttre prisma af jernplåtar, fästadt vid golfvet; *E*, eldstad; *F*, askrum; *G*, eldstadslucka; *H*, lucka till askrummet; *I*, lucka nedanför askrummet, hvilken ställes öppen endast då, när man vill uppvärma rummet, utan att få luftvexling i detsamma; *K*, spjell, medelst hvilket förbindelsen mellan salen och den yttre luften kan afbrytas. (Spjället kan hållas i olika ställningar medelst en vef, hvars yttersta ända är försedd med stift, som fäster sig uti hål, borrhade i en på golfvet anbragt halfcirkel af jern.) *M*, murmassa, som omgifver eldstaden; *S*, kanal, som leder frisk luft från yttre atmosfären till ugnen. Ofta gifver man afven cylindrisk form åt ugnen."

"I salar för 150 lärjungar bör man gifva rökrören minst 0,5 fots diameter; för ännu större salar vore det ändamålsenligt att öka detta mått till 0,6 à 0,7 fot. Dessa storlekar göra tillfyllest för draget; men genom större rör skulle röken för mycket afky-

las och ventilationskorstenarnas verkan minskas. Samma olägenheter skulle uppstå, om rökrören allt för långt utsträcktes eller finge för många knän. För att verksam luftvexlingskall erhållas, är det af synnerlig vigt, att röken icke går ut för mycket afkyld. Rökrörens vidd be-

höfver icke ökas i samma proportion som lärjungarnes antal tillväxer, dels emedan vi antaga, att, när lärjungarnes antal öfverstiger 50, man använder tvenne jernugnar; dels emedan i sjelfva verket åtgången af bränsle föga ökas. Orsakerna härtill äro, att ytan af fönster och murar, genom hvilka en stor del af värmets förloras, icke tilltager i proportion med lärjungarnes antal, samt att det genom respirationsprocessen alstrade värmets lemman en betydlig del af den behöfliga värmequantiteten."

"Värmeugnarnas inre cylinder håller föga mer än 4 fot i höjd och 1,4 fot i bredd. Manteln kan vara af jernplåt, gjutjern eller bränd lera (tegel, kakel); sistnämnda ämne skulle hafva den fördelen, att värmegraden på ugnens yttre yta blefve lägre. Den yttre cylindern eller prismat bör, i anseende till luftens genom upphettningen förökade volym, hafva sådana mått, att genomskärningen af rummet mellan dess inre yta och eldstaden är minst en och en half gång så stor som den motsvarande ventilationskanalens."

"Det är af synnerlig vikt, att friskluftskanalernas öppningar utåt äro belägna mot en öppen plats, långt från latrinerna, och tillräckligt högt öfver marken, med ett ord oberoende af alla sådana inflytelser, som kunna förskämma luften. Ventilationsluften får ej tagas från de rum, der barnen förvara sina matsäckar, emedan luften der aldrig är ren. Kanalerna kunna anläggas under golvet mellan bjelkarne eller i fönsterbröstningarne. De kunna vara murade eller gjorda af trä, af hvad form som helst. De böra i genomskärning hålla ungefär 70, 140 och 200 qvadrat-decimaltum för salar med utrymme för 50, 100 och 150 barn. Dessa genomskärnings-areor äro tillräckliga, när kanalernas längd icke öfverstiger 27 å 34 fot; men måste ökas om kanalerna äro längre. Det medför dock alldeles ingen olägenhet att

i allmänhet gifva friskluftskanalerna mycket ansenligare genomskärnings-areor."

"Ventilationsskorstenen kan göras af murverk eller jernplåtar. Dess genomskärnings-area bör vara i det närmaste lika med friskluftskanalernas. Om man gäfvade den en större area, blefve afloppshastigheten för liten, och den stigande luftströmmen skulle icke kunna motstå vindarnes verkan på skorstenens öfre öppning. Det vore derföre icke klokt att göra genomskärnings-arean mycket större, än som antyddes. Emellertid, om man för luftvexling ville begagna en redan uppförd skorsten, hvars area vore för stor, skulle sådant låta sig göra, om man efter behof sammandroge den öfre öppningen. Skorstenen bör höja sig öfver taken och avslutas med en plåthuf, afsedd att förhindra vindarnes menliga inverkan på den uppstigande luft- och rökpelaren. Om skolhuset vore omgifvet af andra, mycket höga byggnader, skulle vid häftiga vindar väderhvirflar kunna genom skorstenen trycka luften tillbaka ned i rummet. Till förekommande här af vore bäst att förlänga rökröret genom skorstenens hela höjd och några fot öfver dess spets, samt skydda skorstenen, såväl som röret, med en ändamålsenligt inrättad huf."

"I vanliga fall öfverstiger åtgången af stenkol under de kallaste vinterdagarne i Paris och norra Frankrike icke 2, 3 och 4 kilogrammer (= 4,7, 7 och 9,4 skålpund) i timman för salar, som inrymma 50, 100 och 150 lärjungar."

"Uppvärmningen verkställes på följande sätt: En timma före barnens ankomst eldas värmeugnarna, sedan man stängt öppningarne till såväl friskluftskanalen som ventilationsskorstenen, men lemnat den lucka öppen, genom hvilken luften kan från rummet intränga i mellanrummet mellan manteln och ugnen. Uppvärmningen fortgår nu, medan



luften i rummet cirkulerar, och några ögonblick efter lärjungarnes ankomst sättes luftvexlingen i gång.”

”Om sommaren, när temperatur och andra omständigheter sådant medgifva, sker luftvexlingen med fördel genom dörrars och fönsters öppnande; men det är lätt att med konst bedrifva densamma, utan att i någon måtto förändra apparatens inrättning. I detta hänseende gör det tillfyllest att tända en liten eld nederst i skorstenen; den yttre luften skall då, likaväl som under vintern, strömma in genom ugnarnas mantlar. Om tilloppsrören äro horizontela, faller den friska luften, som i allmänhet är kallare än luften i rummet, till golvet, och man måste då, på det att luften i rummet må omsättas, låta densamma komma till ventilationsskorstenen genom de öfre öppningarne; men om tilloppsrören åter äro vertikala, så skola tvenne motsatta krafter vid friskluftens inströmmande komma att verka, den ena till dess uppstigande, den andra till dess nedfallande, och endast medelst försök skall det kunna utrönas, huruvida man bör låta luften från rummet gå ut vid taket eller vid golvet.”

— — — — —  
— — — — —

”De apparater, vi sålunda beskrifvit, hafva först blifvit tillämpade i Paris i tre stora skolor, den ena belägen vid Rue Neuve-Coquenard, de andra i la Halle aux Draps. Man har i allt varit nöjd med de erhållna resultaterna, samt hvad uppvärmningen angår med dess likformighet och den bränslebesparing, som, oaktadt den af luftvexlingen vållade värmeförlusten, uppstått derigenom, att värmets genom dessa apparater är bättre tillgodogjort än genom de gamla. I skolan vid rue Neuve-Coquenard, den enda i hvilken jag gjort försök, var det icke en grads skillnad mellan temperaturen i salens

motsatta ändar, och luftvexlingen, som dock vanligen icke öfverstiger 6 kubikmeter (228 kub. fot) i timman för hvarje lärjunge, åstadkom redan en märkbar skillnad mot förhållandet i de skolor, som sakna luftvexling.”

— — — — —  
— — — — —

”I det system för uppvärmning och luftvexling, som nu blifvit beskrifvet, förefinnes en olägenhet, som under andra omständigheter skulle vara af betydighet; luftvexlingen är nemligen förenad med uppvärmningen och förändras med denna. Således, om luftvexlingen är tillräcklig under de kallaste dagarna om vintern, skulle den vara otillräcklig vid början och slutet af nämnda årstid; jag har icke destomindre föredragit denna inrättning framför andra, vid hvilka man skulle kunna skilja uppvärmningen från luftvexlingen, för dess ytterliga enkelhets skull, så mycket hellre, som den i sammanhang med rummets allmänna uppvärmning alstrade luftvexlingen kan genom den nederst i ventilationsskorstenen förlagda eldstaden kompletteras och förökas, när den är otillräcklig, hvilket bättre utrönes medelst känsligheten hos våra luktorganer, än genom de bästa instrumenter och mest fullkomliga analyser. Förbränningen af 1 kilogram (2,5  $\epsilon$ ) stenkol i timman i denna ventilationshård skulle vara tillräcklig för att åstadkomma fullständig luftvexling i en skolsal med 200 lärjungar, så framt skorstenen vore minst 34 fot hög och 3 qv. fot i genomskärning.”

82. I den mån jernugnar mera allmänt användas till uppvärmning af rum, såsom fallet är i en eller annan af rikets sydligaste provinser, skulle Péclets apparat utan tvifvel med framgång kunna tillämpas äfven hos oss, sådan den här blifvit beskrifven. Likväl böra eldstäderna för mera varaktighets skull vara af gjutjern, icke af plåtar, samt runda, icke fyrkantiga.

Att jernugnar med mantlar redan på ett eller annat ställe kommit i bruk i svenska skolor, kan slutas af en uppgift i Tidskrift för Byggnadskonst och Ingeniörvetenskap, 1:sta årgången, pag. 130. Men den i samma årgång beskrifna ventilationsugnens verksamhet är såtillvida ofullständig, som skämdluftens utsugning besörjes endast genom sjelfva eldstaden, hvaraf följer, att luftvexlingen blir = 0, såväl när spjället skjutes, som under de tider af året, då ugnen icke utan stort obehag skulle kunna eldas. Denna brist finnes hos Pécelet sinnrikt och enkelt afhjelpat genom hans ventilationsskorsten med serskild eldstad \*).

Men i allmänhet medföra jernugnar för ett kallare klimat vissa olägenheter. Isynnerhet då de på det franska sättet placeras fristående, så att deras rökrör genomlöpa en större del af rummet, skymma de och skada rummets utseende. Äfven bör värmeugnen i vårt klimat ega en förmåga att bibehålla och småningom meddela värme, hvilket jernugnen saknar. På landsbygden förstår man ej heller att sköta en jernugn.

83. Likasom Pécelet upptagit det i hans land gängse sättet för skolans uppvärming medelst jernugnar och utvecklats detsamma till en fullständig värme- och luftvexlingsapparat, så böra äfven vi måhända, för att erhålla ett för våra förhållanden afpassadt luftvexlingssystem, icke allt för mycket afvika från våra vanliga eldstäder. Sannolikt skulle en duglig luftvexlingsapparat erhållas, om, jemte kakelugnar samt kalorifärör af tillräckliga dimensioner och vederbörlig höjd med tillhörande friskluftskanaler, en ventilationsskorsten anlades enligt Pécelets method (se mom. 81), då en eld till luftvexlingens be-

\*) En apparat, som börjat med fördel användas, är den Wallinska kalorifären. Så vidt känt är har den dock icke i skolor blifvit begagnad.

drifvande vid behof kunde underhållas, antingen i kakelugnen eller i ventilationsskorsten; — eller om, i ännu närmare öfverensstämmelse med Pécelets förslag, en ugn af gjutjern, invändigt fodrad med tegel, användes med förlängda rökrör af jernbleck samt mantel af tegelmur och kakel, hvarvid friskluften skulle inströmma mellan ugnen och manteln. Ventilationsskorstens eldstad finnge i intet fall förläggas i vinden, utan vid bottenbjelklaget eller allra helst i källaren, på det skorstens höjd öfver eldstället måtte blifva så stor som möjligt.

Men försök, som, enär de lätt misslyckas, endast der böra komma i fråga, hvar est medel för ändamålet kunna uppoffras, måste ledas af en theoretiskt bildad fysiker och utföras af kunnige ingenjörer och byggmästare, om ett lyckligt resultat skall vara att förvänta.

#### Snygghet.

84. Äfven den kraftigaste luftvexling blir otillräcklig i en skola, om icke snygghet och renlighet der strängt iakttages.

85. På somliga orter, der renlighet och friskluft i hemmen föga aktas, komma barnen ofta till skolan smutsiga och med illaluktande kläder. Långt ifrån att låta sådant utan anmärkning passera, bör läraren göra allt hvad på honom ankommer, för att i skolan upprätthålla snygghet, då äfven ett bättre tillstånd i detta hänseende helt visst skall från skolan sprida sig till hemmen.

86. Ingen bör få inkomma i skolsalen med nedsmutsade kläder och våta skor, ej heller dit införa hufvudbonad och ytterplagg, och ännu mindre dit medföra sin matsäck, eller derstädes hålla sin måltid.

87. Om förvaringen af ytterplagg och matkorgar, se mom. 93.

Under den tid af året, då barnen för kölds skull icke kunna tvätta ansigte och

händer vid brunnen, bör någon anstalt till tvagning inrymmas i afklädningsrummet.

För fötternas rengöring från smuts och snö böra dels fotjern anbringas å ömse ändrar af första trappsteget i yttertrappan, dels ock grofva mattor finnas utanför dörrarne och i afklädningsrummet. Ett radikalt förfaringsätt i detta hänseende vore att låta barnen före lästimman taga af sig de nedsmutsade eller våta skodonen. På några orter lär det verkligen vara sed, att barnen, då vägarna äro smutsiga, lemna sina skor i förstugan och komma in i skolsalen barfota. Bättre vore det dock, om hvarje barn i sådant fall hade tvenne fotbeklädnader, hvaraf den ena, ett par lätta skor, förvarades i skolans afklädningsrum till ombyte.

88. Följande yttrande rörande vigten deraf, att skolrummet hålles snyggt torde förtjena anföras:

"Under alla omständigheter är det lärarens pligt att sörja för, det skolrummet, med allt hvad dertill hör, hålles väl rent. Det är en helig ort, och en sådan bör äfven till sitt yttre bära renhetens prägel. Dessutom skall läraren förgäfvos af barnen fordra renlighet i deras yttre, aktsamhet om böcker och andra undervisningsmedel, samt snygghet i deras skriftliga arbeten, om han dagligen låter dem se, huru föga han värder sig om renlighet i det rum, som han själf har att vaka öfver. Deremot kunna barnen lätt vänjas, att innan de gå in i skolrummet rengöra sina fötter, samt att derstädes icke strö omkring papperslappar, afskräden ur matsäckarna o. d., om skolrummet, genom själfva sitt städade utseende, på dem gör ett, dess bestämmelse motsvarande, värdigt intryck" \*).

Skolrummet bör ovilkorligen sopas och dammas hvarje dag, samt skuras en gång i veckan eller oftare om det behöfves.

\*) K. Bormann. Schulkunde, 6:te Aufl. s. 103.

### Skolsalens kubik-innehåll.

89. Medelst en apparat, som uppfyllde de ofvan (mom. 62) anförda fordringarne, skulle luften i en skolsal alltid kunna underhållas frisk, äfven om rummet relativt till barnens antal inneslöte ganska liten luftvolym; men i samma mån, som luftvexlingsmedlen äro ofullkomliga, måste skolsalen till sitt kubik-innehåll närma sig den rymlighet, som skulle erfordras, för att det gifna antalet barn under två timmars fortsatt läsning skulle kunna vistas i ett absolut lufttätt rum, utan att luften vid slutet af nämnda tid vore osund, och som enligt de tillförlitligaste försök och beräkningar uppgår till ett å två tusen kub. fot för hvarje barn.

90. När de mått tillämpas, som här ofvan blifvit föreslagna, uppstår, såsom af beskrifningen till plancherne synes, i olika skolsalar en luftrymd af 210 å 250 kub. fot per barn. Erfarenheten skall visa, att minst denna rymlighet erfordras, om luften medelst förhanden varande luftvexlingsmedel skall kunna hållas dragligt ren.

## Fjerde kapitlet.

### Afklädningsrummet.

91. Det för ytterplaggens afklädnings samt förvaring af barnens till skolan medförda matförråd afsedda rummet, som måste vara ljusst, samt ordentligt uppvärmas och ventileras, bör naturligtvis förläggas vid ingången till skolsalen.

92. Serskild förstuga vid hufvudingången kan icke derjemte erfordras; men afklädningsrummet bör mot yttre luften hafva dubbla dörrar, på minst en dörrbredds afstånd från hvarandra\*), och dessa böra under vintern

\*) Om vid hufvudingången en öppen förstuguvist anordnas, kan denna under vintrarna förses med en omklädnad af brädlämmar, fastade med haspar, och den yttre dörren insättas uti samma omklädnad.

uppföstrande inflytande aldrig saknas i skolhusets närhet. Träden bidraga äfven med sin skugga att hålla luften sval och mildra sommarhettan.

111. Alderstund barnen alltid, jemväl under regnigt och hårdt väder, böra tillbringa lofstunderna i fria luften, vore det önskvärdt, att vid sidan af gården uppfördes ett på trenne sidor slutet skjul eller tak på pålar — en s. k. *täckt lekplats*, försedd med säten.

112. På gårdsplanen eller, om täckt lekplats finnes, under gemensamt tak dermed uppställas de enkla apparaterna för barnens gymnastiska öfningar. Serskild gymnastiklokal kan först vid större skolor med flera klasser komma ifråga.

113. Brunnen, som måste vara öfverbygd, förses med pump och drick-kar (t. ex. små bågare eller skopor af förtent jernbleck, fästade med små jernkedjor vid pumpens utkastare), samt ett bäcken (t. ex. ett litet träkar), i hvilket barnen kunna tvätta sina händer och sitt ansigte.

114. Den vid en fast skola för lärarens hushållning erforderliga uthusbyggnaden, innehållande fähus jemte foderskulle, vedbodas och svinhus, förlägges afsides eller bakom hufvudbyggnaden, och en serskild bakgård inrättas, på hvilken spillningen efter kreaturen kan uppläggas, utan att obehag deraf förorsakas.

115. Afträdena måste ligga väl undan-gömda och likväl vara lätt tillgängliga. Gos-sarnes och flickornas inrättas på skilda stäl-len, eller åtminstone med ingångar från olika sidor. För hvart 15:de à 20:de barn erfor-dras en sitts. Hvarje sitts skiljes från de öfriga genom brädväggar och dörrar. En serskild afdelning inrättas på vanligt sätt för läraren.

På dertill tjenlig plats bör finnas en serskild afplankning med urinrännor. Att derstädes måste finnas ett lätt affall är af sig sjelf tydligt; äfvensom att rännorna böra sköljas med vatten, så ofta som det befin-nes behöfligt.

## II. Beskrifning till Plancherna.

### Pl. I.

Ritning till skolhus af sten för fasta skolor med 50 barn.

Skolsalen håller:	
i längd 10 bord à 12,5 tum.....	12,5 fot
10 stolplatser à 14,5 tum.....	14,5 »
1 gång för lärarens pulpet.....	5 »
1 d:o vid motsatta gäfvägg.....	5 »
1 midtelgång.....	3 »
	<hr/>
	40 fot,
i bredd 5 bord à 20 tum.....	10 fot
4 genomgångar à 13 tum.....	5,2 »
1 sidogång vid fönsterväggen.....	1,5 »
1 d:o vid salens inre långvägg.....	5,3 »
	<hr/>
	22 fot,
i höjd.....	12 fot,
samt har: tillsammans för hvarje barn	
golftyta, qv. fot.....	880 ..... 17,6
luft, kub. fot.....	10,560 ..... 211,2
fönsteryta, qv. fot.....	180 ..... 3,6

### Pl. II.

Plan och façade till skolhus af trä för fasta skolor med 50 barn.

Jemför Pl. I.

### Pl. III.

Ritning till skolhus af sten för fasta skolor med 100 barn.

Skolsalen håller:	
i längd 14 bord à 12,5 tum.....	17,5 fot
14 stolplatser à 14,5 tum.....	20,3 »
1 gång för lärarepulpent m. m.....	5,6 »
1 d:o vid motsatta gäfvägg... ..	5,6 »
1 midtelgång.....	3 »
	<hr/>
	52 fot,
i bredd 7 bord à 20 tum.....	14 fot,
6 genomgångar à 13 tum.....	7,8 »
1 sidogång vid fönsterväggen.....	1,5 »
1 d:o vid salens inre långvägg... ..	6,7 »
	<hr/>
	30 fot,
i höjd.....	16 fot,

samt har: tillsammans för hvarje barn

golftyta, qv. fot.....	1,560 ..... 15,6
luft, kub. fot.....	24,960 ..... 250
fönsteryta, qv. fot.....	378 ..... 3,8

### Pl. IV.

Planer till skolsalar med 60, 80 och 150 barn.

a) 60 barn. Fig. 1.

Skolsalen håller:	
i längd 10 bord à 12,5 tum.....	12,5 fot
10 stolplatser à 14,5 tum.....	14,5 »
1 gång för lärarens pulpet m. m. ...	5 »
1 d:o vid motsatta gäfvägg... ..	5 »
1 midtelgång.....	3 »
	<hr/>
	40 fot,
i bredd 6 bord à 20 tum.....	12 fot
5 genomgångar à 13 tum.....	6,5 »
1 sidogång vid fönsterväggen.....	1,5 »
1 d:o vid salens inre långvägg... ..	6 »
	<hr/>
	26 fot,
i höjd.....	14 fot,

samt har: tillsammans för hvarje barn

golftyta, qv. fot.....	1,040 ..... 17,3
luft, kub. fot.....	14,560 ..... 243
fönsteryta, qv. fot.....	230 ..... 3,8.

För fasta skolor med lärarebostad göres fortsättningen af planen enligt Pl. I; façader och genomskärningar efter Pl. IV, Fig. 2, jemförd med Pl. I.

b) 80 barn. Fig. 3.

Skolsalen håller:	
i längd 13 bord à 12,5 tum.....	16,25 fot
13 stolplatser à 14,5 tum.....	18,85 »
1 gång för lärarens pulpet m. m. ...	5,95 »
1 d:o vid salens inre långvägg... ..	5,95 »
1 midtelgång.....	3 »
	<hr/>
	50 fot,
i bredd 6 bord à 20 tum.....	12 fot
5 genomgångar à 13 tum.....	6,5 »
1 sidogång vid fönsterväggen.....	1,5 »
1 d:o vid salens inre långvägg... ..	6 »
	<hr/>
	26 fot,
i höjd.....	14 fot,

samt har:	tillsammans	för hvarje barn
golffyta, qv. fot.....	1,300	16,3
luft, kub. fot.....	18,200	227
fönsteryta, qv. fot.....	276	3,5

För fasta skolor med lärareboställe göres planens fortsättning enligt Pl. III; facader och genomskärningar efter Pl. IV, Fig. 2, jämförd med Pl. III.

c) 150 barn. Fig. 4.

Fig. 4 ger exempel på en skolsal om 36 fots bredd, med fönster i båda långsidorna. (Se mom. 43.)

För 120 barn göres planen 10 å 11 fot kortare, men med samma bredd.

Vid skolsalar af ifrågavarande storlek gör sig behovet af klass- eller lexhöringsrum gällande, och då man för 120 å 150 barn måste antaga minst tvenne lärare vara anställda, skulle på landet äfven tvenne lärareboställen erfordras. I allmänhet bör ej så stort antal barn hopas på samma ställe, hvilket dessutom på landet sällan kan ske, utan att somliga få allt för lång skolväg.

Pl. V.

Ritning till skolhus af trä för ambulatöriska skolor med 30, 40 och 50 barn.

a) 30 barn. Fig. 1, 2 och 3.

Skolsalen håller:		
i längd	8 bord å 12,5 tum.....	10 fot
	8 stolplatser å 14,5 tum.....	11,6 "
	1 gång för lärarens pulpet m. m.....	5 "
	1 do vid motsatta gafvelväggen.....	5 "
	1 midtelgång.....	2,4 "
		34 fot,
i bredd	4 bord å 20 tum.....	8 fot
	3 genomgångar å 13 tum.....	3,9 "
	1 sidogång vid fönsterna.....	1,5 "
	1 do vid salens inre långvägg...	5,6 "
		19 fot,
i höjd.....		12 fot,
samt har:                      tillsammans      för hvarje barn		
golffyta, qv. fot.....	646	21,5
luft, kub. fot.....	7,752	258
fönsteryta, qv. fot.....	180	6.

b) 40 barn. Fig. 4.

Skolsalen håller:

i längd, lika som å Pl. V, a).....	34 fot.
i bredd, lika som å Pl. I.....	22 "
i höjd.....	12 "

samt har:	tillsammans	för hvarje barn
golffyta, qv. fot.....	748	18,7
luft, kub. fot.....	8,976	224
fönsteryta, qv. fot.....	180	4,5.

Fortsättningen af denna plan tages efter Fig. 3; höjdmåtten och yttre utseendet efter Fig. 1 och 2.

c) 50 barn. Fig. 5.

Likasom å Pl. I håller skolsalen:

i längd 40 fot,
i bredd 22 "
i höjd 12 "

samt har:	tillsammans	för hvarje barn
golffyta, qv. fot.....	880	17,6
luft, kub. fot.....	10,560	211,2
fönsteryta, qv. fot.....	180	3,6

Fortsättningen af planen göres efter Fig. 3; höjdmåtten och yttre utseendet efter Fig. 1 och 2.

Bilagorna A, B och C

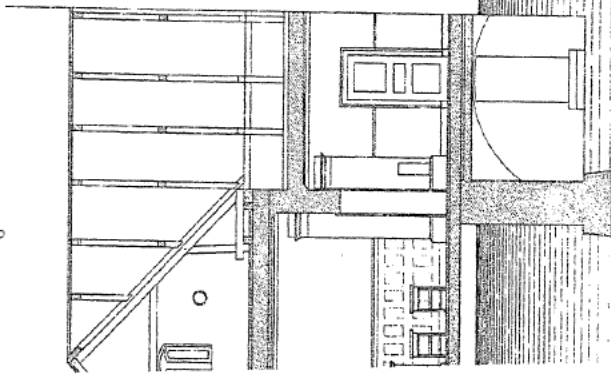
innefatta alternativa förslagsritningar, efter till en del andra grunder än de, som i det föregående blifvit utvecklade, nemligen i afseende på sjelfva lärosalarne:

1:o) att planformen något mera närmar sig kvadratens,	} Bil. A.	} Bil. B. och C.
2:o) att fönster anbringas i tvenne motsatta sidor, och		
3:o) att katedern placeras vid ena långväggen, samt i afseende på byggnadens yttre anordning,		
4:o) att både lärarens bostad och skolsalen inrymmas i en hufvudbyggnad utan flygel.		

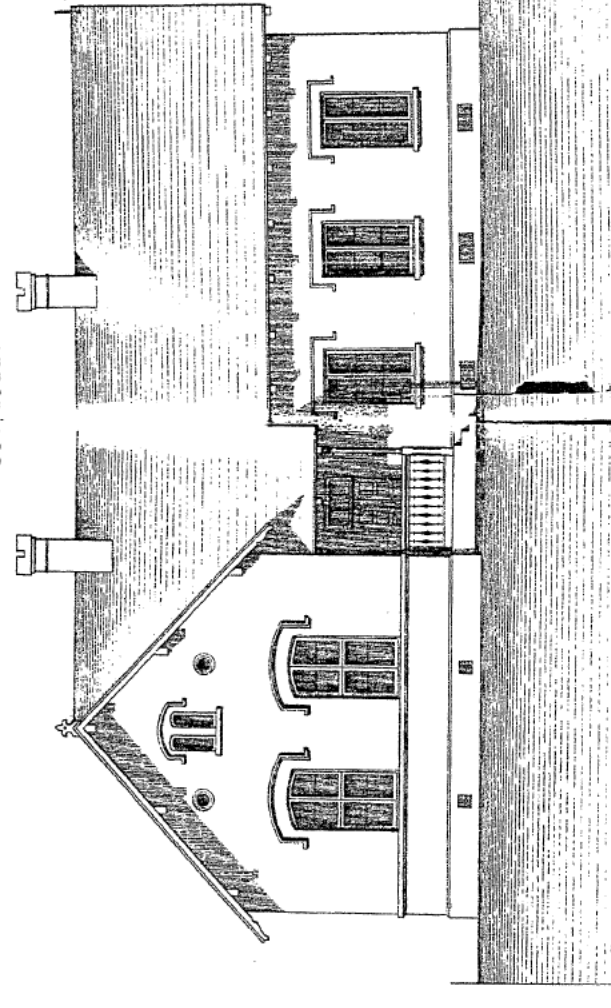


Kitning till skolhus af sten för fasta skolor med 50 barn.

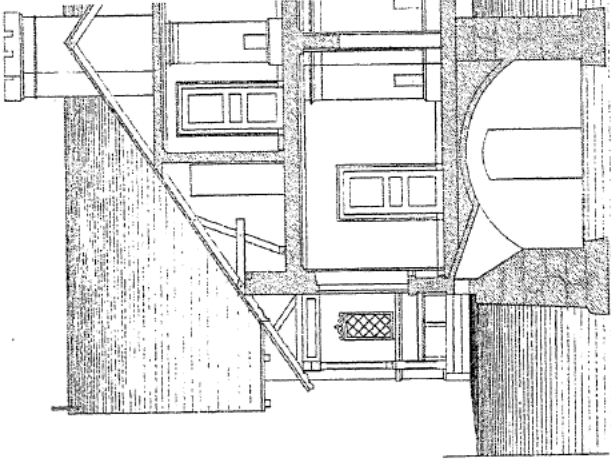
snomskäring A-B.



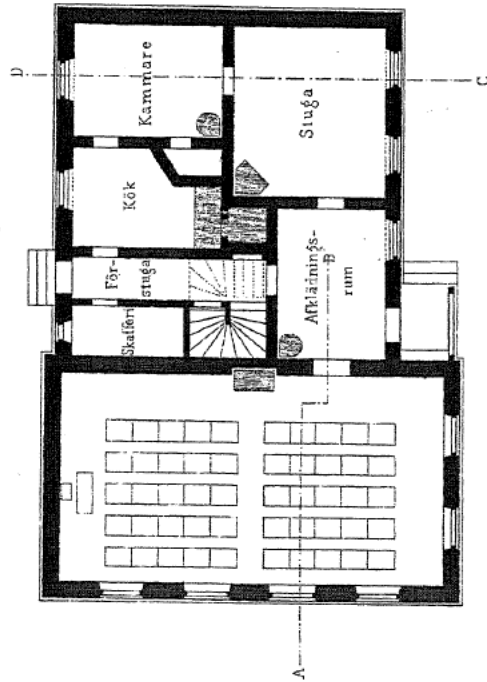
Fr. sida.



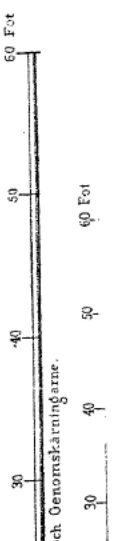
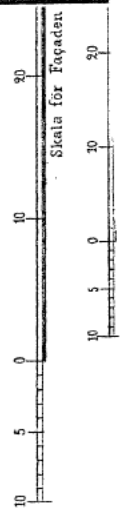
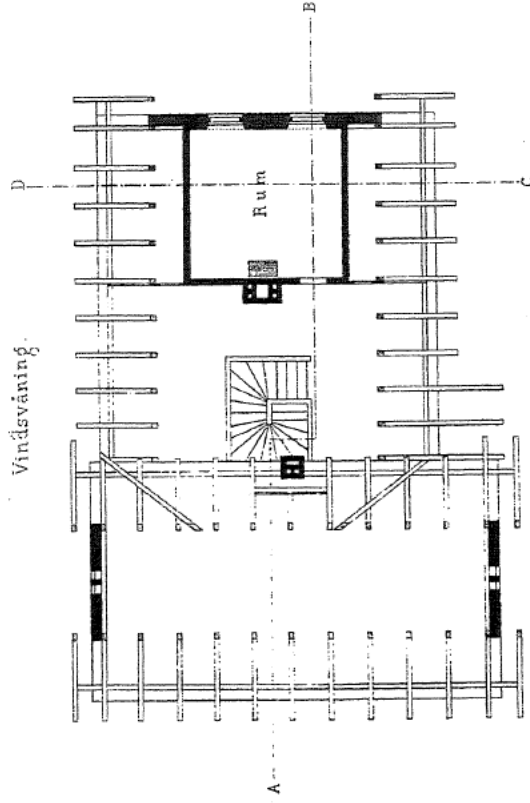
Genomskäring C



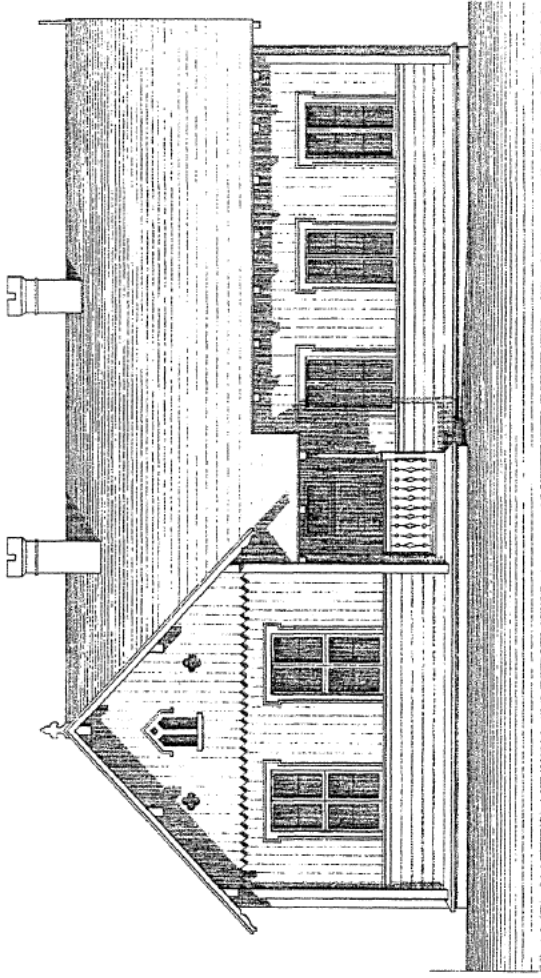
Bottenvåning.



Vindsvåning.



Façade.



Plan.

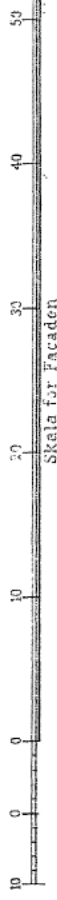
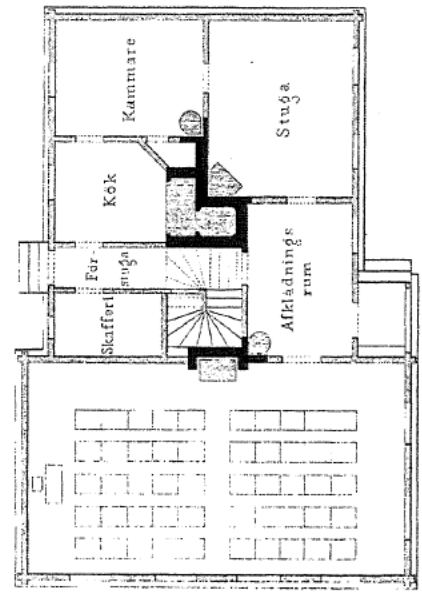


Fig. 1.

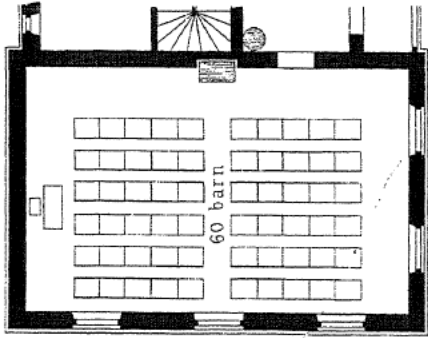


Fig. 2.

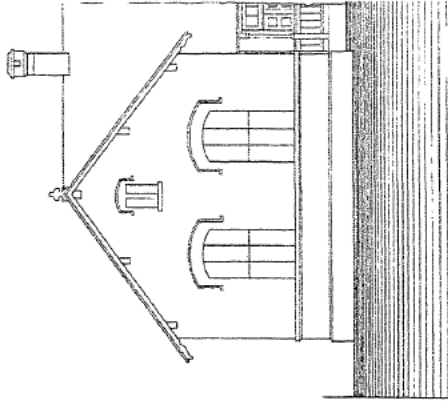


Fig. 4.

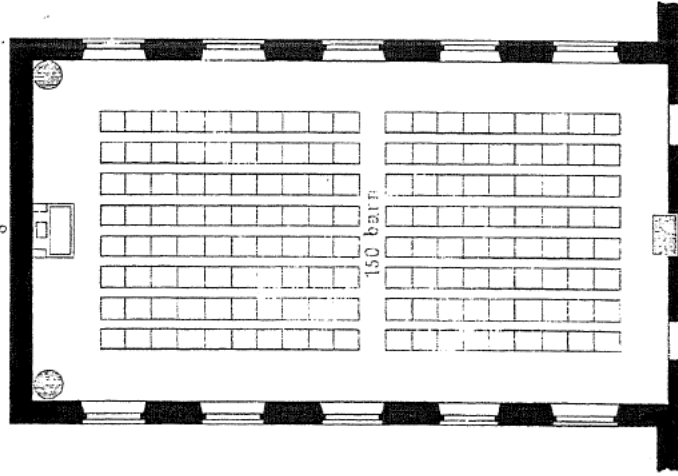
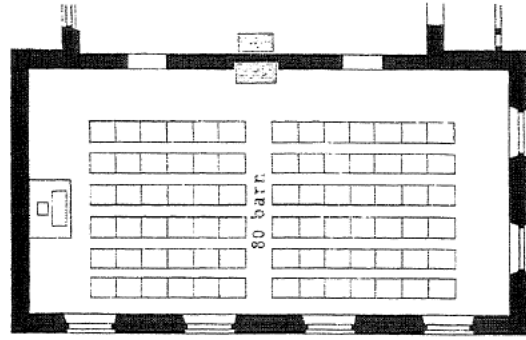
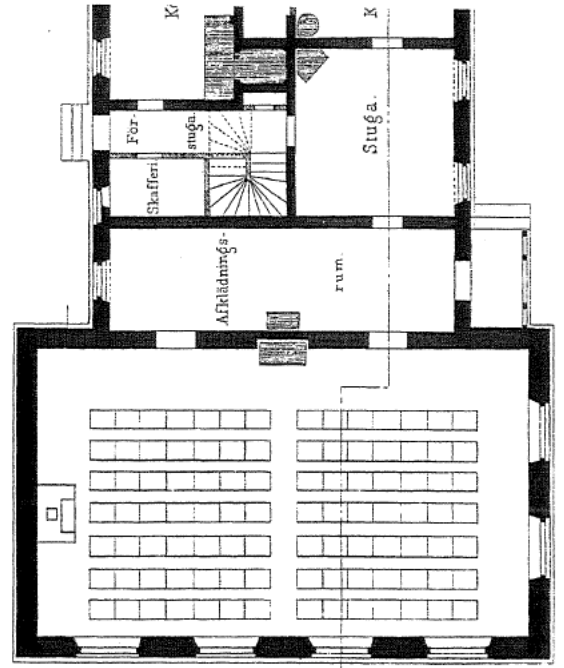
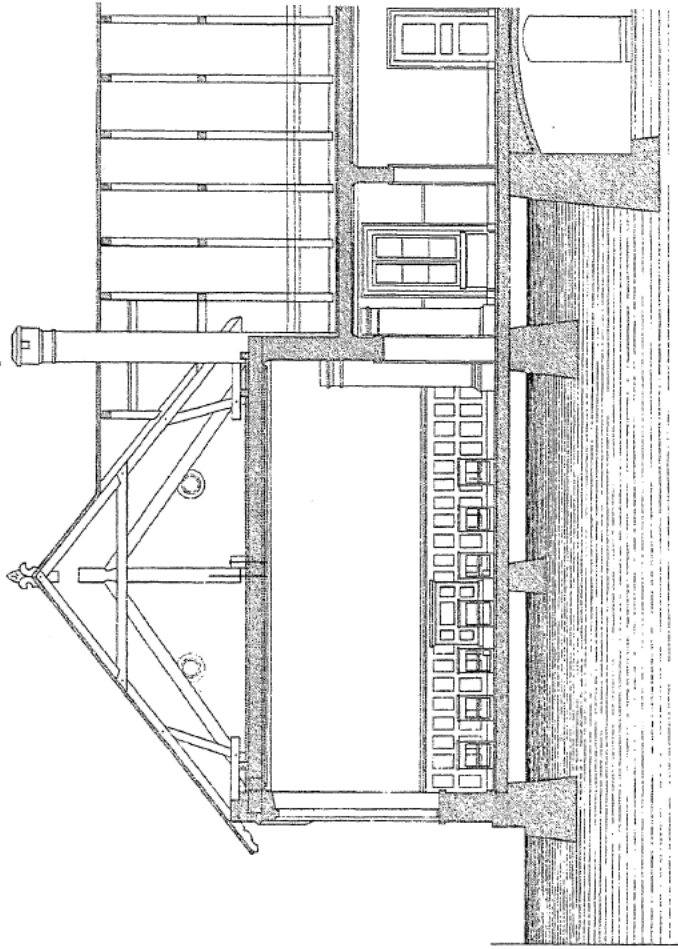


Fig. 3.



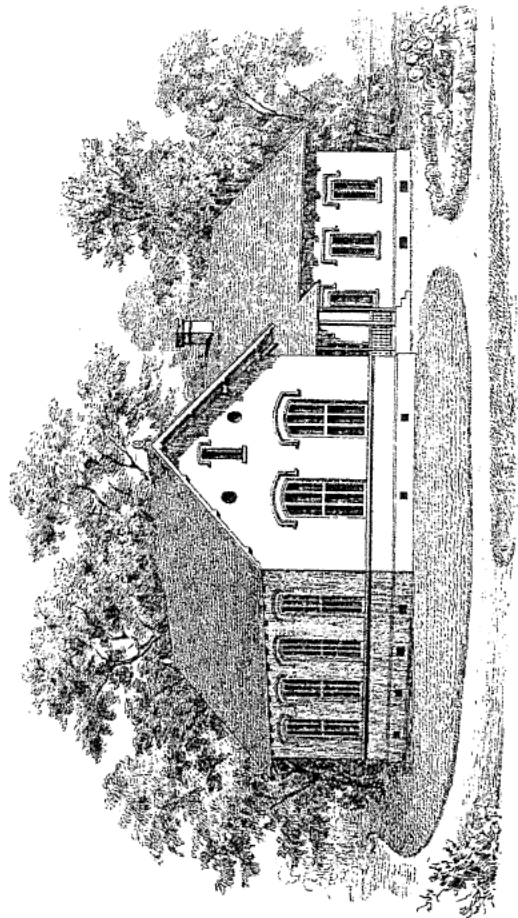
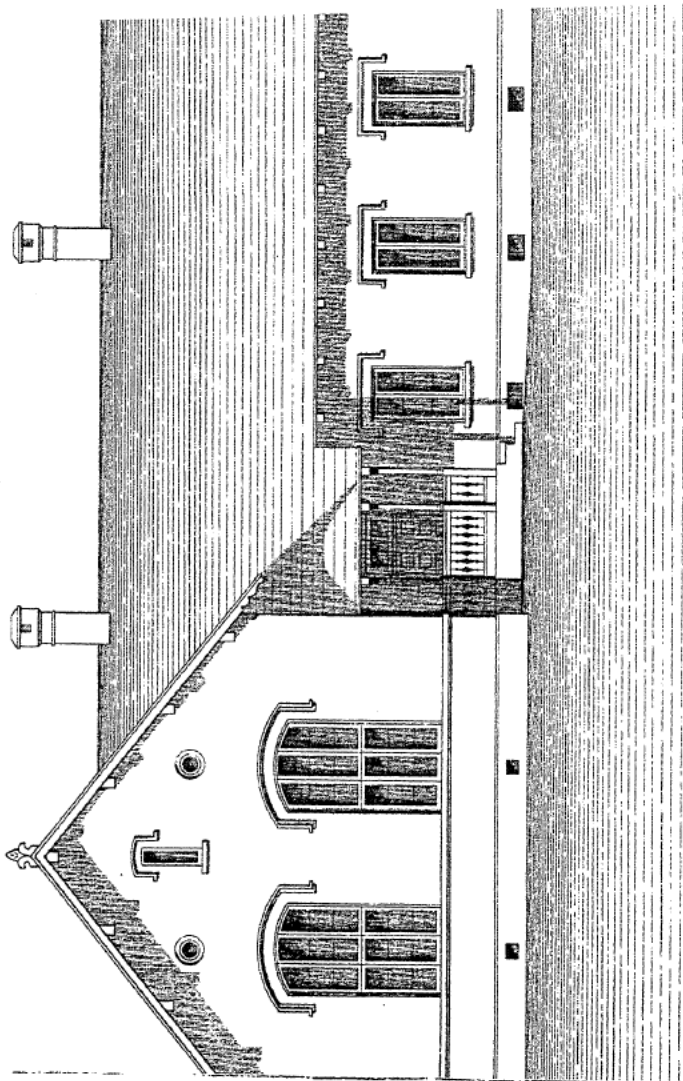
Øenomskeering A-B.



Plan af  
Bottenvåningen.

0 10 20 30 40

Framsida



Ritning till skolhus af trä, för ambulatoriska skolor med 30, 40 och 50 barn.

Fig 1.  
Framsida.

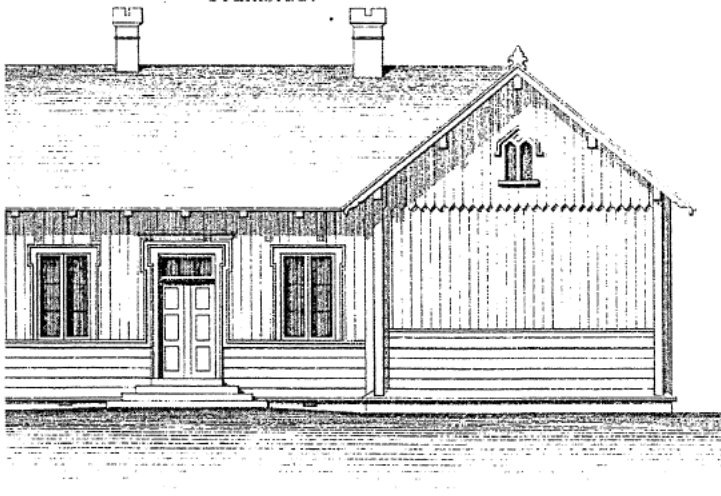


Fig. 2.  
Genomskärning A-B.



Fig. 3.

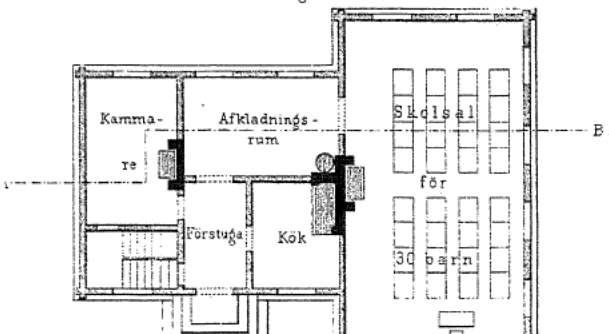


Fig. 4.

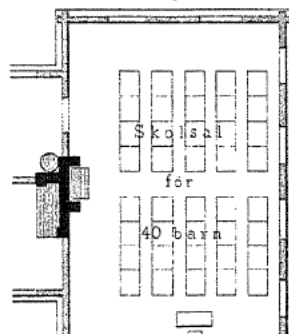
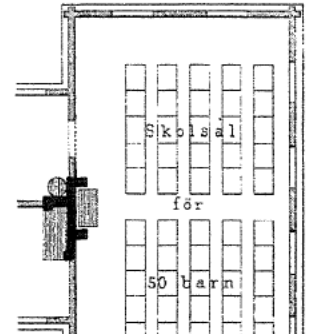
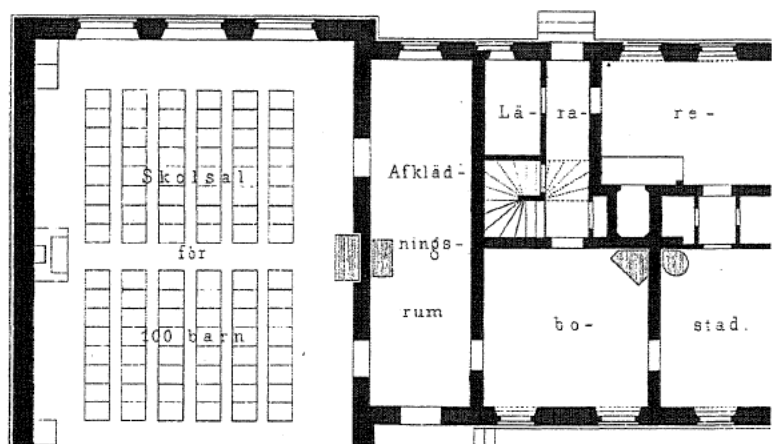
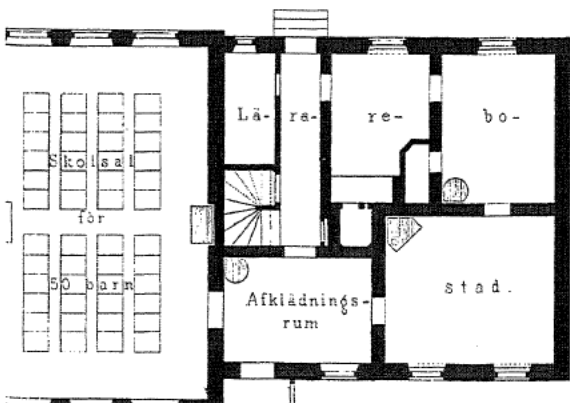
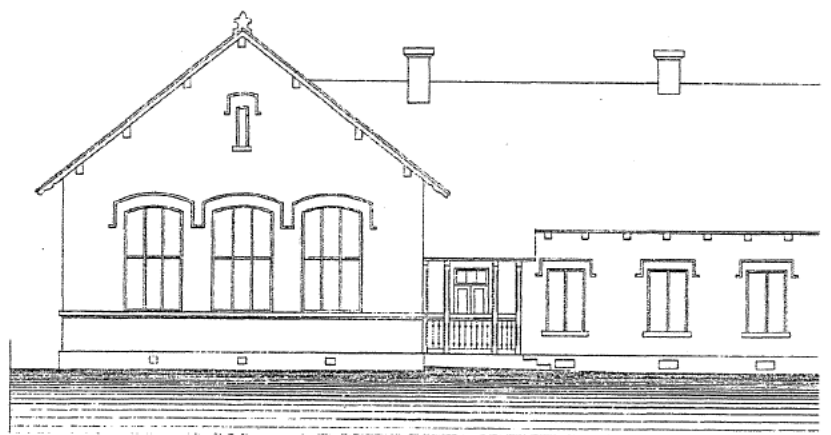
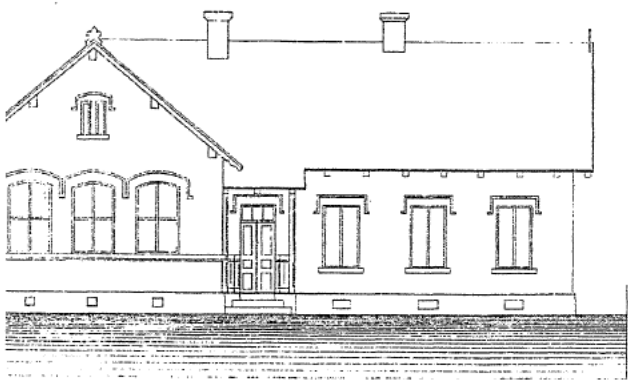


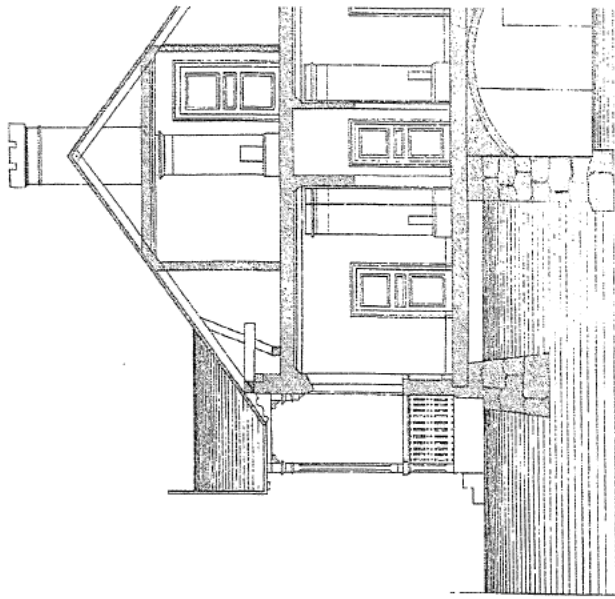
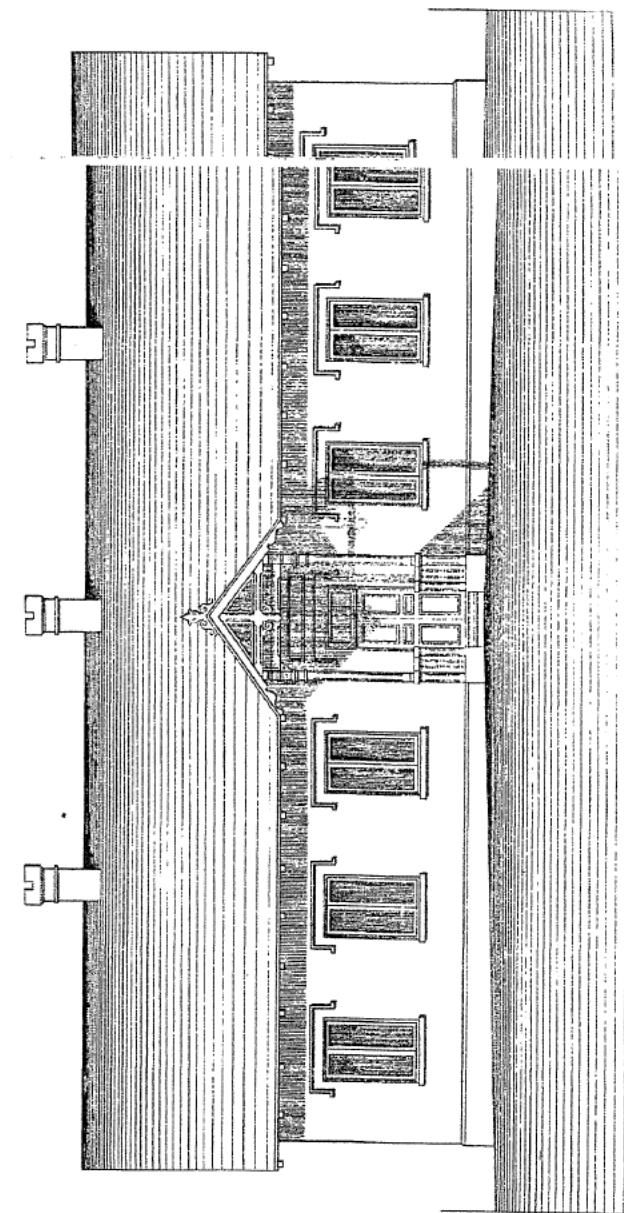
Fig. 5.



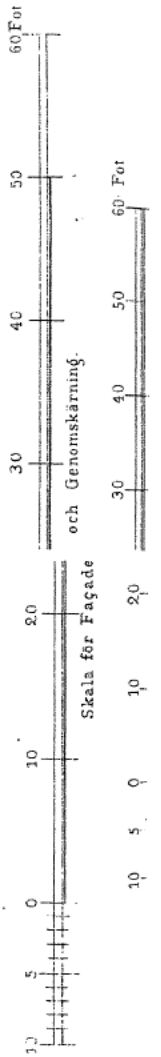
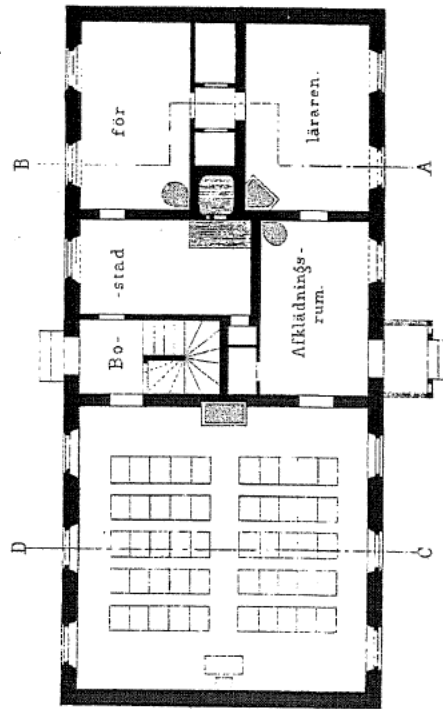
Alternativa förslag till skolhus för 50 och 100 barn.



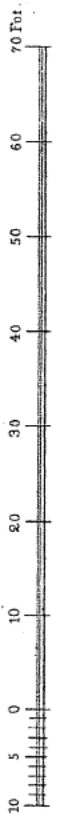
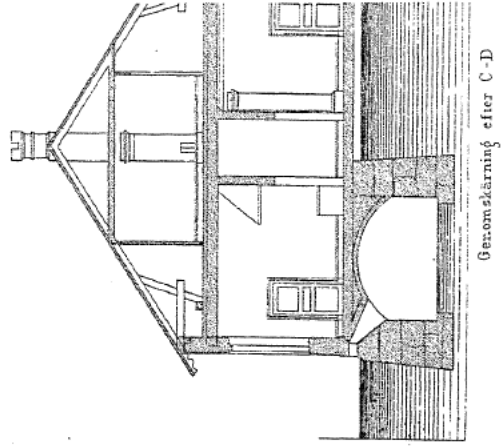
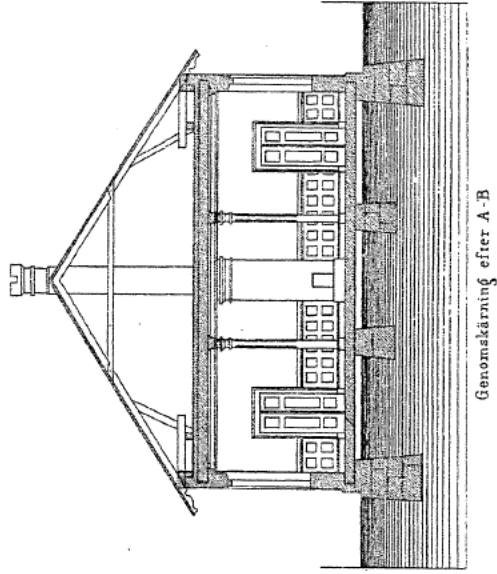
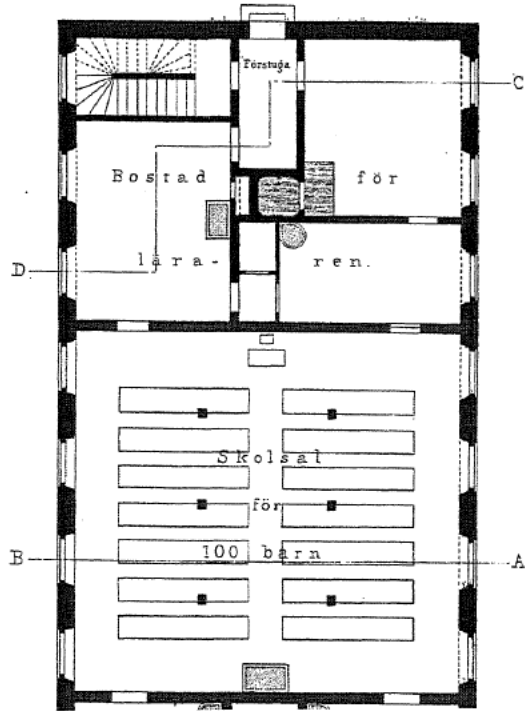
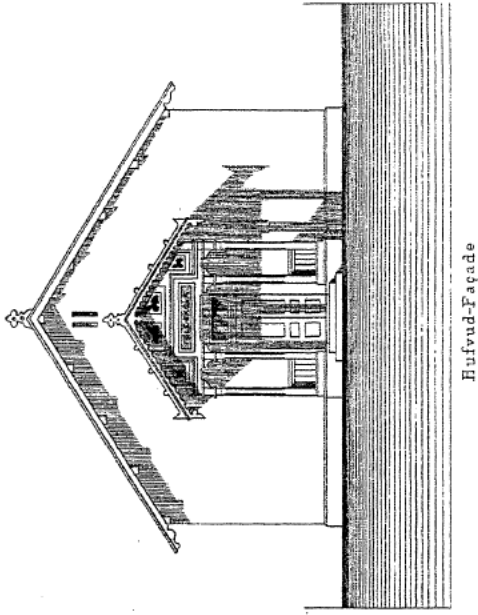
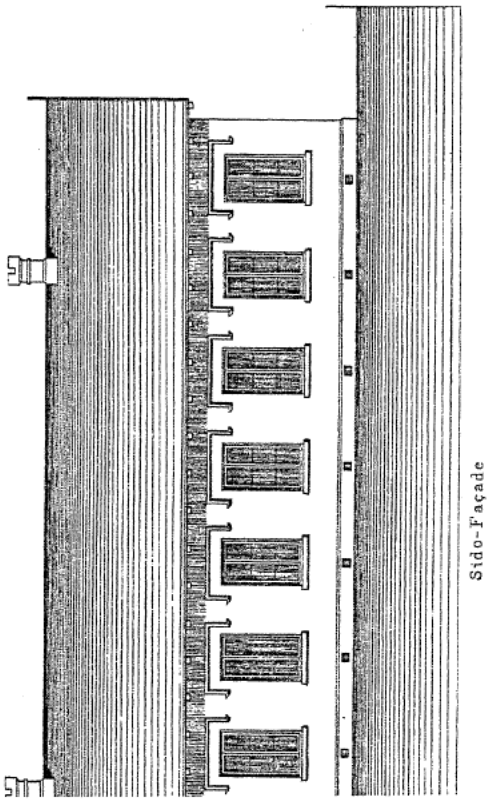




Genomskärning efter linien A-B



Genomskärning efter linien C-D



# NORMALRITNINGAR

TILL

# FOLKSKOLEBYGGNADER

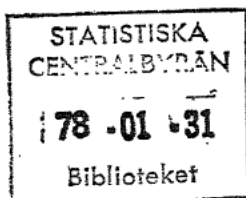
JEMTE BESKRIFNING.

PÅ NÅDIG BEFALLNING UTARBETADE

AF

Kongl. Öfver-Intendents-Embetet.

ANDRA OMARBETADE UPPLAGAN.



STOCKHOLM, 1878.  
KONGL. BOKTRYCKERIET,  
P. A. NORSTEDT & SÖNER.



**BIBLIOTEKET**

## INLEDNING.

Då en ny upplaga af Normalritningar till Folkskolebyggnader jemte beskrifning blifvit behöflig, hafva i densamma med ledning af den erfarenhet, som vunnits sedan första upplagan år 1865 utgafs, förändringar blifvit vidtagna hufvudsakligen i följande hänseenden:

1:o). I den äldre upplagan förekommo endast ritningar till skolhus med en skolsal jemte lärarebostad, hvaremot den nya dessutom innehåller förslag till skolhus, inrymmande, jemte lärarebostad, en eller flere skolsalar samt slöjdsal; hvarjemte tillkommit ritningar till skolhus, afsedda för småskolor, samt planritningar till åtskilliga skolhus i städer.

2:o). De flesta ritningarna i den äldre upplagan afsågo byggnader i vinkelform med skolsal och lärarebostad under olika tak, hvaremot denna anordning, hvilken ansetts medföra större både byggnads- och underhållskostnad, i den nya upplagan föreslagits endast i några få fall för byggnader med flere skolsalar.

3:o). Då en aflångt fyrkantig form å lärosalar, hvilken i den äldre upplagan föreslogs såsom ändamålsenlig, visat sig medföra åtskilliga olägenheter så väl med afseende å undervisningen som disciplinen, har i den nya förordats den kvadratiske formen eller den, som närmar sig den qua-

dratiske, enär denna medgifver en bättre placering af barnen, jemte det den på lika stort yttinnehåll lemnar utrymme för ett större antal barn.

4:o). I de äldre normalritningarna upptogos skolsalar, beräknade för 80 till 100, några ända till 150 barn; i de nya äro de största skolsalarne beräknade endast för omkring 60 barn, såsom det högsta antal, som anses kunna med fördel undervisas af *en* lärare eller lärarinna.

5:o). Samtliga skolsalarne i de äldre normalritningarna voro beräknade för ensitsiga skolbord; i de nya åter äro salarne i allmänhet beräknade för tvåsitsiga skolbord, enär dessa äro billigare att anskaffa, kräfva mindre utrymme, medgifva en för undervisningen gynsamare form på skolsalen samt medföra den fördel, att tvenne barn, som sitta tillsammans, stundom kunna begagna samma läromateriel.

6:o). I den nya upplagan har man ansett sig böra helt och hållet afstyrka bruket af de gamla långbänkarne, hvarjemte måtten på skolborden blifvit ändrade till öfverensstämmelse med en ny, ändamålsenligare modell.

7:o). Skolsalarnes höjd, som i de äldre normalritningarna i några fall föreslogs ända till 16 fot, är enligt de nya bestämd till högst 14 fot.

8:o). Skolsalarnes fönster ansågos vid de äldre ritningarnas utgifvande böra anbringas å tvenne sidor; på några ritningar förekommo till och med fönster å hvarandra motstående sidor. Der i de nya ritningarna fönster föreslås å tvenne sidor, hafva de alltid blifvit anbragta så, att barnen, sittande på sina platser, få ljuset från venster och bakifrån. Såsom den lämpligaste anordning har man dock föreslagit fönstrens anbringande blott å *en* sida, till

venster om barnen, så vida tillräcklig belysning derigenom kan vinnas.

9:o). I den äldre upplagan föreslogs kalkrappning på insidorna af skolsalens väggar såsom lämplig; i den nya förordas väggarnas brädbeklädnad såsom ändamålsenligare och varaktigare.

10:o). I den nya upplagan hafva modellritningar till en- och tvåsitsiga skolbord, pulpeter, materialskåp och kartställning m. m. tillkommit.

# I. ALLMÄNNA GRUNDER.

## Första kapitlet.

### Byggnadsplatsen.

1. Enligt 3 § i Kongl. Maj:ts nådiga stadga den 18 Juni 1842 angående folkundervisningen i riket bör en fast skola "helst förläggas nära intill ordförandens i skolstyrelsen bostad, för att lätta hans upp-sigt öfver skolan."

2. Vid valet af byggnadsplats för ett folkskolehus böra för öfrigt följande omständigheter tagas i betraktande:

a). Skolhuset bör förläggas på en torr och om möjligt fri plats, som är öppen mot söder och skyddad för hårda vindar.

b). Sådana ställen, som äro besvarade af stank eller osunda utdunstningar, måste omsorgsfullt undvikas.

c). I synnerhet på landet, der afstånden stundom äro betydliga, bör skolbyggnaden förläggas så, att de flesta barn, som derstädes skola njuta undervisning, erhålla så kort skolväg som möjligt.

d). För att underlätta barnens skolgång, bör skolhuset äfven ligga nära intill någon större, alla årstider väl underhållen väg.

e). Likväl måste skolhuset ligga tyst och fredligt, tillräckligt långt från allmänna vägen, för att icke behöfva lida af dess buller och dam, äfvensom aflägsset från bullrande fabriker och verkstäder; och då gran-skapet med enskilda boningshus vanligen medför icke blott eldfara utan äfven an-

dra olägenheter af flera slag, bör jemväl en från sådana byggnader och till dem hörande lägenheter afskild plats sökas.

I städerna väljas helst platser afsides från den lifligaste rörelsen, och, dels för att undvika buller, dels till förekommande af trängsel, drages skolbyggnaden tillbaka från gatan om möjligt 20 fot.

f). Derjemte bör ett skolhus, för att genom sjelfva sitt läge bjuda aktning och medföra trefnad, ligga högt och från flera sidor synligt, i den vackraste omgifning, som under för handen varande omständigheter kan åstadkommas, samt med fri ut-sigt öfver landskapet.

g). Vidare bör en tjenlig skoltomt, jemte god byggnadsgrund på måttligt djup för sjelfva skolhuset, ega tillräcklig rymlighet samt vara så beskaffad, att plats för barnens lekar, för trädgård och för uthusbyggnader m. m. derstädes kan beredas (se mom 76 och följ.)

h). Rik tillgång på godt dricksvatten får ej vid skolan saknas.

## Andra kapitlet.

### Skolbyggnaden i allmänhet.

#### Läge.

3. Vid bestämmandet af skolhusets läge på byggnadsplatsen måste man fästa afseende på tomtens läge, storlek, planform,

docering, jordmån, tillgänglighet och närmaste omgifningar.

Platsens fördelning till gårdsplan, trädgård m. m. afvensom uthusens läge måste i sammanhang med hufvudbyggnadens placering bestämmas, samt för nämnda byggnad en i afseende på väderstrecken ändamålsenlig riktning sökas.

4. I sistnämnda hänseende är lämpligast att den fönstervägg, genom hvilken skolsalen emottager sin hufvudsakliga belysning, är belägen mot sydost. Genom sydlig eller sydvestlig riktning skulle visserligen skolans uppvärmning om vintern underlättas, men deremot om sommaren odräglig hetta uppkomma. Rigtades skolsalens fönster rakt i öster eller vester, så skulle det om morgnar och aftnar nästan horisontellt infallande solljuset tränga djupt in i rummet och förorsaka olägenheter.

#### Byggnadssätt.

5. Synnerlig omtanke måste egnas åt grunden, på hvars beskaffenhet byggnadens bestånd i väsentlig mån beror.

Huru djupt och på hvad sätt grunden bör läggas, måste i hvarje särskildt fall bestämmas efter markens beskaffenhet och byggnadens tyngd. Stundom anträffas strax under matjorden ett jordlager med den erforderliga bärigheten; på andra ställen åter måste fast botten sökas på betydligt djup. Öfver allt, utom der berg anträffas, måste grundmurarne läggas minst så djupt, som frosten nedtränger.

6. Under de delar af byggnaden, dit källaren icke sträcker sig, skall all matjord borttagas och ersättas till den omgifvande markens höjd med torr och ren fyllning, fri från vegetabiliska ämnen.

7. Stenfoten, af huggen eller tuktrad och fogstruken grå-, kalk- eller sandsten, bör sättas så hög, att bottenvåningens golf

öfver allt kommer att ligga åtminstone 2 fot öfver jordytan. Der markens beskaffenhet det fordrar, må stenfoten sättas ännu högre.

8. För större varaktighets skull samt till vinnande af säkerhet mot eldfara, torde det, isynnerhet i städerna, vara fördelaktigt, att skolhusen byggas af sten. På landsbygden åter, isynnerhet i skogstrakter och i allmänhet der, hvarest godt trävirke erhålles för billigt pris, uppföras de lämpligen af trä.

9. Ett skolhus af sten bör ofvan sockeln helst uppföras af tegel, som är det sundaste stenmaterial. Der kalk- eller sandsten, såsom i orten rådande byggnadsmaterial, kommer till användning, förses yttermurarne med invändig beklädnad af brändt tegel, murad i skickt med förtagningar, och skiljemurarne uppföras om möjligt af tegel. Yttermurarne få i sådant fall efter materialet afpassad tjocklek.

I yttermurarne af stenhus kunna luftmellanrum med fördel anläggas, till underlättande af uppvärmningen.

10. Skorstenarne skola utan afbrott uppdragas från grunden till lämplig höjd öfver byggnadens tak, samt bjelklag och träväggar allestädes *afveklas* på minst 10 decimaltums afstånd från rökrörens insida, och dessa mellanrum fyllas med murmassa.

11. Ett skolhus af sten bör icke utvändigt afputsas förr än fram på sommaren, året efter, sedan det blifvit uppfördt, på det att murarne må bättre uttorka.

12. Då af godt timmer byggda hus kunna ega bestånd i 80 till 100, någon gång till och med flere hundra år, men det deremot alldeles icke är ovanligt, att ett trähus förfaller efter 30 å 40 år eller ännu tidigare, om till detsamma blifvit användt ungt, omoget timmer; så är af största vigt, att när ett skolhus bygges af trä,



moget, kärnfullt, torrt och friskt vinterhugget furuvirke, oaktadt den större kostnaden, anskaffas till så väl timmer som bjelkar, sparrar och bräder.

Skolhus af trä kan antingen på vanligt sätt upptimras af nytt virke eller ock, der tillgång finnes på gammalt brukbart virke efter rifna byggnader, uppföras af upprättstående timmer. Dock bör i hvarje fall, användas friskt, nytt och torrt virke till syllar, öfverslag och hörnstolpar, samt skolrummens väggar invändigt helst beklädas med bräder. Att innanväggarna kalkputsas, är ej rätt lämpligt för åskådningsmaterielens uppsättning. På hus af upprättstående virke böra deremot ytterväggarna utvändigt reveteras på pinnar eller klufna spröt, men de på vanligt sätt timrade beklädas med bräder och målas eller rödfärgas.

13. Så väl i alla botten- och mellanbjelklag, som äfven ofvanför vindsrummen inläggas tjenliga trossbottnar med fyllning, så inrättade, att bjelklagen blifva dragfria, och kölden i möjligaste måtto utestänges.

14. I flera afseenden är det lämpligt, att byggnadens takfot, uppburen af synliga sparrhufvuden, öfverskjuter väggarna med 2 å 3 fots språng. Något större takyta uppstår visserligen härigenom; men deremot inbesparas den murade taklisten samt de dyrbara fotrännorna af jernplåt, som jemväl alltid skada byggnadens utseende, och väggarna skyddas förträffligt för väta genom det starka taksprånget.

Till taktäckning rekommenderas svensk takskiffer och vanligt taktegel, såsom billiga, särdeles varaktiga och fullkomligt brandfria materialier, samt s. k. asfaltpapp, stickor eller takspån, spingade af gran, såsom det billigaste och ojemförligt lättaste täckningsämne.

#### Olika dispositioner. — Arkitektonisk behandling.

16. Vid skolhus med en lärosal och en boställslägenhet, bör skolsalen med afklädningsrummet alltid ligga i bottenvåningen.

Boställsrummen skulle under vissa förhållanden, då de upptaga ungefär lika utrymme antingen med skolsalen eller med afklädningsrummet, kunna i en öfvervåning förläggas, och sålunda, i följd af den ringa grundyta, som byggnaden i sådant fall komme att upptaga, någon besparing vinnas. Men en dylik disposition medför i andra afseenden stora olägenheter, såsom: ömsesidig störande inverkan lokalerna emellan, svårighet att åstadkomma uppvärmning och att placera eldstäderna. Det är ock i konstruktivt hänseende vidrigt, att flera smärre rum inredas ofvanpå ett större; takbjelkarne i skolsalen skulle icke ens vid smärre spännvidder kunna uppbära den öfre våningens skiljeväggar, utan att understödjas med pelare eller upphängas medelst spännverk. Byggnaden får ett skåplikt utseende, isynnerhet om någon höjd tillägges ofvan de tvenne våningarna, för att göra vinden rymligare, emedan denna blir i annat fall för ett hushåll otillräcklig. Särdeles otjenligt vore att, när materialet är trä, bygga flera våningar.

Af alla dessa skäl må folkskolebyggnader i två våningar endast vid särskilda lokala förhållanden ifrågakomma; och skolhus, som innehålla endast en lärosal jemte lärarebostad, i allmänhet byggas med en vånings höjd.

17. Skolhuset bör förete ett treffigt och inbjudande yttre. Såsom en offentlig byggnad, och på landet ofta uppfördt i närheten af kyrkan, får det icke sakna en viss värdighet, men måste likväl i möjligaste måtto enkelt behandlas. En till byggnadens karaktär passande prydlighet skall

utan betydlig tillökning i byggnadskostnaderna ernås, om de för byggnaden egenomliga inre anordningarna, hvilka stundom måste kräva en olikhet mellan den till skollokaler afsedda delen af huset och den, som skall innehålla lärarebostad, oförstaldt framträda äfven i det yttre, och dervid i första rummet vackra proportioner för det hela sökas samt orneringen okonstladt härledes ur konstruktionen. För att gifva karakter åt byggnaden eller höja dess façad, plägar någon gång för signalklockan ett litet torn uppföras å skolhusets gafvelvägg.

### Tredje kapitlet.

#### Skolsalen.

##### Planform.

18. Bästa formen för en skolsal är i allmänhet den kvadratiske, eller den hvars längd- och breddmått äro åtminstone nära lika, hvarvid dock salens bredd ej må öfverstiga 30 fot, emedan lärarens öfversigt öfver barnen i annat fall försvåras. Dock kan äfven den aflängt fyrkantiga formen användas, ehuru längden ej gerna bör öfverstiga 36 fot, emedan i annat fall en del barn blifva allt för långt aflägsnade från läraren, hvarigenom både undervisningen på ett betänkligt sätt lider och ordningens upprätthållande försvåras. Särskildt skulle den undervisning, som bibringas med tillhjälp af den på ömse sidor om lärarens plats befintliga åskådningsmaterielen, ofta nog gå för de ifrågavarande barnen alldeles förlorad.

##### Planyta.

19. Skolsalens storlek rättas efter det antal barn, som beräknas samtidigt komma att besöka skolan.

Med fästadt afseende på den fortgående folkökningen samt på grund af iakttagelser, gjorda under en följd af år, bör barnens antal antagas något större, än det för tiden är.

20. Golfytan för en skolsal bestämes efter det utrymme, som erfordras till sittplatser för ett gifvet antal barn, med tillägg för gångar, lärarepulpit, eldstad, skåp m. m. och beräknas till 16 å 17 kvadratfot för hvarje barn (se vidare den till planscherna hörande beskrifning).

##### Barnens sittplatser.

(Skolborden).

21. At ändamålsenlig konstruktion och placering af skolborden bör den största omtanke egnas, emedan deraf i väsentlig mån beror, ej blott huru vida ordning och disciplin i en skola kunna med lätthet upprätthållas, utan äfven huruvida undervisningen skall kunna med större eller mindre framgång bedrifvas. Genom obehägnade skolbord lida barnen skada till helsan och förhindras både att med uppmärksamhet följa undervisningen och att iakttaga nödigstillhet.

22. I afseende på skolbordens ändamålsenliga form och anordning bör hufvudsakligen iakttagas:

a) att barnen, så väl vid läsning som skrifning, kunna sitta i en naturlig och otvungen ställning;

b) att de med lätthet kunna resa sig upp samt komma till och ifrån sina platser;

c) att de ej sakna väl afpassade ryggstöd, emedan det för barnen är icke blott plågsamt utan ock för helsan vådligt att hela timmar sitta antingen upprätt utan allt stöd eller med armarne stödda mot bordet; och

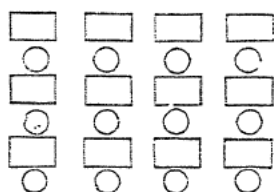
d) att barnen föranledas att vända sig emot det håll, der läraren har sin plats.

23. Enär de på ett och annat ställe ännu förekommande långa borden och bänkarne icke motsvara de i föregående moment angifna, viktiga fordringar på ändamålsenliga skolbord, måste de anses såsom odugliga och förkastliga.

24. Nedan nämnda slag af skolbord, anordnade på sätt figg. I och II utvisa, äro de ändamålsenligaste:

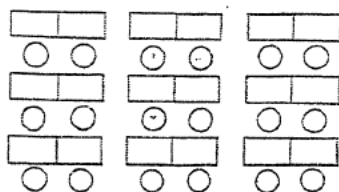
- a) ensitsiga skolbord, skilda från hvarandra medelst genomgångar, till höger och venster om hvarje bord,

Fig. I.



- b) tvåsitsiga skolbord, likaledes med genomgångar vid sidorna,

Fig. II.



*Anm.* Om längre bord begagnas, måste särskilda stolar anskaffas för hvarje barn, och genomgångar lemnas bakom hvarje stolsrad.

25. Enligt de mått, som här nedan (mom. 28) angifvas, upptager

ett ensitsigt skolbord 11 kvadratfot för hvarje barn,

ett tvåsitsigt skolbord 8,25 kvadratfot; sidogångar äro härvid inberäknade.

26. Skolborden kunna antingen göras helt och hållet af trä, björk eller furu, eller ock delvis af trä och delvis (fötter och sidostycken) af jern. Bord och stolar böra

antingen betsas eller ock strykas; i senare fallet användes lämpligast kopalfernissa, i hvilken helt litet gulbrun färg blifvit uppblandad.

Bakre delen af bordskifvan, 2,5 tum bred, kan, om man så vill, göras horisontel. I denna del försänkes bläckhornet helt och hållet, så att ett lock af trä, messing eller jernbleck, hvarmed öppningen täckes, kommer att ligga i bordskifvans plan; äfven göres en urhålkning för griffel, penna m. m.

Bordskifvan, hvilkens kanter afrundas, inskäres på midten vid pass 2 tum.

Åt barnen kan beredas rymligare plats att stå upprätta emellan sitsen och bordskifvan, i fall denna senare, medelst ett par små falsar å bordets yttersidor, göres rörlig, så att den kan föras närmare intill eller längre ifrån lärjungen (se Pl. XVIII, fig. 4). Den rörliga skifvan medför dessutom den fördelen, att barnen vid skrifning, kunna flytta henne efter behof och följaktligen lättare intaga en riktig kroppsställning.

Hvarje barn bör i bordet hafva en låda till förvarande af böcker, skrifmaterialier o. d., hvilken låda täckes med ett lock, afdeladt i två hälfter, förenade medelst gångjern. Skolborden böra alltid, af hvilken storlek och modell de än må vara, förses med ryggstöd och fotbräde, hvilket senare helst bör vara fästadt emellan bordets sidostycken samt försedt med en rörlig klaff (se Pl. XVIII, fig. 4), så att det kan göras högre eller lägre, allt efter som lärjungens olika kroppsstorlek det kräver.

27. Borden böra ställas så, att barnen, när de sitta på sina platser, icke få dagern hvarken framifrån eller från högra sidan, utan helst endast från den venstra sidan eller, der förstärkt belysning skulle

finnas behöflig, både från venster och bakifrån.

28. Följande mått å skolmöbler m. m. må tjena såsom norm:

Bordskifvans hela bredd.....	13	dec.tum.
» » längd .....	18 à 20	»
» » lutning .....	1,5	»
Bordets höjd i framkanten...	27,5	»
Stolsitsens horisontala afstånd från bordet(=distansen), då skifvan är fast.....	0 à 1,5	»
» » » rörlig	3,5 à 4	»
(så att den kanneddragas 3,5 à 4 dec.-tum emot lärjungen).		
Stolsitsens bredd (= djupleken) .....	10	»
» höjd från fotbrädet .....	12 à 14	»
» vertikala afstånd från bordskifvan (= differensen) .....	8 à 10	»
Fotbrädets vertikala afstånd från bordlådans underkant .....	4 à 6	»
» höjd från golfvet	6 à 2	»
» bredd(=djuplek)	10 à 12	»
En genomgångs bredd.....	17	»
» sidogångs » .....	3	fot.
» midtelgångs » .....	3	»
Platsen framför den främsta bordraden .....	7	»

#### Lärarens plats m. m.

29. Ett löst stående bord eller mindre pulpet (se Pl. XX) för läraren uppställs framför bänkraderna i deras midtlinie, helst på en förhöjning eller s. k. plattform af omkring 10 dec.tums höjd och omkring 5 fots djuplek. Denna förhöjning kan lämpligen upptaga salens hela bredd. Katedrar böra undvikas, enär de, vid åskådningsmaterielens användande, ofta skymma, af-

vensom äro hinderliga, om läraren vid något tillfälle behöfver samla barnen omkring sin plats, då deremot bordet eller pulpeten med lätthet kan undanflyttas.

30. Svarta taflan\*) bör anbringas bakom eller vid sidan af lärarens plats. Fördelaktigt är att hafva en svart tafla, som sträcker sig längs hela väggen ofvan platformen. I närheten af lärarens plats bör finnas en lämplig kartställning (se Pl. XXI).

#### Golf.

31. Skolrummets golf bör inläggas af torra och qvistfria plankor, minst 1,66 dec.-tum tjocka. Furuvirke kan dertill användas; men begagnas ekvirke, blir det mångdubbelt varaktigare. Att med linoljefer-nissa indränka golfvet är i flera afseenden fördelaktigt; ett sådant golf insuper mindre dam än ett omåladt, fäster ej fläckar af fett och dylikt samt är särdeles lätt att rengöra. Oljedränkningen måste hvarje år förnyas.

#### Höjd.

32. För att luften må kunna underhållas frisk, göras skolsalarne 12 à 14 fot höga.

#### Fönster.

33. Hvarje skolrum måste vara väl belyst genom tillräckligt stora och ändamålsenligt anbragta fönster.

\*) Svarta taflan, hvars dimensioner icke gerna böra understiga 6 fot i bredd och 3 fot i höjd, göres af torra, liggande bräder, som fogas och limmas samt förses med starka narar. Dessa senare få icke limmas, utan medelst tvärskrufvar fästas i taflans nedre kant. Upp till förses de med jernbyglar för taflans upphängande. Taflans bestyckning kan lämpligen ske med s. k. »skifferkautschuksmassa». Sådan massa äfvensom anvisning om dess begagnande erhålles hos Svanström & C: Stockholm.

34. Fönstren böra insläppa så ymnigt ljus, att hvarje del af skolrummet erhåller full dager; men å andra sidan böra, för besparings skull, och på det att uppvärmingen icke onödigtvis må försvåras, icke flera fönster upptagas, än behovet påkallar.

Vid bestämmandet af fönster-ytans storlek, som i allmänhet kan antagas till 15 å 20 procent af rummets golftyta, måste afseende fästas på så väl väderstrecket som omgifningens beskaffenhet.

35. På det att barnen måtte, jemlikt mom. 27, få dagern från lämpligt håll, samt i allmänhet för vinnande af en lugn och i alla afseenden fullt ändamålsenlig belysning, böra skolsalens fönster helst anbringas endast på den vägg, som är till venster från barnen, när de sitta vid sina bord. Äfven ett stort rum erhåller på detta sätt full dager, om fönstren äro tillräckligt stora och deras höjd afpassad efter rummets djup.

Å väggen bakom barnens platser kunna dock, der omständigheterna det fordra, såsom ofvan i nämnda 27 mom. är antydt, fönster jemväl anbringas.

Å tvenne motstående väggar må fönster icke anbringas. Ett dylikt sätt för fönstrens anordning är otjenligt, emedan de många, hvarandra korsande dagrarna och skuggorna, som derigenom uppstå, medföra ett intryck af oro. Svarta taflian antager vid sådan belysning ett glänsande skimmer, hvarigenom det, som på densamma skrives, endast med svårighet kan uppfattas; och vid skriföfningarna komma barnen att, allt efter som det starkare ljuset infaller, vända sig än åt den ena, än åt den andra sidan.

Å den framför barnens platser belägna väggen få under intet vilkor fönster upptagas. Det ljus, som härifrån inströmmade,

skulle nämligen falla barnen rätt i ansigtet och menligt inverka på deras ögon.

36. Fönstren i skolsalen bör vara större än i vanliga boningsrum; deras höjd kan allt efter salens storlek vexla mellan 7 och 10, bredden mellan 4 och 6 fot.

37. Pelarne mellan fönstren och vid väggens ändar böra icke vara bredare, än att dagern blir jemnt fördelad. Bakom en alltför bred fönsterpelare skulle mörker uppstå. Åtminstone när fönster upptagas endast å en af rummets väggar, böra inga breda pelare finnas mellan fönstren, helst salens tre öfriga väggar lemna rikligt utrymme för kartor, tabeller, svarta tafior m. m. I stenhus vidgas fönstersmygarne inåt, så att de mellan fönstren uppkommande slagskuggorna i möjligaste måtto må förkortas.

38. Fönstren böra gå så långt upp som möjligen kan ske. Vägghöjden öfver fönstren, eller afståndet från fönsterdagern till skolsalens takyta, torde böra i allmänhet bestämmas till omkring 1 fot.

39. Vid alltför låga fönsterbröstningar skulle ljuset nedifrån slå barnen i ögonen; för höga dereinot skulle göra rummet dystert. På det att barnen icke under lästimmarne må kunna se ut, eller förbigående genom fönstren se in i skolsalen, göras bröstningarna i allmänhet något högre, än i vanliga boningsrum. Lämpligaste bröstningshöjden är omkring 4 fot. Dock kan denna höjd, der huset ligger högt mot den omgifvande trakten och icke vetter åt gata eller allmän väg, något minskas.

40. Till skolsalen och alla öfriga med eldstad försedda rum göras dubbelfönster.

41. Alla de yttre fönsterbågarna till skolsalen, och i de inre åtminstone en fönsterbåge i hvarje luft, sättas på gångjern, för att kunna efter behof öppnas.

42. Fönsterkarmar och bågar göras

efter vanlig konstruktion af furuträ, förses med starka beslag samt målas väl med god oljefärg.

I skolsalens fönster, så väl yttre som inre, användes fullkomligt rent och hvitt (s. k. helhvitt) glas.

43. Till skydd mot starkt solljus anbringas markiser eller gardiner. Till gardiner användes hvarken mörk eller helt hvit, utan ljusgrå eller oblekt väfnad, som borttager det blandande i solskenet, utan att rummet blir mörkt.

Gardiner af intensiv blå färg torde böra undvikas, såsom för ögonen menliga.

Om fönstrens inrättning i och för luftvexling, se längre fram (mom. 54).

#### Tak och väggar.

44. Alla försprång i väggarna äfvensom pelare inne uti rummet till takets upp bärande böra i en skolsal helst undvikas.

45. I skolsalens tak anbringas spåntad, hyflad och kälad underpanel eller ock röradt och rappadt gipstak, hvilket strykes med hvit lim- eller kalkfärg.

I så väl trä- som stenhus är det särdeles lämpligt att hela väggarne i skolsalen brädbeklädas. I stenhus böra åtminstone väggarnas nedre del till omkring 5 fots höjd beklädas med bröstpaneler af trä i fyllningsfasen, eller med spåntade och kälade bräder. Härigenom skyddas väggarna för sönderstötning, och rummet kan lättare hållas rent, samt blir dragfritt och varmt. Kring dörrar och fönster sätts träfoder. Bröstpanelen och fodren oljemålas och fernissas, antingen i ekfärg eller, för besparings skull, i annan jemn kulör.

Ofvan bröstpanelen anstrykas väggarna med lim- eller oljefärg i någon ljus ton, helst grågrön.

Tapeter må aldrig uppsättas i skolsalen, emedan papperet fäster lukt.

#### Uppvärmning.

46. Skolsalens väggar, dörrar och fönster måste vara af den beskaffenhet, att skolrummet under kall årstid låter uppvärma sig lätt och likformigt.

47. Till skolsalens uppvärmning är lämpligast att använda antingen vanliga kakelugnar eller eldstäder, som utgöra en sammansättning af kakelugn och jernugn\*), i hvilket senare fall anordningar dock böra vidtagas, att luften ej måtte blifva för torr.

48. Värmugnen bör aldrig, när sådant kan undvikas, ställas emot yttervägg, emedan i sådant fall en större del af värmen skulle meddela sig till den yttre luften utan att komma rummet till godo, och uppvärmningen fördyras, utan fast hellre vid någon af de väggar, med hvilka skolsalen ansluter sig till den öfriga delen af byggnaden; ej heller bör den eldas utifrån, såsom från kök eller förstuga, utan inifrån sjelfva skolrummet, på det att den luftvexling, som genom ugnen uppstår vid eldning, må komma skolrummet till godo.

49. Skolrummet uppeldas, efter att förut hafva blifvit vädradt, morgon och eftermiddag så tidigt, att detsamma vid lästimmens början har en medeltemperatur af 16 grader Celsius.

#### Luftvexling.

50. Då det i sanitärt hänseende är af högsta vikt att frisk luft bibehålles i skolrummen, måste den allvarligaste omsorg egnas åt anordningarna för luftvexling, hvilken bör ske dels genom en ändamålsenlig inrättning af eldstäderna, dels genom flitig vädring af rummen. Äfven i de största skolsalar är en kraftig ventilation ovilkorligen nödig.

\*) De s. k. Gurneys ugnarne hafva visat sig ganska lämpliga.



För åstadkommande af behöflig luftvexling böra följande åtgärder vidtagas:

a). *Kalorifärrörs anbringande i kakelugnarna.*

51. Till denna inrättning, som till sin beskaffenhet i allmänhet torde vara känd, höra följande delar:

1:o för friskluftens ledning till kolorifärröret, en från yttre luften, mellan eller under golfbjelkarna, fram till kakelugnens plats för dät tät luftkanal;

2:o sjelfva kolorifärröret, som insättes i kakelugnen, så att det genomlöper dess eldstad och en del af dess rökrör; samt

3:o rör för den skämda luftens afledning.

Friskluftskanalen bör hafva minst lika stor genomskärningsarea som kolorifärröret. Kanalens yttre mynning lägges beqvämast i jernhöjd med det bjelklag, genom hvilket densamma skall ledas; eller, om luften på denna höjd öfver marken skulle anses mindre ren, lägges dess mynning högre upp.

Kolorifärröret göres vanligen af gjutjern. Det bör hålla 3,5 à 5 tum i inre diameter, och midt för eldstaden antingen hafva en svällning, såsom en låda, eller derstädes vara söndergrenadt i flera rör, för att erbjuda största möjliga yta mot elden. Nedåt kommunicerar röret med friskluftskanalen och inmynnar med sin öfre ända i rummet, der luftvexling åstundas. Framför rörets mynning i bröstet af kakelugnen sättes en ventil, som efter behag kan öppnas eller slutas.

Den betydliga quantitet luft, som, när kakelugnen eldas, utströmmar genom dess öppna eldstad, ersättes nu genom kalorifärröret, hvilket insuger luft från yttre atmosfären och låter densamma uppvärmd nströmma i rummet med allt större hastig-

het, ju mera röret höjer sig öfver eldstaden och luften i detsamma upphettas.

På det luftvexlingen må fortgå, äfven sedan spjället är skjutet, anläggas särskilda sugrör för skämdluftens afgang. Vanligen anbringas mynningarna till dessa sugrör nära golfvet.

För att meddela den i sugrören inneslutna luften stügkraft, föras dessa bakom kakelugnens rygg och uppdragas tillsammans med eldstädernas skorstensrör.

52. Då emellertid en konstgjord luftvexling alltid, utom när större kostnader derfor användas, blir mer eller mindre ofullständig, är det angeläget, dels att skolrummet dagligen och ofta, isynnerhet om morgnarne före eldningen samt före och efter hvarje lektion, grundligen luftas genom direkt förbindelse mellan inre luftmassan och den yttre atmosfären, dels ock att sådana anstalter med ventiler o. d. vidtagas, hvarigenom äfven under vintern luftvexling med minsta möjliga olägenhet kan åstadkommas. I detta hänseende användes:

b). *Fönsters öppnande.*

53. Vädring genom fönsters öppnande bör, såsom ofvan är antydt, ske före läsningens början samt under rastestunderna emellan lektionerna. Under lektion må sådan vädring, åtminstone under den kallare årstiden, icke ega rum. Sedan arbetet för dagen är slutadt, är ock synnerligen nödigt att ventilerera rummet genom fönstrens öppnande.

54. För att denna luftvexling må äfven under den kallare årstiden kunna noggrant regleras, måste lämpliga ventiler anbringas på fönstren, helst i fönsterlufternas öfversta båggar. I alla händelser måste alla ytterfönstren samt en eller två af innanbågarna i hvarje luft gå på gångjern (se ofvan mom. 41).



c). *Särskilda öppningar i väggarna.*

55. En ganska kraftig luftvexling åstadkommes derigenom, att i hvardera af tvenne, helst motstående, ytterväggar, så nära taket som möjligt, insättas 2 à 3 ventiler (af ungefär 5 tums diameter), hvilka stå i direkt förbindelse med den yttre luften samt äro så inrättade, att de efter behag kunna öppnas eller slutas. För att hindra luftens alltför häftiga inströmande i rummet böra ventilkanalerna utvändigt vara försedda med ett fint galler eller en bleckplåt med små hål.

#### Snygghet.

56. Äfven den kraftigaste luftvexling i en skola, blir otillräcklig, om icke snygghet och renlighet derstädes iakttagas.

57. Ingen bör få inkomma i skolsalen oren i ansigtet och på händerna eller med nedsmutsade kläder och våta skodon, ej heller dit införa hufvudbonad och ytterplagg, och ännu mindre dit medföra sin matsäck eller derstädes hålla sin måltid.

I afklädningsrummet bör finnas ett tvättställ, der barnen, om sådant erfordras, må kunna tvätta ansigte och händer.

För skoplaggens rengöring från smuts och snö böra dels fotjern anbringas å båda ändar af första trappsteget i yttertrappan, dels ock grofva mattor finnas utanför dörarne och i afklädningsrummet.

Om förvaringen af hufvudbonader, ytterplagg och matkorgar (se mom. 62).

58. Skolrummet bör ovilkorligen hvarje dag sopas och dammas samt skuras åtminstone en gång i månaden.

#### Skolsalens kubikinnehåll.

59. När de mått tillämpas, som angifvas i den planschen åtföljande beskrifningen, uppstår i de olika skolsalarna en luftrymd af omkring 200 kubikfot för hvarje barn. Erfarenheten visar, att minst denna

rymlighet erfordras, om luften medelst förhanden varande luftvexlingsmedel, samt under förutsättning att snygghet och renlighet iakttagas, skall kunna hållas dragligt ren.

## Fjerde kapitlet.

### Afklädningsrummet.

60. Det för ytterplaggens afläggande samt förvaring af barnens till skolan medförda matförråd afsedda rummet, som måste vara ljust, samt ordentligt uppvärmas och ventileras, bör förläggas vid ingången till skolsalen.

61. Der särskild förstuga vid hufvudingången icke finnes, bör denna ingång förses med dubbla dörrar, på minst en dörrbredds afstånd från hvarandra\*); och dessa böra vara försedda med draglod eller fjedrår, så att de, omedelbart efter att hafva blifvit öppnade, åter må tillsluta sig.

62. Hvarje barn bör i afklädningsrummet hafva sin särskilda hängare för ytterplagg och hufvudbonad samt plats för matkorg m. m. Hängarne (dubbelt böjda krokår af 0,2 decimaltums rundjern, vanligen medelst hylsor och skrufvar fästade å en utefter rummets väggar, på 3,5 till 4,5 fots höjd öfver golvet löpande träslå) sättas på 3,33 decimaltums afstånd från hvarandra.

Rundt kring väggarne anbringas faststående bänkar, med derunder varande särskilda afdelningar eller fack af omkring 12 decimaltums längd för hvarje barn, till förvarande af matkorgarne, i fall man icke föredrager att hafva särskilda med hyllfack för matkorgarne försedda skåp.

63. Afklädningsrummet bör beräknas

\*) Om vid hufvudingången en öppen förstuguvist anordnas, kan denna under vintrarne förses med en omklädnad af brädlämmar, fästade med haspar, och den yttre dörren insättas i samma omklädnad.

så stort, att det icke blott blir tjenligt för det i föregående mom. omförmålda ändamål, utan äfven medgifver, att barnen under lofstunderna der kunna uppehålla sig vid sträng kyla eller eljest svår väderlek samt derstädes hålla sin måltid. Äfven om rummet bildar en längre korridor, bör det, till undvikande af trängsel, vara minst 8 à 10 fot bredt. I annat fall bör detta rum hafva en bredd af minst 11 fot och längd af omkring 16 fot, då det beräknas för 30 barn, samt en bredd af 14 à 16 fot och längd af minst 18 fot, då det beräknas för 50 barn.

64. Tak och väggar i afklädningsrummet anordnas på samma sätt som i skolsalen. Dock bör iakttagas, att bröstpanelen göres minst 5,5 fot hög.

## Femte kapitlet.

### Lärarens bostad.

65. Till undvikande af ömsesidiga obehag böra skolsal och lärarebostad i möjligaste måtto skiljas åt. Skolsalen får således aldrig stå i direkt förbindelse med skollärefamiljens boningsrum.

66. Lärarens boningsrum böra, för att vara sunda, icke göras lägre än 9 à 9,5 fot, men å andra sidan, på det deras uppvärmning om vintern ej må försvåras, icke högre än 10 à 11 fot. Rummen böra ligga tillsammans och stå i förbindelse med hvarandra. Ett af dem, med utgång till skolans afklädningsrum, bör hafva 250 à 350 qvadratfots golftyta; det eller de andra, med utgång till köket eller köksförstugan, kunna vara en tredjedel eller fjerdedel mindre.

Fönsterbröstningarna i boningsrummen göras omkring 2,5 fot höga, så att man inifrån rummen kan bekvämt se ut. Rummen förses med oljemålade dörr- och fön-

sterfoder samt fotlister. I hvarje rum uppsättes en kakelugn. Taken göras med underpanel, samt strykas hvita med kalkfärg eller spännas med papper och målas med limfärg, eller ock förses rummen med s. k. gipstak. Väggarna oljemålas eller tapetseras.

67. Köket, försedt med spisel och bakugn, bör vara ljust och så rymligt, att utom andra hushållssysslor äfven en mindre tvätt derstädes kan förrättas. Jemväl bör der finnas sängställe för en tjenare.

I köket anbringas gipstak eller takpanel af spåntade bräder samt oljemålade fotlister. Väggarne målas med limfärg.

Skafferiet kan förläggas vid köket eller utmed köksförstugan.

68. Köksförstugan bör hafva dörr åt en baksida af huset och om möjligt förläggas så, att den utgör lärareboställets egentliga utgång.

69. Ett vindsrum bör vid hvarje fast skola, samt vid flyttande skolor å den station, der läraren har sin egentliga bostad, finnas för att tjena till studerkammare åt läraren. Detta rum bör vara minst 8½ fot högt, och väggarne göras af timmer eller plank. I senare fallet böra de vara dubbla med mellanlagdt förhrydningspapper. Sådana träväggar skola förses med rappning å ena sidan. I öfrigt må rummet behandlas lika med boningsrummen i bottenvåningen (se mom. 66).

70. Vindstrappan bör förläggas så, att densamma, om möjligt, blir tillgänglig så väl från boningsrummen som från köksförstugan eller köket.

71. Källaren, försedd med tegelhalf eller putsadt tak, bör vara minst 6,5 fot hög. Dess storlek lämpas efter den afkastning i rotfrukter, som till skolan hörande åkrar och trädgårdsland kunna lemna. I allmänhet vinnes tillräckligt utrymme, om källa-

ren sträcker sig under ett eller två af de större boningsrummen.

72. Lärarens boningsrum vid de stationer af en flyttande skola, der han icke har sin egentliga bostad, bör innehålla åtminstone omkring 200 kvadratfots golfyta och behandlas såsom ofvan (mom. 66) är beskrifvet. Köket kan ock hafva mindre dimensioner.

### Sjette kapitlet.

#### Anordningarna i skolhusets närmaste omgivning, uthusbyggnader och skolträdgård.

73. Yttertrappan vid hufvudingången bör helst förläggas till största delen under tak. Trappans höjd bör i möjligaste måtto förminskas genom den närmast liggande markens påfyllning till en sakta sluttning. Trappstegen böra göras antingen 1,1 fot breda och 0,5 fot höga (11,5 decimaltum breda (och 4,5 decimaltum höga).

74. Att omkring skolhuset sätta fris af gatsten med rännstenar för takvattnets afledning, är alltid nyttigt och i vissa fall nödvändigt.

75. För att hindra införandet af smuts i skolsalen bör, jemte de nedan i mom. 77 nämnda anordningar, iakttagas, att gångvägen, som leder upp till skolhuset, stensättes, makadamiseras eller på annat sätt väl anlägges och grusas, så att densamma städse må vara fast och torr.

76. Vid hvarje skolhus bör finnas en rymlig gårdsplan såsom samlingsplats för barnen vid deras lekar och kroppsöfningar. Den anlägges med grus på torrt underlag och måste ega godt affall för regnvatten samt vara på ett eller annat sätt inhägnad.

På lekplanen böra träd planteras.

77. Alldenstund det är önskligt, att

barnen alltid, jemväl under regnigt och hårdt väder, tillbringa lofstunderna i fria luften, borde vid sidan af gården uppföras ett på trenne sidor slutet skjul eller tak på pålar — en s. k. *täckt lekplats*, försedd med säten.

78. På gårdsplanen eller, om täckt lekplats finnes, under gemensamt tak dermed, uppställas de enkla apparaterna för barnens gymnastiska öfningar.

Bland gymnastikapparaterna borde ej på någon lekplan saknas den s. k. springbommen (rörlig) å hvilken alla de hufvudsakligaste formerna af gymnastikens bundna rörelser (hoppning med och utan stöd, klättring, armhäfning och balancering) kunna utföras\*).

79. Brunnen, som måste vara öfverbygd, förses med pump och drickkar: t. ex. små bägare eller skopor af förtent jernbleck, fästade med små jernkedjor vid pumpens utkastare.

80. Den vid en fast skola, eller vid en flyttande skolas hufvudstation, för lärarens hushållning erforderliga uthusbyggnaden, innehållande fåhus jemte foderskulle, vedbodar och svinhus, förlägges afsides eller bakom hufvudbyggnaden, och en särskild bakgård inrättas, på hvilken spillningen efter kreaturen kan uppläggas, utan att obehag deraf förorsakas.

81. Afträdena måste ligga väl undan-gömda och likväl vara lätt tillgängliga. Gossarnes och flickornas skola inrättas på skilda ställen, eller åtminstone med ingångar från olika sidor. För hvar 15 å 20 barn erfordras en sits. Hvarje sits bör skiljas från de öfriga genom brädväggar och dörrar. En särskild afdelning inrättas på vanligt sätt för läraren.

\*) Ritning till springbommen finnes i "Handledning i gymnastik och vapenöfning för folkskolelärarseminarier och folkskolor" af G. Nyblæus.

På dertill tjenlig plats bör finnas en särskild afplankning med sluttande urinerännor, hvilka böra sköljas med vatten, så ofta det befinnes behöfligt.

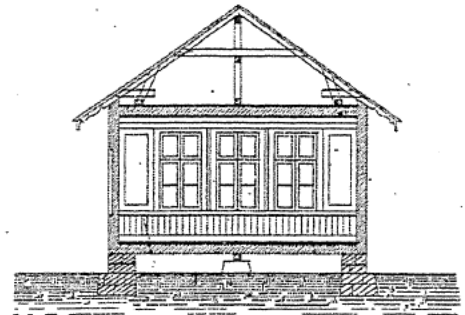
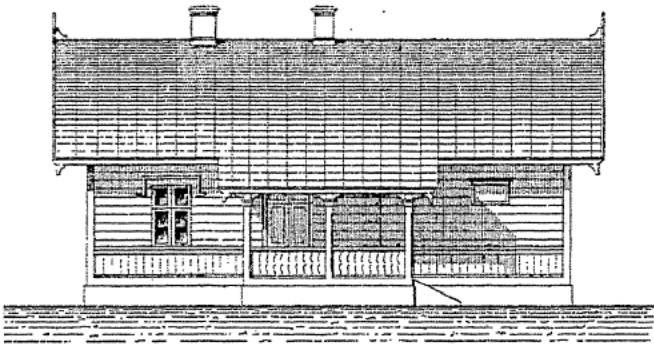
82. Det jordland, som enligt lag skall ställas till skollärares disposition, "dels till brukning för eget behof af jordfrukter, dels för att lemna tillfälle till undervisning i trädplantering och trädgårdsskötsel," bör, om möjligt, anordnas i skolhusets omedelbara närhet, helst mot sydligt väderstreck.

Om detta jordland upparbetas till en

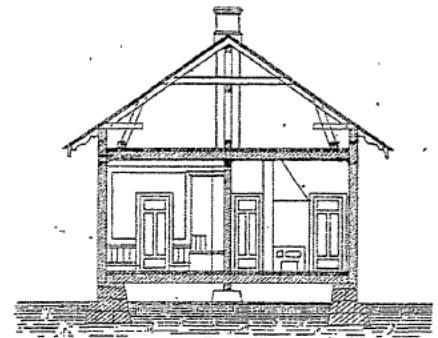
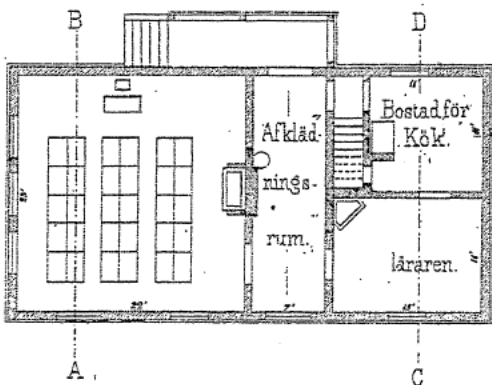
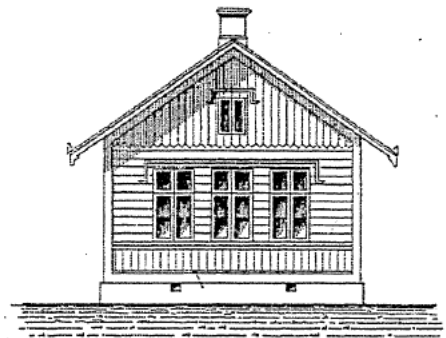
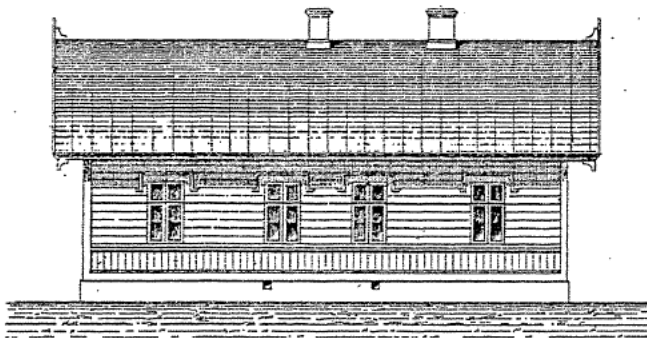
frukt- och köksträdgård, medför det, väl skött, ej blott materiel nytta för läraren, utan är derjemte synnerligen egnadt att hos både yngre och äldre väcka lust för trädgårdsodling.

En väl anlagd och vårdad plantering af träd, buskar och blommor må aldrig saknas i skolhusets närhet. Träden bidraga med sin skugga att hålla luften sval och mildra sommarhettan. Men ännu högre må uppskattas en sådan anläggnings uppfostrande och förädlande inflytande.

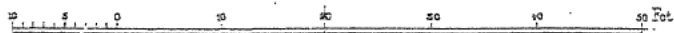
Ritning till folkskola (småskola) för 30 barn.  
Af trä.



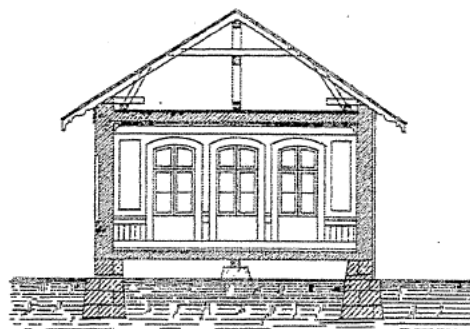
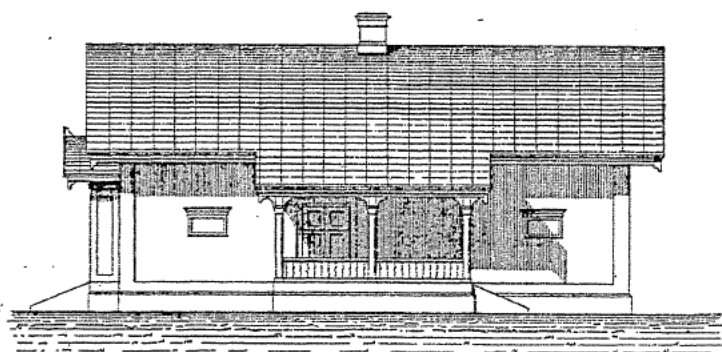
Genomskärning efter linien A-B.



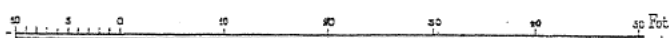
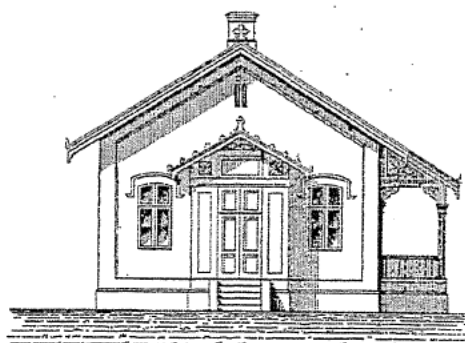
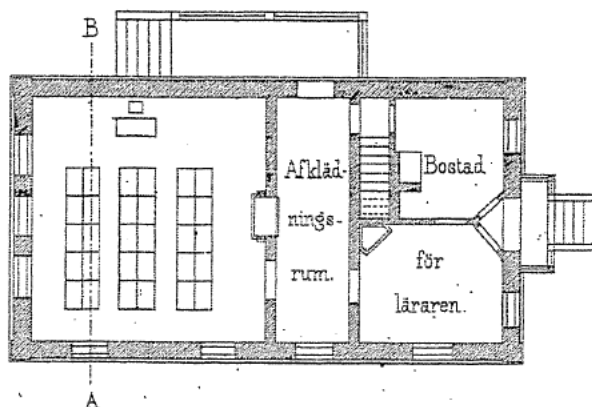
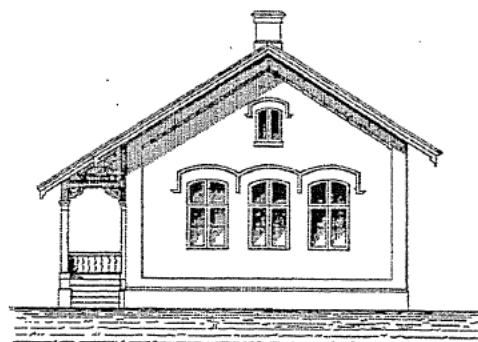
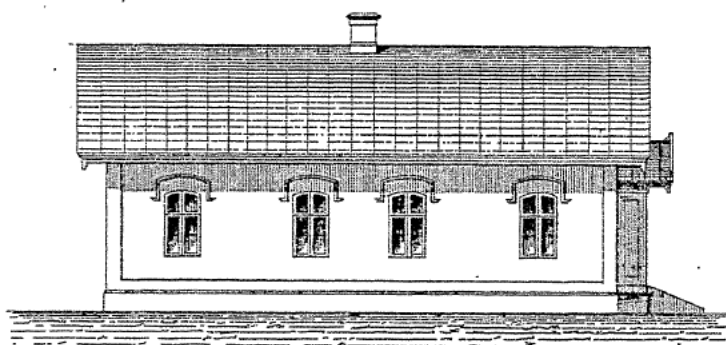
Genomskärning efter linien C-D.



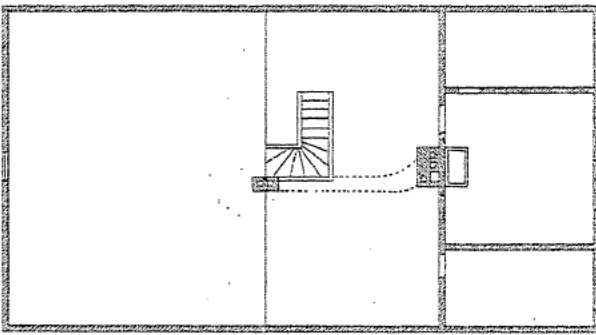
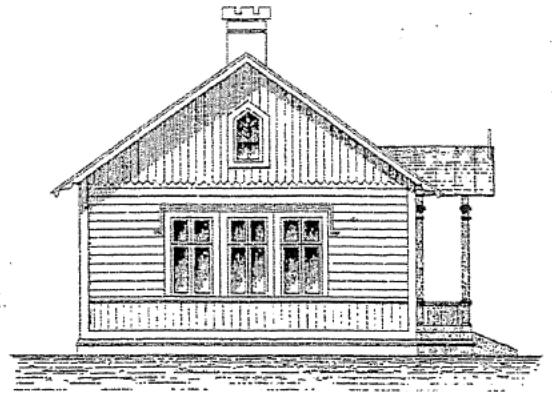
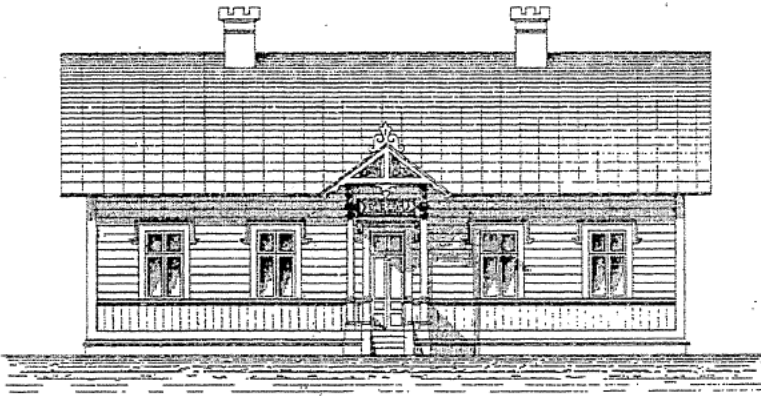
Ritning till folkskola (småskola) för 30 barn.  
Af sten.



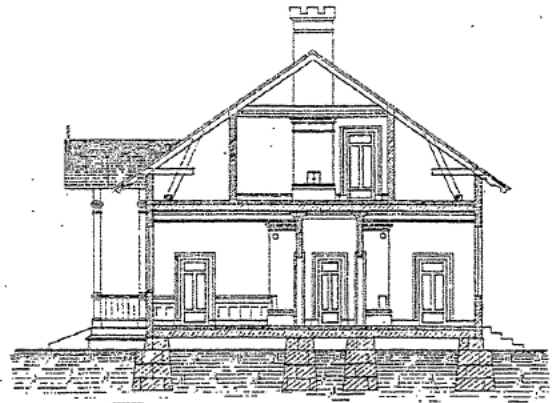
Genomskärning efter linien A-B.



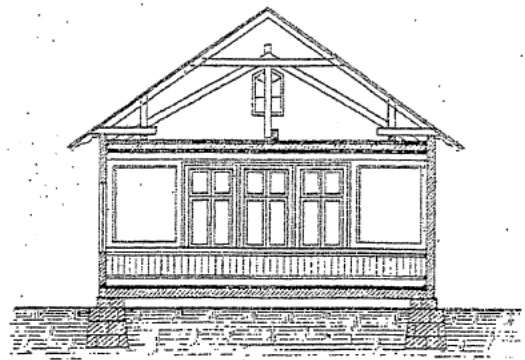
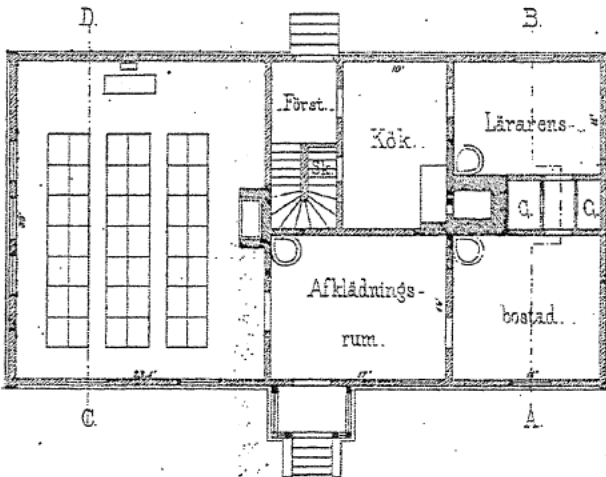
Ritning till folkskolehus för 42 barn.  
Af trä



Vinds-plan



Genomskärning efter linien A-B

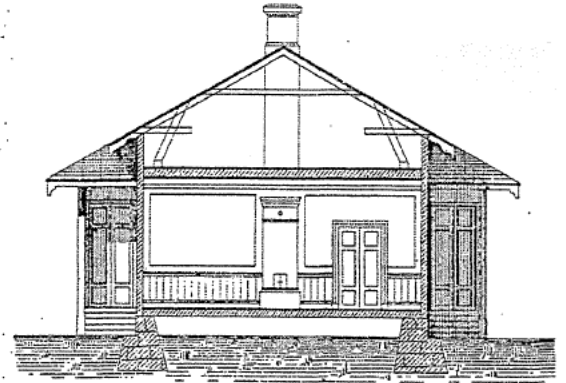
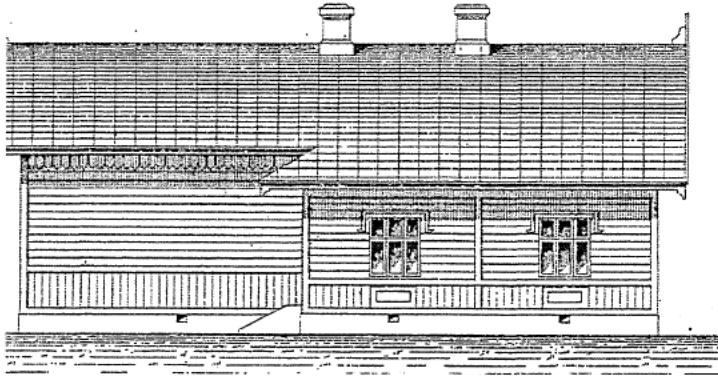


Genomskärning efter linien C-D

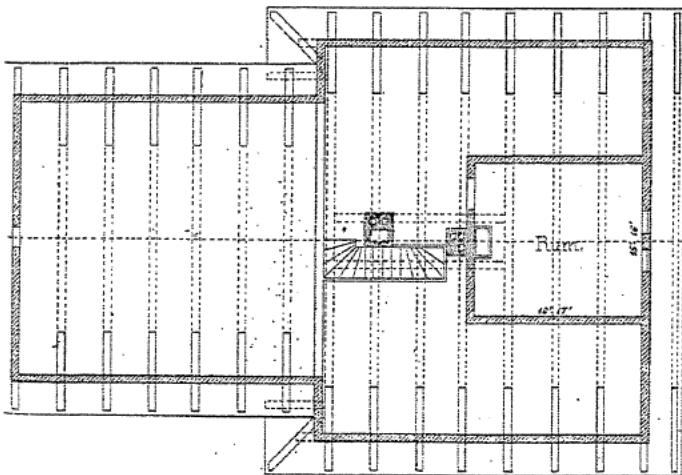
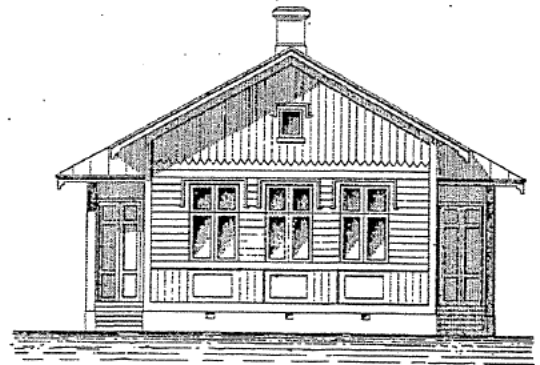
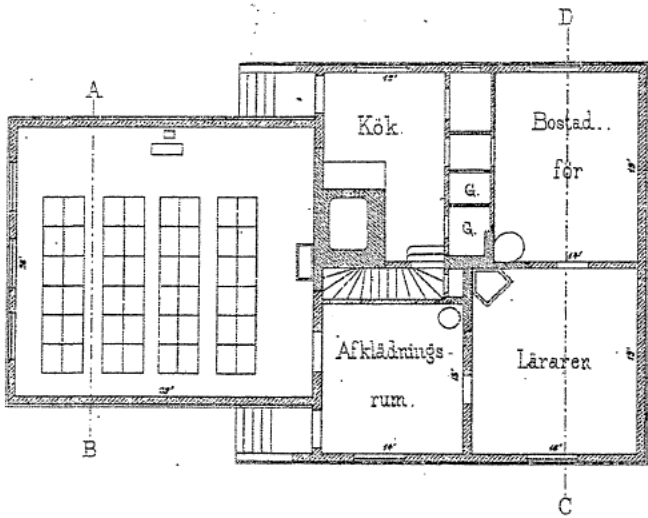




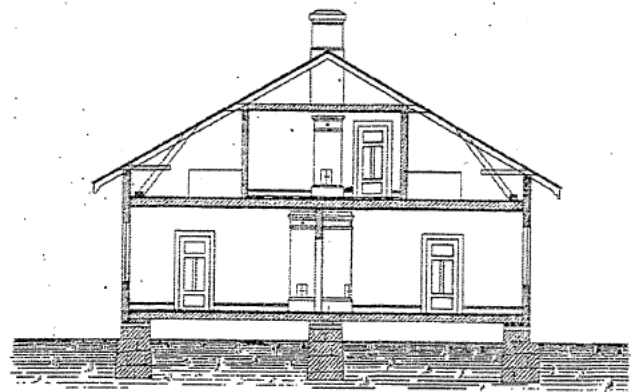
Ritning till folkskolehus för 48 barn.  
Af trä.



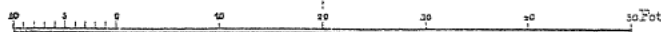
Genomskärning efter linien A-B.



Plan af vind.

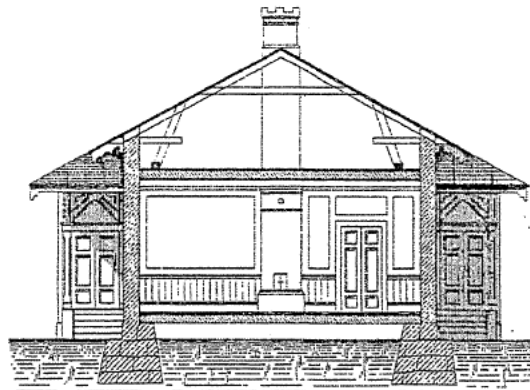
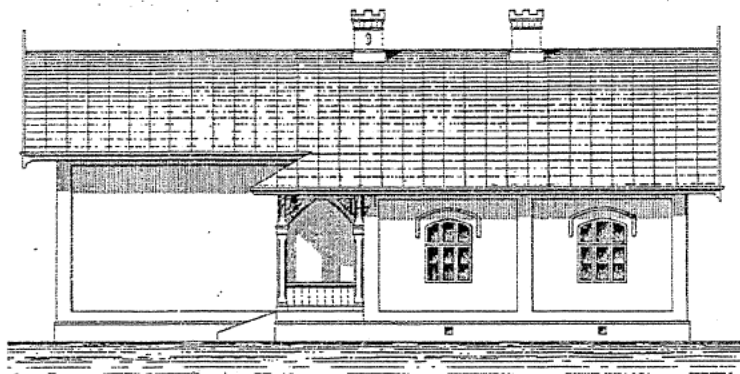


Genomskärning efter linien C-D.

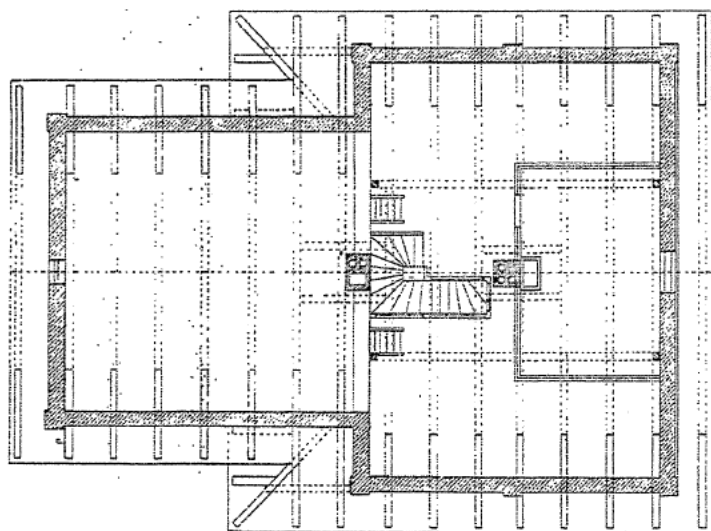
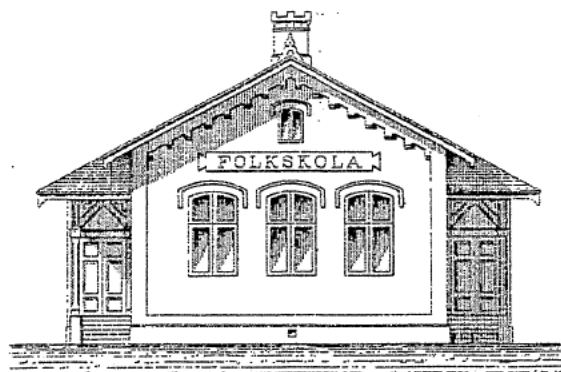
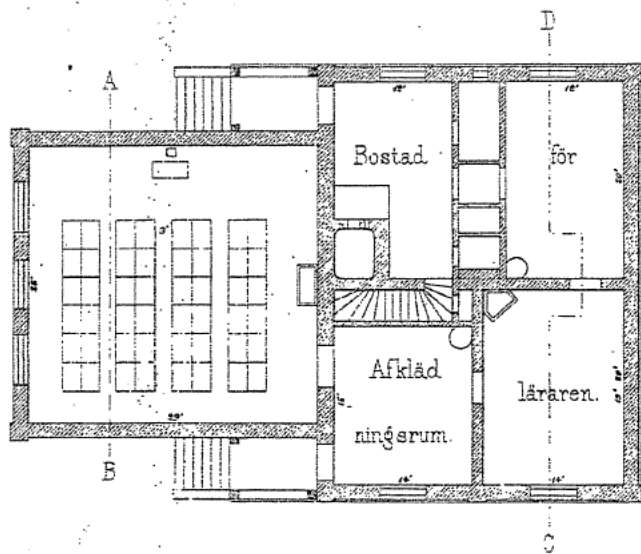


# Ritning till folkskolehus för 48 barn.

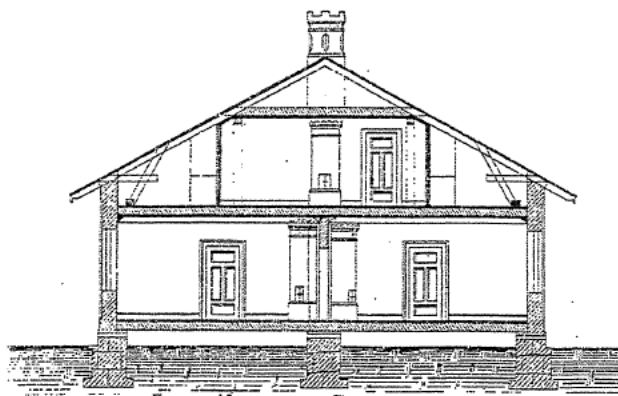
Af sten.



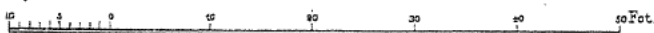
Genomskäring efter linien A-B.



Vinds-plan.

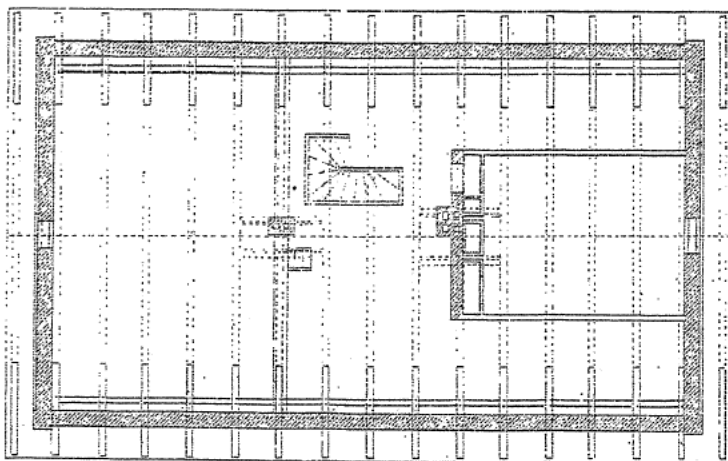
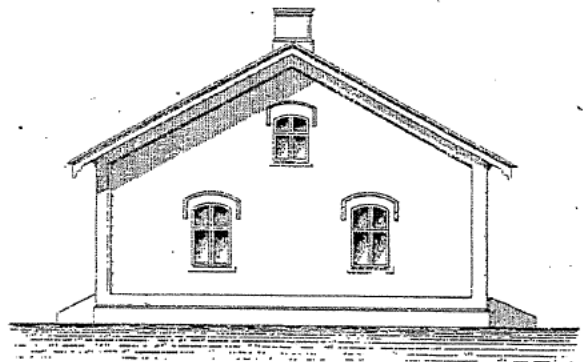
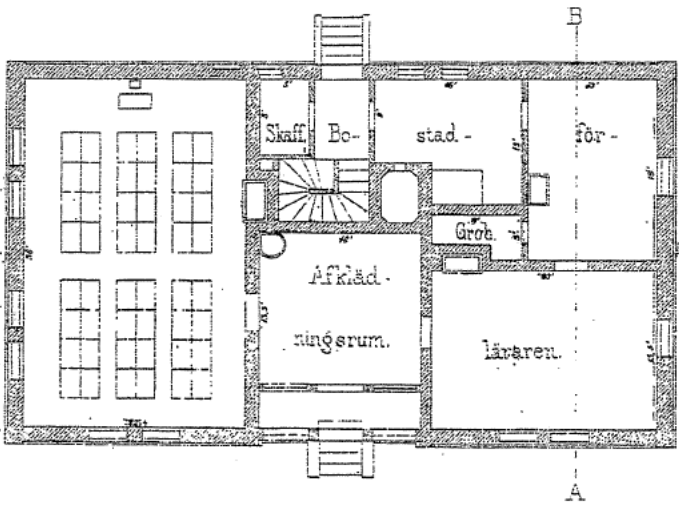


Genomskäring efter linien C-D.



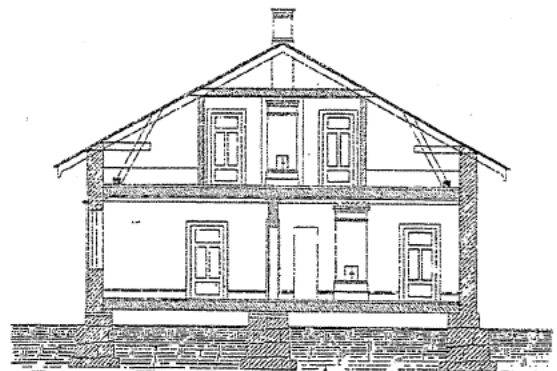
# Ritning till folkskolehus för 48 barn.

Af sten.



Plan af vind.

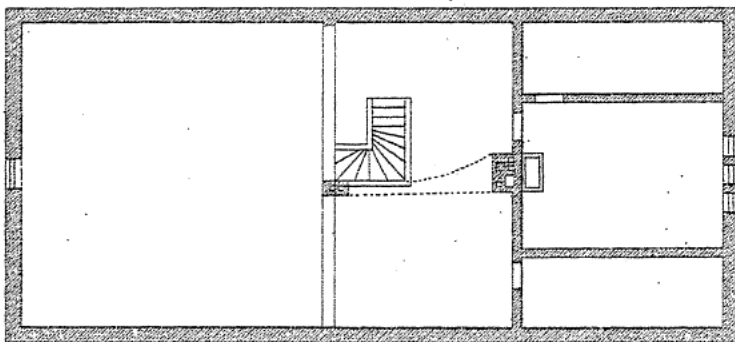
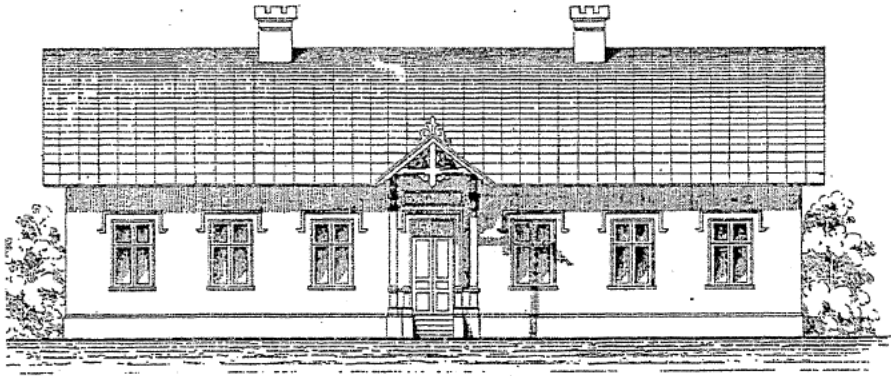
10 20 30 40 50 Fot.



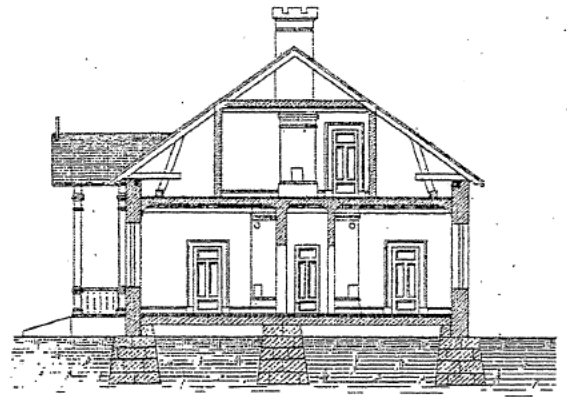
Genomskärning efter linien A-B.

# Ritning till folkskolehus för 56 barn.

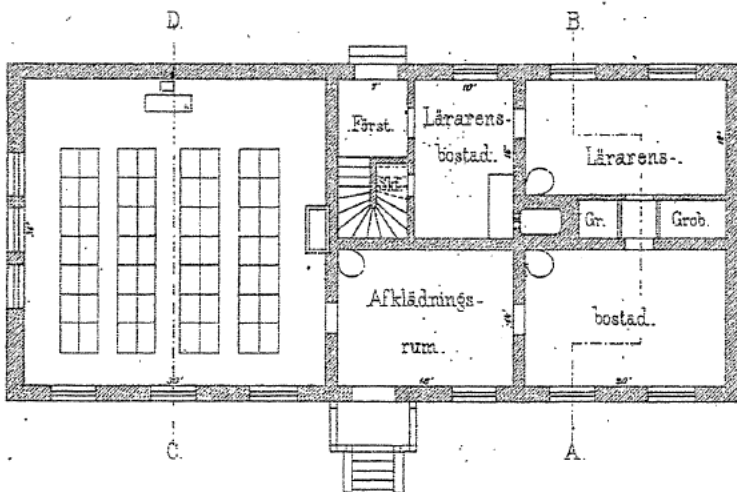
Af sten.



Vinds-plan.



Genomskärning efter linien A-B.

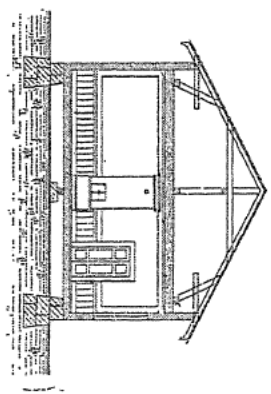
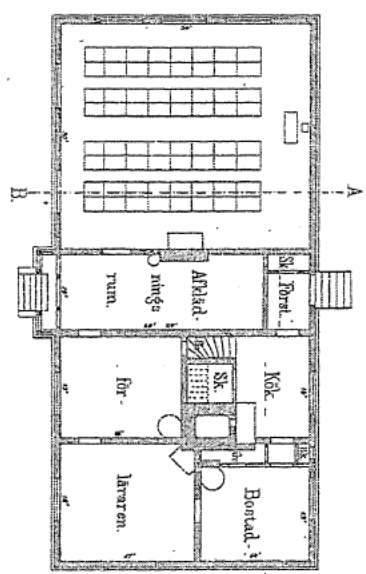
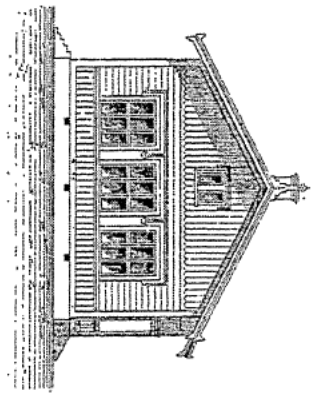
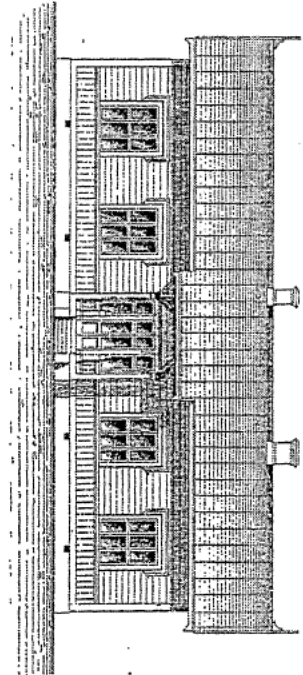


Genomskärning efter linien C-D.



Ritning till folkskolehus för 64 barn.

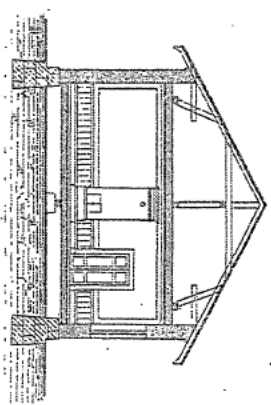
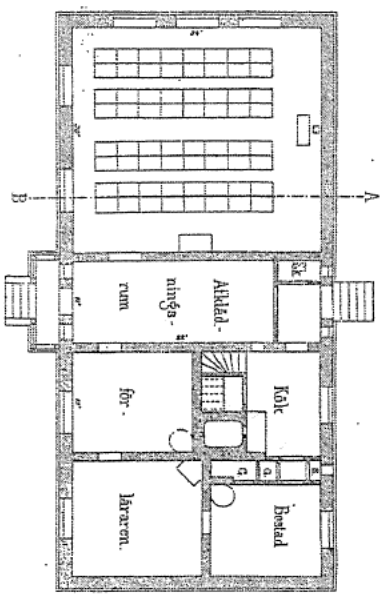
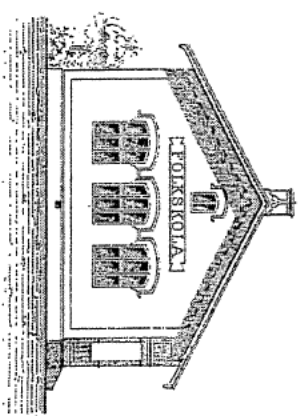
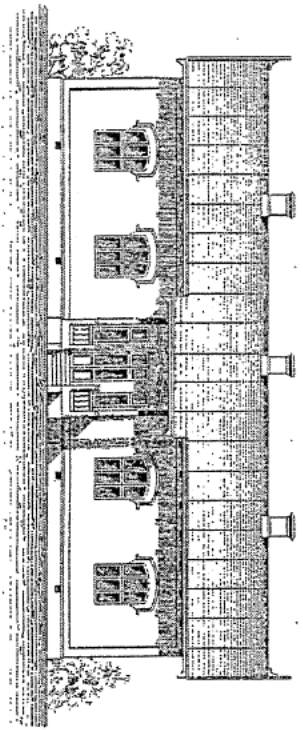
Af trå.



1:50  
10 20 30 40 50 60 70 80 90 100  
Fot.  
För Skolh. Anst.

Genomsnittning efter ritning A-B, C-D

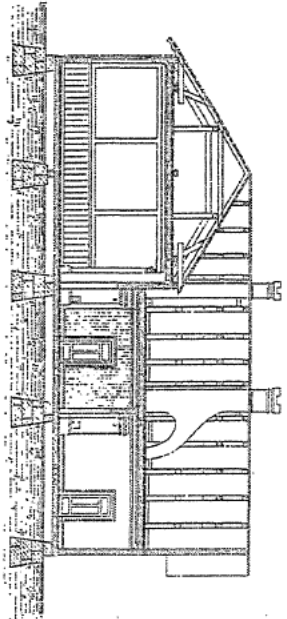
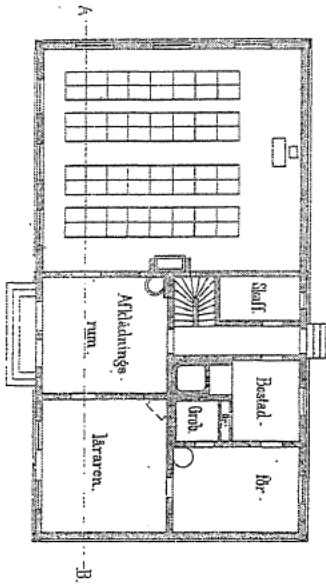
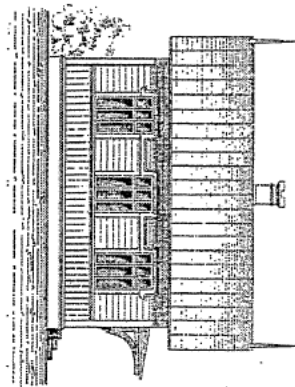
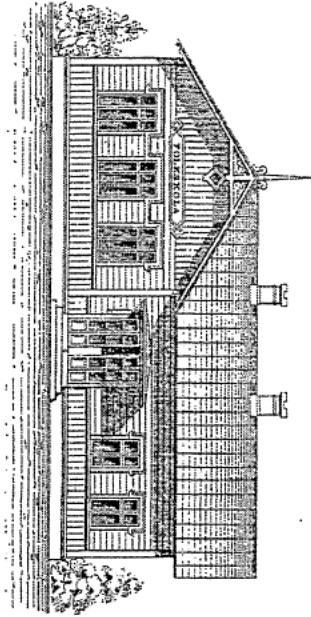
Ritning till folkskolehus för 64 barn.  
Af sten.



Genomskärning efter linien A-B.

Öns. N:o 14. A. 1897.

Ritning till folkskolehus för 64 barn.  
Af trä.

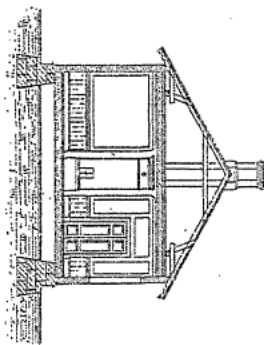
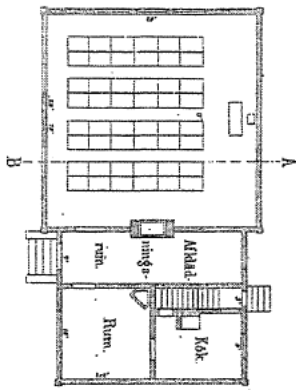
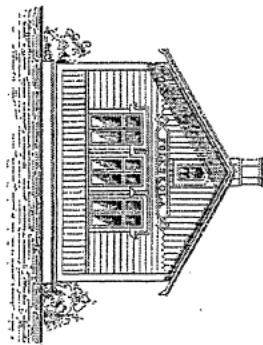
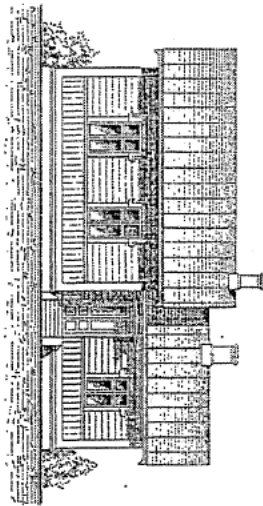


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

Övermåtkärning efter linjen A. B.



Ritning till folkskolehus för 48 barn.  
Af trå.  
(Fyrtiande skola.)



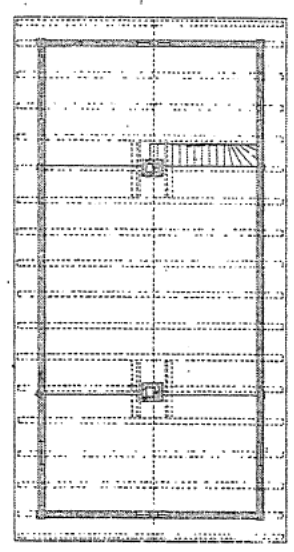
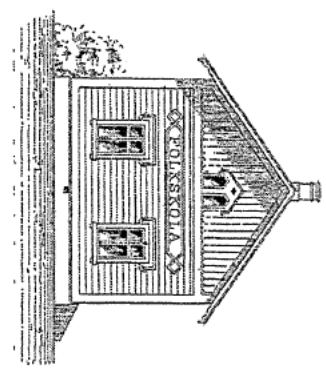
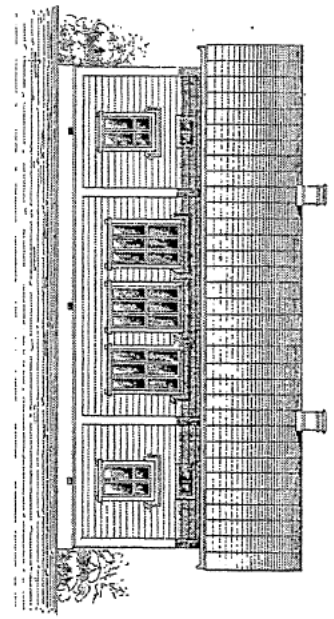
Östsvensk ritning efter Lindén A. B.



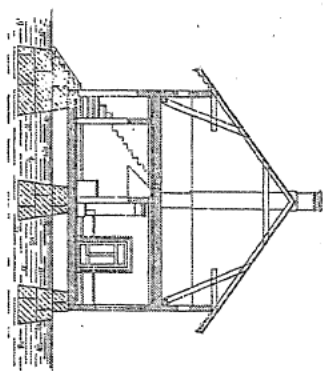
Ritning till folkskolehus för 48 barn med slöjdsal.  
 Af trä.

(Flyttande skola)

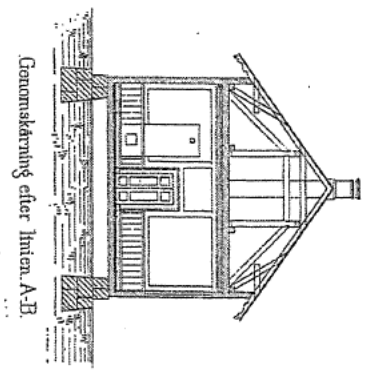
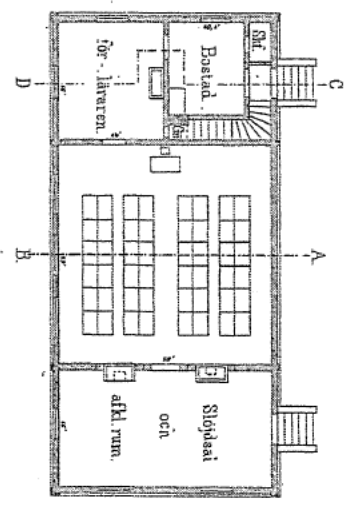
Pl. IX



Vänd-plan.



Genomskäring efter linjen S-D

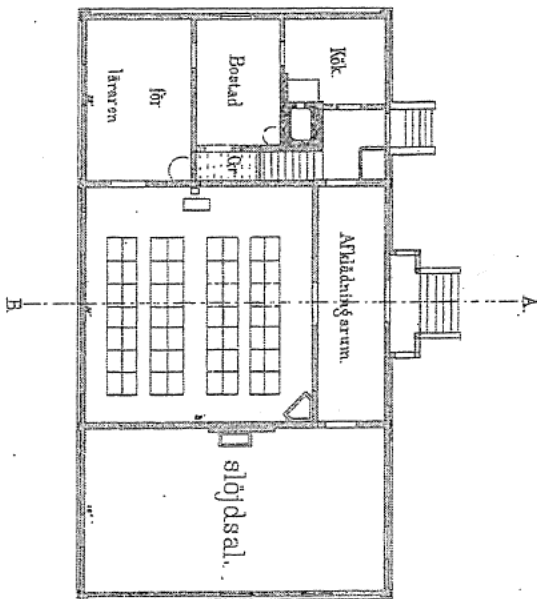
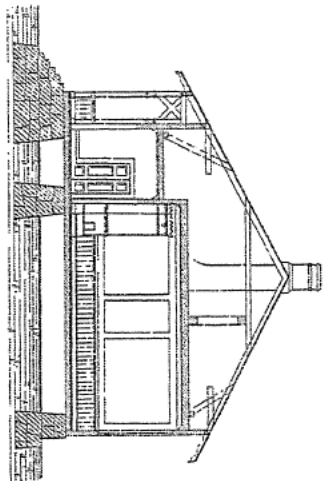
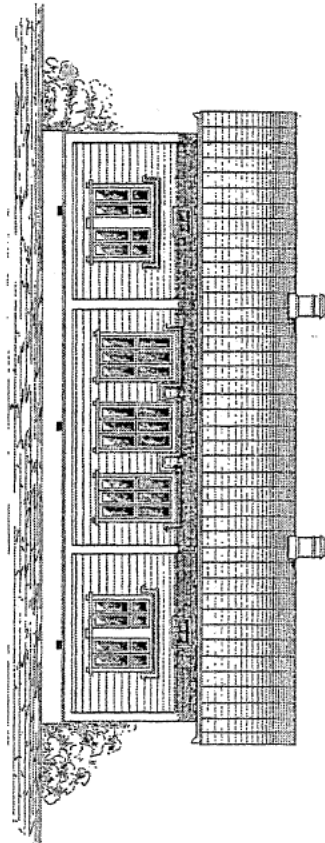
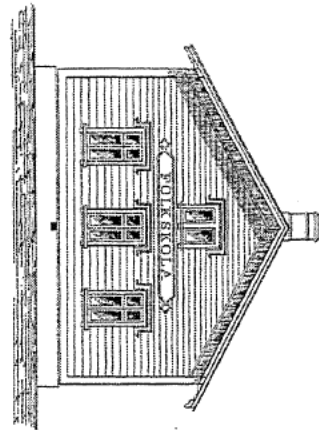


Genomskäring efter linjen A-B

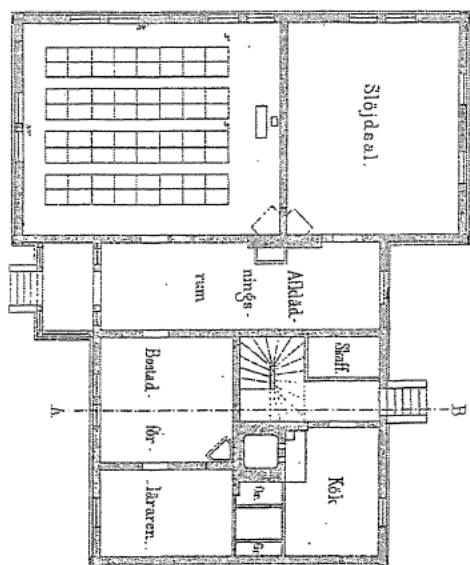
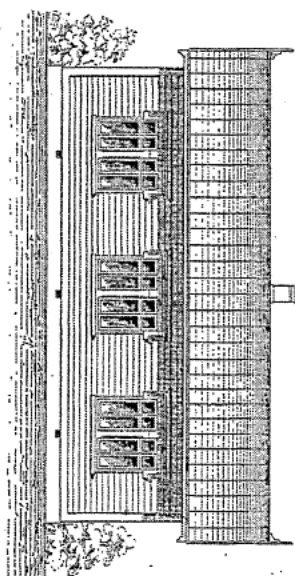
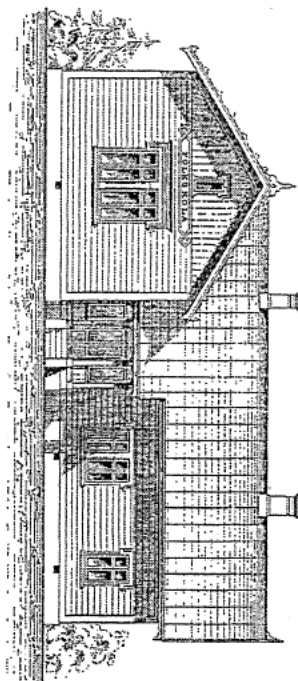
P.L.X.

Ritning till folkskolehus för 56 barn med slöjdsal.

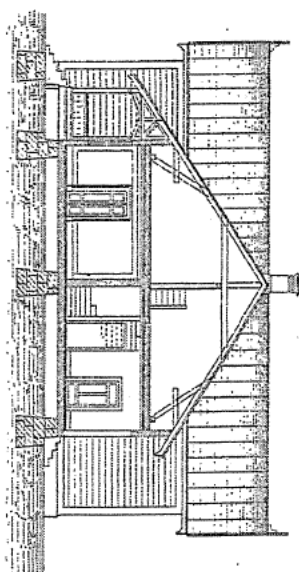
Af trä.



Ritning till folkskolehus för 64 barn med slöjdsal.  
Af trå.



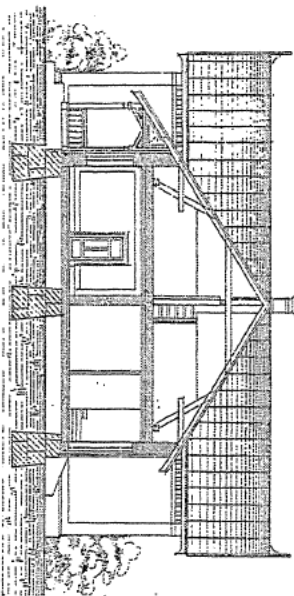
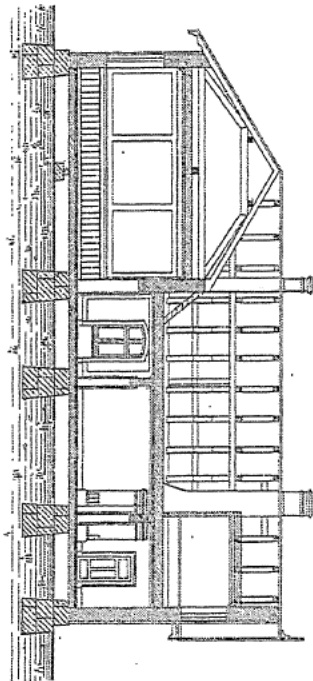
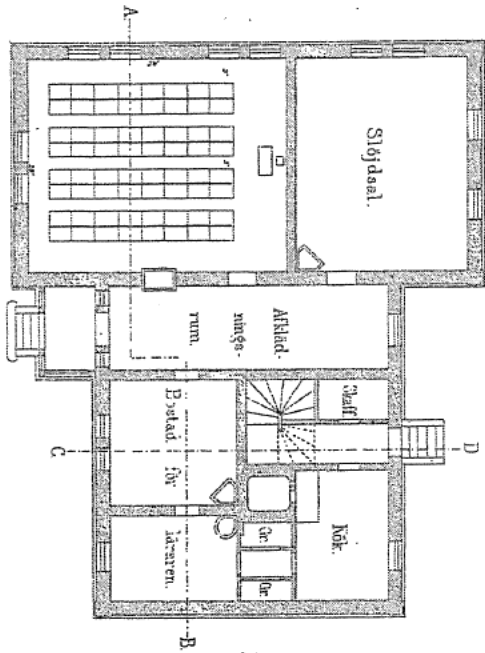
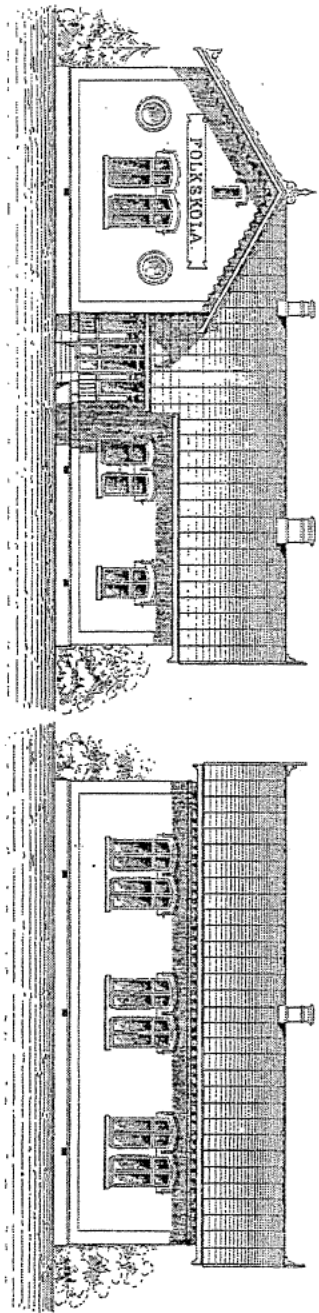
Ven. Rijk. Lit. Anst.



Genomsnitt efter linnen A-B.

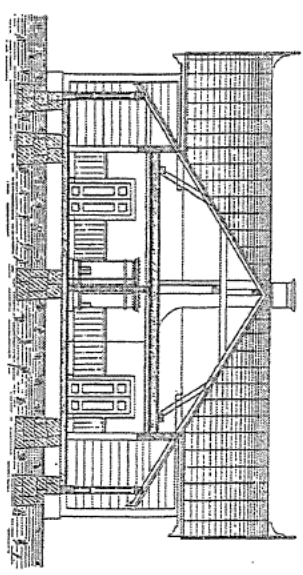
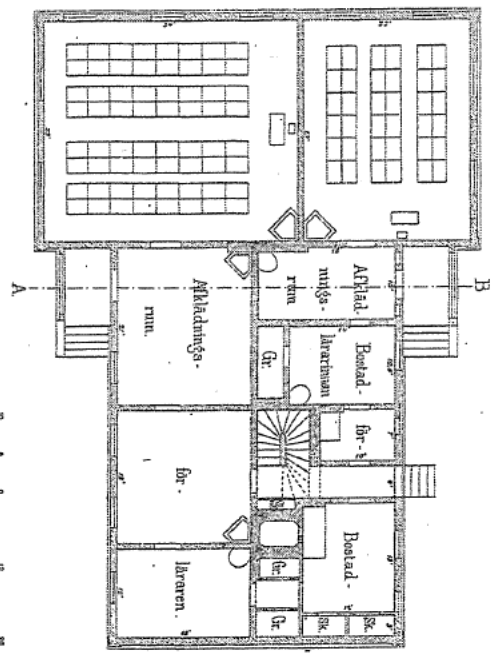
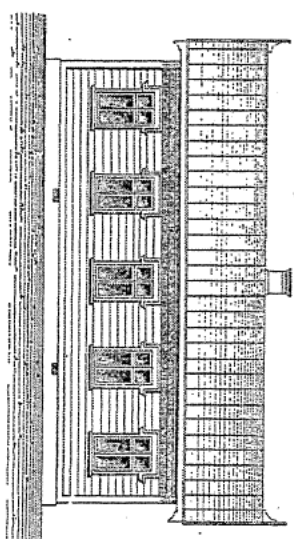
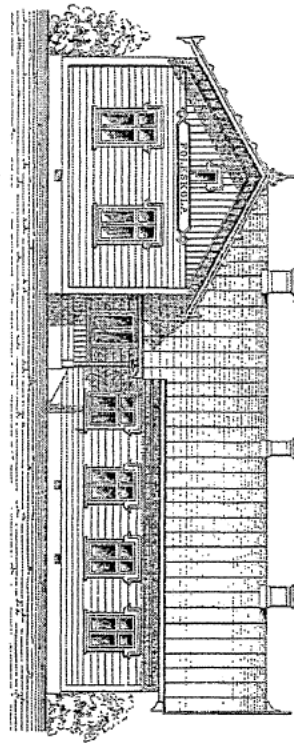
Ritning till folkskolehus för 64 barn med slöjdsal.

Af sten.



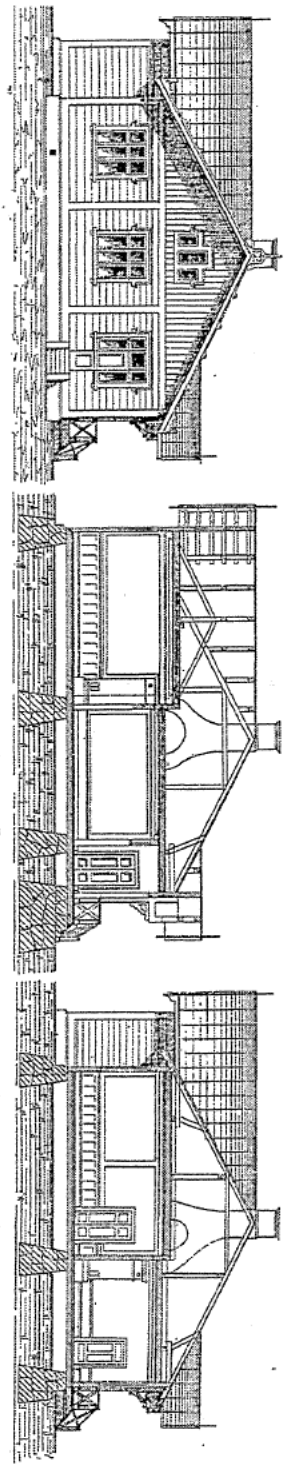
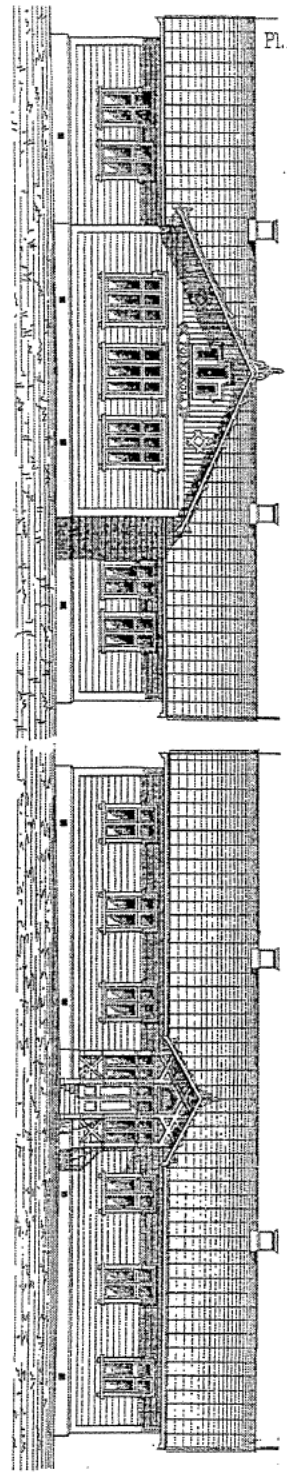
Genomskärning efter linjen C-D

Ritning till folkskolehus för 64 barn, jemte småskola för 36.  
A' trå.



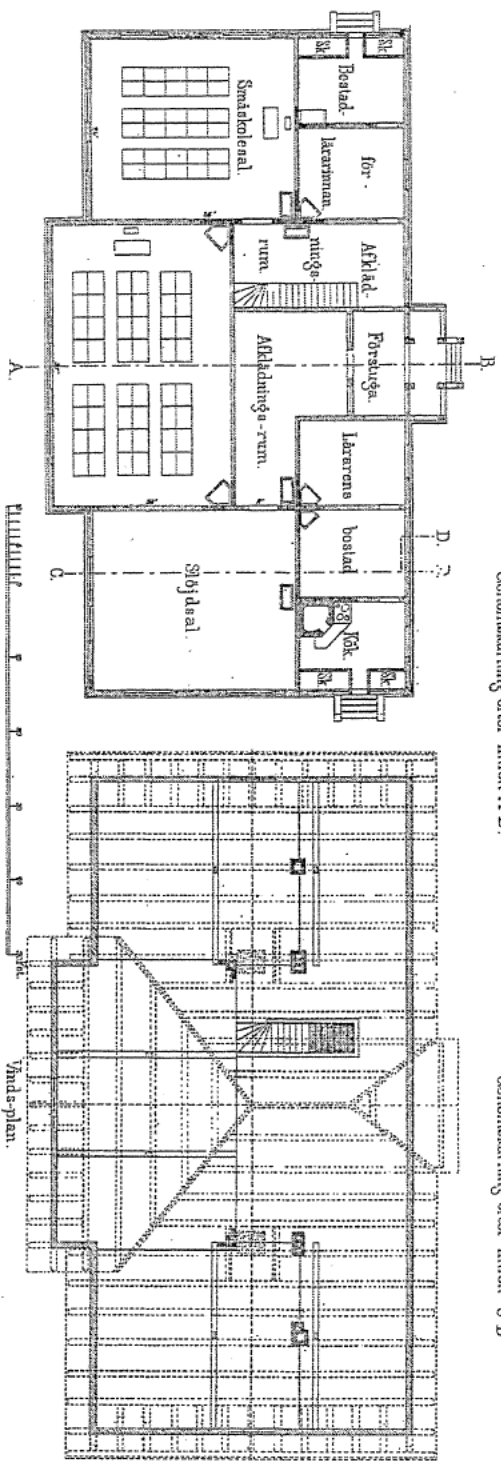
Gjennomskning efter linden A-B.

Ritning till folkskolehus för 48 barn jemte slöjdsal och lärare-bostad,  
samt småskola för 30 barn och lärarinne-bostad.



Genomsnittning efter linjen A-B.

Genomsnittning efter linjen C-D.

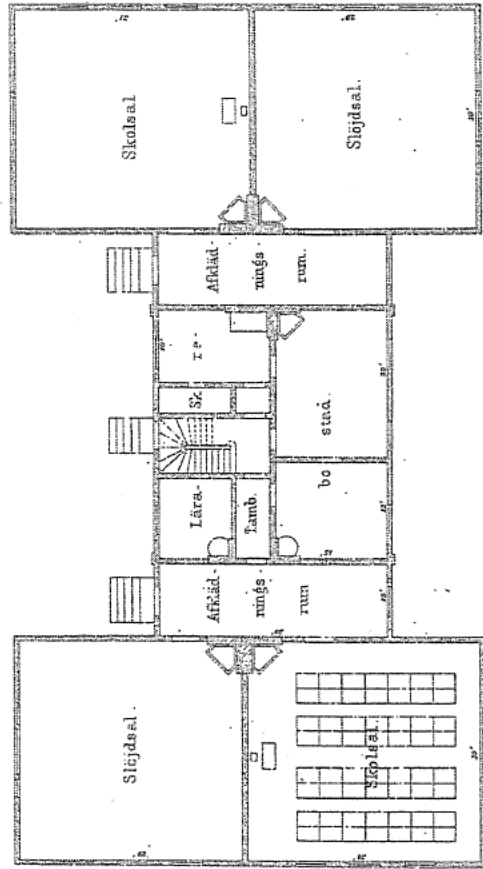
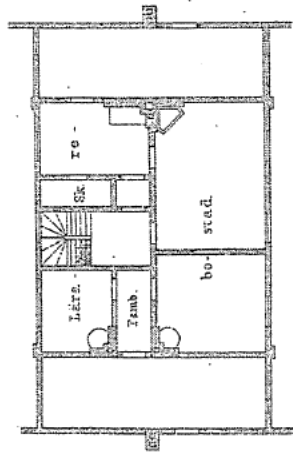
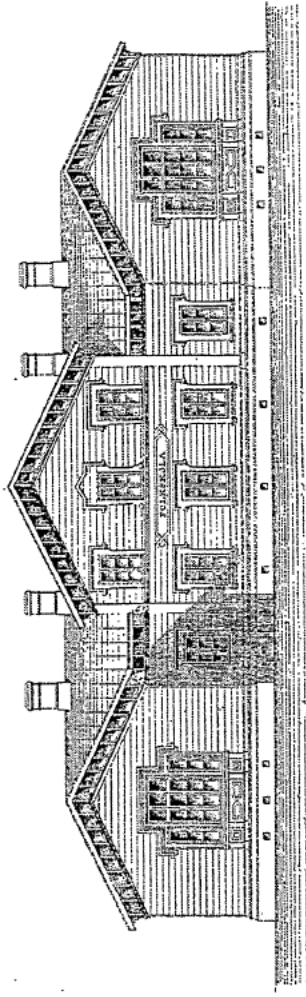


Grundplan.

Vind-plan.

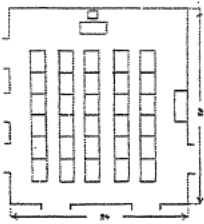
Om Sjöstr. Avest.



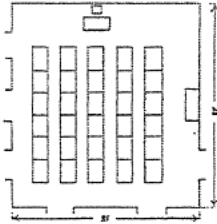


Gm. Stat. Ark. Inst.

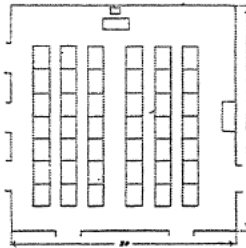
Skolsal för 30 barn.  
Småskolan.



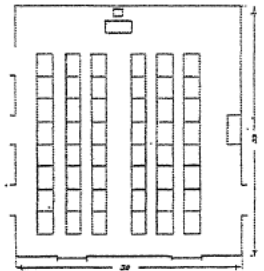
Skolsal för 30 barn.  
Folkskolan.



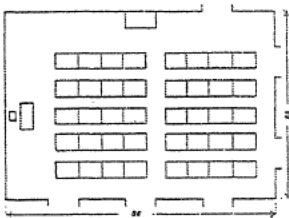
Skolsal för 42 barn.



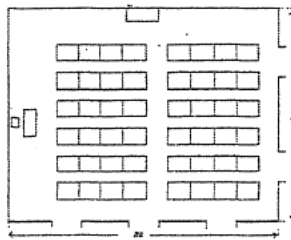
Skolsal för 48 barn.



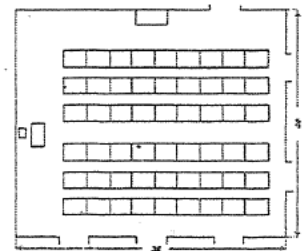
Skolsal för 40 barn.



Skolsal för 48 barn.

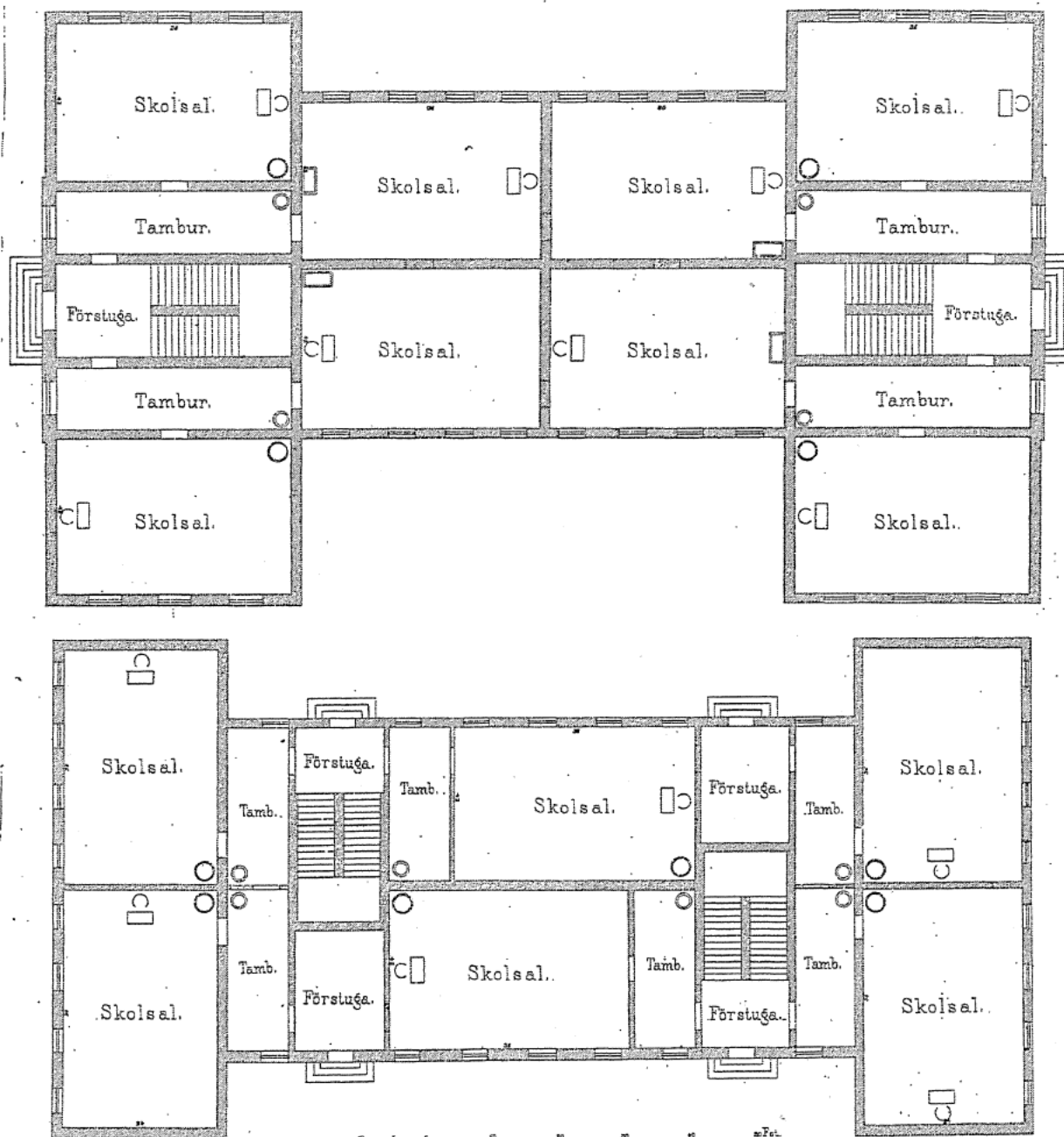


Skolsal för 54 barn.



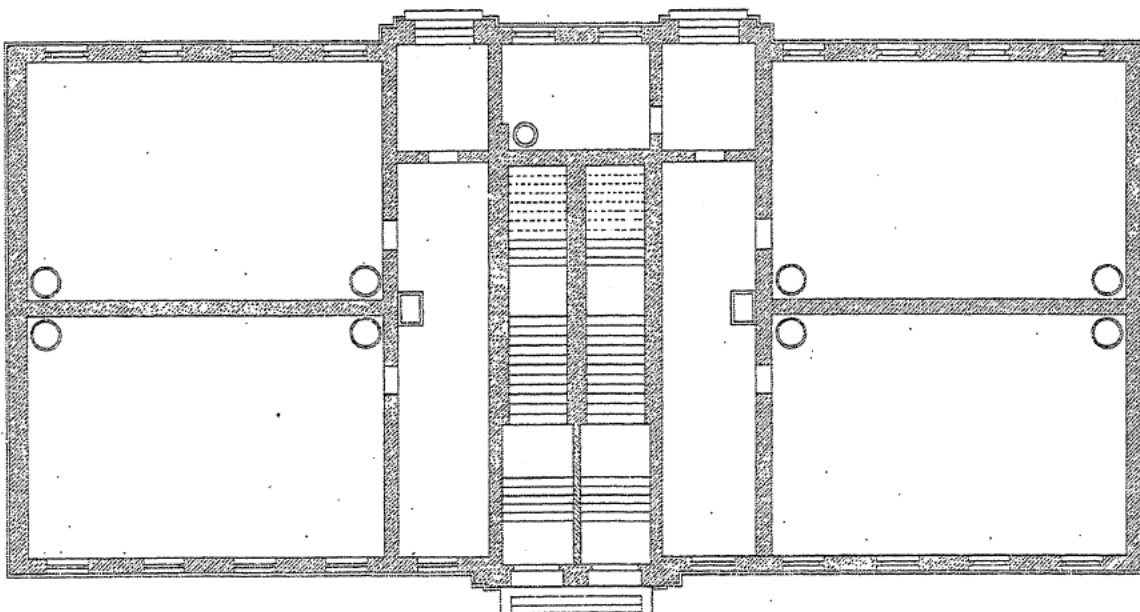
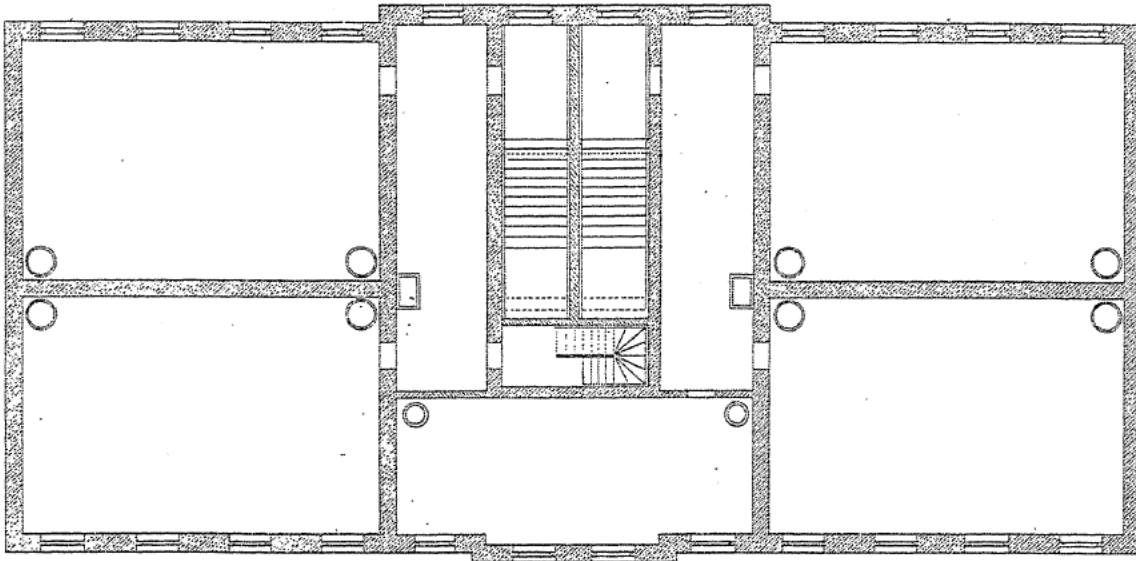
Planer till skolhus för städer.

PLXXVI



Plan af Folkskolehus i Norrköping.  
Constr. af C.Th. Malm.

Pl. XVII.



# Ensisigt Skolbord

(3<sup>de</sup> storlekar)

Constr. af Fr. Sandberg.

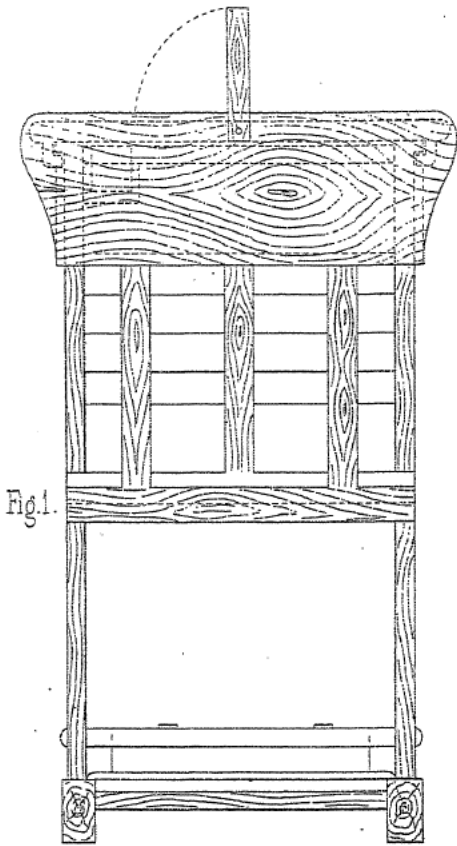


Fig. 1.

Sedt framifrån.

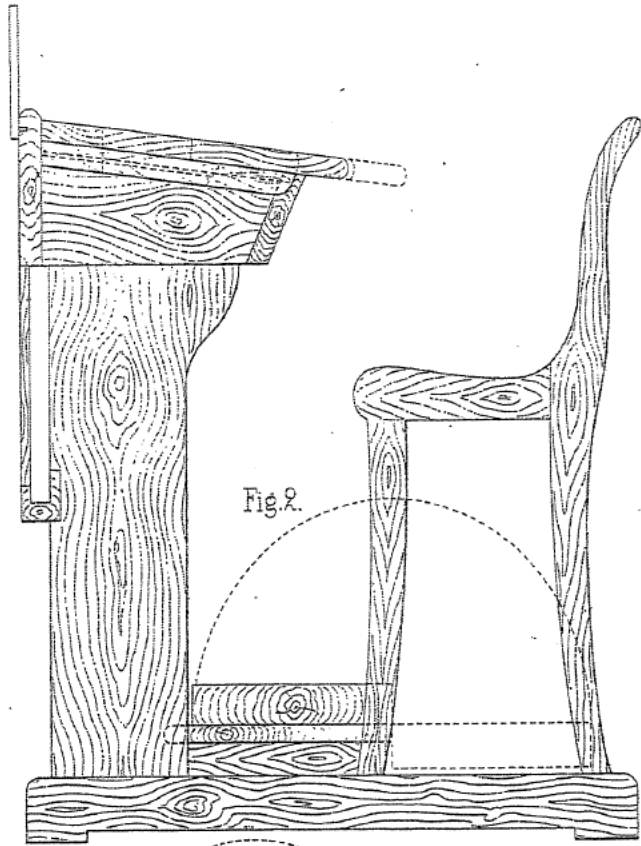


Fig. 2.

Sedt från sidan.

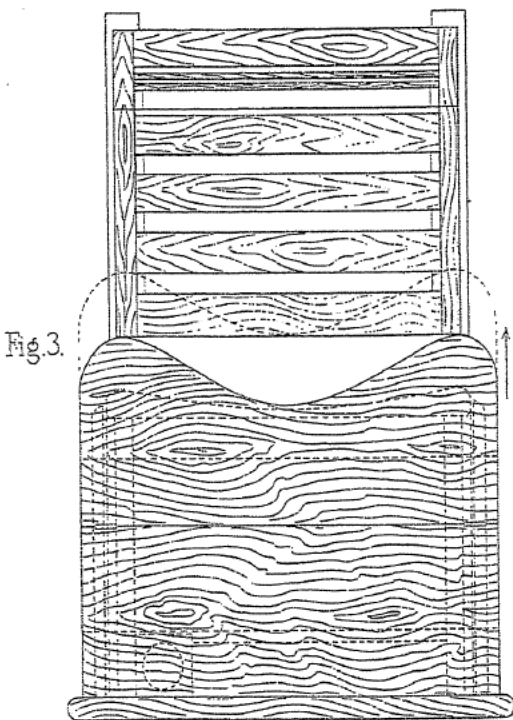


Fig. 3.

Sedt uppifrån.

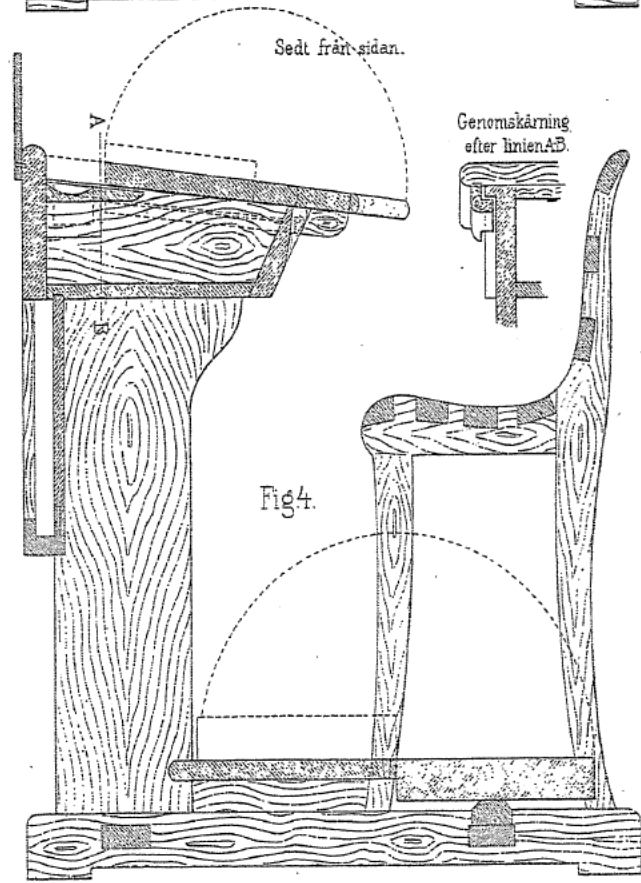


Fig. 4.

Genomskärning

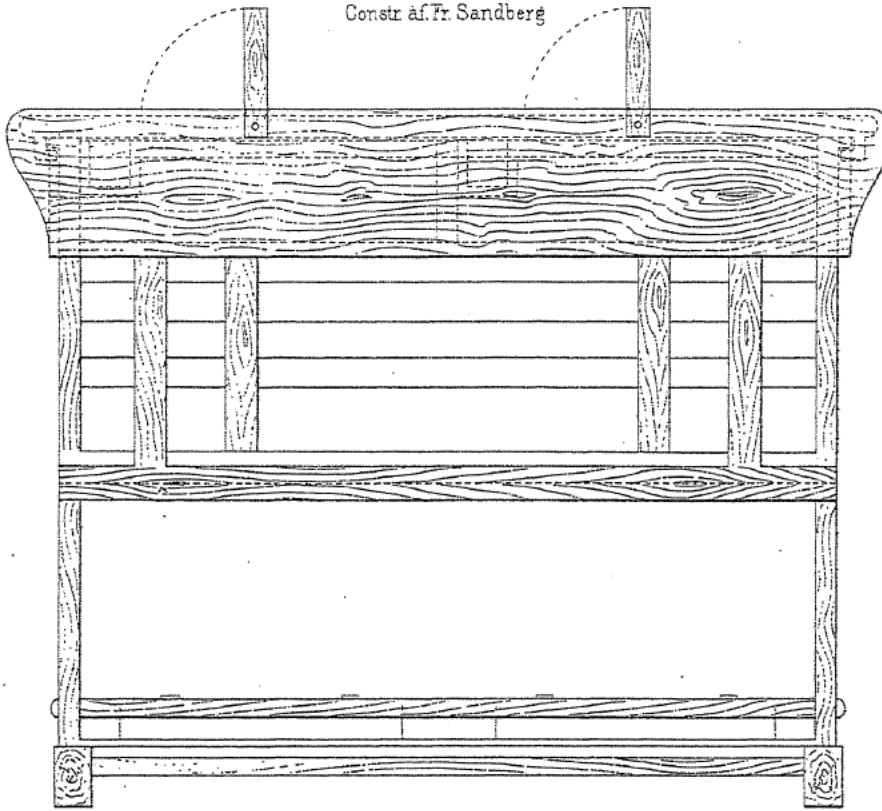


\*Frestående ritning afser skolbord af minsta storleken.

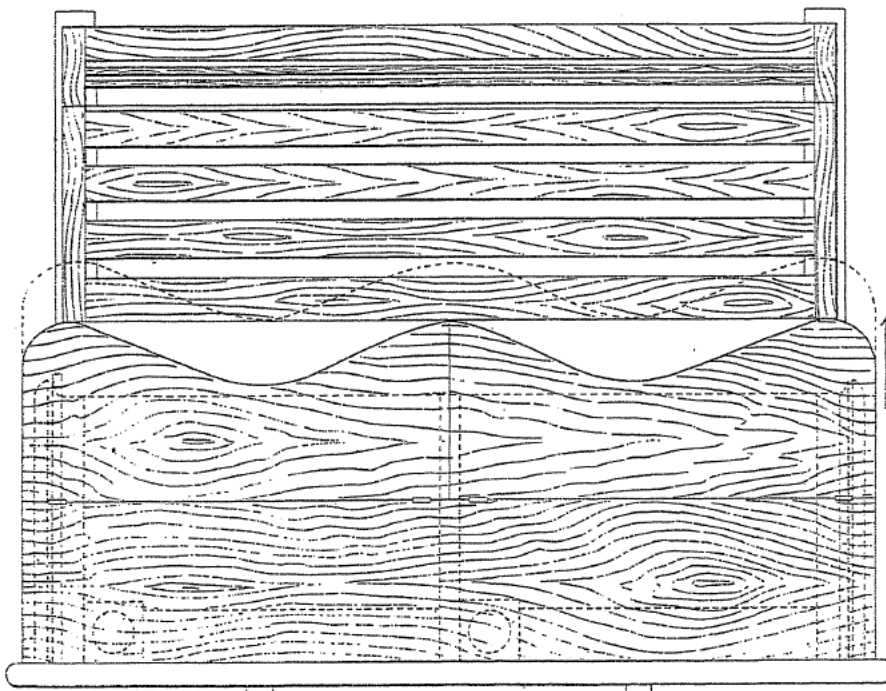
# Tvåsitsigt Skolbord

(3<sup>de</sup> storlekar)

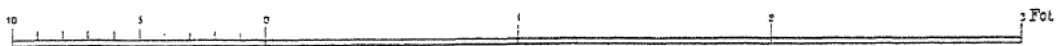
Constr. af Fr. Sandberg



Sedt framifrån

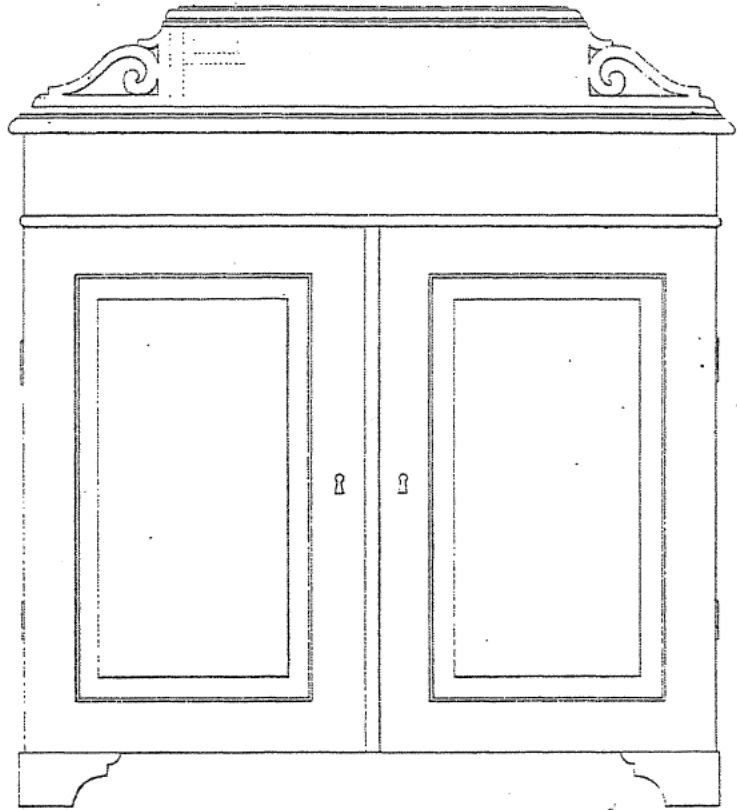
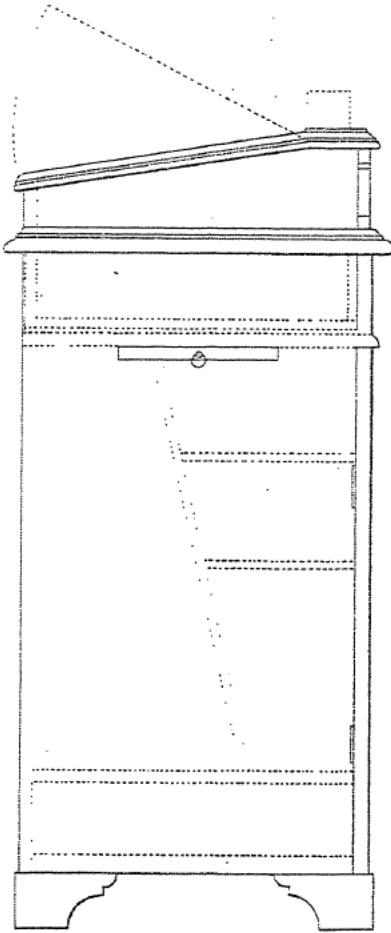


Sedt uppifrån

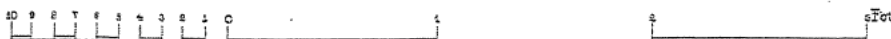
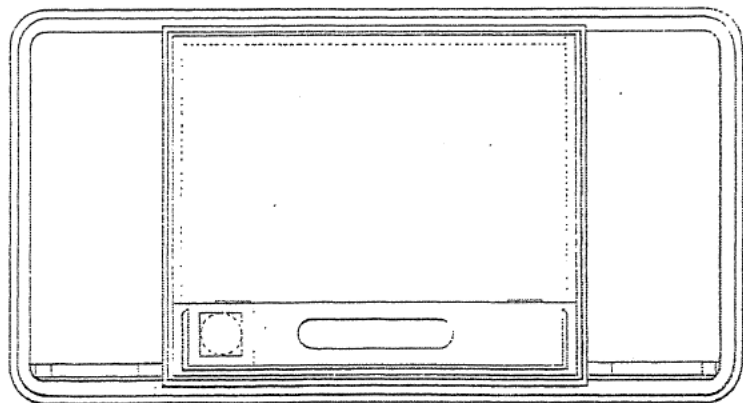


Förestående ritning afser skolbord af minsta storleken. Profil och sidoutseende: Se Pl. XVIII.

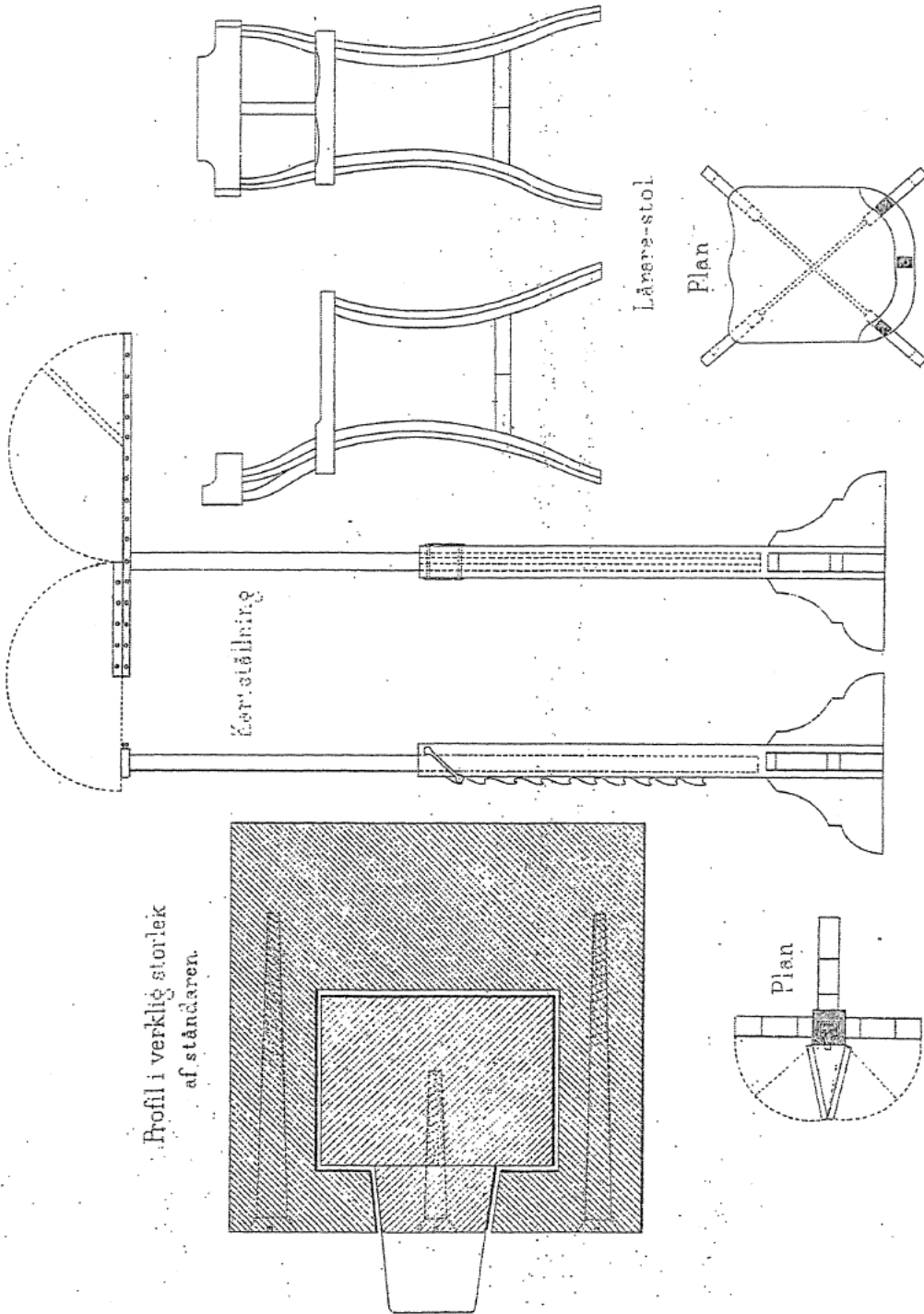
Pulpet för läraren.

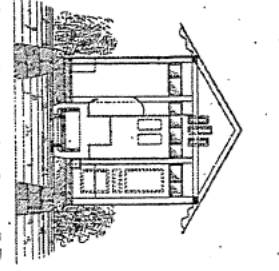
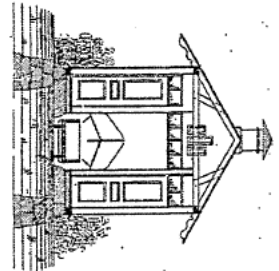
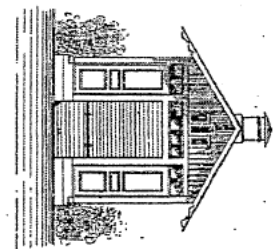
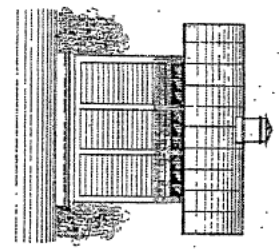


Plan.

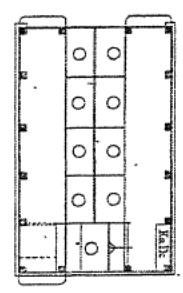
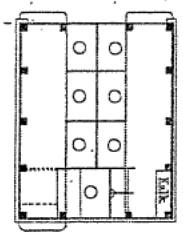
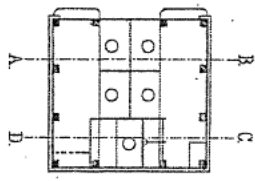








Genomskärning efter linjen A-B. Genomskärning efter linjen C-D:



Detalj af exkrypt laren.

